

上椎ノ木古墳群・谷山古墳
正知浦古墳群・正知浦遺跡

1992. 3

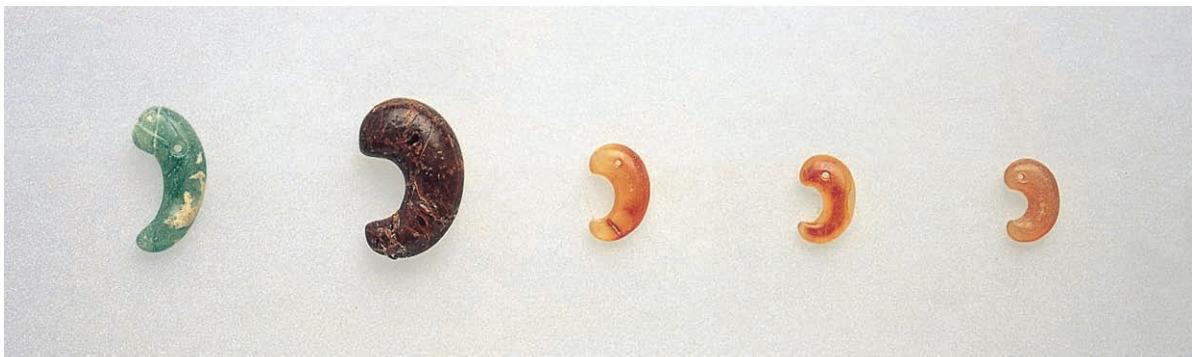
三重県埋蔵文化財センター



上椎ノ木 1号墳 四神鏡



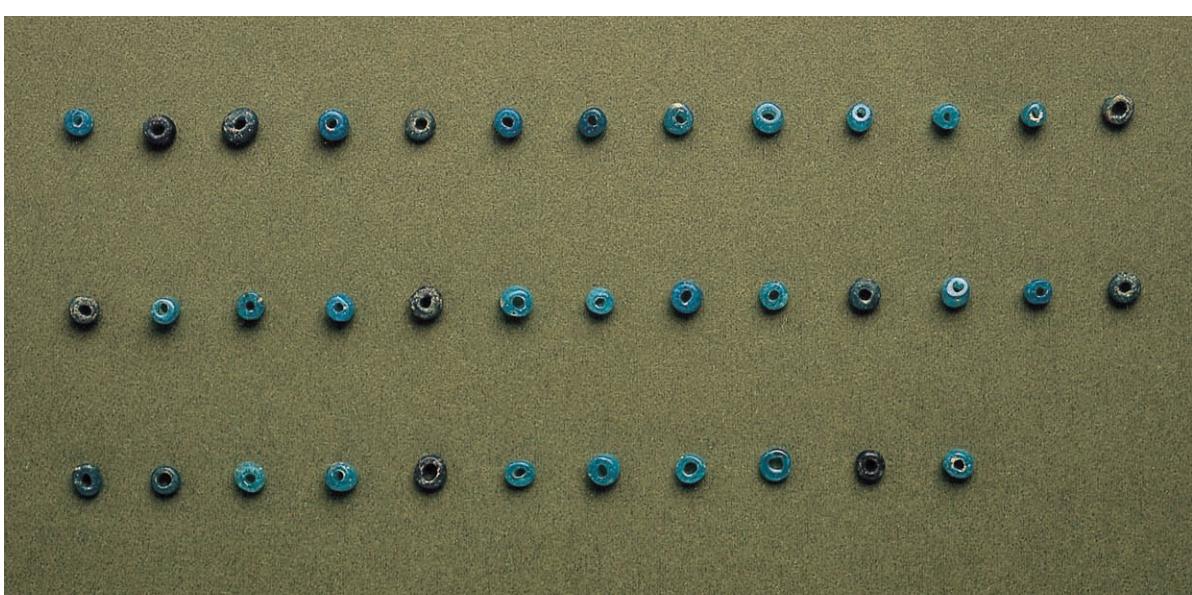
上椎ノ木 1号墳 遺物出土状況



上椎ノ木 1号墳 勾玉



上椎ノ木 1号墳 菖玉



上椎ノ木 1号墳 ガラス小玉



正知浦遺跡第1次調査航空写真



正知浦遺跡第2次調査航空写真

序

亀山市は、高台の静かな城下町として古くから栄えてきたところであります。自然に恵まれた鈴鹿連峰に抱かれ、穏やかな流れの鈴鹿川は悠久の歴史の流れを映しています。落ちついた町並みは、伝統の重さを伝えさせるとともに力強い発展の息吹を感じさせます。

この度、建設省によって計画されました国道1号亀山バイパスは、亀山市内の交通緩和と沿線の発展に寄与することを目的としています。総延長7.2kmの路線地内には、12の遺跡が確認されており、道路建設と文化財保護の調和を図るため関係機関と協議の結果、埋蔵文化財については、記録保存を前提として発掘調査をすることになりました。

ここに報告する上椎ノ木古墳群・谷山古墳・正知浦古墳群などの遺跡は、この地域の古墳文化を解明する上で重要な調査となりました。上椎ノ木1号墳は、粘土櫛の主体部に四神鏡・石鉈・勾玉が副葬された前期古墳であることが判明し、鈴鹿川流域の古墳文化を明らかにする手がかりを得ることが出来ました。また、谷山古墳は、木棺直葬の埋葬施設が2基確認された中期古墳であり、正知浦古墳群は、横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳であり、この地域の古墳文化の推移を知るうえで貴重な調査となりました。

調査にあたりましては、建設省中部地方建設局・同名阪国道工事事務所、亀山市教育委員会、社団法人中部建設協会をはじめとする各関係機関、および地元の皆様には御高配をたまわり厚くお礼申し上げる次第であります。

平成4年3月31日

三重県埋蔵文化財センター
所長 中林昭一

例　　言

- 1 本書は、三重県亀山市川合町字上椎ノ木に所在する上椎ノ木古墳群・上椎ノ木館跡、同市井田川町字谷山に所在する谷山古墳、及び同市亀田町他に所在する正知浦古墳群・正知浦遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、一般国道1号亀山バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第一分冊である。各分冊の概要は、下記のとおりである。
 - 第二分冊－1 千本塚遺跡・大藪遺跡・堀越遺跡
 - 第二分冊－2 粧屋垣内遺跡
 - 第三分冊－1 山城遺跡・北瀬古遺跡
 - 第三分冊－2 大鼻遺跡
- 3 当分冊に係る発掘調査は、三重県が建設省中部地方建設局から委託を受けて三重県教育委員会が実施したものであり、発掘調査に係る費用は、建設省中部地方建設局が全額負担した。
- 4 当該業務全般に係る発掘調査は、昭和59～63年度は三重県教育委員会事務局文化課が、平成元年度以降は三重県埋蔵文化財センターが担当した。なお、現地調査の体制・担当は、当『第一分冊』「I 前言 2 調査の体制と組織」に示したとおりである。
- 5 『第一分冊』の調査報告書の執筆分担は、目次に示したとおりである。なお、編集は、各原稿執筆者の協力を得て駒田利治が担当した。
また、遺構写真は、各調査担当が撮影し、遺物写真は主に森川常厚が撮影した。
- 6 発掘調査にあたっては、下記の方々にご指導とご助言をいただいた。なお、所属等は調査当時とし、敬称は省略させていただいた。
赤塚次郎・石黒立人（愛知県埋蔵文化財センター）、磯部 克（三重県立津西高等学校）、井上喜久男（愛知県陶磁資料館）、太田正臣（近畿大学）、肥塚隆保（奈良国立文化財研究所）、菅原洋一（三重大学工学部）、辰巳和弘（同志社大学文学部）、中野晴久（常滑市民俗資料館）、西山要一（奈良大学文学部）、八賀 晋（三重大学人文学部）、広岡公夫（富山大学理学部）、広瀬和久・原 正之（三重県農業技術センター）藤澤良裕（瀬戸市歴史民俗資料館）、村上隆（奈良国立文化財研究所）
- 7 遺構及び遺物の実測は、各調査担当が実施したほか下記の方々の協力を得た。坂田孝彦（花園大学学生）、清水弘之（菰野中学校講師）、田中智子（京都女子大学学生）、穂積裕昌（同志社大学学生）、水谷芳春（立正大学学生）
- 8 当遺跡の位置は、国土座標第VI系に属している。挿図の方位は、すべて座標北で示している。真北は座標北のN 0° 16' 43" W、磁北は座標北のN 6° 46' 43" Wである。
- 9 本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管・管理している。
- 10 本書には、調査に係わって下記の方々から玉稿をいただき、付篇として掲載させていただいた。

付篇 1 亀山地方の地質	磯部 克
付篇 2 上椎ノ木1号墳出土の四神鏡成分分析	村上 隆
付篇 3 上椎ノ木1号墳 土壌分析	広瀬 和久

目 次

I	前 言	1
1	経 過	(山田 猛) 1
2	調査の体制と組織	(山田 猛) 4
3	調査の方法	(駒田 利治) 19
II	位 置 と 環 境	(浅尾 悟) 20
1	位置と地形	20
2	歴史的環境	20
III	上椎ノ木古墳群・上椎ノ木館跡	25
1	位置と地形	(駒田 利治) 25
2	上椎ノ木 1号墳	28
(1)	墳丘と外部施設	(平子 弘) 28
(2)	主体部	(平子 弘) 30
(3)	遺 物	(浅尾 悟) 32
3	上椎ノ木 2号墳	(近藤 健) 36
4	上椎ノ木館跡	(駒田 利治) 37
5	結 語	(駒田 利治) 38
IV	谷 山 古 墳	(山田 猛、梅澤 裕) 51
1	位置と環境	51
2	遺 構	54
3	遺 物	57
4	結 語	63
V	正知浦古墳群・正知浦遺跡	79
1	位置と地形	(駒田 利治) 79
2	正知浦古墳群	(浅尾 悟) 81
3	正知浦遺跡	101
1	遺 構	(駒田 利治、浅尾 悟) 101
2	遺 物	(大川 勝宏、森川 常厚、駒田 利治、浅尾 悟) 115
4	結 語	(駒田 利治) 144
付 表 (遺物観察表)	145	
付 編 1	亀山地方の地質	(磯部 克) 215
付 編 2	上椎ノ木 1号墳出土の四神鏡の材質分析	(村上 隆) 219
付 編 3	上椎ノ木 1号墳の土壤分析結果	(広瀬 和久) 223

図版目次

卷頭図版

卷頭図版1

- 上椎ノ木1号墳 四神鏡
上椎ノ木1号墳 遺物出土状況

卷頭図版2

- 上椎ノ木1号墳 勾玉、菅玉、ガラス小玉

卷頭図版3

- 正知浦遺跡 第1次調査航空写真
正知浦遺跡 第2次調査航空写真

挿図

前言

- 第1図 一般国道1号亀山バイパスと調査遺跡位置図
第2図 発掘調査体制
位置と環境
第3図 鈴鹿川流域の遺跡位置図
上椎ノ木古墳群・上椎ノ木館跡
第4図 上椎ノ木古墳群・館跡地形図
第5図 上椎ノ木古墳群・館跡調査前実測図
第6図 上椎ノ木1号墳・館跡遺構全体図
第7図 上椎ノ木1号墳調査後実測図
第8図 上椎ノ木1号墳主体部実測図
第9図 上椎ノ木1号墳主体部の遺物実測図
第10図 上椎ノ木古墳群墳丘遺物・上椎ノ木館跡遺物実測図
第11図 上椎ノ木館跡 空堀SD4土層断面図
第12図 上椎ノ木館跡周辺字割図

谷山古墳

- 第13図 谷山古墳位置図
第14図 谷山古墳地形図
第15図 調査前墳丘実測図
第16図 墳丘土層図
第17図 墳輪出土位置
第18図 調査後墳丘実測図
第19図 墳輪出土状況
第20図 第一主体部と第二主体部
第21図 遺物実測図
第22図 遺物実測図
第23図 遺物実測図
第24図 鉄刀実測図

第25図 第二主体部玉類実測図

第26図 第二主体部玉類出土状況

第27図 第二主体部出土玉類の比較

正知浦古墳群・正知浦遺跡

- 第28図 正知浦遺跡位置図
第29図 正知浦遺跡地形図・調査区域図
第30図 正知浦古墳群・正知浦遺跡遺構配置図
第31図 正知浦1号墳実測図
第32図 正知浦1号墳石室実測図
第33図 正知浦1号墳石室遺物実測図
第34図 正知浦1号墳周溝遺物実測図
第35図 正知浦2号墳実測図
第36図 正知浦2号墳石室実測図・遺物出土状況
第37図 正知浦2号墳石室遺物実測図1
第38図 正知浦2号墳石室遺物実測図2
第39図 正知浦2号墳周溝遺物実測図
第40図 北勢地方の横穴式石室古墳位置図
第41図 北勢地方の横穴式石室実測図
第42図 SH19～SH23実測図
第43図 SK1・8・26・46実測図
第44図 SB28・43・50実測図
第45図 SB13～15、SK11・12実測図
第46図 SB16・32・47・73実測図
第47図 SX6 SK11・40・59・60実測図
第48図 SB63 SB65・66実測図
第49図 SE61・62・69・71 SK31・67実測図
第50図 石器、縄文土器実測図
第51図 SH21・23遺物実測図
第52図 古墳時代遺構遺物実測図
第53図 古墳時代包含層土師器実測図
第54図 古墳時代包含層須恵器実測図1
第55図 古墳時代包含層須恵器実測図2
第56図 古墳時代包含層須恵器・玉類実測図
第57図 飛鳥・奈良時代遺構遺物実測図
第58図 飛鳥・奈良時代包含層土師器実測図
第59図 飛鳥・奈良時代包含層須恵器実測図1
第60図 飛鳥・奈良時代包含層須恵器実測図2
第61図 平安時代遺構遺物実測図
第62図 鎌倉時代遺構遺物実測図
第63図 平安・鎌倉時代包含層土師器実測図
第64図 平安・鎌倉時代包含層遺物実測図
第65図 SB63 SB69・71・62遺物実測図
第66図 SK31・51・52・55・56・66・67遺物実測図
第67図 SK67遺物実測図

第68図 戦国時代包含層遺物実測図

表

- 第1表 一般国道1号亀山バイパス地内埋蔵文化財一覧表
- 第2表 一般国道1号亀山バイパス地内埋蔵文化財発掘調査経過表
- 第3表 亀山市周辺の遺跡一覧表
- 第4表 上椎ノ木1号墳玉類一覧表
- 第5表 三重県内石釧出土地名表
- 第6表 北勢地方の前期古墳一覧表
- 第7表 谷山古墳玉類觀察表
- 第8表 北勢地方の横穴式石室古墳一覧表
- 第9表 北勢地方の横穴式石室変遷表

写 真 図 版

上椎ノ木古墳群・上椎ノ木館跡

- P L 1 調査前近景 調査後近景
- P L 2 調査後遠景 1号墳近景
- P L 3 1号墳主体部遺物出土状況 1号墳主体部
- P L 4 1号墳粘土櫛 1号墳主体部立ち割り
- P L 5 鏡・石釧・石製小形壺・玉類出土状況
鉄斧出土状況
- P L 6 1号墳立ち割り 1号墳墳丘盛土
- P L 7 上椎ノ木1号墳 鏡・石釧・石製小形壺・
鉄斧
- P L 8 上椎ノ木1号墳玉類、同2号墳埴輪

谷山古墳

- P L 1 航空写真 遠景
- P L 2 航空写真 調査前古墳全景
- P L 3 調査風景 調査風景
- P L 4 発掘後古墳全景 第二主体部全景
- P L 5 第二主体部西石組 第二主体部東石組
- P L 6 第二主体部棺内玉類出土状況
第二主体部棺内鉄刀出土状況
- P L 7 第二主体部棺外杯身・蓋出土状況
第一主体部
- P L 8 周溝 墓輪出土状況
- P L 9 墓輪出土状況 墓輪出土状況
- P L 10 遺物
- P L 11 遺物
- P L 12 遺物

正知浦古墳群・正知浦遺跡

- P L 1 遺跡遠景 調査前状況
- P L 2 第1次調査区全景 第1次調査区航空写真
- P L 3 第2次調査区全景 第2次調査区航空写真
- P L 4 正知浦古墳群近景 1号墳石室
- P L 5 1号墳石室全景 1号墳石室
- P L 6 1号墳石室 1号墳石室掘形
- P L 7 2号墳全景 2号墳石室全景
- P L 8 2号墳石室遺物出土状況
- P L 9 2号墳玄室遺物出土状況 鉄製品出土状況
- P L 10 SH23 SH20・21
- P L 11 SH20・21・22 SH19
- P L 12 SK1 SK26
- P L 13 SK8 SK46
- P L 14 SB28 SB28
- P L 15 SB50 SB43
- P L 16 SB13・14・15・16 SB32
- P L 17 SB47 SB73
- P L 18 SX6 SK11
- P L 19 SK60出土状況 SK60
- P L 20 SK59出土状況 SK59
- P L 21 SK40 SK67
- P L 22 SK56 SK56・SK57
- P L 23 SB63 SE71
- P L 24 SE72 SE69
- P L 25 遺物(縄文土器・石器)
- P L 26 遺物(須恵器1)
- P L 27 遺物(須恵器2)
- P L 28 遺物(須恵器3)
- P L 29 遺物(須恵器4・鉄器)
- P L 30 遺物(金環・玉類・須恵器5)
- P L 31 遺物(須恵器6)
- P L 32 遺物(須恵器7)
- P L 33 遺物(土師器・白玉)
- P L 34 遺物(須恵器8)
- P L 35 遺物(須恵器9)
- P L 36 遺物(灰釉陶器・山茶碗・山皿・土師器)
- P L 37 遺物(灰釉陶器・山茶碗)
- P L 38 遺物(山茶碗・山皿・施釉陶器)
- P L 39 遺物(擂鉢)
- P L 40 遺物(施釉陶器・石硯)

I 前 言

1 経 過

歴史的経過 飛鳥時代（7世紀頃）、大和南部に都があった頃、伊勢国への道は長谷（初瀬）・名張・青山峠を経て一志郡に出るものが主であった。一志から北上すれば東海道・東山道であり、南下すれば斎宮・伊勢神宮への道である。

ところが大和北部への平城遷都（710年）後、東国への道は木津川及び鈴鹿川沿いが主となる。伊勢国府や国分寺が鈴鹿川沿いに選地された所以である。そして、長岡京（784年）・平安京（794年）遷都後、東国への道は近江・美濃ルートが重要性を増した。一方、鈴鹿川沿いの官道は、都から東国に至る不可避なルートではなくなつたために相対的にその地位が低下し、延暦8（789）年には鈴鹿関も廃されている。しかし、都と斎宮や神宮、あるいは御食国志摩に通じる官道としての地位は失われなかつた。

近世に至つても、難所として名高い鈴鹿峠を控えた関宿は東海道の宿場町として栄え、今日もその面影は重要伝統的建造物群として伝えられている。また亀山市内の旧東海道筋には、国史跡「野村の一里塚」をはじめ、街道の名残りが各所に認められる。

ところで亀山の旧市街は、鈴鹿川北岸の台地南縁を東西に延びる旧東海道沿いに発達したものである。亀山城も、この交通の要衝地に位置している。亀山市街は、幸にして第二次世界大戦の戦禍をあまり被らず、落着いた家並景観を今日に留めている。

しかしながら、道路の狭さは街の発達と広域交通上の要請に応え切れなくなり、国道1号は鈴鹿川北岸の低位段丘面である旧市街地の南方に新設された。いわば「第一次亀山バイパス」である。

その後、1960年代には名神・東名高速道路が開通し、東・西名阪高速道路等も順次開設された。このように、戦後の激しいモータリゼーション化に対応する道路整備がなされてきたが、これらの東西日本を結ぶ高速道路は自ずと料金抵抗も大きく、国道1

号を利用する長距離トラックは増加の一途を辿っている。このような交通状況に対して、建設省は昭和48年度に亀山市街地の北にバイパスを新設し、その他の2車線部分も4車線化するよう事業化した。これが当該調査業務に係るものであり、上述の歴史からすれば、いわば「第二次亀山バイパス」とでも云うべきものである。

それはともかく、翌49年度には、建設省中部地方建設局名阪国道工事事務所（当時、現「北勢国道工事事務所」）から、三重県教育委員会事務局文化課（当時、現「三重県教育委員会事務局文化部文化振興課」）に対して、当該事業に係る埋蔵文化財の保護協議がなされた。昭和55年度には、文化課において全線の分布調査を実施し、多数の埋蔵文化財が存在する事実を確認した。そして58年度には、翌年度からの発掘調査に先立つて、全体計画や調査体制等に関する具体的な協議を重ねた。

現場調査期間 昭和59年度からは、いよいよ本格的に現場調査を開始した。まず4月に、建設省中部地方建設局長との間で、業務全体を確認した協定書と、当該年度の埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結した。またこれに伴つて、全体計画書や当該年度調査計画書も策定した。

本格的な発掘調査の幕開けは、59年7月からの谷山古墳においてであった。一方、10月には亀山市和田町内に「一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査整理所」を開設し、以後の日常的な調査活動の拠点とした。

調査体制については後述するが、当初は調査業務を受託した三重県教育委員会が、民間土木建設業者に現場作業の土工部門を委託した。しかし昭和61年度からは、社団法人中部建設協会に建設省が直接土工部門を委託する方式に変更した。また平成元年度からは、亀山市教育委員会も調査の一部を分担した。

現場調査期間は、最終的に昭和59年度から平成2年度までの7年度に及び、10遺跡計約65,000m²を本調査した。

この間には、発掘調査結果の公報活動として、現地説明会を開催するなどし、多くの市民の参加を得た。また、地元の小・中・高校生を対象とした体験

発掘も実施した。一方、「国一バイパスだより」を23号まで発行し、県内外の研究者や一般市民に調査結果を紹介し、好評を得た。さらにこれらとは別に現場調査を実施した各年度には、『調査概要I～VII』を刊行した。



第1図 一般国道1号バイパスと調査遺跡位置図（1:50,000）

番号	中心杭No.	遺跡名	所在地	種別	時代	現況地目	面積(m ²)		概要			
							全体	調査面積				
1	No.4	谷山古墳	亀山市井田川町	古墳	古墳	山林	100	100	5世紀後葉の築成になる一辺13mの方墳で、本棺直葬の2つの主体部をもつ古墳。			
2	No.59~72	山城遺跡	亀山市川合町	集落跡	弥生~鎌倉	畑水田 果樹園	7,500	2,600	古墳時代の堅穴住居16基をはじめ、鎌倉時代の掘立柱建物群で構成される集落跡。			
3	No.72~75	上椎ノ木古墳群 上椎ノ木館跡	亀山市川合町	古墳城館跡	古墳中世	山林	6,500	2,500	4世紀末の築成になる径18~24mの円墳で、粘土塚の主体部から四神鏡・石製模造品・勾玉が出土。			
4	No.135 ~142	堀越遺跡	亀山市椿世町	集落跡	平安・鎌倉	畑	4,700	3,400	鎌倉時代の掘立柱建物群で構成される集落跡。			
5	No.148.5 ~152	大坪遺跡	亀山市椿世町	"	"	畑	4,600	0	周囲より一段高い畠地に、土師器片が散布する。			
6	No.158 ~169	正知浦遺跡 正知浦古墳群	亀山市龜田町	集落跡 古墳	古墳~江戸	畑水田 果樹園荒地	40,000	8,500	6世紀の横穴式石室を内部主体とする古墳2基と古墳時代から江戸初期にかけての集落跡。			
7	No.169.5 ~169	千本塚遺跡	亀山市龜田町	集落跡	奈良~鎌倉	畑水田 荒地	36,000	1,230	奈良時代の堅穴住居と掘立柱建物、鎌倉時代の柱建物群で構成される集落跡。			
8	No.196.5 ~200.5	大藪遺跡	亀山市羽若町	集落跡	"	荒地	45,000	8,650	奈良時代の堅穴住居と掘立柱建物、鎌倉時代の掘立柱建物群で構成される集落跡。			
9	No.214 ~224.5	粂屋垣内遺跡	亀山市羽若町	"	"	畑	28,000	9,500	平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物群で構成される集落跡。			
10	No.293.5 ~303.5	上野垣内遺跡	亀山市野村町	"	古墳~室町	畑	8,000	0	茶畠とその周辺に土師器や近世陶器が散布する。			
11	No.308 ~336	北瀬古遺跡	亀山市布氣町	"	縄文	山林 畑	64,000	1,000	縄文時代早期の土器片が出土。			
12	No.338 ~369	大鼻遺跡	亀山市太岡寺町	墳墓 集落跡	縄文 室町	畑 水田	73,000	27,500	縄文時代早期の押型文土器と堅穴住居、弥生時代の方形周溝墓群、古墳時代から奈良時代の堅穴住居、鎌倉時代の掘立柱建物群で構成される複合遺跡			
合計 12 遺跡							317,400	64,980				

第1表 一般国道1号亀山バイパス地内埋蔵文化財一覧表

遺跡名		調査面積(m ²)		昭和59	60	61	62	63	平成元	2	3	4	5
	範囲確認調査	本調査											
1	谷山古墳	—	100	100							報告書		
2	山城古墳	96	2,600	1,200範	1,000	400							報告書
3	上椎ノ木1号墳 上椎ノ木館跡	—	2,500						2,500		報告書		
4	堀越遺跡	152	3,400				範	1,700範	1,700				報告書
5	大坪遺跡	16	0				範						
6	正知浦遺跡 正知浦古墳群	176	8,500				範	8,500					報告書
7	千本塚遺跡	258	1,230				範		1,230				報告書
8	大藪遺跡	360	8,650				範		8,650				報告書
9	粂屋垣内遺跡	232	[9,500]				範		[3,000]	[6,500]			報告書
10	上野垣内遺跡	88	0				範						
11	北瀬古遺跡	472	1,000	1,000	範								報告書
12	大鼻遺跡	728	27,500		2,400範	7,500		11,100		6,500			報告書
合計		2,578	55,480 [9,500]	2,300	3,400	7,900	10,200	12,800	12,380 [3,000]	6,500 [6,500]			
調査担当職員数				2	2	2	3	4	4 [1]	3 [1]	4 [1]	4	3

第2表 一般国道1号亀山バイパス地内内蔵文化財発掘調査経過表

[]亀山市教育委員会担当

2 調査の体制と組織

三重県では、県と市町村における発掘調査の分担は、調査原因によって一応次のとおりとしてきた。すなわち国や公団及び県の事業は県教育委員会が、市町村の公共事業や民間事業は市町村教育委員会の担当である。これにより、建設省関係の当該事業は三重県教育委員会が担当した。

(1) 調査体制の決定と変更

直営 従来、三重県教育委員会の実施してきた発掘調査の体制は、ほとんど全てがいわゆる「直営」方式であった。この方式は、県教委が発掘作業員を直接任用し、各種機材のリース等も直接行なうものである。このような調査体制は、文化財保護行政、とりわけ埋蔵文化財の発掘調査に係る諸条件が未整理であった頃には、他に選択の余地もなく、それだけに自然なものであった。旧来の調査の多くは、昨今と比較すれば短期で小規模であったことも、この直営方式を可能としていたといえよう。さらに、調査原因の多くが圃場整備事業という個人負担の多い事業であり、発掘作業も農家の出合い的側面もあって作業員が確保されていた、という一面も無視し難い。

この直営方式は、間接経費が不要というメリットを持つ一方、作業員の確保や労務管理、機材管理等の手間が多く掛かり、調査員が純粋に調査に専念できないことや、事務量の多さ等がデメリットである。特に作業員の確保は、調査原因部局において手配していただいているが、近年は人手不足の傾向が著しい。特に、建設省関係の事業に係る発掘作業は、作業員の確保を期待できず、新たな調査体制が必要であった。

業者委託 そこで、建設省から発掘調査業務を受託した三重県教育委員会が、民間の土木建設業者に作業員や機材の手配を委託する方式をとってきた。この体制を、便宜的に「業者委託」と呼んでおく。これは、上述の直営方式のデメリットを解消できるが、土工部門に限定されるとはいえ、利益法人に調査業務の一部を委託することは、文化財調査にはなじまない面もあった。また、委託のための設計や変更等に伴う事務量が膨大になり、大きな問題となつた。

さらにこの体制は、建設省からすれば再委託となり、行政的にも問題を多く含んでいた。

ともかく、国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査業務も、開始の昭和59年度からこの業者委託体制をとってきた。ところが、59年度にこの体制の再委託が建設省から問題とされ、見直しの必要性が指摘された。そこで60年度は調査と併行、建設省と県教委との間で新体制に関する協議を重ねた。

第三者体制 60年度の一年間を費やして創出された新体制は、61年度から実施に移された。この新体制は全国的に類例のないものであり、当時の関係者はこれを便宜的に「第三者体制」と呼んだ。

この体制は業者委託と同様に、現場作業に係る作業員の任用や労務管理、各種機材の手配等といった土工部門に関してのみを委託するものである。ただし、委託者は県ではなくて建設省であり、受託者は検証の外郭団体である社団法人中部建設協会である。一方、調査に関する委託契約は委託者が建設省であり、受託者は三重県（教育委員会）である。したがって調査主体である県は、建設省から作業員や各種機材等の現物供与を受ける形となる。ところが、これらの国と県、および国と協会という、ふたつの委託契約だけでは、県と協会との関係を直接的には位置付けられないため、国・県・協会の三者で協定を結び、三者の協力関係を明らかにした。

この三者協定に基づき、県は協会に「作業要領」をあらかじめ提示した。また、各年度の委託契約に基づいて、県から協会に詳細工程表を提示して準備を求めるものとした。また現場作業期間中は、協会職員は県の調査員の指示に従い、毎翌週と毎翌日の指示を受けて準備することとした。実際の現場作業は、県の調査員が協会職員に指示する一方、作業員にも直接指示するものとした。

概略以上のような調査体制は、前例のないものであり、その体制の創出と具体的準備には多くの協議を重ねた。結果的には各契約や協定等には特段の問題はなかったが、実施までには内部的にも多くの議論が必要であった。最も強く懸念された点は、調査

の主体性が損なわれはしないかにあった。しかし現実に施行してみると、これは全くの杞憂に過ぎないことが明らかになった。また、心配された現場の指揮系統の混乱も無く、調査員は指示や観察・記録作業等の、純粋な調査業務に専念できるようになった。円滑な現場作業の実現には、作業の直接的な管理者が、利益法人ではなくて公益法人であることも重要な要素であるとも実感された。さらに、当初計画と実績とに差が生じても、県の事務量には何の影響も生じることはない点も、業者委託に比しての利点であった。

なお、この体制が軌道に乗ってからは、室内整理作業の一部も協会の協力を受けた。

(2) 現在の調査体制

現在の三重県教育委員会（三重県埋蔵文化財センター）が実施している発掘調査体制は、以下の三方式である。すなわち、文化庁の補助事業でもある直営方式と、当業務の中で創出された三者体制、およびこの応用方式である公社委託である。

三者体制 上述したように、いわゆる三者体制は、昭和61年度に当該業務において創出・導入された。それ以来、建設省関係の調査業務の全てに導入されており、当該調査業務における行政上の重要な成果である。

直営 一方、伝統的な直営方式も、県営圃場整備事

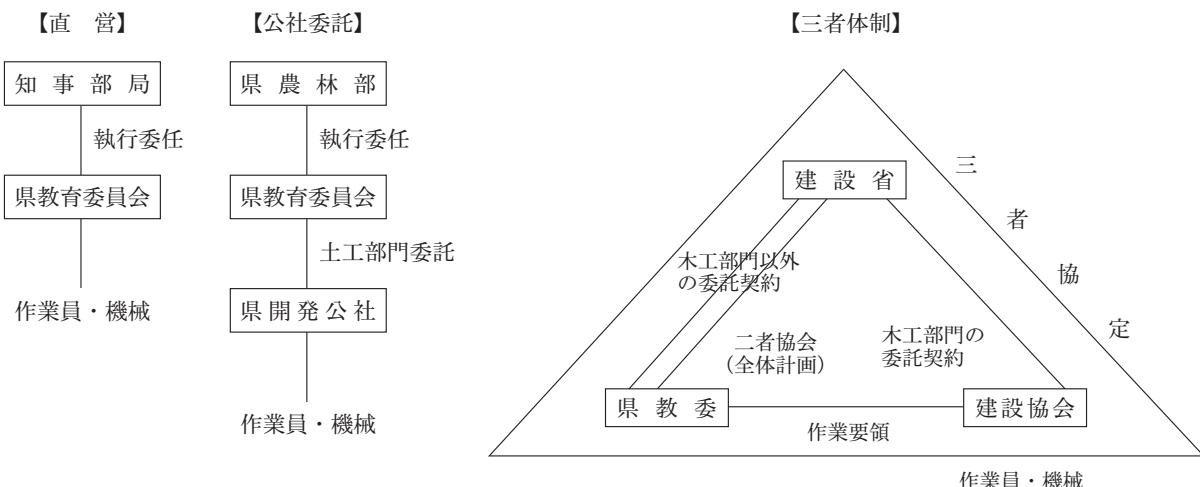
業を中心に採用され続けている。ところが、労務賃金に格差のある三者体制が同一地域で実施された場合、直営方式は作業員確保が一段と困難になる。また同じ県の調査員でも、調査体制によって労働条件も異なるという問題も発生した。

公社委託 そこで三者体制を参考として、原因者側の外郭団体である公益法人に、土工部門を委託する方式を県農林水産部関係業務の一部で平成元年度から採用した。

具体的には、県営圃場整備事業関連調査の土工部門を、三重県農業開発公社に県教委が委託するものである。建設省関係とは異なり、調査原因者（県農水部）ではなくて県教委が直接委託する理由は、発掘調査費の農家負担金は、大部分が教育費負担であり、この半分は国庫補助であるが、引き続き国庫補助を受け得る体制にしていることにある。

この体制のデメリットは、従来の直営方式よりも調査単価が上昇することや、補助金事業であるために公社への委託料に「諸経費」や「事務費」を計上できないことである。また、短期・小規模な調査現場には導入が困難な面もある。一方メリットは、三者体制と同様である。

この公社委託体制は、当該国道1号亀山バイパス関係業務の成果物である三者体制からの副産物とも言えるものである。



第2図 発掘調査体制

(3) 調査の組織

一般国道1号亀山バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、三重県が建設省中部地方建設局の委託を受けて実施した。発掘調査の主体は、三重県教育委員会であり、昭和59年度から昭和63度までは三重県教育委員会事務局文化課が、平成元年度以後は同年に発足した三重埋蔵文化財センターが各々調査を担当した。

以下、現地調査にかかる組織及び担当を列記する。

(山田猛)

昭和59年度

教育長 横田猛雄
文化課長 橘 重蔵
同課長補佐 西村高雄
主 幹 小玉道明
文化財第二係長 伊藤久嗣
文化財第二係 技師 山田猛
主事 梅沢裕

昭和60年度

教育長 横田猛雄
文化課長 橘 重蔵
同課長補佐 西村高雄
主 幹 小玉道明
文化財第二係長 伊藤久嗣
文化財第二係 技師 山田 猛
主事 梅澤 裕

昭和61年度

教育長 中林 博
文化課長 佐々木宣明
同課長補佐 岡田 忠
主 幹 小玉道明
文化財第二係長 伊藤久嗣
文化財第二係 技師 山田 猛
主事 梅澤 裕

昭和62年度

教育長 中林 博
文化課長 佐々木宣明
同課長補佐 蒔田 督
主 幹 小玉道明
文化財第二係長 伊藤久嗣
文化財第二係 主事 駒田利治・浅尾 悟
梅澤 裕

昭和63年度

教育長 中林 博
文化課長 佐々木宣明
同課長補佐 蒔田 督
文化財第二係長 伊藤久嗣
文化財第二係 主査 吉水康夫
主事 駒田利治・浅尾 悟
森川幸雄・近藤 健

平成元年度

教育長 中林博
文化部長 佐々木宣明
三重県埋蔵文化財センター所長 中林昭一
主幹兼調査第二課長 山澤義貴
同課主査 新田 洋
同課第2係長 駒田利治
主事 平子 弘・浅尾 悟・近藤 健

平成2年度

教育長 宮本長和
文化部長 横山洋平
三重県埋蔵文化財センター所長 中林昭一
次長兼調査第二課長 山澤義貴
同 課 主査 新田 洋
同 課 第2係長 駒田利治
主事 平子 弘

付 関係書類

A 二者委託契約書（建設省、三重県）

「委託契約書」

1. 委託業務の名称 ○○○○年度 一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査業務

2. 委託金額 ¥—————
(内、取引に係る消費税額 ¥—————)

「取引に係る消費税額」は消費税法第28条第1項及び第29条の規定により算出したもので、委託金額に3/103を乗じて得た金額である。

3. 委託期間 ○○○○年○月○日から
○○○○年○月○日まで

4. 発掘調査場所 三重県亀山市川合町山域～
同市太岡寺町大鼻地先

頭書業務の委託について、委託者 支出負担行為担当官中部地方建設局長○○○○を「甲」、受託者三重県知事○○○○を「乙」として次の条項により委託契約を締結し、別途締結する「埋蔵文化財発掘調査協定書」に基づき、信義に従い、誠実にこれを履行するものとする。

(総則)

第1条 乙は、別冊「○○○○年度一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘作業計画書」に基づき、頭書の委託金額をもって、頭書の委託期間までに、頭書の業務（以下「業務」という）を完了しなければならない。

2. 乙は、甲が別途委託した発掘作業担当者を指導監督し、発掘調査実施計画書、発掘詳細工程表（以下「計画」という）を作成するものとする。

3. 甲、乙及び発掘作業担当者は、分担又は、協力して発掘作業予定地の確認、地元等への

協力依頼、発掘作業跡地の確認等にあたるものとする。

(契約等の変更)

第2条 甲又は乙の都合により契約及び計画を変更し、又は、中止しようとするとき、あるいは発掘作業担当者から同様な申し出があったときは、あらかじめ甲、乙及び発掘作業担当者が協議して定めるものとする。ただし、軽微な変更は甲・乙協議して定めるものとする。

(権利義務の譲渡等の禁止)

第3条 乙は、この契約によって生ずる権利、又は義務を第三者に譲渡し、又は承継させてはならないものとする。

(再委託の禁止)

第4条 乙は、業務の処理を他に委託し、または請負わせてはならない。ただし、書面により甲の承諾を得たときは、この限りでないものとする。

(作業工程表および資金使用計画書の作成)

第5条 乙は、契約締結後、遅滞なく作業工程表、及び資金使用計画書を作成し、甲に提出するものとする。なお、作業工程表及び資金使用計画書を変更するときも同様とする。

2. 甲は、前項に基づき、業務の実施に支障をきたさないよう諸般の準備をするものとする。

(経費の負担範囲)

第6条 甲は、乙が業務（発掘作業担当者の指導監督を含む）を施工するために必要な次の各号に掲げる経費を負担するものとする。

一、調査人件費等 発掘調査に要する調査員・補助員の日当、旅費及び各種保険料、機械器具等、借損料等。ただし、発掘作業担当者の施行する費用を除く。

二、整理保存費 洗浄、接合、分類、復元、実測、写真撮影等の整理費、錆止め腐食止めのための理化学的保存処理費等

三、報告書類作成費 発掘調査報告書の印刷

製本費等

四、安全に要する費用

五、調査雑費

六、業務に関し障害が発生した場合（乙の故意、又は重大な過失により障害が発生した場合を除く）…当該損害の賠償額

七、天災その他不可抗力によって損害を生じた場合…当該損害の賠償額

八、その他、業務処理に伴い必要を生じた経費（業務の調査等）

第7条 甲は、必要がある場合には、乙に業務の処理状況について調査をし、又は報告書を求めることができる。

（安全管理）

第8条 乙は、発掘作業にあたっては、安全管理について発掘作業担当者を指導し、業務を施行しなければならない。

（発掘調査の範囲）

第9条 発掘調査の範囲は、別添図面に図示（赤色）したとおりとする。

（備品の使用）

第10条 乙は、甲の備品を使用するときは、遅滞なく甲に借用書又は、受領書を提出しなければならない。

2. 乙は、備品の使用にあたっては善良な管理者的注意義務をもって取り扱わなければならぬ。

3. 乙の故意又は重大な過失によって使用備品が滅失し、若しくはき損し、またはその返還が不可能になったときは、乙は甲の指定した期間内に代品を納め、又は原状に復し、若しくは損害を賠償しなければならない。

（業務完了報告書の提出）

第11条 乙は、業務が完了したときは、遅滞なく業務完了報告書に費用清算書及び調査結果報告書（以下「完了報告書等」という）を添えて、甲に提出するものとする。

2. 甲は、前項の完了報告書等を受理したときは、すみやかにこれらの確認を行うものとする。

（委託金額の支払い）

第12条 甲は、前条第2項の確認の後、乙から適正な請求書を受理したときは、その日から起算して30日以内に支払わなければならない。（概算払）

第13条 甲は、乙が必要とし、甲が必要と認めた場合は、前条の規定にかかわらず、資金使用計画書に基づき、委託金額の一部を概算払することができるものとする。

2. 前条の規定は、前項の支払いについて準用するものとする。（残存物件の処理）

第14条 乙は、業務完了の際、委託金額によって取得した資器材等で残存する物件がある場合は、残存物件調書を添えて甲に引き渡すものとする。ただし、次年度において引き続き使用が見込まれるものについては、この限りではない。

（出土品の処理）

第15条 発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続きについては、乙が代行するものとする。

2. 甲は、発掘され又は発見された埋蔵文化財に関する甲の権利は放棄するものとする。（契約外の事項）

第16条 この契約に定めのない事項、又はこの契約について疑義を生じた事項については、甲・乙協議して定めるものとする。

この契約の締結の証として、本書2通を作成し、甲・乙記名捺印のうえ、各自1通を保有する。

○○○○年○月○日

甲 名古屋市中区三の丸二丁目5番1号
支出負担行為担当官
中部地方建設局長 ○○○○印
乙 三重県津市広明町13番地
三重県知事 ○○○○印

B 二者協定書（建設省・三重県）

「協 定 書」

一般国道1号亀山バイパス建設地内に在する埋蔵文化財の適正な保護の措置を講じるための事前発掘調査の業務分担に関する事項について、建設省中部地方建設局長〇〇〇〇を「甲」とし、三重県知事〇〇〇〇を「乙」として、次の条項により協定を締結する。

第1条 この調査では、甲の委託により、乙が〇〇〇〇年〇月〇日から〇〇〇〇年〇月〇〇日までに施工するものとする。

この調査の発掘作業等に係る部分については、乙の指導監督に基づき、別途甲が委託する発掘作業担当者があたるものとして、その他については全て乙が実施するものとする。

第2条 この調査の施工箇所は、三重県亀山市川合町山域から同市太岡寺町大鼻地先までの別途図面に示す箇所とする。

第3条 この調査に要する経費は、総額￥————とし、その内訳及び予定年割額は、次のとおりとする

〔省略〕

第4条 年割額にもとづく調査の委託に関する契約は、年度毎に別途契約を締結し、必要な経費を乙の請求に基づいて支払うものとする。

第5条 この調査の施工にあたり、発掘された出土品の帰属は法令の定めるところに従うものとする。

第6条 この調査の施工にあたり、甲、又は乙のやむを得ない自由により計画の変更等の必要が生じた場合は、甲・乙協議のうえ、変更するものとする。

第7条 この協定に規定されない事項、及びこの協定の内容を変更する必要が生じたときは、甲・乙協議のうえ、決定するものとする。

上記の協定の証として本書2通を作成し、甲・乙記名押印のうえ、各自1通を保有する。

〇〇〇〇年〇月〇日

甲 名古屋市中区三の丸二丁目5番1号
中部地方建設局長 〇〇〇〇 印

乙 三重県津市広明町13番地
三重県知事 〇〇〇〇 印

C 三者協定書（建設省・三重県・中部建設協会）

「埋蔵文化財発掘調査協定書」

一般国道1号亀山バイパス建設地内に在する埋蔵文化財の適正な保護の措置を講じるための事前発掘調査の業務分担に関する事項について、建設省中部地方建設局長〇〇〇〇を「甲」とし、三重県知事〇〇〇〇を「乙」とし、社団法人中部建設教会理事長〇〇〇〇を「丙」として、次の条項により協定を締結する。

第1条 この調査では、甲の委託により、乙及び丙が次により施工するものとする。この調査を施工するのに必要な包蔵地の発掘作業等に係る部分については、乙の指導監督に基づき丙が施工するものとする。その他については全て乙が施工するものとする。

2. 乙はこの調査に先だって、丙と十分な打合せを行い、予想される当該埋蔵文化財の性格、概略掘削深、作業手順、調査期間等の発掘調査実施計画書を丙に示すとともに、甲に提出するものとする。

3. 丙は、発掘調査実施計画書を基に、発掘詳細工程表（案）を作成し、乙に提出するものとする。

4. 乙は、発掘詳細工程表を作成し、甲及び丙に提出するものとする。

5. この調査の実施中、乙と丙は互いに連絡を密にとり、調査の計画的施工に努めるものとする。

6. 甲、乙、丙は分担又は協力して、発掘作業予定地の確認、地元等への協力依頼、発掘作業跡

地の確認等にあたるものとする。

7. 発掘作業の施工に必要な細部については、別途甲、乙、丙連名の「埋蔵文化財発掘調査作業要領」を作成し、これに基づき実施するものとする。

第2条 この調査の施工箇所は、亀山市川合町山域から同市太岡寺町大鼻地先の別添図面に示す箇所とする。

第3条 この調査に関する必要な費用は、原則として全額甲が負担するものとし、甲は各年度毎に、乙及び丙と別途に契約を締結するものとする。

第4条 この調査の施工にあたり発掘された出土品の帰属は、法令の定めるところに従うものとし、その手続きは乙が行なうものとする。

第5条 この調査の施工にあたり、甲、乙又は丙のやむを得ない事由により計画の変更等の必要が生じた場合は、原則として甲・乙・丙協議のうえ変更するものとする。

第6条 この協定に規定されない事由及びこの協定の内容を変更する必要が生じたときは、甲・乙・丙協議のうえ決定するものとする。

第7条 この協定は〇〇〇〇年度の契約から適用するものとする。

上記協定の証として、本書3通を作成し、甲・乙・丙記名押印のうえ、各自1通を保有する

〇〇〇〇年〇月〇日

甲 名古屋市中区三の丸二丁目5番1号
中部地方建設局長 〇〇〇〇 印

乙 三重県津市広明町13番地
三重県知事 〇〇〇〇 印

丙 名古屋市中区三の丸三丁目5番10号
社団法人中部建設協会
理事長 〇〇〇〇 印

D 土工部門の委託契約書（建設省、中部建設協会）

「委託契約書」

1. 委託業務の名称 〇〇〇〇年度 一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘作業業務

2. 委託金額 ¥—————
(内、取引に係る消費税額 ¥—————)
「取引に係る消費税額」は消費税法第28条第1項及び第29条の規定により算出したもので、委託金額に3/103を乗じて得た金額である。

3. 委託期間 〇〇〇〇年〇月〇日から
〇〇〇〇年〇月〇日まで

4. 発掘調査場所 三重県亀山市川合町山域～
同市太岡寺町大鼻地先

頭書業務の委託について、委託者 支出負担行為担当官中部地方建設局長〇〇〇〇を「甲」、受託者中部建設協会理事長〇〇〇〇を「乙」として次の条項により委託契約を締結し、別途締結する「埋蔵文化財発掘調査協定書」に基づき、信義に従い、誠実にこれを履行するものとする。

(総則)

第1条 乙は、別冊「〇〇〇〇年度一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘作業計画書」に基づき、頭書の委託金額を持って、頭書の委託期間までに、頭書の業務（以下「業務」という）を完了しなければならない。

2. 乙は、甲が別途委託した三重県知事〇〇〇〇（以下「県」という）による発掘調査実施計画書に基づき、発掘詳細工程表（案）を作成し、教育委員会に提出するものとする。

3. 乙は、教育委員会と連絡を密にとり、業務の計画的執行と文化財の特殊性から予測出来ない事項にも対処するよう努めるものとする。

4. 甲、乙及び教育委員会は、分担又は協力し

て発掘作業予定地の確認、地元等への協力依頼、発掘作業跡地の確認等にあたるものとする。

(契約等の変更)

第2条 甲又は乙の都合により契約及び契約を変更し、又は、中止しようとするとき、あるいは県より同様の申し出があったときは、あらかじめ甲、乙及び教育委員会が協議して定めるものとする。ただし、軽微な変更は甲・乙協議して定めるものとする。

(権利義務の譲渡等の禁止)

第3条 乙は、この契約によって生ずる権利、又は義務を第三者に譲渡し、又は承継させてはならないものとする。

(再委託の禁止)

第4条 乙は、業務の処理を他に委託し、又は請負わせてはならない。ただし、書面により甲の承諾を得たときは、この限りではないものとする。

(作業工程表および資金使用計画書の作成)

第5条 乙は契約締結後、発掘調査実施計画書、及び実施詳細工程表に従い、遅滞なく作業工程表及び資金使用計画書を作成し、甲に提出するものとする。なお、作業工程表および資金使用計画書を変更する時も同様とする。

2. 甲は、前項に基づき、業務の実施に支障をきたさないよう諸般の準備をするものとする。

(経費の負担範囲)

第6条 甲は、乙が業務を施行するために必要な次の各号に掲げる経費を負担するものとする。

一、発掘作業費……発掘作業に従事する職員の日当、旅費および人夫の賃金、各種保険料、機械器具費、借損料、立入補償費等

二、整理保存協力費……洗浄、接合、分類、復元、実測、写真撮影等の整理費、銹止め腐食止めのための理化学的保存処理等、教育委員会に協力して実施する費用

三、安全に要する費用

四、作業雑費

五、業務に関し損害が発生した場合（乙の故意、又は重大な過失により損害が発生した場合を

除く）……当該損害の賠償額

六、天災その他不可抗力によって損害を生じた場合……当該損害の賠償額

七、その他、発掘作業に伴い必要を生じた経費（業務の調査等）

第7条 甲は、必要がある場合には、乙に業務の処理状況について調査をし、又は報告を求めることができる。

(安全管理)

第8条 乙は、発掘作業にあたっては安全管理に充分注意し業務を施行しなければならない。

(発掘作業の範囲)

第9条 発掘作業の範囲は、別添図面に図示（赤色）したとおりとする。

(備品の使用)

第10条 乙は、別冊計画書に記載の備品を使用してこの契約を履行するものとする。

2. 甲は、備品を乙の立ち会いのもとに検査して引き渡すものとし、乙は、引き渡しを受けたときは、遅滞なく甲に借用書又は受領書を提出しなければならない。

3. 乙は、備品の使用にあたっては善良な管理者の注意義務をもって取り扱わなければならぬ。

4. 乙の故意又は重大な過失によって使用備品が滅失し、若しくはき損し、又はその返還が不可能になったときは、乙は甲の指定した期間内に代品を納め、又は原状に復し、若しくはその損害を賠償しなければならない。

(業務完了報告書の提出)

第11条 乙は、義務が完了したときは、遅滞なく業務完了報告書に費用清算書および発掘作業報告書、県からの指導簿（以下「報告書等」という）を添えて、甲に提出するものとする。

2. 甲は、前項の報告書等を受理したときは、すみやかにこれらの確認を行なうものとする。

(委託金額の支払い)

第12条 甲は、前条第2項の確認の後、乙から適正な請求書を受理したときは、その日から起算して30日以内に支払わなければならない。

(概算払)

第13条 甲は、乙が必要とし、甲が必要と認めた場合は、前条の規定にかかわらず、資金使用計画書に基づき、委託金額の一部を概算払することができるものとする。

2. 前条の規定は、前項の支払いについて準用するものとする。

(残存物件の処理)

第14条 乙は、業務完了の際、委託金額によって取得した資器材當て残存する物件がある場合は、残存物件調書を添えて甲に引き渡すものとする。

(出土品の処理)

第15条 発掘途中において文化財又は文化財と思われる地物を発掘又は発見した場合は、あらかじめ指導を受けている場合を除き、すみやかに県に連絡し指示を受けるものとし、乙は善良な管理を行い出土品を県に引継ぐものとする。

2. 甲及び乙は、発掘又は発見された埋蔵文化財に関する甲及び乙の権利は放棄するものとする。

(契約外の事項)

第16条 この契約に定めのない事項、又はこの契約について疑義を生じた事項については、甲・乙協議して定めるものとする。

この契約の締結の証として、本書2通を作成し、甲・乙記名押印のうえ、各自1通を保有する。

○○○○年○月○日

甲 名古屋市中区三の丸二丁目5番1号
支出負担行為担当官
中部地方建設局長 ○○○○ 印

乙 名古屋市中区丸の内三丁目5番10号
社団法人中部建設協会
理事長 ○○○○ 印

E 作業要領（建設省、三重県教委、中部建設協会）

「一般国道1号亀山バイパス

埋蔵文化財発掘調査作業要領」

○○○○年○月○日

建設省中部地方建設局

三重県教育委員会

社団法人中部建設協会

1. 業務名称

一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査

2. 業務内容

一般国道1号亀山バイパス建設工事に伴い、現状保存が困難な埋蔵文化財について、事前の発掘調査を実施し、記録保存するための遺物包含層や遺構等の発掘作業を実施するものである。

3. 用語の定義

この仕様書で用いる用語の定義は次のとおりとする。

「甲」 三重県教育委員会

「乙」 社団法人中部建設協会

「発掘調査」 甲の実施する当該埋蔵文化財の考古学的な調査であり、計画立案から発掘作業に関する指導監督や記録作業等を含む。

「発掘作業」 甲の実施する発掘調査に関して甲の指導監督を受けて乙が行なう作業

「調査職員等」 甲の任命を受け、発掘調査を担当する職員および甲の任命を受け、発掘作業担当者に対し調査職員に準じて発掘作業の内容や方法等に関する指示をする調査補助員

「発掘作業担当者」 乙の発掘作業を担当する現場責任者

「発掘作業従事者」 乙の雇用する発掘作業に実際に従事する者

「発掘作業地」	発掘作業を実施する埋蔵文化財包蔵地
「包蔵層」	遺構の上に堆積している、遺物を包含した土層
「遺構」	埋蔵文化財のうち、住居や墓、溝等土質によって確認できる土地に残された昔の人々の生活痕跡
「遺物」	埋蔵文化財のうち、土器や石器、木製品等昔の人々の生活を知ることができる品物
「機材」	発掘作業に使用する各種の機械及び材料
「工具」	発掘作業に要する道具で、人力の掘削用の各種道具

4. 発掘作業

- (1) 乙は、調査職員等の指示に基づいて、人力あるいは重機による表土除去を行なうものとする。
- (2) 乙は、掘削によって生じた排土を指示された箇所に搬出、仮置きする。
- (3) 乙は、人力掘削開始に先立ち調査職員等の指示に従って発掘作業地区前面に4m方眼に地区杭を設定するものとする。
- (4) 包含層の掘削は手堀り（スコップ等）で行い、その際出土する遺物は、定められた範囲ごとに収納する。ただし、調査職員等が別に指示した場合はそれによる。
- (5) 包含層の掘削後は、鍬等で平坦にして遺構の検出を行なう。
- (6) 検出された遺構の掘削は、調査職員等の指示を充分に受け、原則として、小道具（移植コテ等）で行なう。また、ここで出土する遺物の取り扱いは、調査職員などの支持を受けたのちに取り上げ、遺構ごとに収納する。ただし、調査職員等が別に指示した場合はそれによる。
- (7) 掘削作業従事者の員数については、業務が円滑に実施されるようあらかじめ甲、乙充分協議して、定めるものとする。
また、業務執行中、甲または、乙の都合により員数の増減の必要が生じた場合には、すみやかに甲、乙協議のものとする。

5. 官公署その他との関係協議等

- (1) 乙は、発掘作業の実施に当たり必要な場合は一般道路、農業用水路、電気、ガス、水道施設等の管理者と協議し、発掘作業に支障をきたさないよう処理しなければならない。
- (2) 乙は、建設省の実施する隣接工事または関連工事の請負者と調整し、工事に障害又は遅滞を与えるよう努めなければならない。
- (3) 乙は、地方公共団体等と連絡を密にし、円滑な作業の実施につとめなければならない。

6. 安全管理

- (1) 発掘作業の安全確保
乙は、業務を施行するにあたっては、関係法令および規則を遵守するのはもちろん、発掘作業期間中随時少なくとも月に1日は安全日を設定し、発掘作業に関する処置状況の確認、予防効果の確認、安全施行の研修等を実施し、発掘作業における安全意識の高揚に努めるものとする。
- (2) 発掘作業地の安全整備
乙は、発掘作業地の整理整頓、工事用道路の整備、毎日の作業終了時の後片付け等、発掘作業地の安全整備に努めなければならない。
また、作業用道路の設定、遺構等の防護工の必要な場合は、調査職員等に連絡し、対策を講じる。
- (3) 保安対策
乙は、交通安全、災害、公害防止および防犯等について、必要により所轄警察署、道路管理者、労働基準監督署等の関係官公署、地元関係者ならびに調査職員と緊密な連絡をとり、万全を期さなければならない。
- (4) 公害防止
乙は、業務の施工中は、周辺の生活環境への悪影響を極力少なくするように努めなければならない。
- (5) 火災防止
乙は、発掘作業中の葛西事故防止のため、油脂類、薪炭やその他易燃性の物品の周辺は、火気使用厳禁の指示を行い、周辺の整理整頓を励行しなければならない。

(6) 事故防止

乙は、事故が発生した場合は、すみやかに調査職員等に報告するとともに必要な処置を講じなければならない。

(7) 埋戻し

乙は、発掘作業に関する全ての作業を終了した後、調査職員等の指示に従って保安に必要な範囲内での埋戻しをしなくてはならない。

7. 細部事項

(1) 発掘詳細工程表（案）の提出

乙は、契約締結後、甲の発掘実施計画書をうけて発掘作業全体に関する工程、施行方法、施行機械設備および安全管理対策について、発掘詳細工程表（案）を作成し、甲に提出するものとする。

(2) 準備工

（ア）業務施行に際して中心杭、基準点等は、乙において充分照査するものとし、業務施行に際して失われる杭およびその恐れのある杭については、後に復元可能な状態を維持するとともに、控杭の配置図を作成し、甲に提出しなければならない。

（イ）発掘作業に用いる機材・工具は原則として乙によって準備するものとする。

(3) 現場詰所

乙は、発掘作業の施行に際して、現場詰所を設けることができる。

(4) 近接施行に対する注意

業務施行に際しては、近接する水路、路肩、電柱等の物件に対し損傷を与えないように充分注意し、万全の対策を立てなければならない。

(5) 排土運搬

重機によって排土の運搬を行う場合、未調査部分に埋蔵される文化財の現状が損傷しないよう、充分配慮して作業を実施しなければならない。

(6) 遺構の保護

遺構、遺物等、調査職員等が特に指定した場合、乙は、それらの遺構、遺物が損なわれないよう、養生マット、シート等をかける等その保存に極力努めなければならない。

(7) 発掘作業従事者の交替

発掘作業は、経験を要する作業を含むため、乙は、その使用する発掘作業従事者を交替する必要が生じた場合は、極力少人数の交替にとどめるよう努めなければならない。

(8) 時間外の発掘作業

時間外の発掘作業は原則として行わないものとする。やむを得ず作業を実施する場合は、調査職員等の指示を遵守して実施するものとする。

(9) 夜間・土曜日・日曜日・祝祭日等の作業

発掘作業および材料運搬等は原則として夜間に行なってはならない。

また、土曜日の午後・日曜日・祝祭日および盆ならびに年末年始は原則として休日とする。やむを得ず発掘作業を実施する場合は、調査職員等と協議し、承諾を得なければならない。

(10) 調査職員等不在時の作業

調査職員等が不在の場合は、原則として作業を休止する。止むを得ず作業を実施する場合は、調査職員等と協議し、特定した作業について実施するものとする。

(11) 雨天時の作業

雨天等天候の都合により休日とする場合は、当日始業前に発掘作業担当者と調査職員等と協議の上、甲が決定する。発掘作業担当者はこの決定を受けて発掘作業従事者に連絡しなければならない。なお、この場合の休日は半日単位で決定するものとする。

(12) 見学者の立入りについて

文化財愛護精神普及の観点から、調査職員等は見学者の立ち入りを許可する場合がある。この場合は、これに協力しなければならない。

8. 挖削等

(1) 乙は、埋蔵文化財の発掘作業という特殊性、重要性等を充分理解し、使用する発掘作業従事者等にも周知徹底を図るとともに、掘削に際しては万全の注意をはらって行わなければならぬ。

(2) 掘削を始めるに当っては、まず調査職員等の指示を受けて指示された深さまで掘り下げた後は、新たに調査職員等の指示を求めなければならない。

らない。

また、無遺物層を掘削中に遺物遺構が検出されたり特殊な遺物が検出された場合は、ただちに掘削を中止し、調査職員等に報告し、その指示を受けなければならない。

(3) 掘削後の地面には、みだりに立ち入らないよう以し、やむを得ず立ち入る場合は調査職員等の許可を受けなければならない。

(4) 湧き水、溜水等のある場合は、排水を完全に行った後、掘削作業を実施しなければならない。また、排水は、第三者から苦情の出ぬよう適切な方法で処理しなければならない。

(5) 降雨その他により、発掘作業に支障のある場合は、調査職員等の指示を受けなければならない。

(6) 乙は、業務の全部または一部が完了した時は、調査職員等の指示を受け、発掘作業地を清掃し、残材、廃物、木屑等を撤去しなければならない。

(7) 掘削によって出土する遺物の収納および遺構の掘削は、発掘調査の最も重要な作業の一つであり、乙およびその使用する発掘作業従事者は調査職員等の指示を充分に理解し、これを行わなければならぬ。

(8) 毎日の作業によって出土した遺物については、調査職員等の指示に従い、その指定した場所に運び入れるものとする。

9. 補足事項

(1) 掘削数量の検出のために必要な測量等の作業は、すべて乙が行なうものとする。

(2) 工法変更等の必要な場合には、図面等資料を

添えて調査職員等の指示を受けるものとする。

F 発掘調査計画書

「〇〇〇〇年度一般国道1号亀山バイパス 埋蔵文化財発掘調査計画書」

1. 発掘調査場所

亀山市〇〇町

2. 埋蔵文化財の名称及び現状

〇〇遺跡 〇〇

3. 調査の目的

本調査は、一般国道1号亀山バイパス建設工事に伴い、現状保存が困難な埋蔵文化財について、事前の発掘調査を実施し、記録保存に努める。

4. 調査面積及び調査期間

〇〇遺跡 〇〇〇〇m²

〇〇〇〇年〇月～〇〇〇〇年〇月

5. 調査機関

調査主体 三重県

調査担当 三重県教育委員会

三重県埋蔵文化財センター

6. 発掘調査費用

￥〇〇〇〇〇〇〇-

7. 発掘調査工程表

(下の表)

	作業内容	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
○ ○ 遺 跡	計画・準備												
	表土掘削												
	包含層掘削												
	遺構検出												
	写真・航測												
出土品整理	水洗い・注記												
	接合・復元												
	実測・製図												
	写真撮影												
	概要作成												

G 発掘詳細工程表

「発掘詳細工程表」

H 業務予定表

「業務予定表」

I 発掘作業指導簿

発掘作業指導簿

年 月 日

記

No.

(印)

調査職員	
(印)	

発掘作業業務週報

J 発掘作業業務週報

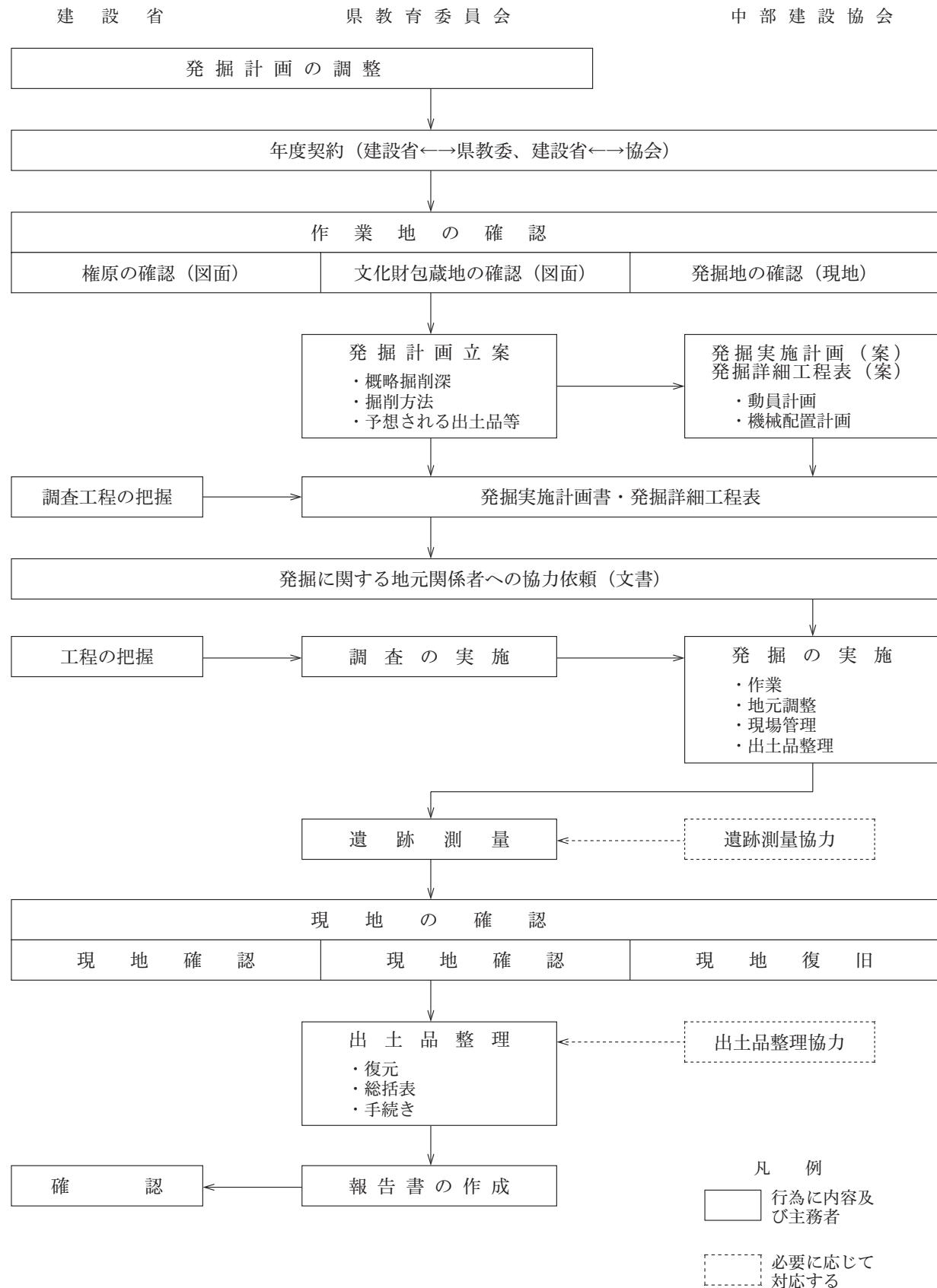
業務名		年度 一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘作業業務		作業員数	主な使用機械
作業日 天候	登録作業簿 No.	作業箇所 上段：予備調査 下段：本調査	作業箇所 遺跡		
(月)	No._____	<input type="checkbox"/> 遺跡	<input type="checkbox"/> 遺跡	○	バックホウ ダンブルック
(火)	No._____	<input type="checkbox"/> 遺跡	<input type="checkbox"/> 遺跡	○	ブルドーザー ベルトコンベア
(水)	No._____	<input type="checkbox"/> 遺跡	<input type="checkbox"/> 遺跡	○	バックホウ ダンブルック
(木)	No._____	<input type="checkbox"/> 遺跡	<input type="checkbox"/> 遺跡	○	ブルドーザー ベルトコンベア
(金)	No._____	<input type="checkbox"/> 遺跡	<input type="checkbox"/> 遺跡	○	バックホウ ダンブルック
	備考			○	ブルドーザー ベルトコンベア
				○	発電機(20KW) 発電機(20KW)

上記は、受理しました。

(印)

発掘作業担当者	
(印)	

K 発掘調査業務の流れ



3 調査の方法

亀山バイパス建設予定地内には、昭和49年度の分布調査で10ヶ所の遺跡が確認されていた。昭和57年1月に都市計画決定され、工事計画が具体化してきた昭和58年度には具体的な発掘調査計画の協議が行われ、翌昭和59年度からは、谷山古墳・山城遺跡の調査に着手した。昭和59年4月に実施したバイパス建設予定地内における遺跡の再調査を行ったところ新たな遺跡の所在も確認され、12ヶ所の遺跡が所在していることが確定された。

発掘調査は、バイパス工事計画が東から開始される計画になっていることに呼応して、谷山古墳・山城遺跡から着手した。しかしながら、建設予定地内の用地買収の進捗状況や民家の移転問題などにより、山城遺跡のように分割して発掘調査を実施せざるを得なかつた遺跡もある。従って、発掘調査は、東の起点からを前提としながらも、用地買収等の進捗状況をみきわめながら、協議・決定して行った。

調査は、昭和59・60年度には「直営方式」で、昭和61年度以降は、「三者協定方式」で実施した。

(1) 現地調査

現地における発掘調査の実施にあたっては、遺跡の位置等の基準を国土座標に求めるにした。幸い、バイパス建設路線に沿って第VI系の基準点及び水準点が埋標されており、また計画路線内には20mピッチで座標が付加されたセンター杭が設定されていたので、地区割り等の基準はこれに依った。

地区割りは、重機による表土除去後4m四方の地区を設定しこれを小地区とし、小地区25の集合である20m四方を中地区とし、中地区25の集合である100m四方を大地区とする地区設定を基本にしてきた。平成元年度に三重県埋蔵文化財センターが設置され、地区割りについても見直しがおこなわれた。4mの小地区を基本地区とすることに変わりはないが100m四方を縦横各々25分割し、縦（南北）方向にA～Yのアルファベット、（東西）方向に1～25の数字を与えた。100m四方を越える遺跡については、100m単位の地区を設定し、A-E〇と呼称することとなった。この地区割りの見直しにより、亀山バイパス関係の

調査でも、平成元年から新たに調査を開始した上椎ノ木古墳群・千本塚遺跡・大藪遺跡については新しい方式を用いることになった。

調査の掘削では、表土・耕作土は重機による機械掘削とし、これ以下の遺物包含層は人力掘削とした。昭和60年度の大鼻遺跡（第1次）の調査以降、堅穴住居等の埋土は、すべて2mmのフリイ上で水洗し、埋土中に含まれる遺物の散逸をふせいた。この結果、古墳時代堅穴住居から多数の滑石製の白玉や石鍬の出土をみた。

調査の記録は図面関係では最終検出面の実測を航空写真測量を用い1/300～1/400の写真撮影を行い、1/50と1/100の平面図・遺構図を作成した。また、報告書作成段階で遺構と等高線を図示した等高線図も作成し、報告書へ掲載した。日々の調査結果は、小地区毎に「遺構カード」へ記入し、作業経過は「作業日誌」に調査の流れを記録した。

映像記録は、主に大型カメラと小型カメラによる写真としたが、平成元年度からはビデオカメラによる映像記録も適宜採用した。写真は、プローニー判及び4×5判のカラーポジフィルム及びモノクロフィルムを基本とし35mm判を補助とし用いた。

現地調査で、熱残留磁気・熱ルミネッセンスの年代測定、プラントオパール・花粉分析等による古環境の復元、脂肪酸・カルシウム・リンの分析による動物遺体の鑑定など考古学的手法では不可能な分野については、各々必要に応じて自然科学分野の研究者に調査・分析を依頼し、調査に万全を期した。

(2) 整理・報告書作成

遺物の整理は、抽出した異物については各遺跡毎に整理ナンバー「R」番号を与え、後には図面番号「000-00」を与えた。報告書掲載番号が確定した段階で、「遺物管理台帳」を整理・作成し遺物を収納した。金属製品及び木製品については、自然科学的保存処理を施した。

発掘調査及び報告書作成を円滑に実施するため、亀山市和田町に「一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査整理所」を設けた。 (駒田利治)

II 位置と環境

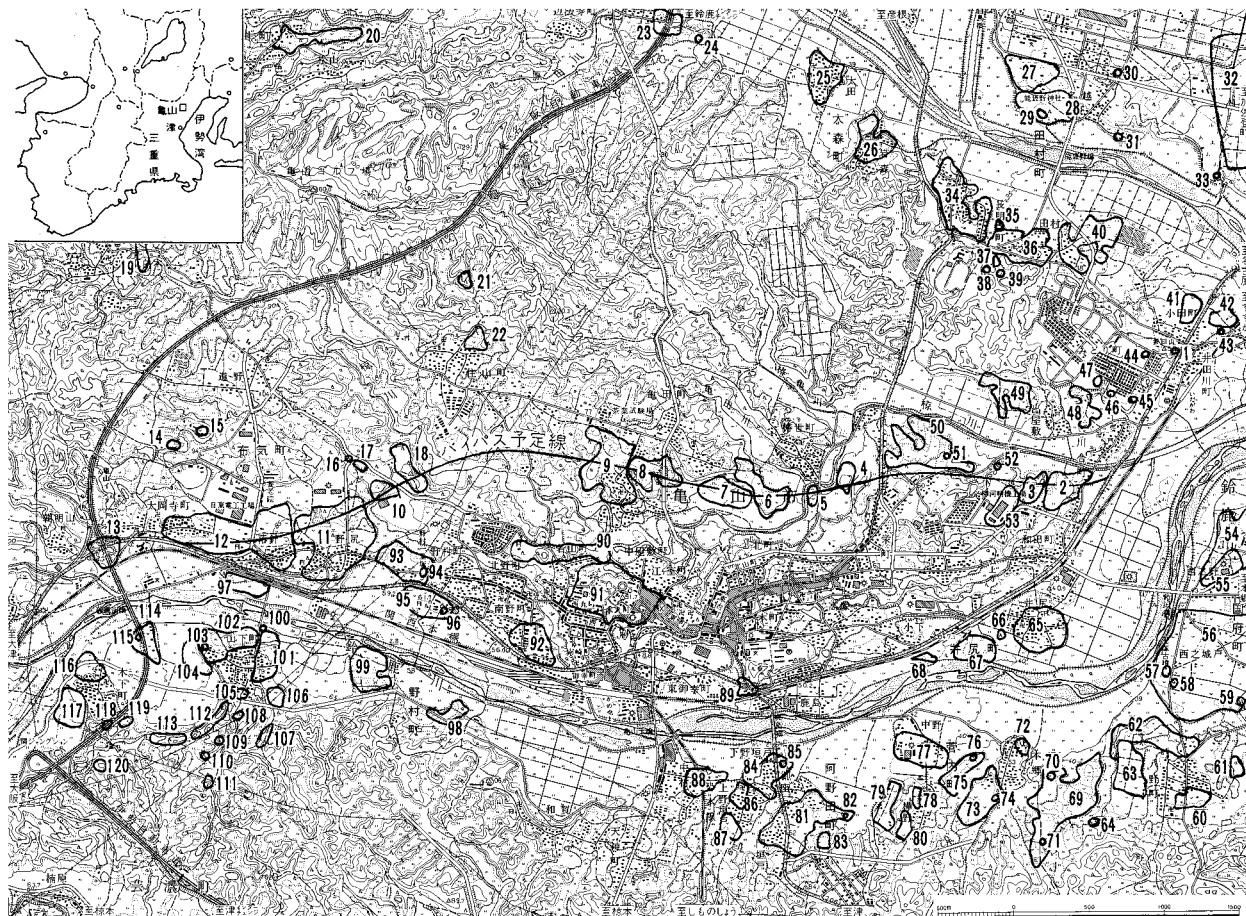
1 位置と地形

三重県は南北に長く、旧国名では伊勢国、伊賀国、志摩国と紀伊国の一部を編入する。さらに旧伊勢国は風土的にも、また行政的にも3つに分かれ、それぞれ北勢、中勢、南勢と呼称される。亀山市は北勢の南端に位置し、東は鈴鹿市に、西は鈴鹿郡関町に、南は安芸郡芸濃町に、北は鈴鹿山脈を隔てて滋賀県と接する。現在の亀山市は人口38,455人（1992.3.31現在）、面積111.13km²で、東西に国道1号線とJR関西線が、南北に名阪国道とJR参宮線が貫通する交

通の要衝の地にある。

亀山地域の地形は複雑で、北辺の千ヶ岳（961m）、野登山（851m）をはじめとする山岳地帯の南側は、中小の河川が浸食する開析谷が発達し、起伏の多い台地が連続している。市の南端を東流する鈴鹿川は西の加太峠に源を発し、関町、亀山市、鈴鹿市を流れて伊勢湾に注ぐ。鈴鹿川両岸は河岸段丘が発達し、低位段丘面上に水田が、高位段丘面上に集落が立地する。

2 歴史的環境



第3図 鈴鹿川流域の遺跡位置図 1:50,000（「国土地理院 1:25,000亀山」から）

(1) 繩文時代

亀山市域では、現在のところ確実に旧石器時代に遡る遺跡は報告されていないが、本報告の正知浦遺跡（6）出土の有茎尖頭器が唯一最古の遺物である。亀山市域では縄文時代の遺跡は西部の鈴鹿川沿岸に集中している、今次バイパス建設によって調査された大鼻遺跡（12）では早期の竪穴住居7基と共に押型文土器群を出土している他、大鼻遺跡の東方約1kmに位置する野村遺跡（93）からは後期の土器が、さらに1km東方の南野遺跡（92）からは晩期の土器が、また、鈴鹿川を隔てて対岸の沢遺跡（102）からは中期を主体とした前期から晩期の土器が出土している。

(2) 弥生時代

亀山市域における弥生時代の遺跡は、発掘調査によって検出された遺跡の他は明らかでない。前期に遡る遺跡・遺物は現段階では報告されていない。地蔵僧遺跡では中期中葉の方形周溝墓3基と後期後半の竪穴住居6基が検出されている他、大鼻遺跡では中期中葉から後葉にかけての方形周溝墓11基を検出している。また、太岡寺古墳群（13）の下層から中期の住居跡を検出している他、下庄町からは中期の壺の出土報告がある。特に、大鼻・地蔵僧遺跡の遺物は中期後葉からの「近江系」の壺も出土しており、東の沖積地の立地する上箕田遺跡などには見られない近江との交流が注目される。

(3) 古墳時代

畿内から東国への玄関口に位置する鈴鹿川流域は古墳時代に至り高度に発達した文化の吸収、伝播の地となった。

鈴鹿川流域及び北勢地方で最古最大の古墳は能褒野王塚古墳（29）とされる。全長90mの前方後円墳は埴輪列・葺石を外部施設とし、概ね4世紀後半の時期が想定される。それに続く古墳は鈴鹿川流域では鈴鹿市愛宕山1号墳（全長66m、前方後円墳）や寺田山1号墳（全長70m、前方後円墳）で、概ね5世紀前後の時期が考えられる。またそれらは規模的には似かよっているが、距離的には分散しており、鈴鹿川流域が全体として系統的に発展したのではなく、それぞれの小グループに分化して発展していった。

上椎ノ木1号墳（3）を含むグループは鈴鹿川流域の中でも特に卓越しており、上椎ノ木1号墳（3）→愛宕山1号墳→西ノ野5号墳（58）（全長31m、前方後円墳）→城山古墳（47）（全長40m、前方後円墳）→西ノ野王塚古墳（57）（全長63m、前方後円墳）→井尻古墳（66）（全長54m、前方後円墳）→井田川茶臼山古墳（44）の首長墳の変遷をたどることができる。特に、井田川茶臼山古墳は、1972年に発掘調査され、この地方では最古の横穴式石室を検出した。箱式石棺2基を主体部とし、画文帶同向式神獸鏡2面、宝冠、馬具類を始めとする数々の副葬品の豊富さは畿内との強い結び付きをよく反映している。また、亀山市の西端には、木ノ下古墳（118）（全長31m、前方後円墳）と山下古墳（103）（全長39m、前方後円墳）が位置する。木ノ下古墳は1964年に名阪国道建設に先立ち発掘調査された。埴輪列と葺石を外部施設とする帆立貝式古墳で、3つの主体部を有し、獸帶鏡や形象埴輪を始めとする出土品から5世紀末の築造とされる。

この時代の集落は須恵器、土師器の散布する遺跡の数から、多くの集落が存在したであろうことが予想される。発掘調査によって明らかになった集落遺跡では、大鼻遺跡（12）（竪穴住居64棟、6世紀）、山城遺跡（2）（竪穴住居18棟、4～6世紀）、柴戸遺跡（50）（竪穴住居17棟、4～5世紀）、地蔵僧遺跡（竪穴住居32棟、4～6世紀）、柴崎遺跡（竪穴住居5棟、6世紀）等がある。

(4) 奈良・平安時代

この地域は、律令時代には鈴鹿郡に属していた。

「和名抄」によれば鈴鹿郡内には英多、高宮、長世、鈴鹿、牧田、神戸、駅家の7郷があった。郡衙の所在地については不明であるが、ここに三閼の一つである鈴鹿関が設けられた。伊賀から加太越えで鈴鹿川に至る大和街道（旧東海道）上に設けられた鈴鹿関は現在の関町旧宿場町地区の地に比定されている。壬申の乱の頃にはすでに閼としての機能を備えていたようである。伊勢国府の所在地も鈴鹿郡内にあり、創置の国府が鈴鹿市広瀬町長者屋敷遺跡（32）にあり、鈴鹿関の軍團をも兼ね備えていたとされる。しかし延暦8（789）年の三閼の廃止、延暦11（792）

年の軍団制の廃止でその役割を終え、平安時代には政庁域のみ鈴鹿川対岸の国府地区に移動したものと考えられる。

鈴鹿郡内で白鳳・奈良時代の寺院跡は現在のところ発見されていない。僅かに奈良時代の伊勢国分尼寺へ供給された川原井瓦窯跡の他、国分寺と同系統の瓦を産する八野瓦窯跡(64)と隣接する寺院跡の可能性もある八野积迦堂遺跡(63)が確認されるのみである。また、関町大日森遺跡からは平安時代後半の古瓦や土製如来像が発見されており、寺院跡と考えられている

条里遺構は平地が狭小なためあまり発達せず、僅かに鈴鹿川右岸の山下・木ノ下地区、阿野田・樺野地区、安楽川右岸の太田地区の一部に見られるのみである。

(5) 鎌倉・室町時代

院政期よりこの地方にも荘園の成立をみる。「神鳳抄」には豊田御厨、安乃田御厨、安楽御厨、葉若御厨、原御厨、井後（尻）御厨等の荘園が見えるが、その他の記録には晝生荘、和田荘、三箇荘等も散見する。遺跡との照合でも平安末期からの遺跡は前代よりも格段に増加している。今次バイパス建設によって調査された大藪遺跡(8)や杣屋垣内遺跡(9)では平安末期の集落跡を検出しているが、特に後者は葉若

御厨との直接的な関係が指摘できる集落構成となっている。

元久元(1204)年、平重盛の曾孫である平実忠は鈴鹿郡関田に24郷の地頭職を任じられ、久我に居を構え、関氏を称した。後に山下の地に館(105)を移し、文永(1264)年には若山城(90)を築いてここを拠点とした。南北朝争乱時に、関盛忠は南朝方の武将として活躍したが、5人の子息に領地を分割し、峯城、加伏兎城、国府城、沢城を築かせた。関氏一党である。

その他の中世城館としては野元坂館跡(23)、白木城跡(19)、小川城(20)、山下城跡(102)、阿野田城跡(86)等がある。

(6) 江戸時代

天正18(1590)年、峯城主・岡本下野守良勝は秀吉によりこの地方の領主として領地を充てがわれ、若山城の南に新城を築いた。これが亀山城(91)で、その後、本多俊次によって城郭と共に城下町も整備された。城下を通過するように東海道が付け替えられ、巡見道や伊勢別街道等の脇街道も整備された。野村一里塚跡(94)は東海道で唯一現存する一里塚である。

延享元(1744)年以降は譜代大名石川氏が代々亀山藩を治め、所領6万石の内、1万石は備中領で、残り5万石は鈴鹿郡を中心とした86ヶ村で領有した。

(浅尾 悟)

No.	遺跡名	所在地	種別	時代	規模、発掘調査等
1	谷山古墳	亀山市井田川町	古墳	古墳	一辺13mの方墳、5世紀後葉築造。
2	山城遺跡	〃川合町	集落跡	弥生～鎌倉	古墳時代の竪穴住居16棟、鎌倉時代の溝等検出。
3	上椎木館跡・上椎木古墳群	〃川合町	古墳・城館跡	古墳・戦国	4世紀後半の前期古墳と中世城館。
4	堀越遺跡	〃椿世町	集落跡	鎌倉	鎌倉時代の堀立柱建物群。
5	大坪遺跡	〃椿世町	散布地	鎌倉	1987年試掘調査。
6	正知浦遺跡	〃亀田町	古墳・集落跡	古墳～江戸	古墳2基と奈良～江戸時代の集落跡。
7	千本塚遺跡	〃羽若町	水田・集落跡	古墳～鎌倉	奈良時代の竪穴住居と鎌倉時代の堀立柱建物。
8	大藪遺跡	〃羽若町	集落跡	奈良～鎌倉	平安時代末～鎌倉時代を中心とする集落跡。
9	杣屋垣内遺跡	〃羽若町	〃	〃	平安時代～鎌倉時代の大集落跡。
10	上野垣内遺跡	〃野村町	散布地	古墳～時代	1988年試掘調査。
11	北瀬古遺跡	〃布気町	〃	縄文	縄文時代早期土器片出土。
12	大鼻遺跡	〃太岡町	墳墓・集落跡	縄文～室町	弥生時代の方形周溝墓群と縄文～室町時代の大集落跡。
13	太岡寺古墳群	〃太岡寺町	古墳	古墳	1964年調査、6基の内、3基が横穴式石室。
14	大岬遺跡	〃布気町	散布地	鎌倉～江戸	山茶碗、施釉陶器。
15	山子遺跡	〃布気町	〃	鎌倉・室町	山茶碗、常滑窯。
16	古部野経塚	〃布気町	経塚	平安	円形、径5m×1.5m。
17	横沢経塚I、II	〃布気町	〃	〃	I；径6.5m×高1.3m、II；径6.3m×高1m。
18	高飛館跡	〃野村町	城館跡	戦国	土壘が數ヶ所残る。伝承なし。

第3表 亀山市周辺の遺跡一覧表 (No.は第3図の番号と一致)

No.	遺 跡 名	所 在 地	種 別	時 代	規 模、発 掘 調 査 等
19	白 木 城 跡	亀山市白木町	城館跡	室 町	関家与力の白木氏の居城跡、永享年間築城。
20	小 川 城 跡	" 小川町	"	"	関家与力の小川氏の居城、土墨残る。
21	住 山 廃 寺	" 住山町	寺院跡	室 町	中世真宗寺院跡
22	住 山 館 跡	" 住山町	城館跡	戦 国	関氏一党の住山氏の居館跡。
23	野 元 坂 館 跡	" 边法寺町	"	戦 国	1969年調査。堀立柱建物2棟等検出。
24	青 木 古 墳	" 边法寺町	古 墓	古 墓	円墳、径6m×高1m。
25	太 田 遺 跡	" 太森町	散布地	鎌倉～江戸	土師器、山茶碗、近世陶器。
26	高 頭 遺 跡	" 太森町	"	縄文、古墳～江戸	石鏸、須恵器、土師器、山茶碗、常滑窯。
27	御 幣 立 遺 跡	" 能郷野町	"	古墳～江戸	須恵器、土師器、施釉陶器、円塔埴輪。
28	能 郷 野 古 墳 群	" 田村町	古 墓	古 墓	円墳16基、径4～14m。
29	能 郷 野 王 塚 古 墳	" 田村町	"	"	前方後円墳、全長90mでこの地方最古で最大。
30	小 天 狗 古 墳	" 田村町	"	"	円墳、径10m×高2m。
31	名 越 2 号 墳	" 能郷町	"	"	前方後円墳、消滅。
32	長 者 屋 敷 遺 跡	鈴鹿市広瀬町	官 衙	奈 良	創置の伊勢国府跡
33	矢 下 4 号 墳	亀山市田村町	古 墓	古 墓	前方後円墳、消滅。
34	中 一 色 遺 跡	" 長明寺町	散布地	古墳～江戸	須恵器、土師器、白磁、常滑窯、山茶碗。
35	山 尾 氏 館 跡	" 田村町	城館跡	戦 国	天正年間、山尾甲斐守が居城、土墨、堀残る。
36	奥 条 遺 跡	" 田村町	散布地	室 町	土師器、山茶碗、白磁、近世陶器。
37	中 尾 遺 跡	" 田村町	城館跡	戦 国	土墨、堀切残る。
38	高 い 山 古 墳	" 田村町	古 墓	古 墓	円墳、径10m×高1m
39	田 守 神 社 古 墳	" 田村町	"	"	円墳、径18m×高1.5m
40	若 宮 遺 跡	" 田村町	散布地	"	須恵器、土師器、灰釉陶器、常滑窯、山茶碗。
41	阿 ら こ 遺 跡	鈴鹿市小田町	散布地	古 墓	1989年試掘調査。
42	宮 上 道 遺 跡	" 小田町	"	古墳～鎌倉	須恵器、土師器、山茶碗。
43	宮 上 道 古 墓	" 小田町	古 墓	古 墓	横穴式石室、須恵器（長頸壺、広口壺）出土。
44	井 田 川 荒 白 山 古 墓	亀山市みどり町	"	"	1972年調査、横穴式石室、銅鏡2面等遺物多数。
45	川 合 古 墓	" 川合町	"	"	円墳、径6m×高0.8m
46	天 覧 山 古 墓	" 川合町	"	"	円墳、径10m×高1m
47	城 山 古 墓	" みどり町	"	"	前方後円墳、埴輪列、全長40m。
48	黒 沢 遺 跡	" 川合町	散布地	縄文～江戸	縄文土器、須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗。
49	ハ ツ ハ 遺 跡	" みどり町	"	縄文～鎌倉	縄文土器、須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗。
50	柴 戸 遺 跡	" 栄町	集落・古墳	弥生～鎌倉	1987・88年調査、古墳時代住居16棟、古墳10基。
51	柴 戸 古 墓	" 栄町	古 墓	古 墓	1987年調査、木棺直葬、6世紀前半築造。
52	釣 鐘 山 古 墓	" 川合町	"	"	1973年調査、箱式石棺、6世紀前半築造。
53	和 田 古 墓 群	" 和田町	"	"	6基、径6～14mの円墳。
54	北 一 色 遺 跡	鈴鹿市国府町	集落・墓地	縄文～古墳	1968・89年調査、縄文時代中期住居址6棟、他。
55	保 子 理 古 墓 群	" 国府町	古 墓	古 墓	全28基、現存15基、1号墳からは五獸鏡等出土。
56	西 ノ 野 遺 跡	" 国府町	散布地・古墳	縄文～古墳	全91基の古墳群（現存12基）を含む。
57	西ノ野1号（王塚）墳	" 国府町	古 墓	古 墓	前方後円墳、全長63m×後円部高6m、周堤付。
58	西 ノ 野 5 号 墓	" 国府町	"	"	前方後円墳、全長30.5m×後円部高3.4m。
59	西ノ野11号（椀塚）墳	" 国府町	"	"	前方後円墳、半壊。
60	南 條 A 遺 跡	" 八野町	散布地	"	須恵器、土師器。
61	南 條 B 遺 跡	" 八野町	"	"	須恵器、土師器。
62	八 野 古 墓 群	" 八野町	古 墓	"	全25基、現存16基。2・3・8号墳は発掘調査。
63	八 野 亂 迦 堂 遺 跡	" 八野町	散布地	弥生～室町	寺院跡か。
64	八 野 瓦 窯 跡	" 八野町	窯跡	奈 良	瓦窯跡2基、重圈文、蓮華文軒丸瓦、消滅。
65	宮 ノ 腰 遺 跡	亀山市井尻町	散布地	古墳～江戸	須恵器、土師器、山茶碗、灰釉陶器、常滑窯
66	井 尻 古 墓	" 井尻町	古 墓	古 墓	前方後円墳、全長54m×後円部高4m。
67	高 垣 内 遺 跡	" 井尻町	散布地	縄文～室町	剥片石器、須恵器、土師器、山茶碗、施釉陶器。
68	小 下 遺 跡	" 井尻町	"	古墳～室町	須恵器、土師器、山茶碗、灰釉陶器。
69	植 松 遺 跡	" 管内町	"	古墳～江戸	須恵器、土師器、山茶碗、灰釉陶器。

No.	遺跡名	所在地	種別	時代	規模、発掘調査等
70	お経松古墳群	亀山市管内町	古墳	古墳	円墳4基、径6~10m。
71	植松古墳	" 管内町	"	"	円墳、径10m×高1.8m、半壊。
72	長瀬神社古墳群	" 管内町	"	"	円墳、3基、径7~8m。
73	南野遺跡	" 管内町	散布地	古墳~江戸	須恵器、土師器、山茶碗、灰釉陶器、常滑窯。
74	管内町南野古墳	" 管内町	古墳	古墳	円墳、径7m×高0.8m
75	東樺野遺跡	" 管内町	散布地	古墳~江戸	須恵器、土師器、山茶碗、施釉陶器、常滑窯。
76	東樺野1・2号墳	" 管内町	古墳	古墳	2号墳は1991年調査、径13.5m、6世後半の円墳。
77	中野遺跡	" 管内町	散布地	弥生~鎌倉	弥生土器、須恵器、土師器、山茶碗、常滑窯。
78	西樺野古墳群	" 管内町	古墳	古墳	6基、径7.5~16mの円墳。
79	東阿野田古墳群	" 管内町	"	"	8基、円墳。
80	東阿野田遺跡	" 管内町	散布地	縄文~室町	須恵器、土師器、剥片石器。
81	阿野田東遺跡	" 阿野田町	散布地	縄文~江戸	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、常滑窯
82	東阿野田9号墳	" 阿野田町	古墳	古墳	円墳、径17.5m×高3.5m。
83	辰巳谷遺跡	" 阿野田町	散布地	縄文~江戸	石匙、土師器、近世陶器。
84	下ノ垣遺跡	" 阿野田町	"	古墳~江戸	須恵器、土師器、灰釉陶器、近世陶器。
85	下ノ垣古墳	" 阿野田町	古墳	古墳	円墳、径12m×高15m。
86	阿野田城跡	" 阿野田町	城館跡	戦国	関氏一党の豊田氏の居館跡。
87	西ヶ谷遺跡	" 阿野田町	散布地	古墳~室町	須恵器、土師器、山茶碗、施陶器。
88	中川原遺跡	" 阿野田町	"	縄文~室町	須恵器、土師器、灰釉陶器、白磁、綠釉陶器。
89	陰涼寺山遺跡	" 本町	横穴墓	奈良	4基の横穴墓群。
90	亀山古(若山)城跡	" 若山町	城館跡	鎌倉~戦国	文永元年、関実忠が築城、以後320年間、関師の居館。
91	亀山城跡	亀山市本丸町、東丸町、西丸町	"	鎌倉・江戸	天正18年、岡本宗憲が築城、以後、幕末まで亀山藩の居城。
92	南野遺跡	" 南野町	散布地	縄文~江戸	縄文土器、山茶碗、近世陶器。
93	野村遺跡	" 野村町	散布地	縄文~江戸	縄文土器、山茶碗。
94	野村一里塚跡	" 野村町	一里塚	江戸	国史跡、慶長9年築造、北側一基のみ現存。
95	忍山遺跡	" 野村町	散布地	古墳~江戸	須恵器、土師器、山茶碗、信楽焼、施釉陶器。
96	忍山古墳	" 野村町	古墳	古墳	円墳、径12m×高2m。
97	山之下遺跡	" 布気町	散布地	古墳~江戸	須恵器、土師器、山茶碗、灰釉陶器、山茶碗、近世陶器。
98	大古場遺跡	" 和賀町	"	"	須恵器、土師器、白磁、近世陶器。
99	和歌遺跡	" 和賀町	"	"	須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗、近世陶器。
100	大垣内古墳	" 山下町	縄文・古墳	古墳	1991年調査、径20mの円墳、下層に縄文中期の住居跡。
101	大垣内遺跡	" 山下町	散布地	縄文~江戸	須恵器、土師器、灰釉陶器、常滑窯。
102	沢遺跡	" 山下町	集落・古墳・城館	縄文~室町	1987・89調査、縄文住居、古墳、山下城堀跡。
103	山下古墳	" 山下町	古墳	古墳	前方後円墳、全長39m×後円部高4m。
104	山下A遺跡	" 山下町	散布地	鎌倉~江戸	山茶碗、土師器、近世陶器。
105	関実忠館跡	" 山下町	城館跡	鎌倉	文永元年若山城築城以前の関氏居城跡。
106	荒巻遺跡	" 山下町	散布地	古墳~江戸	須恵器、土師器、山茶碗、常滑窯、近世陶器。
107	アタゴ山古墳群	" 山下町	古墳	古墳	3基、径10m~20mの円墳
108	山ノ神古墳	" 山下町	"	"	円墳、径15m×高3m。
109	オドリ山古墳	" 山下町	"	"	円墳、径30m×高2m。
110	初牛山古墳	" 山下町	"	"	円墳、径30m×高5m、消滅か。
111	キツネ塚古墳群	" 山下町	"	"	2基、径15m×高2mの円墳。
112	菱尾谷古墳群	" 山下町	"	"	3基、径20m×高5m、1988年試掘調査。
113	山入古墳群	" 山下町	"	"	3基、径15m~20m×高2~3mの円墳。
114	於登志館跡	" 木下町	城館跡	戦国	関氏一党、小野筑前守の居館跡。
115	於登志古墳	" 山下町	古墳	古墳	円墳、径8m×高1m。
116	木ノ下中遺跡	" 木下町	散布地	古墳~鎌倉	土師器、須恵器、山茶碗。
117	西台遺跡	" 木下町	"	古墳	土師器、須恵器。
118	木ノ下古墳	" 木下町	古墳	"	1964年調査。全長30.5m前方後円墳、5世紀末築造。
119	宮ノ前古墳群	" 木下町	"	"	2基、径7~15mの円墳。
120	勢武谷経塚	" 木下町	経塚	江戸	一字一石経塚、享保21年設置。

※ 亀山市内の遺跡概要は亀山市教育委員会（亀山隆氏、山口昌直氏）より資料提供を受けた。

III 上椎ノ木古墳群・上椎ノ木館跡

1 位置と地形

上椎ノ木古墳群は、鈴鹿川の支流安楽川が鈴鹿川に合流する地点近くに位置し、鈴鹿川と椋川に挟まれた亀山台地東端部に位置する。台地の東には、鈴鹿川の形成した冲積地が広がる。鈴鹿川左岸の台地上には、旧石器時代からの遺跡が多く分布しており、伊勢湾西岸において古くから文化の発達してきた地域である。

この地域は、台地・丘陵とも開析谷がよく発達しており、谷底平野を形成している。安楽川や椋川等が形成した小規模な冲積地とともに古代における開発が可能な地域となっている。

上椎ノ木古墳群は、標高約50mの丘陵先端部に位置し、丘陵裾の水田との比高は約17mである。北・東・

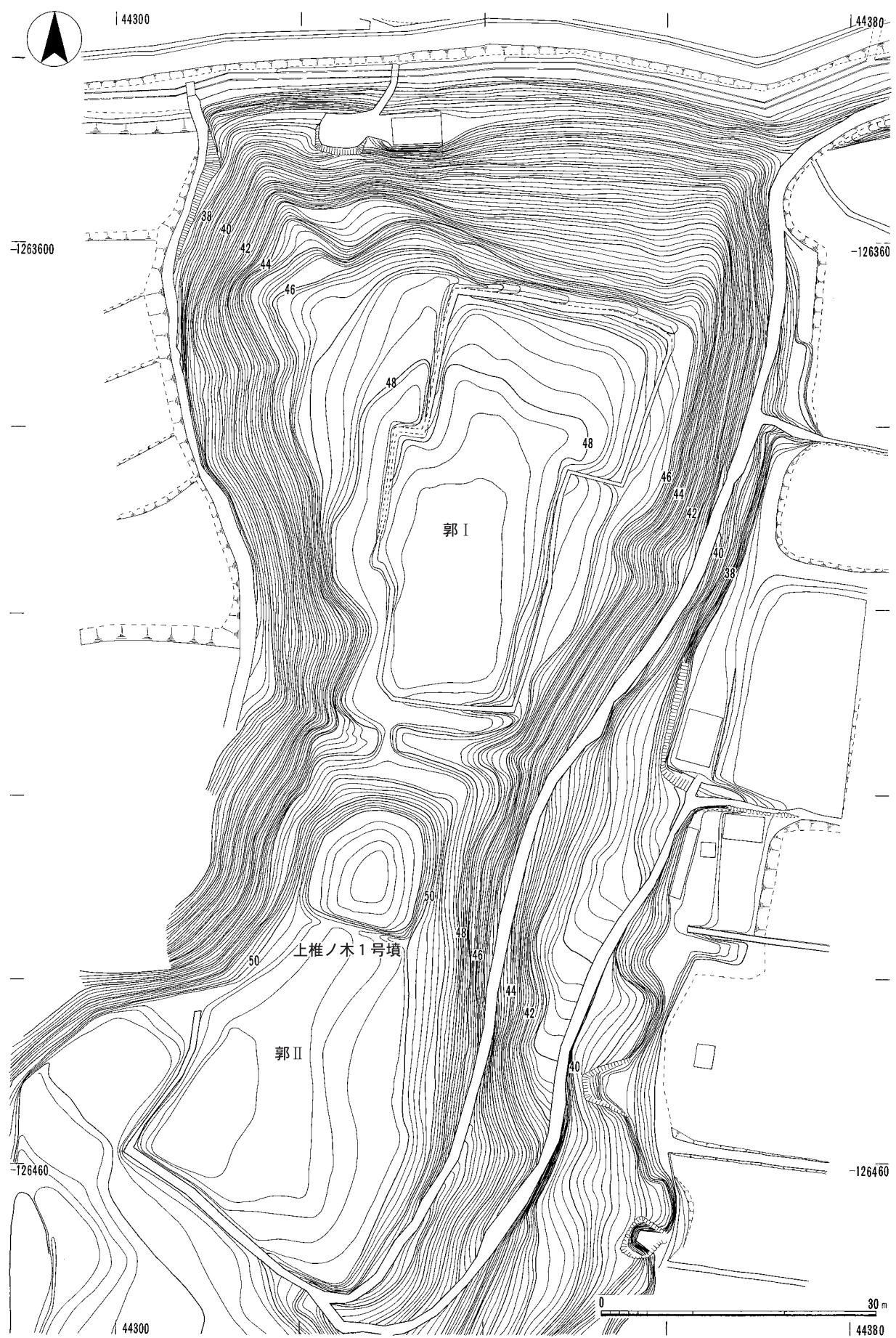
南方を広く見渡せる眺望の良い場所に築造されている。古墳群の立地する丘陵は、丘陵基部から北へ派生した尾根幅の狭い丘陵であり、同じような丘陵地形が椋川沿いの両岸に形成されている。

上椎ノ木1号墳は、丘陵基部近くに立地し、周辺に現況で他の古墳の存在が認められなかつたので上椎ノ木古墳として単独で立地するものと考えていた。調査の結果、1号墳の北側で1号墳に後続すると考えられる埴輪片等が出土し、また墳丘の一部と推定される状況が判明したので2号墳の存在を確認し、上椎ノ木古墳を上椎ノ木古墳1号墳と改称した。とともに、亀山市川合町字上椎ノ木に所在した。

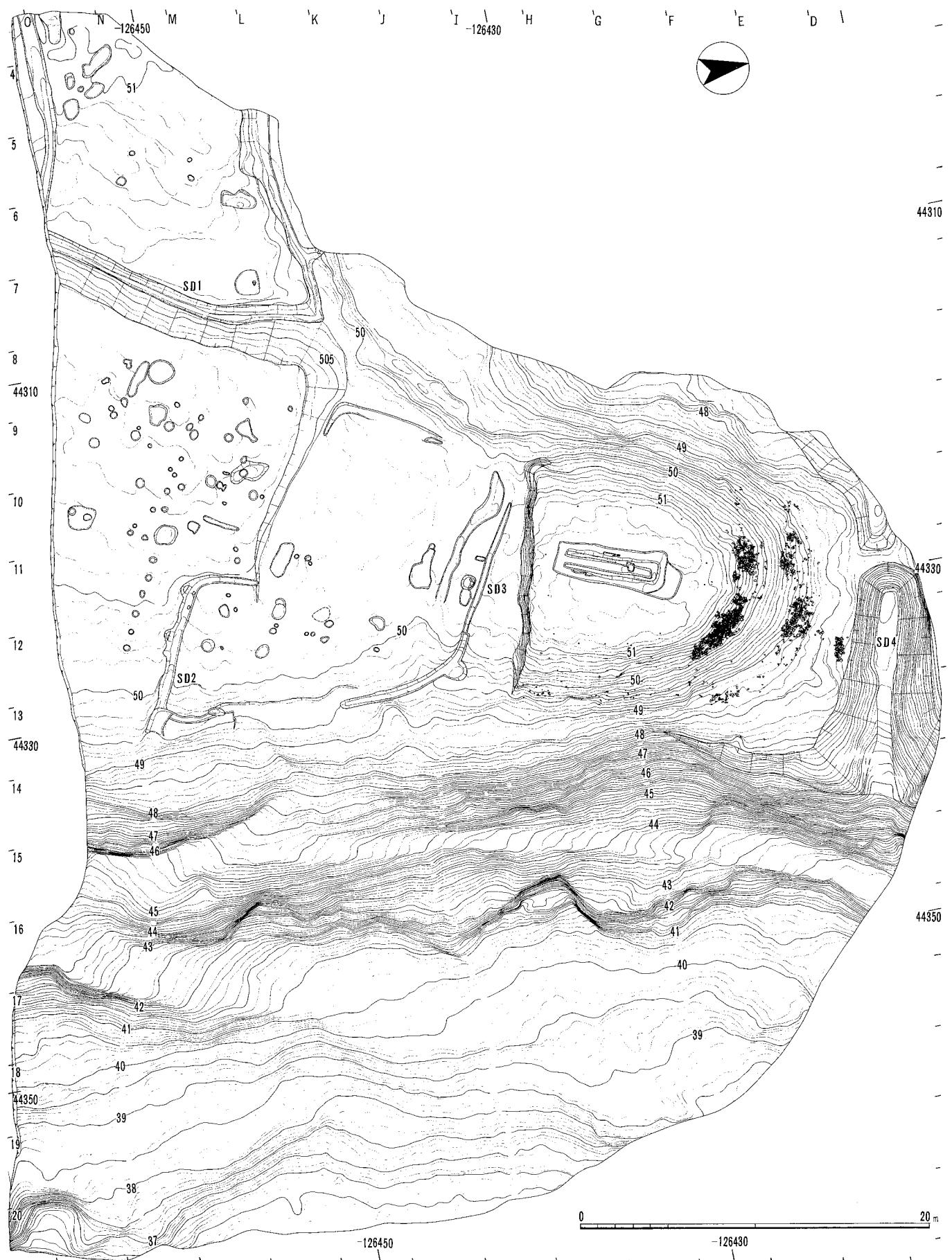
(駒田利治)



第4図 上椎ノ木古墳群・館跡地形図 (1:5,000)



第5図 上椎ノ木古墳群・館跡調査前実測図（1:600）



第6図 上椎ノ木1号墳・館跡遺構全体図 (1:300)

2 上椎ノ木1号墳

(1) 墳丘と外部施設（第7図）

A 墳丘

墳形 西方から張り出した丘陵の東端から、さらに北に延びる支脈上に本墳は位置する。丘陵下の水田との比高は約17mで、北と東の2方向の眺望はきわめて良い。この丘陵支脈は幅が狭く、東西の斜面は、約35°の急傾斜をもつ。したがって墳丘の規模は、選地の段階で、すでに尾根の幅によって制約を受けていると言えよう。墳丘の北斜面の傾斜角度は約25°西と東斜面の傾斜角度は約30°を測る。西と東の斜面は北斜面に比べてより流失を被った可能性もあるが葺石が東斜面にも遺存していることを考慮すると、墳丘の築成当初からすでに不整形であったと考えるのが妥当であろう。墳丘の南の地域が畑として開墾された際に、墳丘南斜面も削平されており、墳形を断定することはできない。墳丘断面の観察から、墳裾の地山を削り込んで墳丘を築成していることが窺えるが、墳丘南側の削平部分にも、墳裾の延長線上に地山を弧状に掘り込んだ痕跡が認められる。これを墳丘築成時の地山の整形と考えると、墳丘の平面形は、尾根方向に長い橢円形となる。北斜面の葺石の位置や傾斜変換点などから、48.6mの等高線辺りに墳丘基底部を想定すると、規模は推定南北径22m（現況17m）、東西径18mとなる。墳丘は自然地形を大きく改変することなく、北に向かって傾斜した状態で築成されている。墳丘の高さは、北裾から3.4m、南側地山面から1.8mを測る。墳丘築成にあたっては、丘陵鞍部の自然の高まりを有効に利用し、墳丘周縁の地山を整形することによって墳丘の高さを確保している。したがって盛土の量は比較的少なく、墳丘中心部で約1.3mの厚さである。

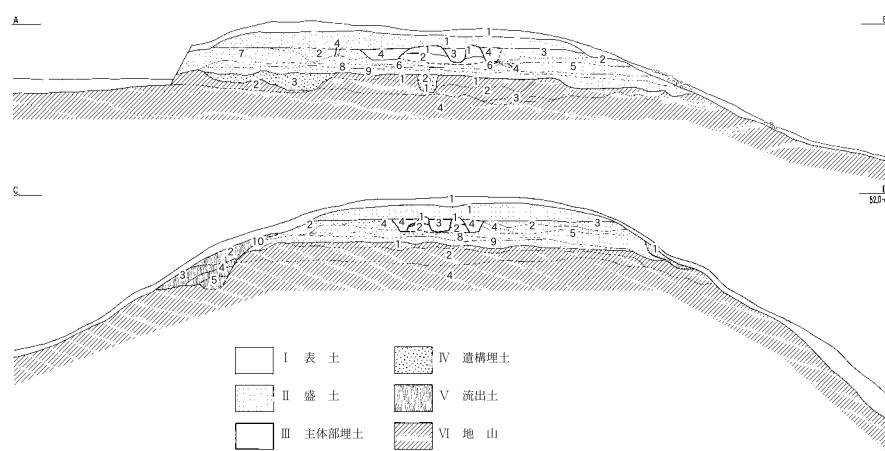
墳頂には、南北3m、東西2.5mほどの橢円形の平坦面が認められた。墳頂部も若干の削平、流出を受けていると思われるが、截頭円錐形の本来の墳形を留めているとも考えられる。調査前の段階で、墳頂部のほぼ中央に直径約60cmの窪みが認められた。主体部に達する深さ約1mの小規模な搅乱坑である。

層序 墳丘を4分割し、その北西と南東の4分の1の盛土を掘削、除去するという方法で、墳丘の断ち割りを行った。断面A Bは真北方向を指し、主体部を斜めに縦断する。また断面C Dは、断面A Bに直交し、主体部を斜めに横断する。表土の厚さは、20cmを測り、Ⅱ1～10層が盛土で、墓坑は地山まで達することなくこの盛土中に形成されている。盛土下にはいわゆる黒色の旧表土は認められず、表土を除去した後に盛土を行ったと思われる。断面A BにおけるIV 3層は地山の上層VI 1・2を切り込んでおり、炭を含む。この層は明らかに盛土の堆積状況と様相を異にする。VI 1層以下の各層が無遺物層であり、旧表土下の自然堆積層と考えられる。

断面A Bの中央部層よりやや北寄りに、直径約50cm、深さ約45cmの土坑（VI 1）を検出した。埋土は赤みを帯びた褐色粘質土で、中央部よりやや上層に直径20cmの焼土塊（VI 2）が認められた。なお土坑壁面には焼土は認められない。土坑はVI 1層から切り込んでいる。平面形は不明である。墳丘築成以前に旧表土から掘り込まれたものか、あるいは旧表土を除去した直後に掘り込まれた、墳丘築成に伴う遺構かは判断できない。

北西部の4分の1を掘削していく際に、墳丘中央からやや北西北寄りで土坑を検出した。検出面は50.6mで、VI 1層上面である。堀形の北半はやや不明瞭であったが、平面形は南北60cm、東西80cmの橢円形である。検出面からの深さは約60cmで、VI 3層に達する。埋土は暗褐色粘質土で炭を含んでいるが、焼土は認められない。丸みのある拳大の川原石が、土坑上部から底部まで全体にわたって入っている。なお墳丘盛土中に石はほとんど認められない。この土坑も、墳丘築成に伴う遺構か否かは不明である。

南東側の墳丘断ち割りの際には、墳丘中央から南東よりで焼土を検出した。薄い焼土が南北1.2m、東西2.2mの範囲に認められ、その中心部に直径約30cm、厚さ10～15cmのきわめて明瞭な濃い焼土がある。焼土上面の絶対高は50.7mで、VI 1層のレベルとほぼ等しい。旧表土はこの焼土の上層、下層のいずれにも認



I 1 表土	II 6 灰褐色粘質土(炭含む)	III 1 青灰色粘土	V 1 暗黄褐色砂質土	VI 1 黄褐色粘質土
II 1 黄褐色弱粘質土	7 黄褐色粘質土(炭含む)	2 黄褐色砂質土(砂含む)	2 黄褐色砂礫	2 明黄褐色粘質土(砂含む)
2 黄褐色粘質土(砂含む)	8 暗黄褐色粘質土(炭含む)	3 暗褐色砂質土(砂含む)	3 黄褐色弱粘質土	3 黄褐色粘質土(灰色粘土ブロック含む)
3 暗黄褐色弱粘質土	9 黄褐色弱粘質土(炭含む)	4 淡褐色砂質土(砂含む)	4 黄褐色粘質土	4 灰褐色砂礫
4 明褐色砂質土(砂多量に含む)	10 明黄褐色質土(橙褐色粘質土ブロック含む)	IV 1 赤褐色砂質土	5 暗黄褐色粘質土	
5 黄褐色砂質土(砂含む)		2 燃土		

第7図 上椎ノ木1号墳調査後実測図（平面図 1:200, 断面図 1:100）

められないことから、この焼土は旧表土を除去した直後に形成されたと考えられ、墳丘築成になんらかの関連のある遺構と思われる。なおVI 1層直上の、盛土の最下層であるII 8・9層には炭が含まれる。上記の3つの遺構からは、遺物はまったく出土していない。

B 外部施設

周溝や埴輪は検出されなかったが、墳丘の北と東斜面には葺石が認められた。葺石は丸みのある川原石で、大きさは直径数cmから30cm程度とかなりばらつきがあり、形もさまざまである。石の大小や形状の差による使い分けも認められない。北斜面には帯状に2段の葺石が遺存する。上段は50.5mの等高線を中心として幅1mの範囲に、下段は49.0mの等高線辺りに幅1.5mにわたって認められる。盛土あるいは地山を整形した墳丘斜面に直接石を葺いており、葺石直下の土質も他の斜面と同様である。東斜面には明瞭な帶状の葺石は認められず、広範囲にわたって少数の葺石が散在する。西斜面にはまったく遺存しておらず、斜面裾の流出土中にも石は認められない。墳丘の西と東斜面は、北斜面に比べて傾斜が急なため流出、崩落の可能性も高いが、西斜面と東斜面はほぼ同じ条件である点を考慮するならば、西斜面の葺石のみがすべて流出、崩落したとは考え難く西斜面にはもともと葺石が施されていなかったと考えるべきであろう。丘陵下の平野部から眺望できる北と東斜面にのみ葺石を施したものと思われる。本墳の場合の葺石は、封土の流出を防止するという意味合いにより、周囲から眺望を意識した装飾を主目的としていると考えられる。

(2) 主体部（第8図）

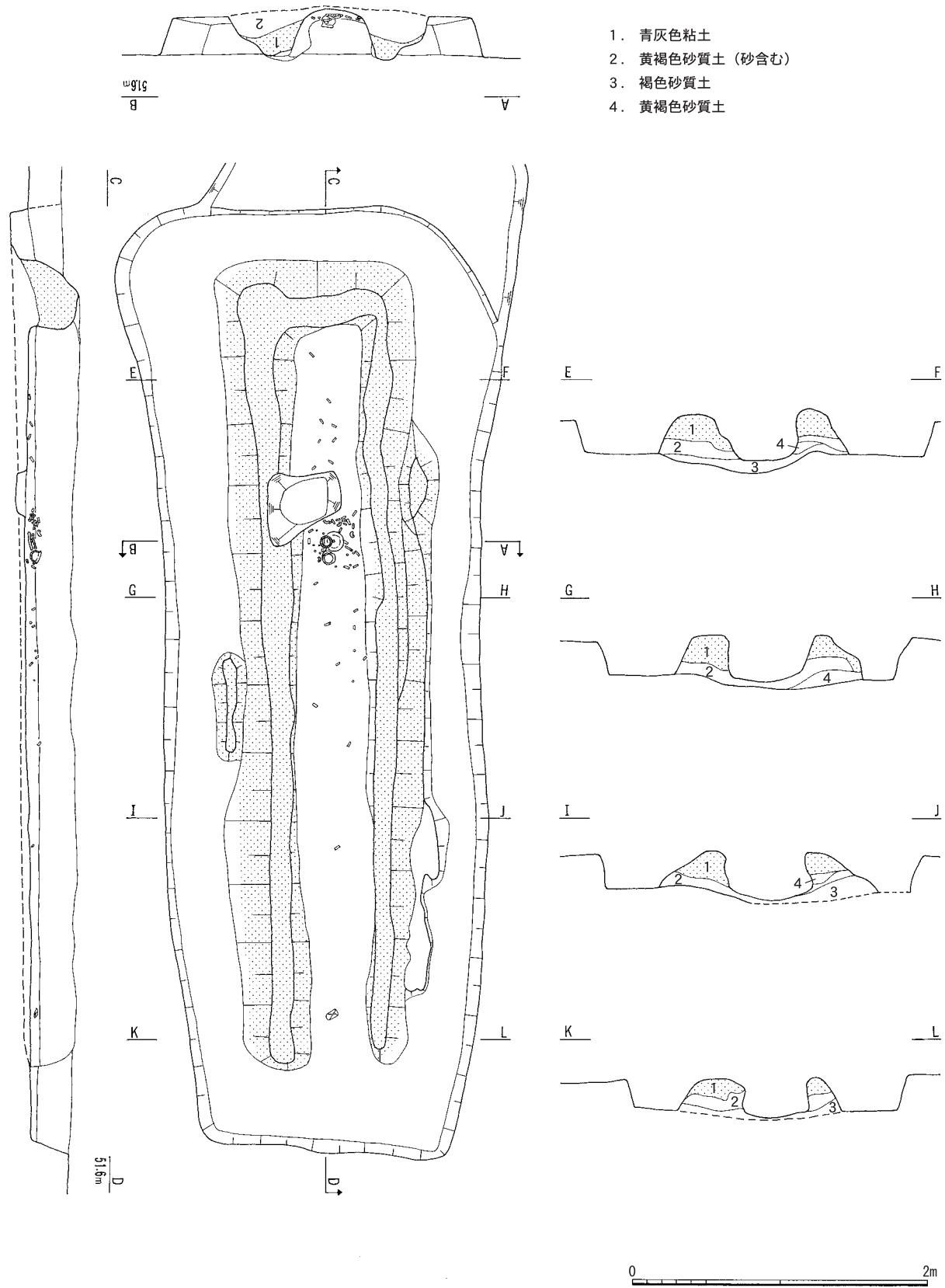
A 墓 坑

墳丘のほぼ中央、墳頂下約65cmの面で墓坑の堀形を検出した。粘土櫛の中央からやや北寄りに、墳頂から掘り込まれた小規模な搅乱坑があるが、主体部および遺物の遺存状態は良好である。検出面の盛土はおおむね黄褐色粘質土（砂含む）で、墓塙埋土の淡褐色砂質土（砂含む）との差異はきわめて微細であり、特に墓塙北半の堀形の検出には困難を伴った。検出面の絶対高は、51.3mであるが、それより上層で

の検出はできなかった。本来の墓塙はもっと上層から掘り込まれていた可能性が高い。墓塙の平面形は不整形な隅丸長方形を呈し、長さは6.4m、幅は北端が広く2.4m、南端で1.8m、検出面からの深さは、約30cmである。墓塙の壁面は75°前後の傾斜をもち、底部の中央部をさらにU字状に浅く掘り凹めている。

B 粘土櫛・棺

粘土櫛の平面形は、南側の短辺を欠く「コ」の字形を呈し、幅（外法）は北端で1.3m、南端で1.1m、長さ5.4mを測る長大な規模をもつ。南の短辺には粘土がなく開口している。排水を意図したものであろうか。また棺の長さも粘土櫛南端までと考えるのが妥当であり、したがって、粘土櫛内の南端で出土した鉄斧も棺内遺物と認定できよう。墓塙、粘土櫛とともにその長軸は尾根線に平行しN22°Eを示す。粘土の幅は北側短辺が最も厚く45cm、他は30cm前後で色は青灰色を呈する。粘土櫛内法の幅は北端で約60cm、南端ではそれよりやや狭く約50cmを測る。棺床はU字状に凹み、粘土櫛内壁もわずかに内側に弯曲する。棺床の絶対高は北端で51.03m、南端で51.08mと数cmの高低差が認められる。粘土櫛内法の長さに等しい5m前後の割竹形木棺が、棺材の根元に近い太い部分を北にして据えられていたものと思われる。棺の小口については、棺材の直径を上まわる小口板が外側から当てられていた可能性はきわめて少ない。そのような小口板の存在を示す痕跡は、北端の粘土櫛内壁にも、南端の棺床にも認められない。粘土櫛の北側短辺の内壁はほぼ垂直に立ち上がり、その壁面も比較的平滑であることから、棺は端部割り抜き式か、棺材の直径に等しい円形の小口板を外側から当てたものか、あるいは棺両端に円形小口板をはめこんだもののいずれかであろう。木棺の埋設にあたっては、あらかじめU字状に浅く掘り凹めた墓塙中央部に、盛土と同質の黄褐色砂質土、ないしは褐色砂質土を薄く敷いて棺床とし、棺底脇にさらに黄褐色粘質土を詰めて安定させ、その後青灰色粘土を棺側に巡らせたと考えられる。粘土櫛上面から棺床までの深さは30~35cmであり、ここに直径50~60cmの木棺を据えると、棺の上半は粘土櫛外に出ることになる。棺身と棺蓋との接点のやや上辺りまで粘土を積んだと考えられ、棺上部を粘土で被覆した形跡はない。棺内に



第8図 上椎ノ木1号墳主体部実測図（1:40）

も部分的に青灰色粘土が検出されたが、その量はきわめて微量で堆積も薄く、棺側の粘土壁が崩落したものと思われ、棺上部の被覆粘土が落下、堆積したとは到底考えられない。本墳の埋葬施設は、粘土床や被覆粘土を持たない省略化された形式の粘土槨といえよう。粘土槨という呼称についても、それが適切かどうか問題はあるが、粘土床のみで被覆粘土の認められないものも含めて粘土槨と呼んできたこれまでの慣例に従っておく。粘土槨内の埋土は墓塙埋土とほぼ同質の暗褐色砂質土（砂含む）であるが、棺床に近い下層の埋土は粘質を帯びる。棺床の北半を中心として広範囲に朱が認められた。木棺内面に塗布されていたものと思われる。副葬品もその大半が棺の北半から出土しており、被葬者は、北を頭位として埋葬されていたものと思われる。

（平子弘）

(3) 遺物 (第9・10図)

上椎ノ木1号墳からの出土遺物は以下の通りである。

主体部の遺物

銅鏡	1点
石鉤	1点
石製小型壺	1点
鉄斧	1点
勾玉	5点
管玉	42点
ガラス小玉	37点

墳丘の遺物

土師器壺	1点
弥生土器壺片	4点

A 主体部 (第8図、1~88)

(a) 出土状況

主体部から出土した遺物のすべては、粘土槨内からの出土であり、墓塙から出土した副葬遺物はない。

遺物は、粘土槨北端から150cm前後付近に、銅鏡・石鉤・石製小型壺が重なるように位置し、その周辺に勾玉・管玉・ガラス小玉などの玉類が集中していた。鏡は、中心軸線上に鏡背を表にしてわずかに西へ傾いて出土した。鏡の両面には、朱が濃く認めら

れるとともに、上下に木質片が付着しており、木箱に納められて副葬されていたと考えられる。鏡は、朱雀と白虎の間にある乳を北位に置かれていた。

石鉤は、鏡の上で西端により重なるように、基部を表にして置かれていた。鉤の中央部で、鏡と接する部分で二つにおれていた。おそらく、棺の朽腐に伴う覆土の陥没により、鏡を梃として土圧によって自然し、折れたものと考えられる。

石製小型壺は、鏡と鉤の南に接するように正立して置かれていた。これら3点の遺物の下端と棺底との間には、1.5~3mmの間隙しか認められず、おそらく遺骸の直上に副葬されたものと判断される。

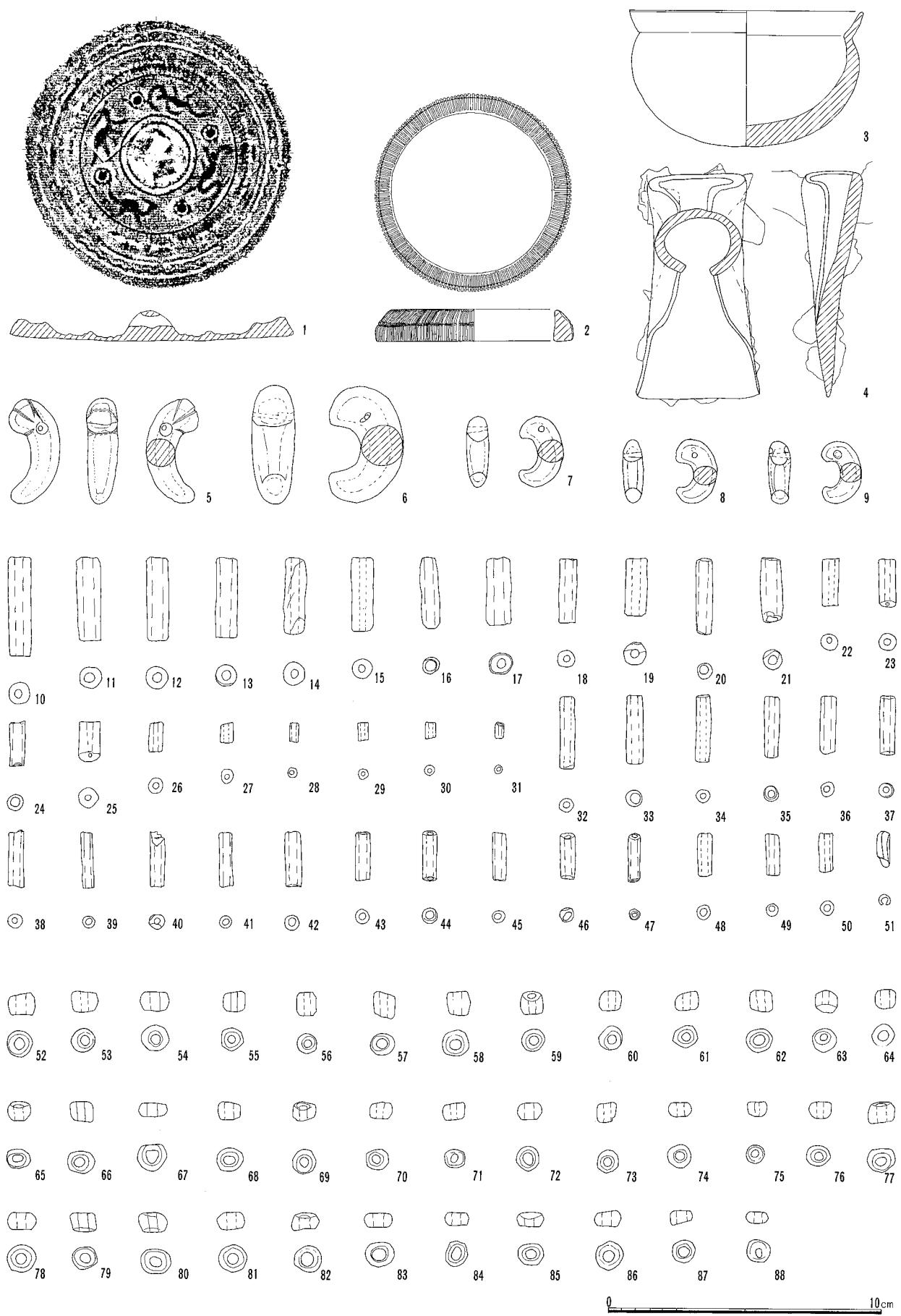
鏡・鉤・壺を中心にして玉類が散乱している。勾玉は、丁字頭勾玉（5）が攪乱坑近くで出土したためその原位置には疑問が残るが、他の4点は鏡類をとり囲むように間隔をおいて出土していた。本来は、近くに散乱している管玉・ガラス玉とともに首飾りとして環をなしていたものと思われる。玉類の出土レベルは、51.03~51.13mとやや高低差をもつが、大半は51.08mで出土しており、棺底部との間隙は約5cmである。また、棺底の弯曲に対応して中心軸線から遠ざかる程出土位置が高い。

管玉の一部は、副葬品が集中するところの北と南にも散乱している。出土レベルは、中央部と大差なく、木棺に遺骸を安置したのち、首飾りの一部を立ち切って副葬したものと推定される。玉類と銅鏡の副葬の前後関係は、にわかに断じ難いが管玉の数点は鏡の下からも出土している。

棺の南端部と考えられる中心軸線上に、斧先を南西に向けた鉄斧が1点出土し、出土レベルからも棺内遺物と判断した。

(b) 出土遺物

銅鏡 (1) 四神鏡で後漢鏡と考えられ、面径10.4cm、縁高7mm、反り2mmを数える。円座を持つ鉤を中心に二本の圈線に囲まれた内区には、4個の円座乳とその間に半肉彫りの獸形を配する。獸形は四神と考えられ、時計まわりに「玄武」「青竜」「朱雀」「白虎」を配している。外区は斜行の櫛齒文を配し、縁は平縁で2帯の波状文を持つ。黒褐色を呈し、光沢を有するが、よく使用したのか全体によく摩滅している。出土時には朱とともに上下に木質を認めており、木



第9図 上椎ノ木1号墳主体部の遺物実測図 (1~9は1/2 10~88は1/1)

箱に収納されていた可能性がある。鈴鹿川流域での鏡を出土した古墳は、木ノ下古墳（獸帶鏡）、井田川茶臼山古墳（画文帶神獸鏡2面）、保子里1号墳（五獸鏡）であり、本墳で4例目にあたる。

石鉤（2） 緑灰色を呈する碧玉製の石鉤で、銅鏡の直上に裏返した状態で出土した。外径7.2cm、内径5.8cm、高さ1.1cmを測り、外面には177条の刻線と斜面と垂直面との境に横1条の刻線を持つ。県下では9遺跡目、北勢地方では初の出土である。

石製小型壺（3） 淡緑灰色を呈する葉蠟石製の壺で、口径8.5cm、高さ6.0cmを測る。内外面共丁寧な削りと磨きによって成形されており、銅鏡や石鉤の横に置かれていた。県内では多気町権現山2号墳に次ぐ出土である。

鉄斧（4） 鍛造有袋式の鉄斧で、長さ8.2cm、幅は刃部5.0cm、袋部で長径3.2cm×短径2.4cm、厚みは0.4～0.7cmを計測する。刃部と袋部の境で浅く「く」の字に折曲する。出土遺跡の中で唯一粘土櫛南端付近からの出土であり、棺内出土か否か判断がつき難いが、一応棺内遺物として扱っておく。

勾玉（5～9） 5は緑色を呈する翡翠製の勾玉で、頭部に3条の刻線を持つ丁字頭である。6は焦茶色を呈する琥珀製の大型の勾玉で、共に県下での出土は稀である。7～9は長さ2.2～2.5cmで葡萄酒色を呈する瑪瑙製の勾玉である。穿孔法は8と9が両面穿孔で、8には「食い違い」及び「失敗孔」が見られる。他は片面穿孔である。

管玉（10～51） 総数42個の出土である。他の棺内遺物のほとんどが遺物の胸付近と思われる地点に集中しているのに対し、この管玉は棺内全体に均等に出土している。むしろ意図的にはらまかれた状況を呈している。材質は緑色凝灰岩（10～19）、碧玉（20～31）、葉蠟石（32～51）、長さは3.0～0.5cmで、材質・サイズ共かなりバラつきがある。

ガラス小玉（52～88） 他の遺物と同様に遺骸の胸付

近に集中して出土している。径40cm以内に出土地点が限定されるが、管玉との組み合わせやつながった状態では出土していない、長さ2.0～4.0mm、径3.5～4.0mmで色調は青色（52～77）と緑色（78～88）に大別される。

B 墳丘（第9図89～93）

墳丘上あるいは盛土から出土した遺物には、弥生土器片及び土師器壺がある。

弥生土器（89～92） 壺の口縁部の破片（89・90）と底部破片（91・92）がある。89は、古墳北の上椎ノ木館跡の堀から出土。推定口径16cm。口縁部は、緩かに「く」の字状に外反し、端部は丸い。口縁部内外面をヨコナデし、頸部内面にヨコハケを施す。細砂・白雲母片を含む。90も堀斜面から出土。細片であるため口径は不明。肥厚して緩かに外反する。口縁部は、端部が丸くおさめられる。口縁部は、ヨコハケを施した後ヨコナデ調整する。頸部内面には、櫛状工具による刺突が施される。底部（91・92）の破片は、壺の底部と考えられる。91は、墳頂表土からの出土。推定底径8cm。底部は、わずかに上げ底となる。内外面ともにナデ調整される。細砂・雲母片を含む。内面は黒色となっている。92は、主体部堀形内の埋土から出土。これも底部の破片であり、推定底径7cm。底部中央は、わずかに窪み、上げ底となる。胎土は緻密で明褐色を呈する。

土師器壺（93） 墳丘の北東部裾の平坦地から出土しており、時期的に本古墳に伴う遺物と考えられる。口縁部の一部と体部中央部分だけの遺存ではあるが、推定口径16.0cm、推定器高20.5cmを計測する広口の丸底壺であろうと考えられる。黄褐色を呈しているが、器面は剥離が進み調整は不明である。

ない、上椎ノ木古墳群・上椎ノ木館跡調査区域からは弥生時代の遺構は見つかっていないが、丘陵の東側で調査された山城遺跡では弥生時代後期の遺物が多く見つかっている。

（浅尾 悟）

No.	名 称	材 質	色 調	法 量 (cm)		重 量 (g)	備 考	No.	名 称	材 質	色 調	法 量 (cm)		重 量 (g)	備 考
				長	径							長	径		
5	勾 玉	翡翠	淡緑色	3.9	1.2	12.3	No.1 R1	47	管 玉	滑 石	灰緑色	1.7	0.4	0.58	No.34 R42
6	勾 玉	琥珀	黒褐色	4.2	1.5	9.36	No.11 R5	48	管 玉	滑 石	淡灰色	1.6	0.5	0.60	No.15 R56
7	勾 玉	瑪瑙	明褐色	2.25	0.9	4.27	R18	49	管 玉	滑 石	灰色	1.5	0.45	0.58	No.30 R35
8	勾 玉	瑪瑙	明褐色	2.3	0.8	3.31	No.20 R6	50	管 玉	滑 石	黃灰色	1.4	0.5		攪乱土杭 R90
9	勾 玉	瑪瑙	明褐色	2.32	0.8	3.31	No.45 R17	51	管 玉	滑 石	灰緑色	1.25	0.4	0.26	No.29 R50
10	管 玉	緑色凝灰岩	灰青色	3.6	0.8	2.96	No.10 R16	52	小 玉	ガラス	青 色	0.3~0.4	0.45		No.21~33 R85
11	管 玉	緑色凝灰岩	灰緑色	3.05	0.9	2.40	No.47 R47	53	小 玉	ガラス	青 色	0.35	0.45		No.21~30 R82
12	管 玉	緑色凝灰岩	淡青色	3.0	0.8		No.23 R54	54	小 玉	ガラス	青 色	0.3	0.45~		No.21~27 R79
13	管 玉	緑色凝灰岩	淡茶色	2.9	0.75	1.87	No.31 R14	55	小 玉	ガラス	青 色	0.35	0.4		No.21~27 R79
14	管 玉	緑色凝灰岩	淡青色	2.8	0.8		No.25 R52	56	小 玉	ガラス	青 色	0.4	0.35		No.21~16 R68
15	管 玉	緑色凝灰岩	淡青色	2.7	0.8	1.96	No.13 R19	57	小 玉	ガラス	青 色	0.4	0.4		No.21~17 R69
16	管 玉	緑色凝灰岩	淡青色	2.6	0.6		No.18 R55	58	小 玉	ガラス	青 色	0.4	0.4		No.21~1 R20
17	管 玉	緑色凝灰岩	淡青色	2.55	0.9		No.24 R53	59	小 玉	ガラス	青 色	0.4	0.4		No.21~24 R76
18	管 玉	緑色凝灰岩	淡茶色	2.35	0.6	1.23	No.33 R41	60	小 玉	ガラス	青 色	0.35	0.4		No.21~12 R64
19	管 玉	緑色凝灰岩	淡青色	2.1	0.8		No.26 R51	61	小 玉	ガラス	青 色	0.25~0.3	0.4		No.21~13 R65
20	管 玉	碧 玉	淡緑色	2.8	0.6	1.23	No.6 R12	62	小 玉	ガラス	青 色	0.35	0.4		No.21~23 R75
21	管 玉	碧 玉	綠 色	2.3	0.7	1.94	No.43 R15	63	小 玉	ガラス	青 色	0.4	0.4~0.45		No.21~8 R27
22	管 玉	碧 玉	乳緑色	1.7	0.6	1.31	No.19 R28	64	小 玉	ガラス	青 色	0.3	0.3~0.4		No.21~5 R24
23	管 玉	碧 玉	淡青色	1.7	0.6		W3 R59	65	小 玉	ガラス	青 色	0.35	0.35~0.4	0.04	No.21~32 R84
24	管 玉	碧 玉	乳緑色	1.65	0.5	0.72	No.38 R30	66	小 玉	ガラス	青 色	0.35	0.4~0.45		No.21~28 R80
25	管 玉	碧 玉	乳緑色	1.4	0.8	1.43	No.32 R29	67	小 玉	ガラス	青 色	0.2	0.45~0.5	0.11	No.21~35 R87
26	管 玉	碧 玉	乳緑色	1.05	0.55	0.47	No.49 R31	68	小 玉	ガラス	青 色	0.25~0.3	0.4~0.45		No.21~35 R87
27	管 玉	碧 玉	乳緑色	0.7	0.45	0.20	No.3 R8	69	小 玉	ガラス	青 色	0.3	0.4		No.21~10 R62
28	管 玉	碧 玉	乳緑色	0.7	0.35	0.11	No.35 R32	70	小 玉	ガラス	青 色	0.25	0.35~0.4		No.21~19 R71
29	管 玉	碧 玉	乳緑色	0.65	0.38	0.22	No.5 R10	71	小 玉	ガラス	青 色	0.3	0.3~0.35		No.21~7 R26
30	管 玉	碧 玉	乳緑色	0.6	0.38	0.12	No.4 R9	72	小 玉	ガラス	青 色	0.3	0.4~0.45		No.21~34 R86
31	管 玉	碧 玉	乳緑色	0.55	0.3	0.07	No.37 R43	73	小 玉	ガラス	青 色	0.3	0.3~0.35		No.21~9 R61
32	管 玉	滑 石	灰緑色	2.6	0.5	1.19	No.28 R40	74	小 玉	ガラス	青 色	0.25	0.4		No.21~15 R67
33	管 玉	滑 石	淡緑色	2.4	0.6		攪乱土杭 R60	75	小 玉	ガラス	青 色	0.25	0.35~0.4		No.21~4 R23
34	管 玉	滑 石	灰白色	2.4	0.5	1.12	No.2 R7	76	小 玉	ガラス	青 色	0.3	0.4		No.21~29 R81
35	管 玉	滑 石	灰緑色	2.15	0.5	0.98	No.14 R13	77	小 玉	ガラス	暗緑色	0.35	0.45		No.21~11 R63
36	管 玉	滑 石	灰緑色	2.1	0.6	0.87	No.40 R45	78	小 玉	ガラス	暗緑色	0.3	0.45~0.5		No.21~21 R73
37	管 玉	滑 石	黒灰色	2.1	0.55	1.11	No.41 R33	79	小 玉	ガラス	綠 色	0.3	0.4~0.45		No.21~3 R22
38	管 玉	滑 石	綠灰色	2.0	0.55		No.48 R48	80	小 玉	ガラス	綠 色	0.35	0.45~0.6		No.21~2 R21
39	管 玉	滑 石	灰白色	2.05	0.45	0.59	No.36 R36	81	小 玉	ガラス	暗緑色	0.3	0.45		No.21~20 R72
40	管 玉	滑 石	灰緑色	2.0	0.5		No.50 R49	82	小 玉	ガラス	暗緑色	0.3	0.35~0.4		No.21~18 R70
41	管 玉	滑 石	灰緑色	1.95	0.5	0.97	No.42 R46	83	小 玉	ガラス	暗緑色	0.25	0.45~0.5		No.21~31 R83
42	管 玉	滑 石	灰緑色	2.0	0.55	0.72	No.12 R37	84	小 玉	ガラス	暗緑色	0.2	0.4		No.21~36 R88
43	管 玉	滑 石	灰緑色	1.8	0.55	0.12	No.44 R39	85	小 玉	ガラス	暗緑色	0.2	0.4~0.45		No.21~25 R77
44	管 玉	滑 石	灰緑色	1.8	0.55	0.70	No.17 R38	86	小 玉	ガラス	暗緑色	0.25	0.45		No.21~22 R74
45	管 玉	滑 石	灰緑色	1.75	0.45	0.75	No.27 R34	87	小 玉	ガラス	暗緑色	0.2	0.4		No.21~26 R78
46	管 玉	滑 石	灰緑色	1.7	0.55	0.86	No.39 R44	88	小 玉	ガラス	暗緑色	0.2	0.4~0.45		No.21~6 R25

第4表 上椎ノ木1号墳玉類一覧表

(注) No. ; 遺物とり上げ番号 R 整理番号

3 上椎ノ木2号墳

(1) 墳丘

上椎ノ木2号墳の調査は、調査区北端の空堀の調査の際、わずかに墳丘と考えられる南端斜面を検出したにすぎず、その形態は明らかでない。墳頂部とその周辺は現在は山林となっており、地形測量の結果からも墳丘は認められず、削平が考えられる。また、周溝も中世以降上椎ノ木館跡等により手を加えられており、周溝とは断定できない。しかし、立地としては丘陵北東端で眺望のよい古墳築造に適した場所であるといえよう。

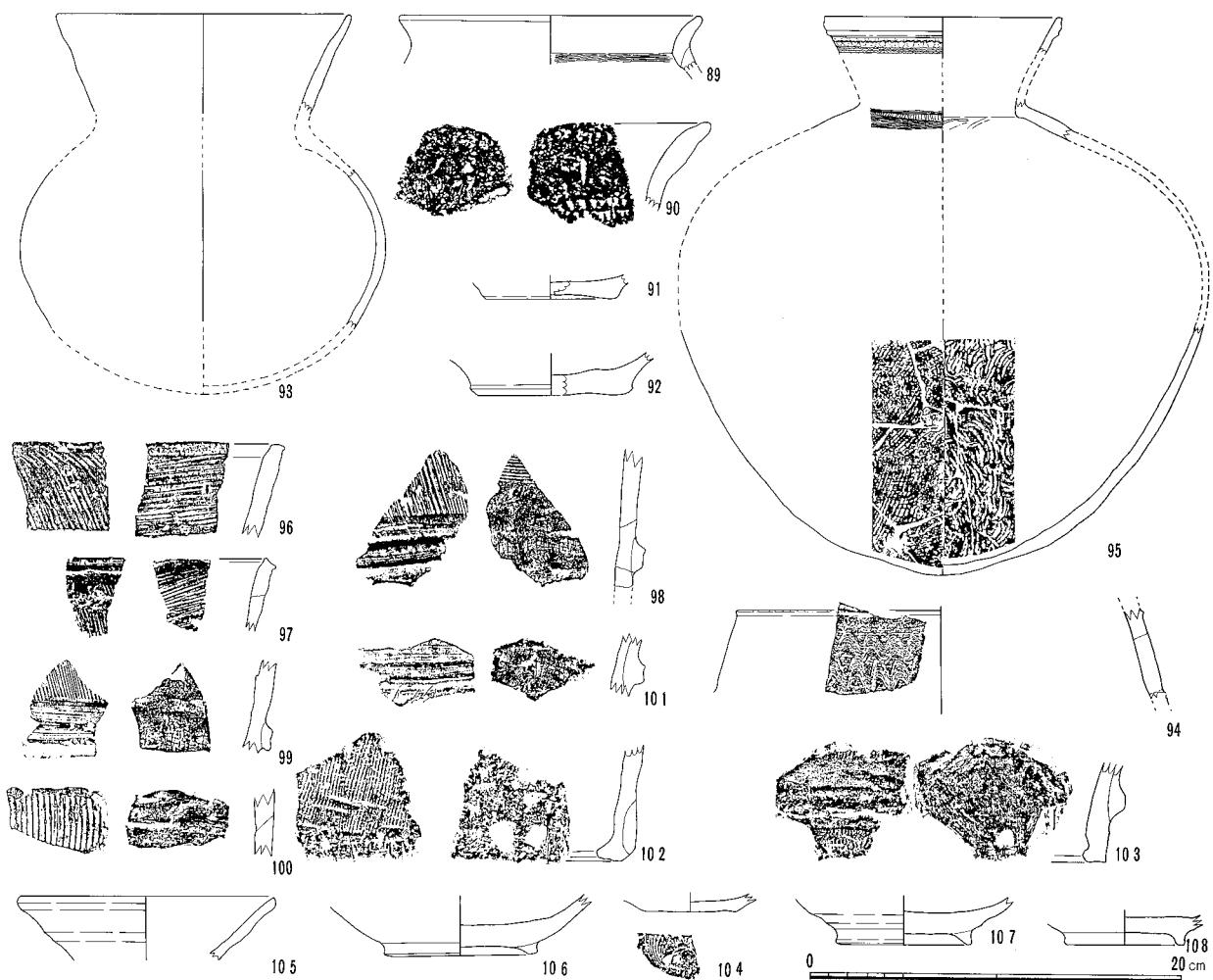
(2) 遺物

遺物は、主に空堀・調査区北部で出土しており原位置をとどめているものはない。

A 須恵器 (第10図、94~95)

器台 (94) 空堀埋土上層から出土。器台脚部でスカシ部付近であると思われる。板状工具により調整を行った後、櫛描波状文が2段に、下段・上段の順に施されている。スカシの形状は不明である。

蓋 (95) 墳丘南端斜面上部から出土した。体部下半はまとまって出土したが、頸部・口縁部はほとんど残っていなかった。口径25.6cm、器高60cm、体部最大径56.4cm程と思われる。口頸部は外開し、口縁端部付近で突帯を巡らす。突帯直下に緩やかに櫛描波状文を巡らす。口縁部及び突帯端部は鈍い。体部外面は平行タタキを全面に行った後、板状工具により、ナデ調整を行った部分もみられる。内面もタタキオサエの後、板状工具により、ナデ調整を行った部分がみられる。



第10図 上椎ノ木古墳群墳丘遺物 (89~93: 1号墳94~103: 2号墳) 上椎ノ木館跡遺物実測図 (104~108) (1:4)

B 墳輪（第10図、96～103）

円筒埴輪（96～102） 周溝の可能性もある空堀内及び墳丘南端斜面から細片で15点出土した。須恵質のもの（96～101）と土師質のもの（102）とがある。須恵質のものについては、暗灰色～灰黄褐色で焼成が良好なタイプ（96・97）と橙色で焼成がやや弱いタイプ（99～101）とがある。

97・98・100には粘土紐輪積みあるいは粘土巻き上げの痕跡があり、粘土紐の傾きは内面が外面に比べて低いものが中心であるが、外面が低い例（98）もある。

口縁部はハケ調整の後、ヨコナデが施され、やや外反するが、形状・ヨコナデの範囲とも96・97では異なる。

内外面調整は1次調整のみで、外面調整は右下方から左上方へのタテハケ、内面調整は左下方から右

上方へのヨコハケ調整が施されている。ハケ目の精粗は一定しない。

タガは1次調整を行った後張りつけられ、ヨコナデにより仕上げる。断面形は台形に近いが、端部は鈍く、突出度は低い。

スカシ孔は98のみで確認され、直径3cm程度の円形であると思われる。

底部は粘土を外面に折り返しており、その後ハケ調整が行われ、仕上げに内面は指で、外面には板状工具で押圧を加えている。

家型埴輪（103） 基底部外面にはタテハケを施し、基底部より2.2cm上方にタガが付けられている。

これは、昭和60年に実施した山城遺跡E₁地区にあたる丘陵の裾付近から出土しており、出土地点からもこの古墳の遺物である可能性が強い。

（近藤 健）

4 上椎ノ木館跡

(1) 郭構造

上椎ノ木館跡は、鈴鹿川北岸に拡がる高位段丘の東端に位置する。北には、鈴鹿川の支流である椋川の小河川が東流し、南と東は、鈴鹿川が形成した沖積平野が広がる。館跡は、標高約50mの段丘上に築かれ、段丘裾の水田との比高は約15mである。亀山市街地がある高位段丘は、その端部で開折谷が発達し、樹枝状の地形をなしている。館跡として現存する遺構は、西側に浅い谷が入り込む南北に突出した段丘片端部に認められる平坦地と空堀だけである。

A 郭（第5・6図）

段丘上面は、わずかに北方向へ傾斜するものの、概ね平坦である。郭は、空堀で区切られ先端部に立地する北の郭（郭Ⅰ）とその南に築かれ上椎ノ木1号墳が立地する南の郭（郭Ⅱ）の2郭が認められる。とともに後世に開墾などにより、必ずしも旧態をとどめているとは言い難い。

郭Ⅰは、空堀で郭Ⅱと区切られ、空堀に平行して高さ約0.5mの土壘が築かれている。郭内は、ほぼ平坦であるが、先端部でわずかに北側へ傾斜する。平

面形は、東西幅が南で約20m、北で約40m、南北長45mの平面が台形状となる。この郭では、平坦部が植林され、斜面が雑木林となっており、土壘は南側のみにしか明瞭に認められないが、西側にも標高48～48.4mの高さが帶状に認められ土壘の痕跡を示すものかも知れない。

郭Ⅱは、北側を空堀で郭Ⅰと区切られ、この南に上椎ノ木1号墳の一段高い台状地を利用し、南で東西幅約40m、南北長約55mの平面が台形状をなす。南の境は、明瞭ではないが、段丘裾から登る小径が西へ曲折する地点の等高線が段丘部へ入り込んでおり、ここにも空堀が設けられていた可能性があり、これを郭Ⅱの南限と考えておきたい。

今回の発掘調査は、この郭Ⅱで実施した。1号墳以南の調査地区は、近年まで畑として利用されており、土壘などの遺構は認められなかった。表土層直下では、近年の根痕と考えられるピットなどが認められた。この面から更に10～20cm下げた面で、ピット・土坑・溝を検出し、これらの中には近世遺構の陶磁器を出土する遺構もあるが、中世に遡ると断定し得る遺構は認められない。

ただ、SD 1～3はSD 2とSD 3が約15mの間隔で平行し、SD 1はこれにほぼ直行する方向にあり、郭内を区画する溝であった可能性はある。また、郭内は南部分がわずかに高く、SD 1から東へ直角に折れ、SD 2と段違いになる部分まで段をなしている。

上椎ノ木1号墳は、地形の制約を受け東西径約17m、南北推定径22mの楕円状をなす円墳であるが、調査前は、方墳とさえ判断できるほど北東部が角張っており、館跡構築にあたって櫓台などの機能をもつ施設として改築された可能性がある。ただし、墳丘上面では、柱穴などの遺構は確認されなかった。

B 空堀（第11図）

郭Iと郭IIを区切る空堀SD 4は、開析谷に浸食された段丘幅約20mを断ち切り、やや西寄りに、土橋を架けている。空堀は、上幅4～6m・深さ2.5～4mで、断面は箱形に近い。

(2) 遺物（第10図）

上椎ノ木館跡から出土した遺物は、近世以降の陶磁器が大半であり、しかも出土量はきわめて少なく数十点にとどまる。館跡の存続時期と考えられる遺

物には、山茶椀の数点だけであり、遺構に伴うものはない。

A 土師器（第10図、104）

104は、ロクロ土師器の底部である。底径5.0cmの椀と考えられる。底部外面に糸切り痕をのこす。器壁が、比較的薄い。

B 山茶椀（第10図、105～108）

105は、推定口径13.8cm直線的に開く体部は、口縁部で強くオサエられ、口縁端面は外上方を向く面をもつ。

106は、推定高台径5.5cm。断面方形の高台は、ほぼ垂直に比較的高くはりつけられる。底部外面の糸切り痕は、ていねいにナデ消される。

107は、高台径7cm。断面逆台形の高台は、わずかに外開してはりつけられる。底部外面は、糸切り痕をのこし、高台はていねいにナデ調整される。

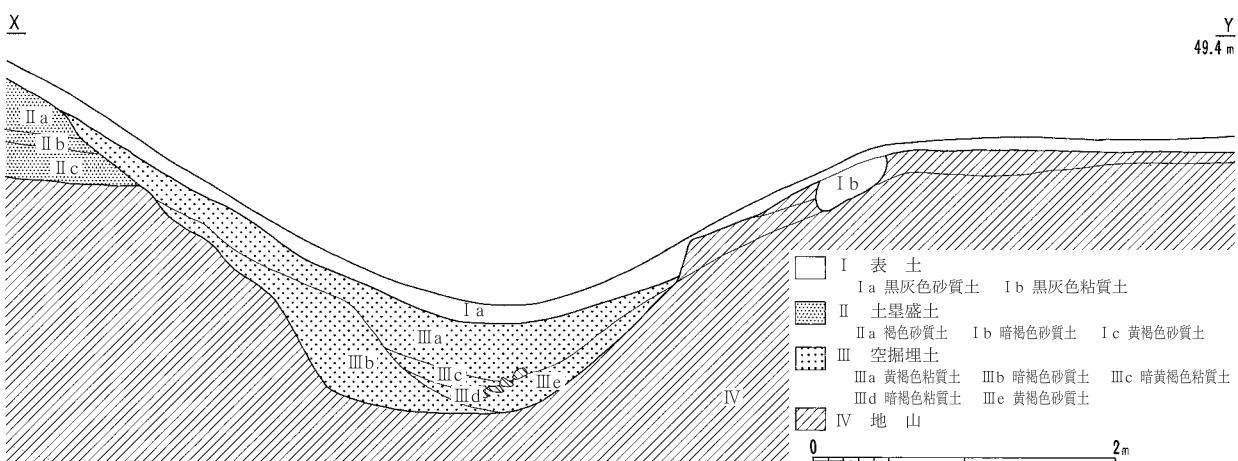
108は、高台径7.4cm断面逆台形の高台は、低く直立する。底部外面に、糸切り痕をのこし、高台部はていねいにナデで調整される。

山茶椀は106～108は、藤澤編年による第Ⅱ段階、105は第Ⅳ段階に比定されよう。（駒田利治）

5 結語

上椎ノ木古墳群は、調査計画段階で単独墳と考えられていたが、調査区内で2号墳と推定される墳丘の一部が確認され、複数の古墳群で構成されていた

ことが判明した。また、本古墳群が立地するこの台地東縁部には、近接して和田古墳群も分布している。上椎ノ木1号墳は、これらの古墳群の中では先行す



第11図 上椎ノ木館跡 空堀SD 4 土層断面図 (1:50)

る古墳と考えられる。

1号墳は、樹枝状に開析された丘陵地の東縁部に立地し、鈴鹿川が形成した沖積平野とその支流椋川の谷底平野が眼下に広がっている。墳丘は、立地する地形に制約され、推定南北径22m・東西径17mで、墳丘の高さ1.8~3.4mの円墳である。沖積地を臨む墳丘の北及び東側には、わずかに葺石が遺存していた。

内部主体は、長さ6.4m・幅1.1~1.3mの粘土槨である。粘土槨は「コ」の字形にめぐらされ、南側の小口部分だけには認められず、また割竹形木棺と推定される棺上下の接合部分を中心に粘土を貼りめぐらしたものである。

副葬品は、四神鏡1面・石鉈1点・石製小型壺1点・鉄斧1点・勾玉5点・管玉42点・ガラス小玉37点である。主体部の一部には、攪乱坑が達しているが、副葬品への影響はすくなく、その散逸は数点の玉類にとどまるものと思われる。遺物は、出土状況から遺骸の胸部付近を中心にして、その直上に副葬されたものと考えられる。

四神鏡は、4個の乳間に玄武・青竜・朱雀・白虎の四畫を配するものであり、後漢鏡と考えられる。

石鉈の形態は、蒲原宏行氏の型式分類によるI-a^①型式に属する。三重県内で石鉈を出土した古墳は、9基となり（第5表）、伊勢湾西岸で最も古く古墳が

築かれた雲出川流域にあたる一志郡の前期古墳に多いことも注目される。また、石山古墳は、伊賀地方を代表する前期古墳のひとつである。北勢地方では、四日市市の志氏神古墳で車輪石が出土している以外、古墳時代前期の出土は、これまで知られていなかった。

石製小型壺の県内での出土例は、多気郡多気町の權現山2号墳の出土例がある。^③ 本墳出土の壺が土器の横倣であるとすれば、その形態から土器編年上古墳時代初期のものと考えられる。奈良県矢部遺跡における寺沢薰氏の分類によれば、本墳出土の小形壺は、小形丸底鉢H₁形式に分類され、同遺跡のS D301の土器群に形態状の類似性が認められる。S D301は、布留O式期の3世紀末から4世紀初頭の時期が与えられている。鉢H₁は、出土数の少ない器種であり、またこの種の石製模造品は仮器的な性格をもつため、土器編年との類似性から必ずしも埋葬時期を示さないと考えられる。ただ、本墳の埋葬の上限が3世紀末を越り得ないことを示している。

玉類は、勾玉・管玉・ガラス小玉で構成される。勾玉は、琥珀製1点・翡翠製1点・瑪瑙製3点が出土した。琥珀製勾玉は、全国で現在18ヵ所ほどの古墳からの出土が知られ、時期的には4世紀から7世紀前半までの幅をもっている。近県の出土例では、

古墳名	所在地	墳形	内部構造	石鉈	主 要 副 著 品				文 献
					鏡	玉類	武器	石製品	
茶臼山古墳	松阪市清生町	帆立貝？	粘土郭	不明2	内行花文鏡1 三角縁三神三獸鏡1 不明鏡1				1
高田2号墳	松阪市上川町	円墳	不明	不明2	内行花文鏡1				1
向山古墳	松阪市小野町 一志郡嬉野町	前方後円墳	粘土郭	I-a2, II-a'3 II-a5, III-b1	内行花文鏡1 重闊文鏡1 変形獸帶鏡1			筒形石製品 車輪石	1
筒野古墳	一志郡嬉野町	前方後円墳	粘土郭	I-a1, 不明1		管玉2, 切子玉(水晶) 6			2
西野3号墳	一志郡嬉野町	円墳							3
西野7号墳	一志郡嬉野町	円墳	木棺直葬？	II-a1, V-a1		小玉(ガラス) 2, 管玉2		車輪石, 石枕	4
高取塚	一志郡嬉野町	円墳							
石山古墳	上野市才良	前方後円墳	西側粘土郭	I-a3, II-a1 III-a1, 特殊形1 不明7	変形神獸鏡1 三角縁神獸鏡片1 小形鏡1	管玉5, 管玉22 小玉(ガラス) 200		車輪石38+ α 鍼形石10 琴柱形石製品 他多数	5

第5表 三重県内石鉈出土地名表

愛知県白山藪古墳1点（4世紀後半）、岐阜県舟木山24号墳1点（4世紀）、滋賀県瓢箪山古墳3点（4世紀後半）、奈良県見田大次2号墳1点（4世紀前半）が知られ、畿内・東海地方での副葬は4世紀代に限られるようである。

本墳の埋葬時期は、割竹形木棺と簡略化された粘土櫛といった埋葬施設と副葬品から4世紀前後と考えられる。

次に、本墳の副葬品においては、（1）供獻用の土器を伴わず、（2）副葬品の組み合わせにおいて、鉄斧が1点遺骸からなれた位置に副葬されてはいるものの、剣、刃・鎌などの武器類をいっさい伴わないことが大きな特徴となっている。

（1）については、初期の古墳に一般的に認められることであり、本墳の埋葬時期を4世紀末と考えたことと矛盾しない。（2）については、県内の前期古墳ではきわめて希なことであり、鏡・玉類を副葬する古墳で武器類を伴わない例はない。この傾向は、

全国的にも少なく九州地方では妙法寺2号墳・忠隅1号墳、四国地方では曾我氏神社（第2）、中国地方では造山3号墳・中小田1号墳・鎧物師谷1号墳、近畿地方では天王山4号墳（第2）・池ノ内1号墳（東西）などが知られるのみである。さらに、鏡・玉・石腕・農工具のセット関係が認められる例には、中小田1号墳・池ノ谷1号墳の例がある。池ノ谷古墳では、本墳と同じように立地地形に制約され墳形は楕円形をなし、方形の墓壙に並列する木棺2基が埋葬されており、絶対権力者の個人の墓よりも家族墓的性格のある古墳として特徴づけられている。西棺北端の棺外からは、土師器小形丸底壺が出土し、本墳が仮器化した石製模造品を伴うのとは異なるが、その副葬品の組合せには類似点も多く、武器類を含んでいないことがこの古墳の特殊性として指摘されている。

武器類を副葬しない理由は判然としないが、それは時空的なものではなく、被葬者の性格に起因する

古 墳 名	所 在 地	墳 形 ・ 規 模	内 部 構 造	副 著 品 他	外 部 施 設	埴 輪	文 献
志氏神社古墳	四日市市大宮町	前方後円墳	不 明	鏡、車輪石、勾玉、管玉	不 明	—	6
八幡塚古墳	四日市市小古曽町	円 墳 径40cm	割竹型木棺2	鉄斧2、土師器高杯	埴輪列	埴 輪	7
上椎ノ木1号墳	龟山市川合町	円 墳 径17~22m	粘 土 郭	鏡、石釧、石製小型壺、勾玉、管玉、小玉	葺 石	—	—
能褒野王塚古墳	龟山市田村町	前方後円墳 全長90m	不 明	不 明	葺石・埴輪列	鰐付朝顔形埴輪	8
愛宕山1号墳	鈴鹿市国府町	前方後円墳 全長66m	不 明	不 明	葺 石	円筒埴輪片	9
西ノ野5号墳	鈴鹿市国府町	前方後円墳 全長30m	不 明	不 明	埴輪 列	形象埴輪	9
八野2号墳	鈴鹿市八野町	方墳（方形台状墓？10.5×7.4）	木棺直葬	鉄劍・鉄鎌・ガラス玉 土師器二重口縁壺・高杯（墳預）	周 溝	—	10
八野3号墳	鈴鹿市八野町	円墳 径5.3m	木棺直葬	鉄劍・鉄鎌・鉗	周 溝	—	10
加佐登6号墳	鈴鹿市加佐登町	円墳 径25m	粘 土 郭	鉄劍・鉄鎌	周 溝	—	10
加佐登9号墳	鈴鹿市加佐登町	円 墳	粘 土 郭	鉄劍・短甲	不 明	不 明	10
富士山1号墳	鈴鹿市国分町	前方後円墳 全長50m	不 明	不 明	不 明	不 明	10
寺田山1号墳	鈴鹿市高岡町	前方後円墳 全長70m	不 明	土師器片	不 明	不 明	10
赤郷古墳	鈴鹿市秋永町	不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	10
経塚古墳	鈴鹿市中瀬古町	前方後円墳 全長35m	粘 土 郭	鉄劍・鉄刀・鉄鎌・刀子・鉄鎌・鉗 鉄斧・鉄鎌・勾玉・目玉	周溝・埴輪列	円筒埴輪	11

第6表 北伊勢の前期古墳一覧表

ものかと考えられる。その性格解明の手掛かりとして、周辺地域における古墳の展開との関係の中で据える必要がある。

鈴鹿川流域以北の北伊勢地方における前期古墳で多少なりともその内容が明らかにされている古墳は少ない（第6表）。本墳と鈴鹿川の支流安楽川をはさんで北約1.8kmの能郷野古墳、同じく南東約2.9kmの鈴鹿川南岸の愛宕山古墳は、ともに前方後円墳であり、本墳の築造と相前後する時期が想定されており、鈴鹿川中流域における初現的な古墳である。能郷野古墳・愛宕山古墳の詳細は、不明な点が多く、微妙な時期関係は、今後の調査・検討を待たねばならないが、本墳の被葬者は、両古墳と同じくこの地域における首長層の一人であり、その首長権の内容の差異が墳形及び副葬品に反映したと推定される。

この地域では、5世紀以降6世紀にかけて鈴鹿川をはさんで、西ノ野5号墳・城山古墳・西ノ野1号墳（王塚）古墳・井戸古墳などの前方後円墳を造営し、北伊勢地方における古墳文化の拠点ともいべき地域となっている。上椎ノ木1号墳の調査は、鈴鹿川流域における古墳では、現在のところ最古に位置づけられるものであり、周辺地域との関係で今後の調査研究が期待される。

上椎ノ木館跡は、段丘東端部に築かれた館跡であり、自然地形を巧みに利用し、土壘・空堀で郭を構成している。現存するのは、2郭のみであるが、館跡の所在する周辺に残された小字をみると、館跡が位置する川合町字上椎ノ木の東には「山城」、南の段丘上には和田町地内に属するが「上城」の小字名が残る。

また、亀山市内には、現在20ヶ所の城館跡が知られているが、その多くは旧態をとどめていない。現存する数例の規模を上椎ノ木館跡と比較してみると、上椎ノ木館跡の現存する郭の面積は、約3300m²で小川城跡（約4100m²）・野元坂館跡（約7800m²）・落山城跡（約16000m²）・峯城跡（約15000m²）に比べ小さい。これらのことから、上椎ノ木館跡が、西の段丘部に拡がっていた可能性が強い。

築成時期は、出土遺物が希少であるため速断しかねるが、山茶碗の編年から言及すれば、12世紀にその存続期間の中心が考えられよう。

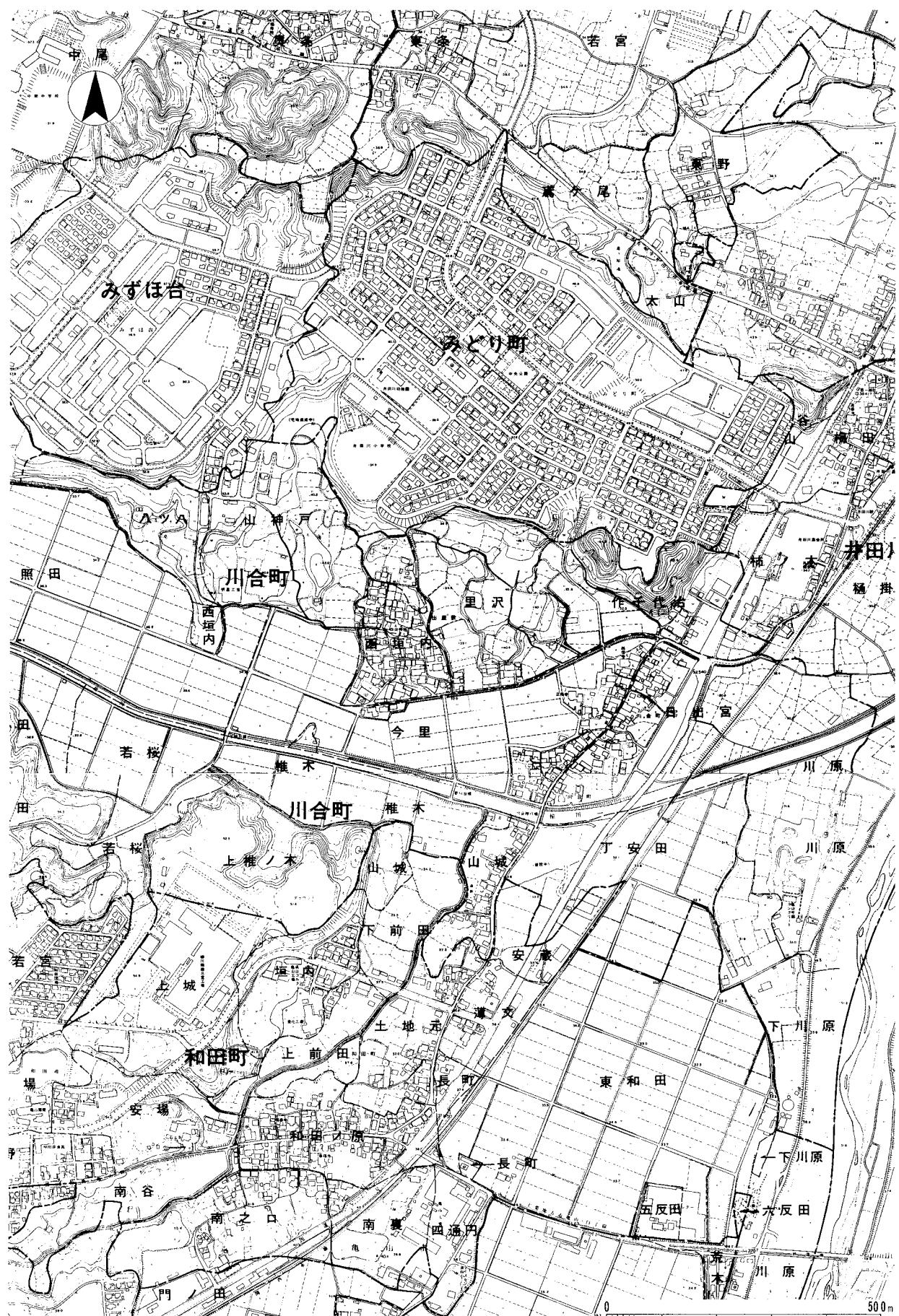
江戸時代以降著された地誌は、この地域の城館跡に触れている。宝暦13年（1763）に完成した『三国地誌』卷27 伊勢国鈴鹿郡古蹟には、「和田堡」・「川合堡」の名が記載され、また天保4年（1833）に完成された『勢陽五鈴遺響』鈴鹿郡和田の項に「別城ノ遺址ナリ」とあり、現在の和田町字上城に城跡の存在した可能性を示している。この「別所城跡」と「和田堡」が同じ遺跡を指しているのか、あるいは異なるのかは判断材料を欠くが、少なくとも字「上城」付近に城跡の存在したことが知らされ、今回発掘調査を実施した上椎ノ木館跡は、その一部をなすものと考えられる。

また、椋川対岸には小字名を残さないが城山古墳あるいは「白山」の俗称が伝えられ、この地域にも城館跡が存在した可能性を示唆している。

（駒田利治）

〔註〕

- (1) 蒲原宏行「石剣研究序説」『比較考古学試論』 雄山閣 1987
 - (2) 『四日市市史』 第二巻 史料編考古I 四日市市 1988
 - (3) 駒田利治他「主要古墳測量調査報告 権現山1・2号墳」『ふびと34』三重大学歴史研究会 1978
 - (4) 寺沢薰編『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1986
 - (5) 琥珀製玉類の出土古墳については、立正大学講師池上悟氏の教授を得た。
 - (6) 今尾文昭「古墳祭祀の画一性と非画一性—前期古墳の副葬品配列から考える—」『橿原考古学研究所論集』第六 橿原考古学研究所
 - (7) 久野邦雄他『磐余・池ノ内古墳群』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第28冊奈良県教育委員会
- 〔文献〕
- (1) 松阪市史編纂委員会『松阪市史』 第二巻史料篇 考古 松阪市 1978
 - (2) 橿本亀次郎『三重考古図録』 三重県 1954
 - (3) 西野3号墳出土の石剣については、一志町教育委員会の伊勢野久好氏に教授いただいた。
 - (4) 山崎恒哉・稻本賢治「一志郡嬉野町天花寺西野7号墳」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告—第3分冊4—』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991
 - (5) 小林行雄「三重県名賀郡石山古墳」『日本考古学年報3』 1955
 - (6) 『四日市市史』 第二巻 史料編考古I 四日市市 1988
 - (7) 番条勇雄・小玉道明『八幡塚古墳発掘調査報告』 四日市市教育委員会 1975
 - (8) 駒田利治・浅尾悟・梅澤裕・亀山隆他『亀山の古墳—埋もれた古代権力—』三重県教育委員会・亀山市教育委員会 1988
 - (9) 村田照久他「鈴鹿・亀山地域調査報告」『ふびと 32』 三重大学歴史研究会 1975
 - (10) 『鈴鹿市史』 第一巻 鈴鹿市 1990
 - (11) 真田幸成「経塚古墳」『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』 鈴鹿市教育委員会



第12図 上椎ノ木館跡周辺字割図 (1:10,000)



調査前近景（西から）



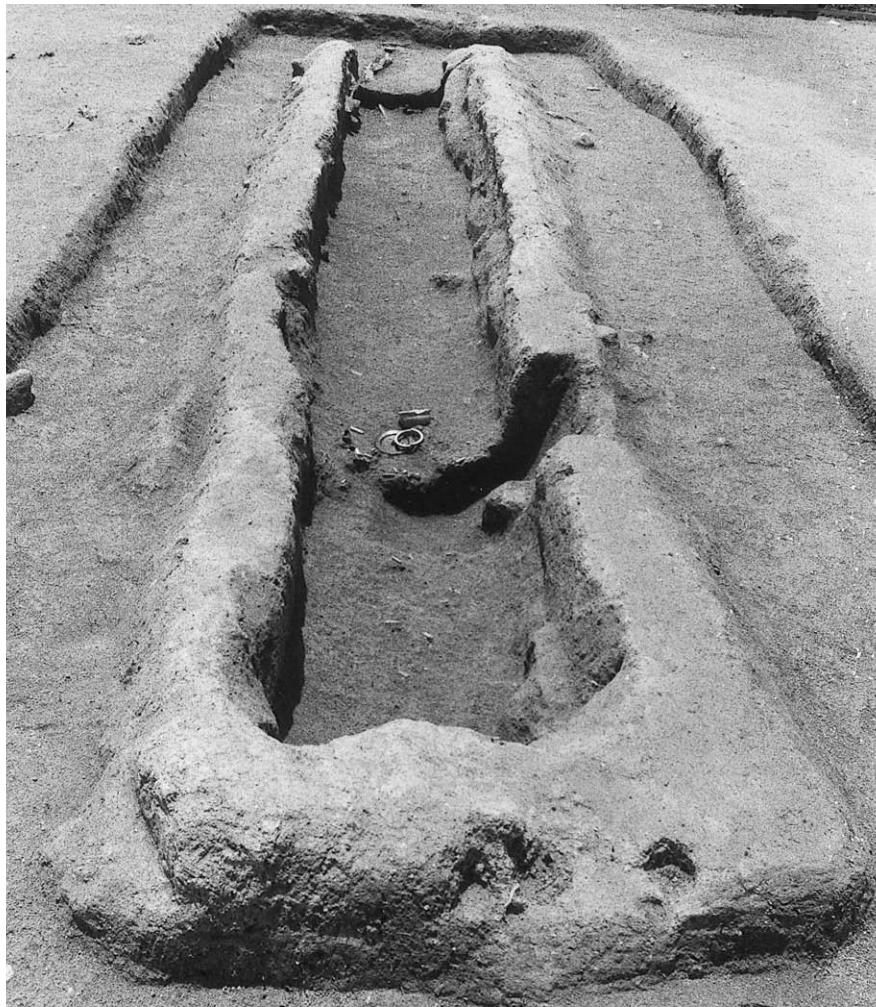
調査後遠景（東上空から）



調査後遠景（北から）



1号墳近景（北から）



1号墳 主体部遺物出土状況（北から）



1号墳 主体部（南から）



1号墳 粘土榔（南から）



1号墳 主体部裁ち割り（南から）



鏡・石鉈・石製小型壺・玉類出土状況



鉄斧出土状況



1号墳 墳丘裁ち割り（南から）



1号墳 墳丘盛土（南東から）



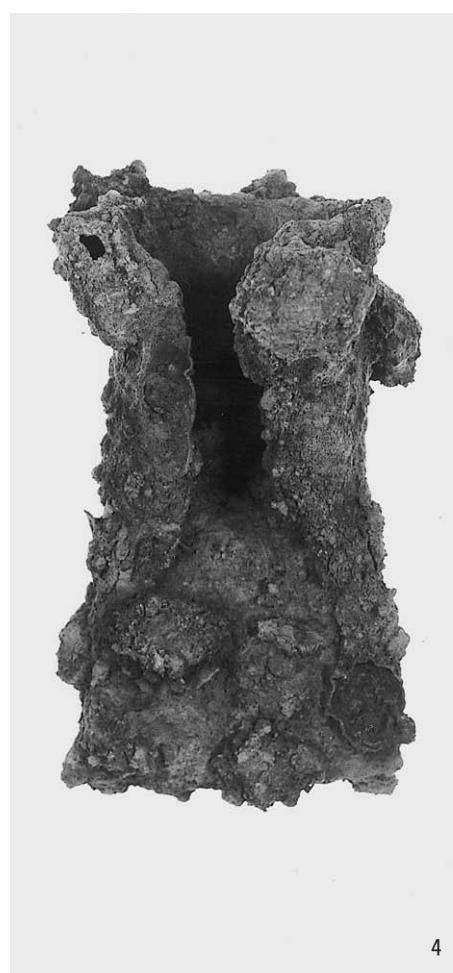
1



2

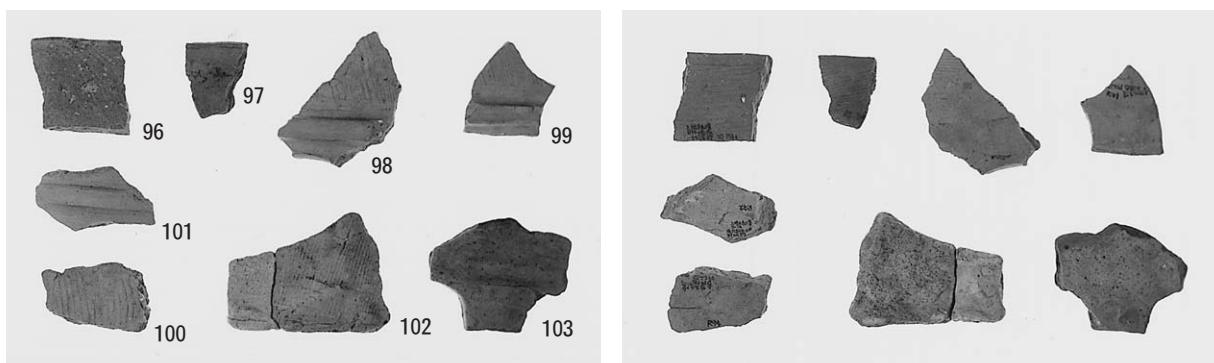
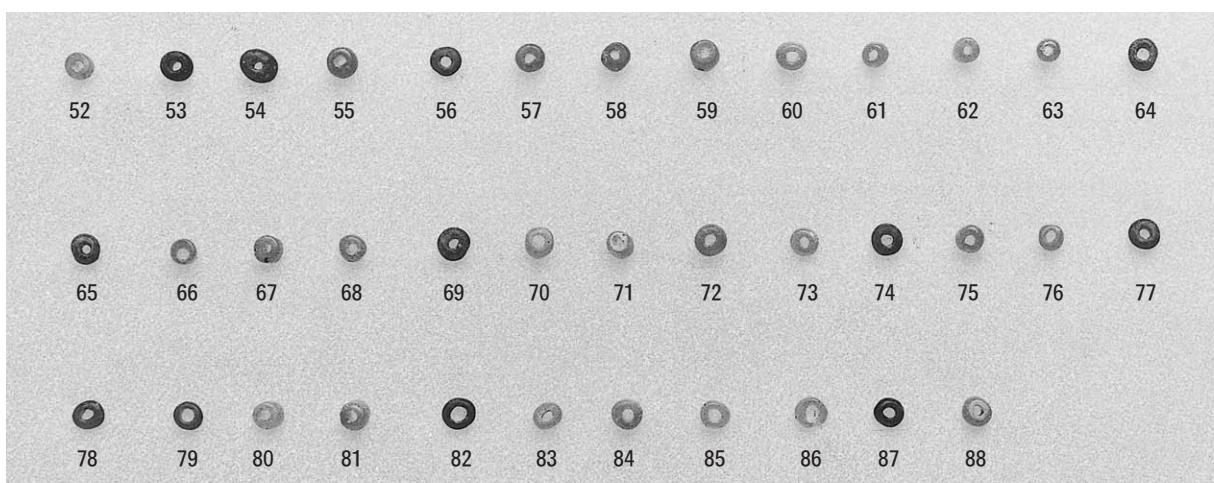
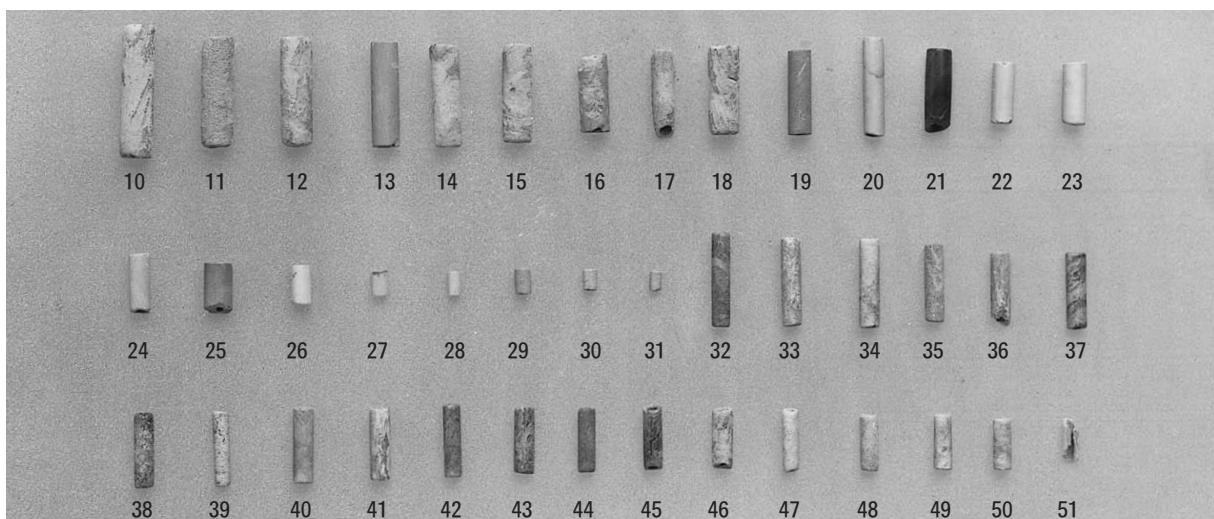
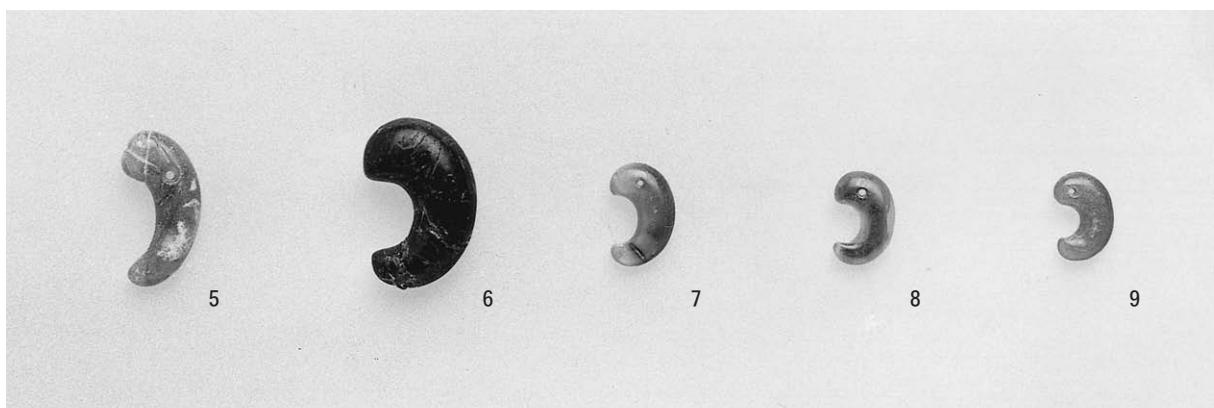


3



4

上椎ノ木1号墳 鏡・石剣・石製小型壺・鉄斧 (1:3)



上椎ノ木1号墳玉類、同2号墳埴輪

IV 谷山古墳

1 位置と環境

(1) 位置

谷山古墳は、亀山市の東端、鈴鹿市と境を接する亀山市井田川町字谷山に所在した。

地形的には、この古墳からみて南側を鈴鹿川が、また北側を鈴鹿川の支流である安楽川がいづれも東流しており、古墳から東へ約1.5kmの地点で合流している。亀山市の北東部は、この二つの河川に挟まれた形で丘陵地を形成しており。その丘陵の最東端にあたる独立丘陵の東斜面上に、谷山古墳は造られている。

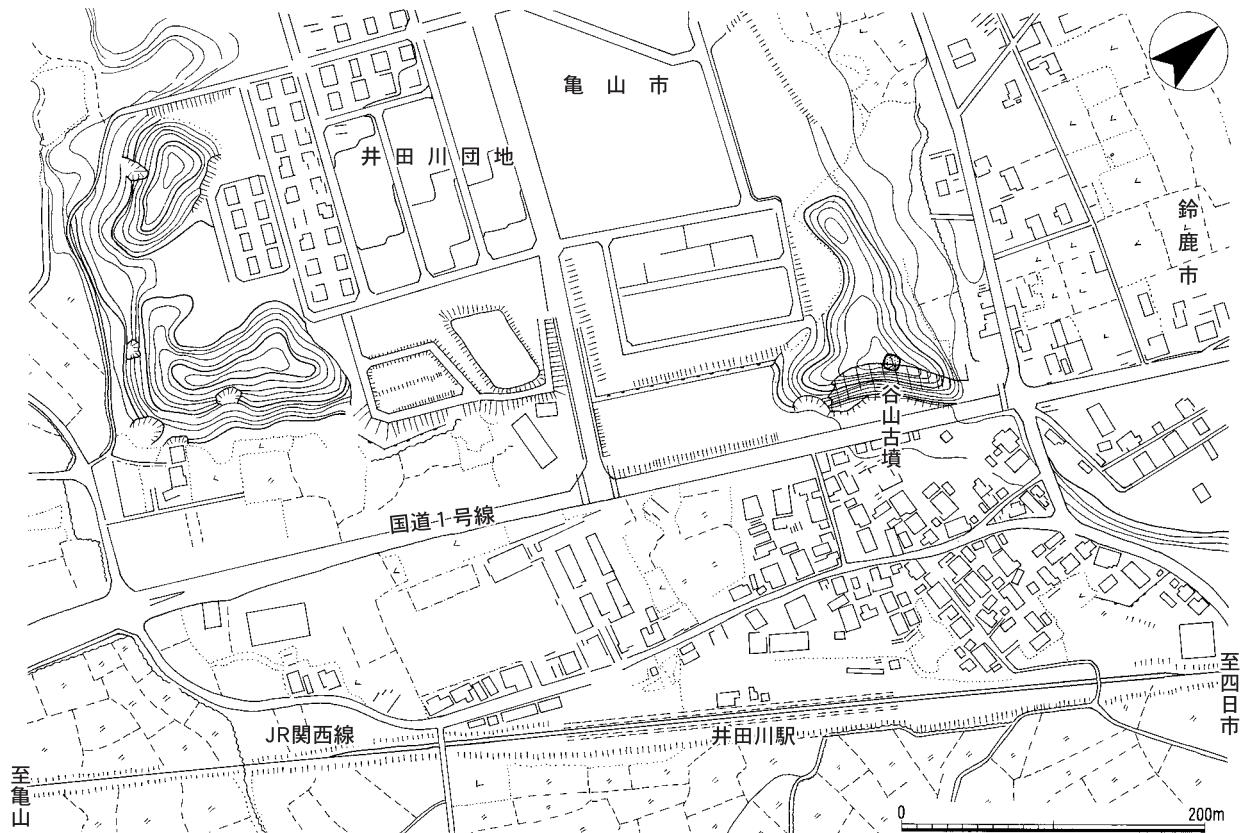
谷山古墳の標高は、調査前の最高部で58.96mを測り、約35m北側の丘陵裾から広がる平地との比高は約16mである。現況では、古墳の東側は国道1号線に面

する崖面を形成しているが、これは国道工事の際に丘陵が大きく掘削されたためであり、従来は、尾根筋がさらに東南方向に延びていたものである。したがって、丘陵の最高部には位置しない谷山古墳は、^①東南方向の丘陵下からの視覚的効果は期待できず、北側からの視線のみ意識して造られたものといえよう。古墳の北側、すなわち安楽川の両側に形成された低位段丘上から見て、はじめて谷山古墳の立地が納得できるものである。

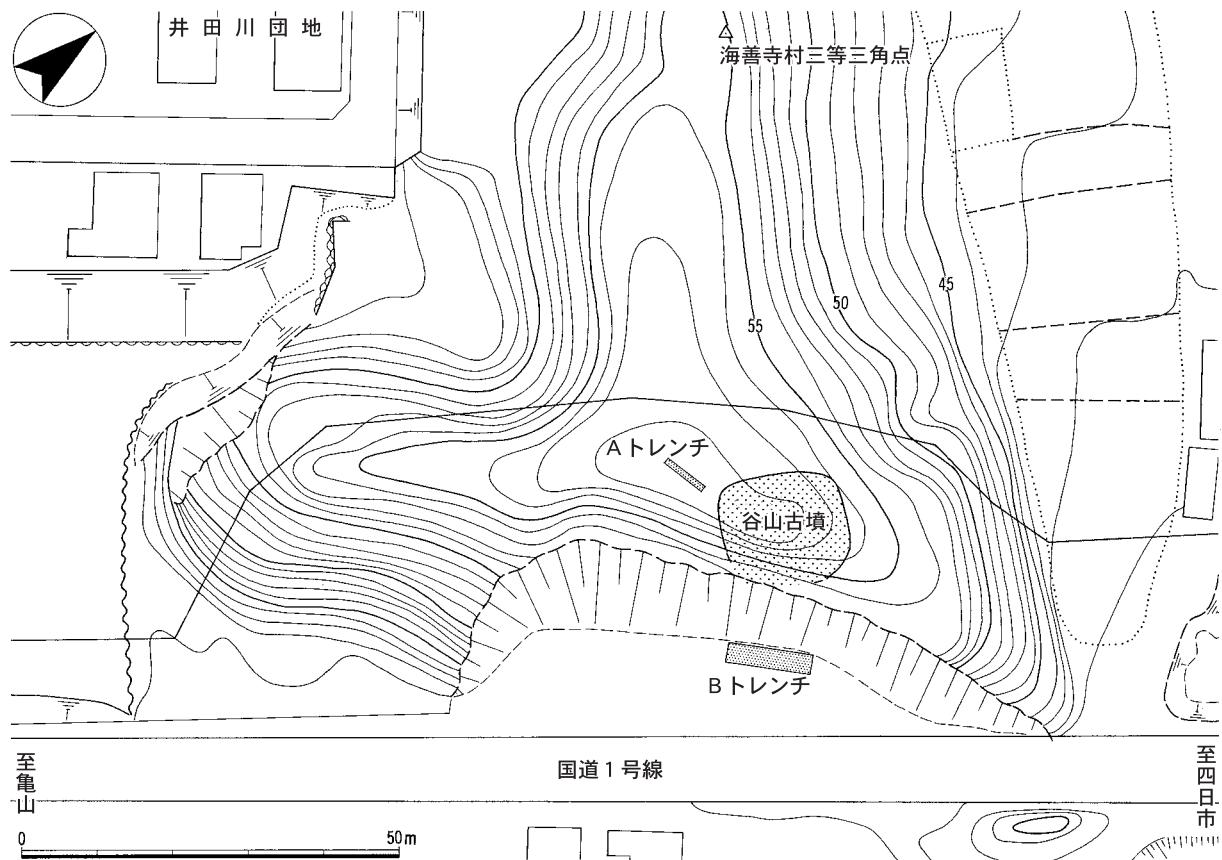
(2) 環境

つぎに、付近の古墳、および古墳時代の遺跡について概観しておく。

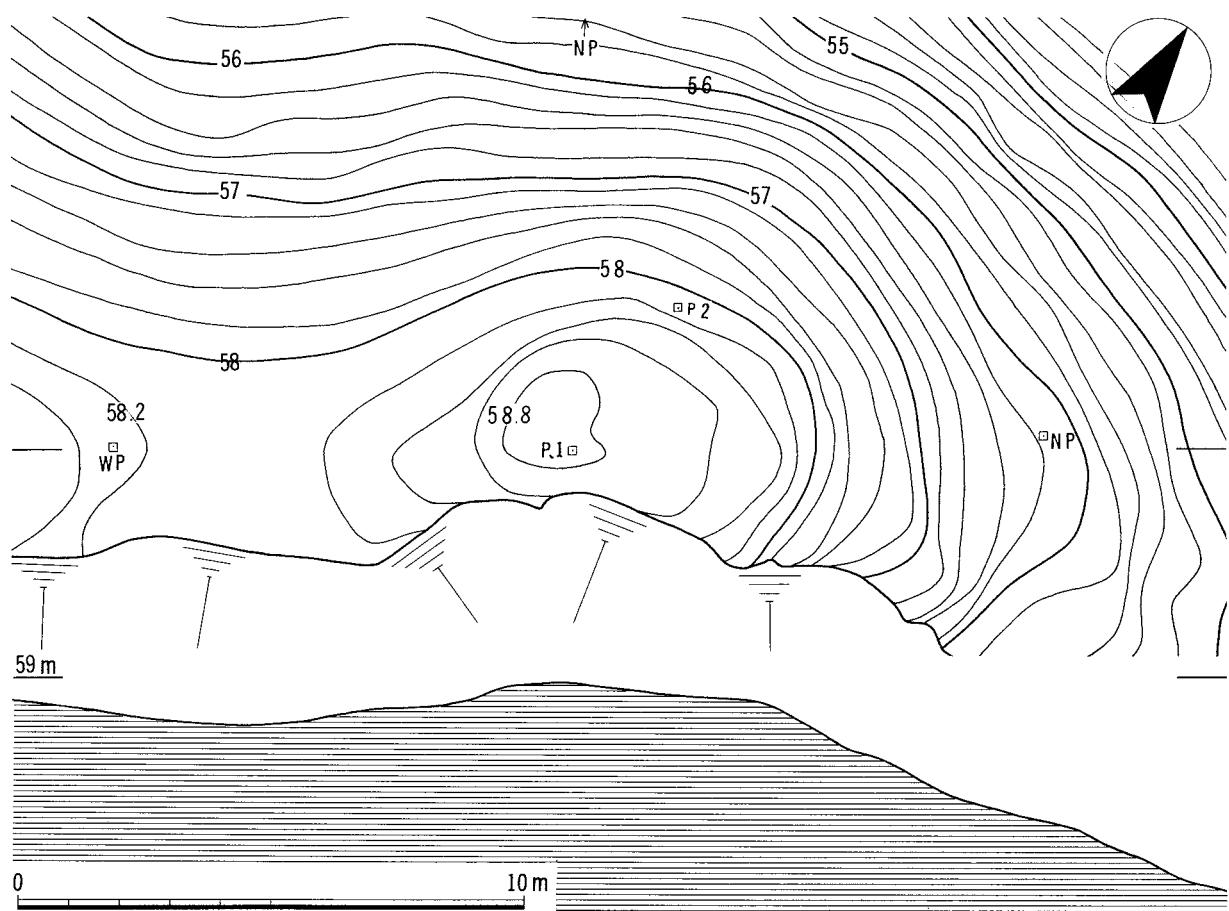
谷山古墳と同じ丘陵上で、西約180mの地点、すな



第13図 谷山古墳位置図 (1:5,000)



第14図 谷山古墳地形図 (1:1,000)

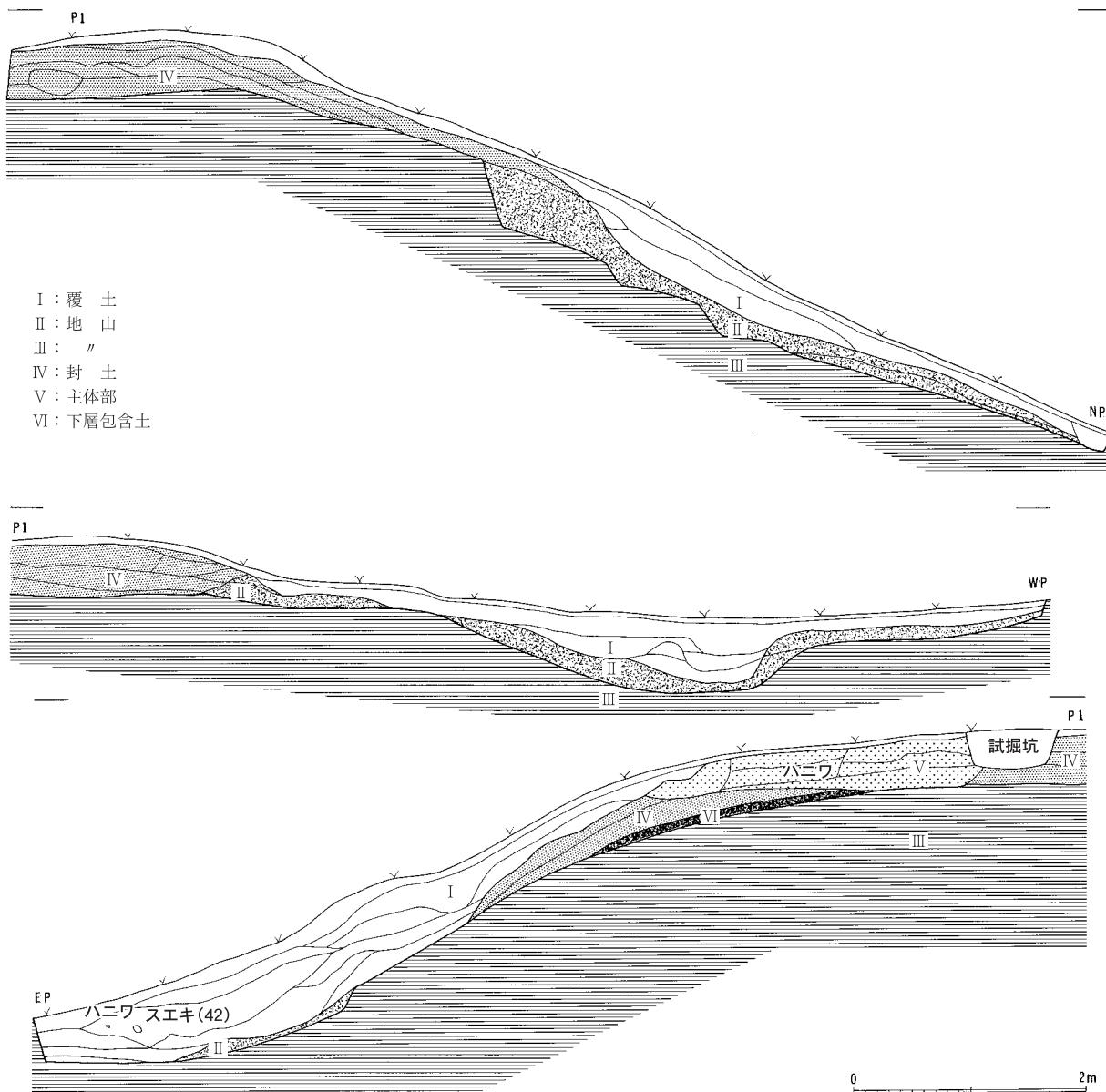


第15図 調査前墳丘実測図 (1:150)

わち、この付近の丘陵中（標高68.79m）には、井田川茶臼山古墳^②（第3図）が存在した。この古墳からは横穴式石室中に2基の箱式石棺と画文帶神獸鏡2面を含む多数の遺物が出土した。6世紀前半に、その築造時期があてられている。さらに西南に約600m離れて、全長約40mの前方後円墳である城山古墳（第3図）があった。この城山古墳は主体部が不明だが、谷山古墳と同様、大阪府淡輪地方と類似した技法を用いた円筒埴輪を墳丘にめぐらしていた。さらに谷山古墳を中心とする半径2.5kmの範囲を見ると、北伊勢最大の前方後円墳で全長90mに及ぶ能褒野王塚古墳

（第3図）をはじめとして、大小100基ちかい古墳が密集している。^③

また、付近の古墳時代の遺跡をみると、谷山古墳の南西約1.2kmの所に山城遺跡（第3図）が存在する。この遺跡は発掘調査の結果、古墳時代と鎌倉時代を中心に営まれた集落であることがわかり、古墳時代の竪穴住居16棟が確認された。また、北約12kmの御幣川左岸では、地蔵僧遺跡（第3図）の調査が行われており、32棟の古墳時代に属する竪穴住居が検出されている。この集落は、弥生時代中期から奈良時代を中心として断続的に営まれたものである。



第16図 墳丘土層図 (1:60)

2 遺構

(1) 調査区

残存する墳丘を中心とする調査区とは別に、尾根の最高地点付近（Aトレンチ）と崖の下（Bトレンチ）にも調査区を設定した（第14図）。

Aトレンチは、別な古墳の在否を確認する目的で設定した。しかし表土直下が岩盤であり、何の遺構・

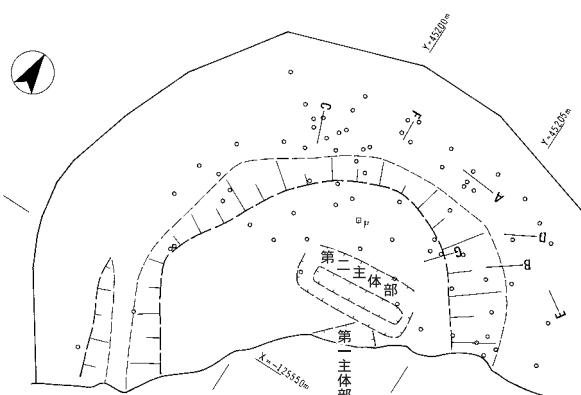
遺物も認められなかった。

Bトレンチは、半壊した谷山古墳から落下した遺物を採集する目的で設置した清掃調査区である。現表土をふるいに掛けたが、何の遺物も検出されなかつた。

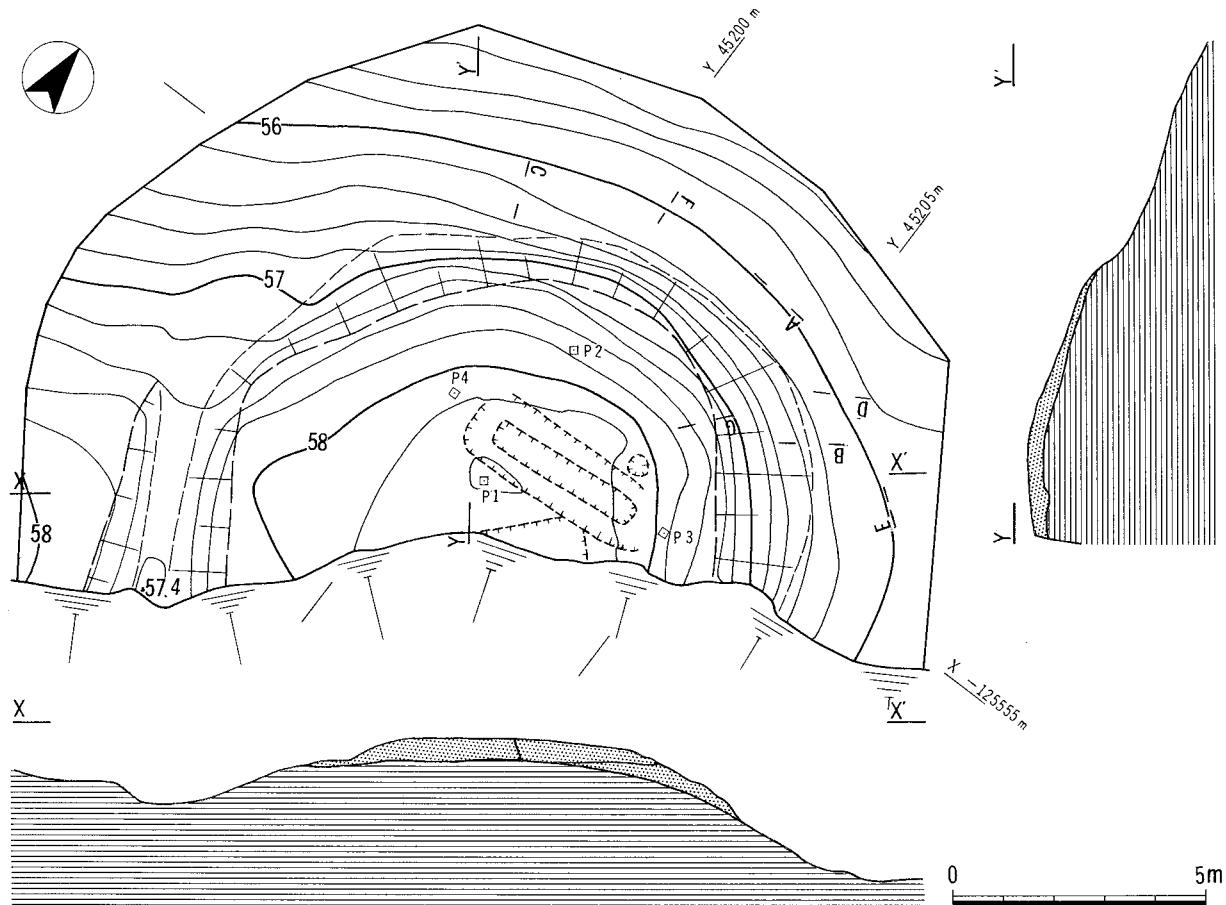
(2) 墳丘

A 墳形

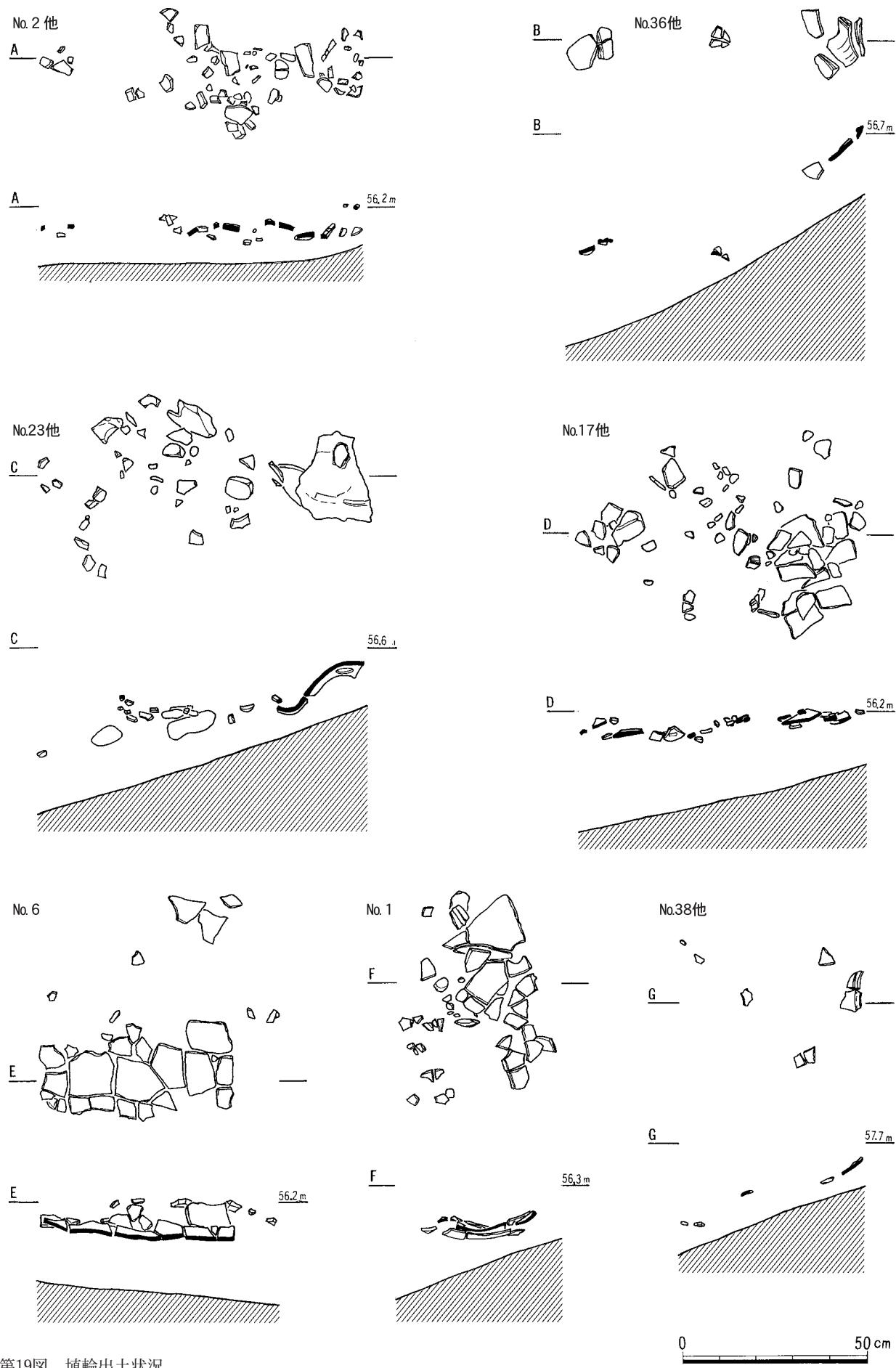
古墳が造られている場所は、丘陵頂部から凸形に三方につながる尾根のうち、北東に延びる尾根上にあたり、丘陵頂部から緩い鞍部をへて北東斜面がはじまる地点である。墳丘の2分の1に近いと推定される部分が、国道1号線の形成する南東の崖面で大きく削られている。また、墳頂部から北東方向への封土の流失も多く、墳形は明確であるとは言いがたい。しかし、表土および封土除去後の状況から見て南北約13m、高さ1.5m程の方墳であった可能性があ



第17図 墓輪出土位置



第18図 調査後墳丘実測図 (1:150)



第19図 墳輪出土状況

る。また、後述する第一主体部のわずかに残された掘形の位置及び方向からみて、墳丘の東西長も約13mの正方形を呈し、その方向は北で東に約40°程振ったものと推定される。

周溝

墳丘の西南裾で幅2m余り、深さ0.5m余りの溝が長さ4mにわたって検出された。現存部分はほぼ直線である。方向は尾根と直行するものである。この溝は、位置や形状および溝中から埴輪の小片が微量に出土したことから考えて、当該古墳にともなう周溝の一部と推定される。

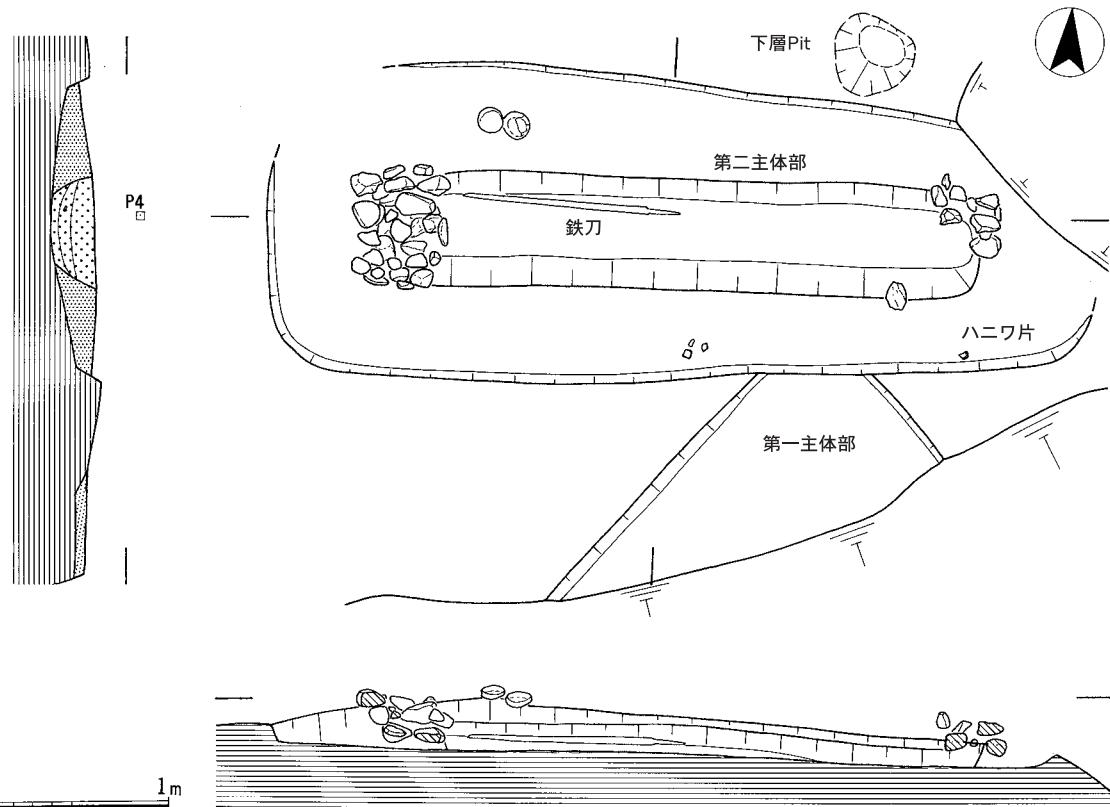
周溝内から出土した埴輪は、眺望のよい墳丘の東側や北側と比較して、非常に少なくて小片のみであった点が注目された。

(3) 第一主体部

谷山古墳では、新旧二つの主体部が確認された。以下、これら二つの主体部を「第一主体部」・「第二主体部」とよぶ。その新旧関係については、次の二つの事実が確認された。(1) 第二主体部の掘形は第

一主体部掘形の北隅をわずかに破壊する形で造られている。(2) 第二主体部の掘形埋土中には、第一主体部埋土では見られない埴輪片が混入している。(1)・(2)の事実から、第一主体部の後に第二主体部が造られ、追葬が行われたと考えられる。

第一主体部は大部分が墳丘南側の崖で崩れているが、その北側の一隅が残っていた。掘形の長辺にあたるとと思われる部分が約1.7m、短辺にあたるとと思われる部分が約0.6m残存していたが、それによると、掘形の形はほぼ長方形で長軸の方向は北から40°東へ振ったものである。この方向は墳丘の方向と一致する。また位置的にも、墳丘のほぼ中央にあたると考えられる。このような状況からみて、第一主体部の形成は、谷山古墳の築造と同時的であったと推定される。調査経過の項でもふれたように、昭和50年に谷山古墳の南側崖面から両端を欠く現存長82cm余りの鉄刀(26)が出土しており、この鉄刀は第一主体部の副葬品と考えられる。なお、今回の調査にあわせて、古墳南側崖下の試堀・ふるいがけを行ったが、古墳からの滑落した遺物は何ら確認されなかった。



第20図 第一主体部と第二主体部 (1:40)

(4) 第二主体部

第二主体部も盛土の流出が激しく、また掘形、棺痕跡とともに浅いものの、判然と残っていた。第二主体部は墳頂部の北寄りに位置し、ほぼ東西方向に長軸をもっている。掘形は長さ4.3m、幅1.5mで、角にややまるみをもつ長方形を呈する。埋葬方法は割竹形木棺直葬であり、痕跡のみを残す。この木棺跡の大きさは長さ約3m、幅約0.6mであった。また木棺の両端には棺座、および木口板止めとして10数cm前後の円礫が「コ」の字形に組まれていた。

この第二主体部では、棺の内外に副葬品が認められた。

まず、棺内遺物としては、東側に玉類（53～118）、西側に鉄刀（52）が遺存した。玉類は碧玉製管玉と、ガラス小玉を主体としており、緒に貫かれて被葬者が着用していたものと推定される状態で出土した。鉄刀は被葬者の右腰下と思われる位置で、切先を西、即ち被葬者のつまさきと推定される方向に向け、刃部を外側に向けて埋納されていた。全長は約111cmで

ある。このほかに、棺内からは性格不明の小鉄片が出土している。

棺内遺物としては、棺の北側、掘形内で、須恵器の杯身（40）・杯蓋（39）が1組と棺の南側、掘形内で焼成不十分と思われる須恵器の壺（44）1点が出土した。杯の身と蓋は、共に倒立状態で出土しており、倒立になった身の中には朱が充填されていた。これらの棺外遺物は、掘形底面より20～30cm上面から出土した。おそらく、棺の下部を少し埋めて安定させた段階で副葬したものであろう。

(5) 下層遺構

第二主体部掘形北辺東寄りの墳頂部で、径約40cm、現存深さ約50cmの小穴1基を検出した。この付近の旧表土はほとんど削平されており、墳丘盛土直下で検出した。

埋土中からは、サヌカイト製石鏃（50）をはじめ、炭化したエゴノキの種子や炭化物、焼土が出土した。石鏃は剥離面を大きく残す薄手小形の打製品である。

3 遺 物

(1) 第一主体部出土の遺物

第一主体部からの出土と考えられる遺物は、先述のように1口の鉄刀（51）のみである。この鉄刀は昭和50年に第一主体部付近と推定される崖面から出土したため、出土状態の詳細等は不明である。切先、茎先とともに欠損しており現存長82.4cm、現存刀身長70.5cm、刃部最大幅3.8cm、峯厚1.3cmを測る。刃側に闇を持ち、茎には現存部に1個の目釘穴を持つ。また把部と刃部のごく一部に木質が残る^⑥。

(2) 第二主体部

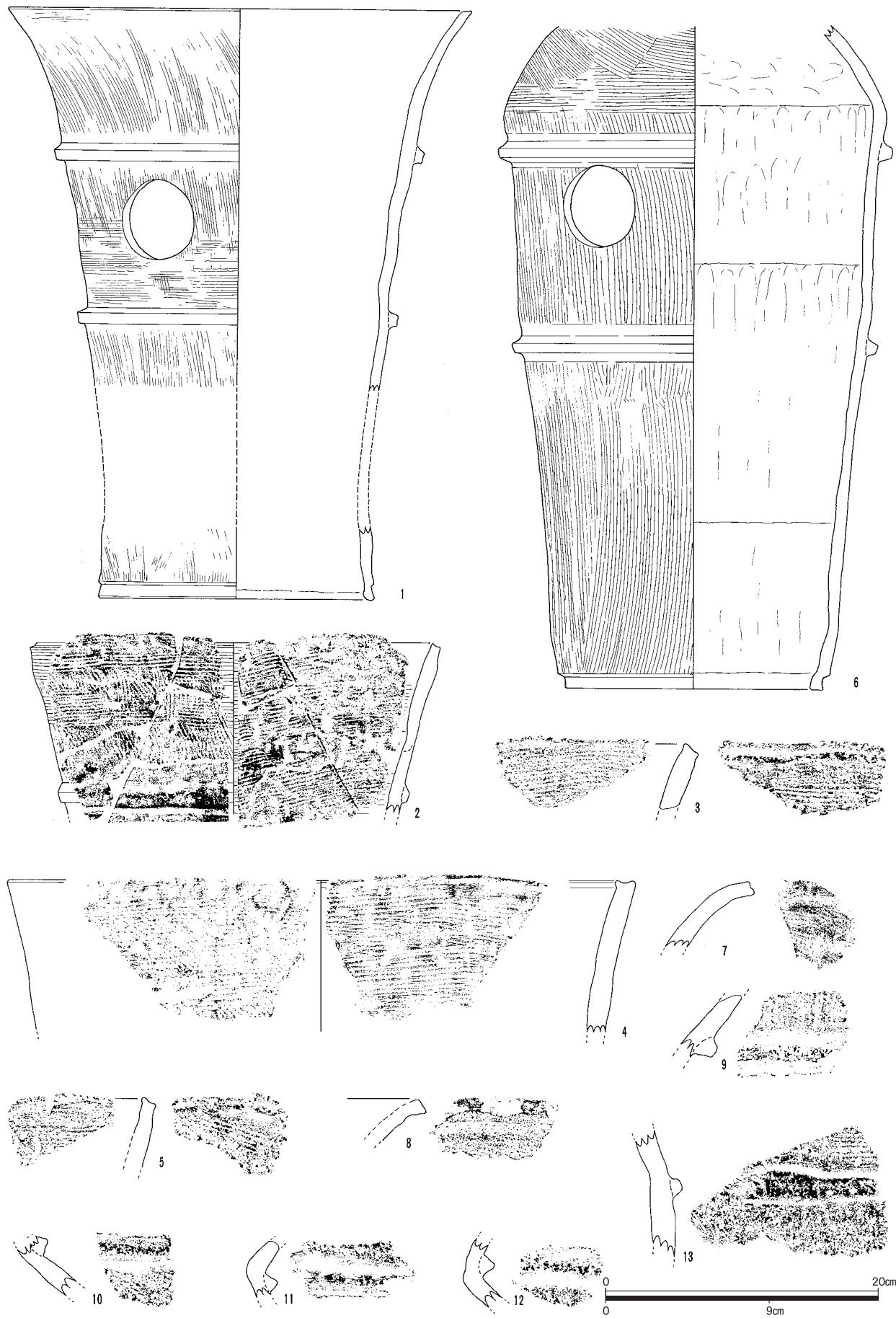
A 棺内遺物

棺内遺物としては、首飾りであったと考えられる一群の玉類と鉄刀1口がある。

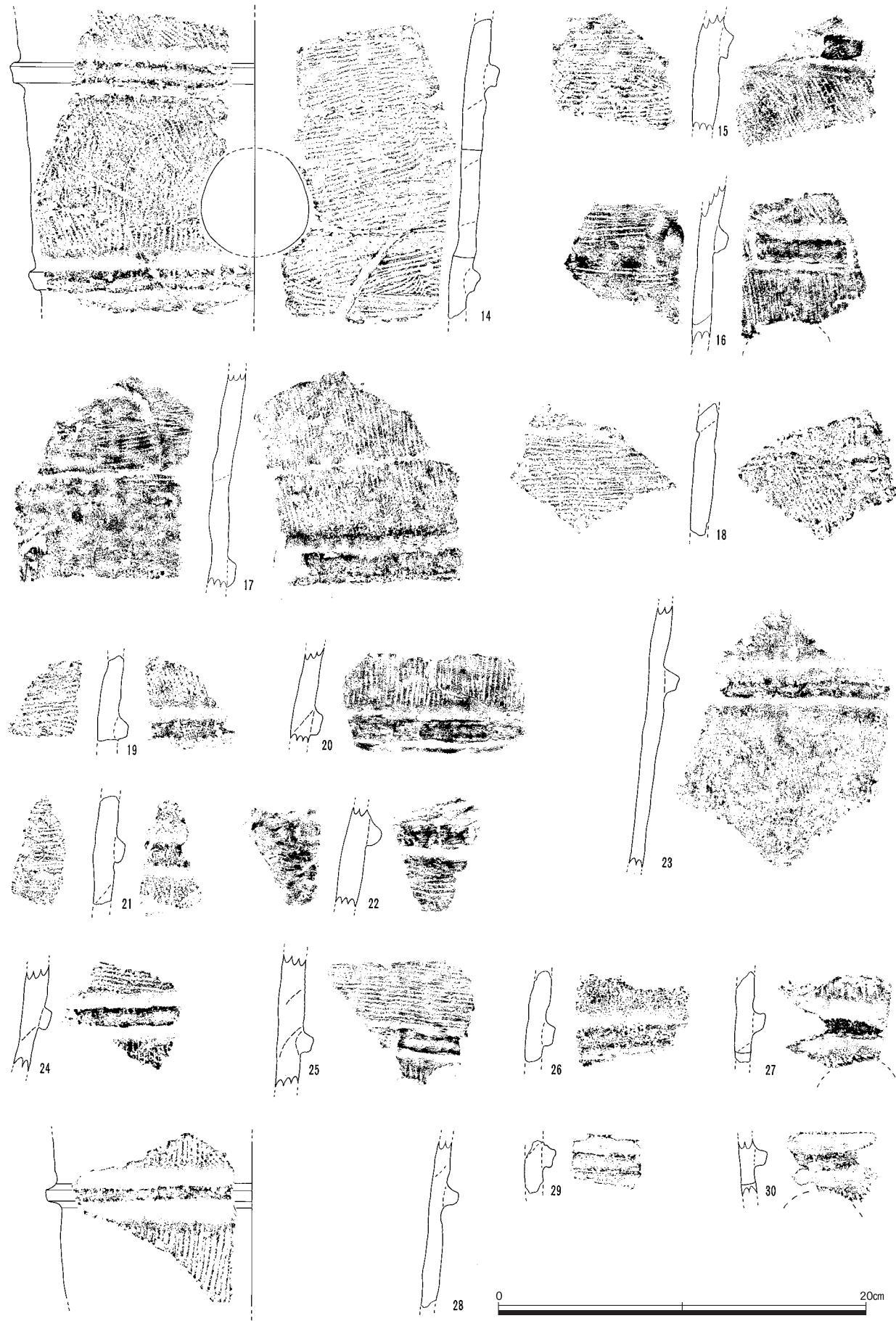
(a) 玉類

玉類は、第二主体部棺内の東方から出土した。緒で貫かれ、被葬者の頸にかけられた状態で副葬され

たものと考えられる。碧玉製管玉10点（108～117）、埋木製ナツメ玉1点（118）、ガラス製ほかの小玉55点（53～107）を確認した。個々の観察結果は、第7表に示したとおりである。管玉の長さは最大のもの2.8cm、最小のもの2.2cm、径は最大のもの1.1cm、最小のもの0.7cmである。最小のもの（117）は両端から穿孔されており、残りは、片方の端からのみの穿孔である。この両端から穿孔されている1点は、第27図上段から明らかのように、大きさも他の管玉とは大きく異なっている。やはり両端から穿孔されているナツメ玉と共に良好磨耗しており、石材も良質である。また、同じく第27図下段に示したように、ガラス製等の小玉類は中・小2つのグループにわけができると考えられる。全般に濃い青色が多いが、明るい青色や黄緑色・青緑色から赤茶色まである。ただし、赤茶色（99～102）は軟らかく、透明度も低い。ガラスではなく岩石類かと考えられる。



第21図 遺物実測図 1・2・6は1:4、3・4・5・7～13は1:3



第22図 遺物実測図 (1:3)

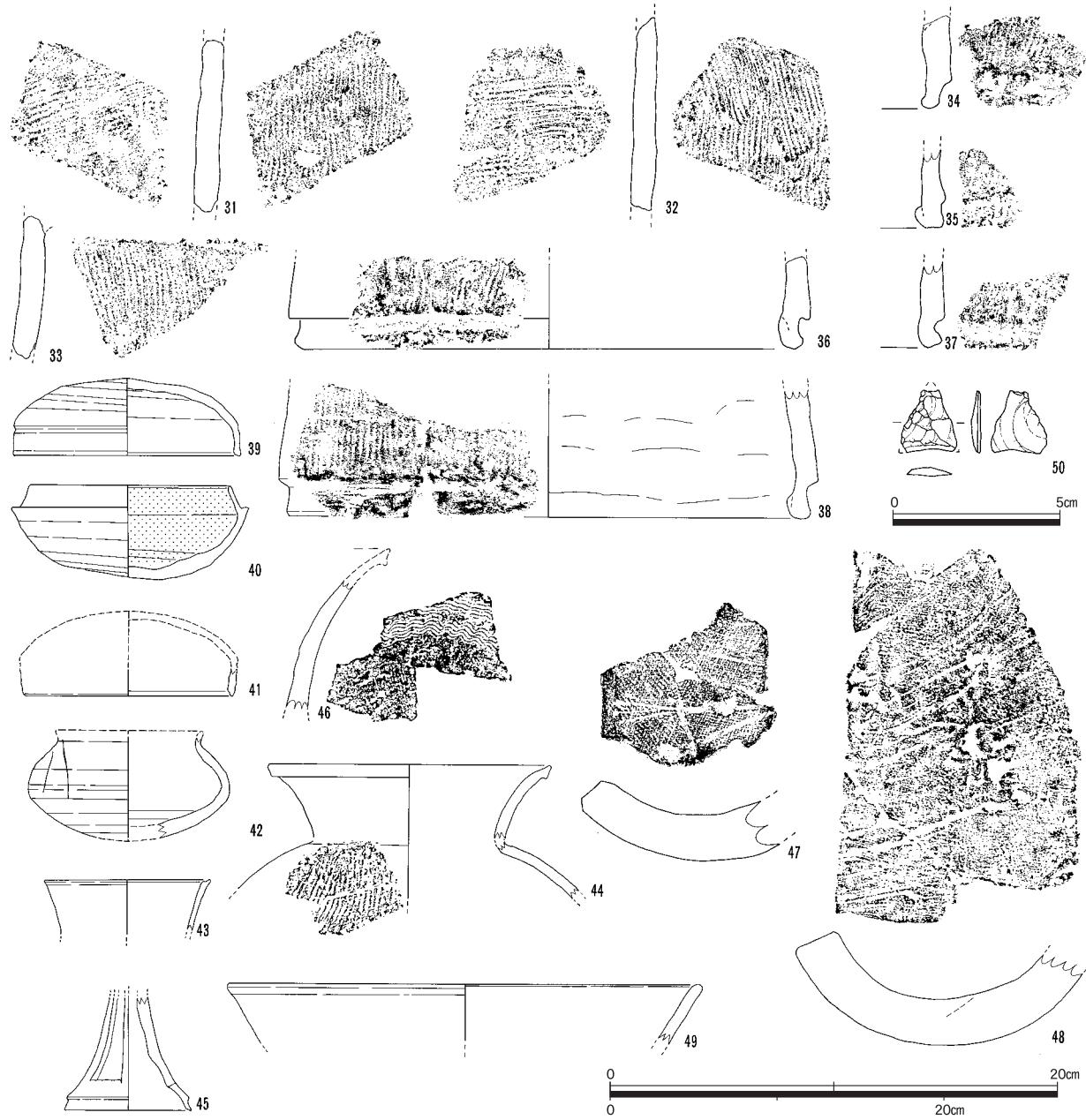
(b) 鉄刀

鉄刀（52）は第二主体部被葬者の右腰下と思われる位置に副葬されていた。この鉄刀は完形品であり、全長11.2cm、刀身長91.8cm、刃部最大幅4.2cm、背幅1.2cmを測る。刃側に闊を持つが茎は銹化が著しく、目釘穴は確認できない。刃部には、部分的に微量の木質が観察された。

B 棺外遺物

須恵器の杯身（40）と杯蓋（39）が、ほぼ完形で棺の北側、東寄りの掘形中から出土した。両方とも倒立状態であった。倒立になった杯身の内部には多量の朱が充填されていた。この杯身、杯蓋は本来の

セットではないと考えられる。蓋の器高4.6cm、口径13.5cm、身の器高5.6cm、口径12.0cmである。蓋の口縁部はやや外開きとなり、丸味を帯びる。さらに端面はかすかに凹んで、ごく浅い沈線状となり、身の蓋受けの立上がりの端部はそのまま丸くおわる。蓋の天井部と身の底部はロクロケズリされている。胎土には砂粒がおおいたため、ロクロケズリの痕跡が細線となって多く残っている。蓋の内外面、身の外面は暗青灰色を呈するが、身の底部付近のみ焼成状況の相異によると思われる明灰色を呈する。また、身の内面には充填されていた朱が全面に強く付着している。



第23図 遺物実測図 31～38・47・48は1:3、39～46は1:4

壺1点(44)が棺の中央部の南側掘形内で出土した。小片の状態であった。表面は黒色、内面は灰白色を呈し、非常に軟質であり、須恵器の焼成不十分なものと思われる。口縁部径は16.8cmと推定される。口縁部にロクロナデ、体部外面に平行タタキの痕が観察される。これらは、陶邑編年のMT15型式に近似する。⁷⁾

(3) 墳 輪

半壊した13m程の古墳とはいえ、出土総量は整理箱に4箱程と少量であった。北側と東側の墳丘斜面や墳裾を中心に出土した。いずれも原位置を保つものではなく、全形を知り得る例にも恵まれなかった。出土例は全て円筒埴輪、すなわち普通の円筒と朝顔形円筒埴輪であり、形象埴輪は含まれていない。

これらの埴輪は全体に齊一性が高い。すなわち、いわゆる淡輪系の底部調整技法を持つこと(34~38)、茶黄色を呈して軟質であるが、黒斑は認められないこと。二次調整はC種ヨコナデらしいこと(1~8、22~25)、小石を少量含む均質な胎土を持つこと等である。⁸⁾

また、口縁部(1~5、7・8)はヨコナデを施して面を作り、内面にもヨコナデを施す例(2~5)が多い。外面の一次調整はやや粗いタテハケを施し、二次調整は衰退気味である。タガはやや細く、台形を呈するものが多いが、わずかに「M」字形を呈する例(14・29)もある。朝顔形円筒埴輪の頸部(10~12)は、断面三角形を呈する。タガは2段と推定され、この間に一对の円形透孔を持つ。基底部は一次調整のタテハケのみであり、二次調整は見られない。底部(1・6・34~38)は、全て淡輪系底部調整技法である。底部の段は何ら調整せず、そのままである。内面は基本的に指圧痕を残す程度であるが、基底部より上ではヨコハケを施す例(14~19・21・22)もある。

朝顔形円筒埴輪の口縁部(7・8)は、普通円筒のそれよりも薄手らしく、口縁部タガ付近での屈曲はない(9)。

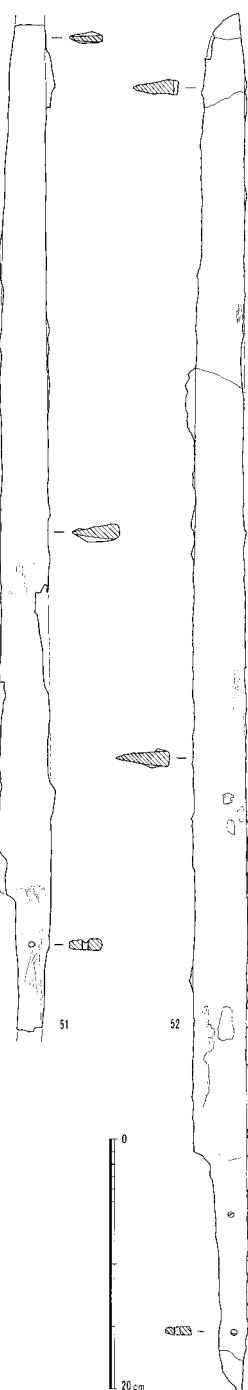
完形復元できた例はないが、普通円筒の口径は28~34cm程、タガ付近の径は26~27cmと21~23cm程、底径は20cm内外であり、高さは40cm前後であったと推測さ

れる。

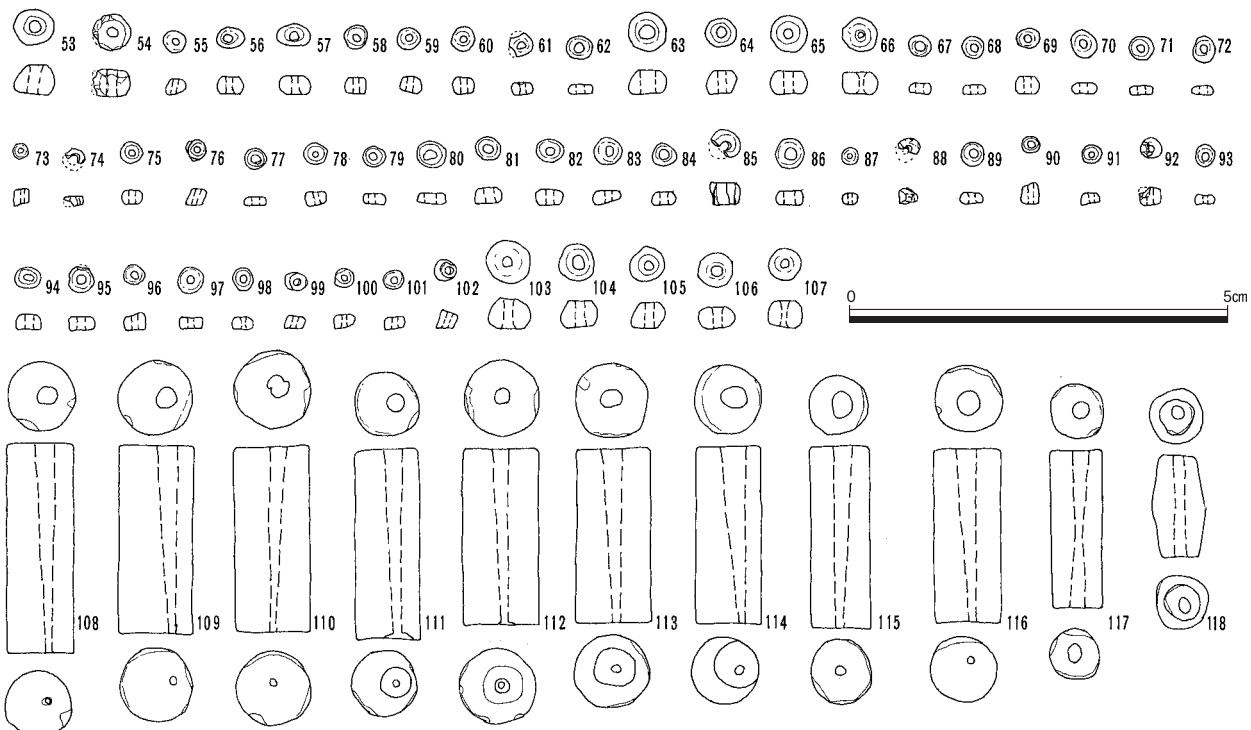
なお、線刻を持つ例(14)がある。一次調整タテハケやタガ貼付のためのヨコナデの上に、鋭いヘラ状具で緩く「C」字形に弧を描く。現存ある破片には弧線は4本認められる。

(4) その他

墳丘および墳裾から、各時代の遺物が少量出土し



第24図 鉄刀実測図(1:6)



第25図 第二主体部玉類実測図 (1:1)

遺物番号	種類	色・その他	厚さcm	径cm	備考
53	小玉	濃青緑色	0.4	0.55	R.53No.3
54	"	濃緑青色	0.35	0.5	R.55No.4
55	"	濃青色	0.15~0.2	0.3	R.1 No.7
56	"	"	0.21	0.3~0.4	R.2 No.13
57	"	"	0.25	0.3~0.4	R.14No.15
58	"	"	0.2	0.3	R.13No.16
59	"	"	0.25	0.3	R.4 No.17
60	"	"	0.2	0.3	R.5 No.18
61	"	"	0.15	0.3	R.6 No.19
62	"	"	0.12	0.35	R.7 No.20
63	"	濃青緑色	0.3~0.35	0.5	R.54No.21
64	"	濃青色	0.3	0.4	R.52No.22
65	"	"	0.3	0.5	R.47 No.23
66	"	"	0.25~0.3	0.45	R.51No.24
67	"	"	0.15	0.3	R.3 No.25
68	"	"	0.11	0.3	R.8
69	"	"	0.22	0.28~0.34	R.9
70	"	"	0.14	0.35	R.10
71	"	"	0.11	0.34	R.11
72	"	青色	0.1	0.3	R.12
73	"	"	0.2	0.2	R.15

遺物番号	種類	色・その他	厚さcm	径cm	備考
74	"	"	0.15(?)	0.3(?)	R.16
75	小玉	淡青色	0.18	0.3	R.17
76	"	"	0.2	0.26	R.18
77	"	青色	0.12	0.3	R.19
78	"	濃青色	0.15~0.2	0.3	R.20
79	"	"	0.1~0.15	0.3	R.21
80	"	青色	0.1~0.15	0.38	R.22
81	"	淡青色	0.15~0.2	0.35	R.23
82	"	濃青色	0.2	0.3~0.35	R.24
83	"	青色	0.1~0.2	0.35	R.25
84	"	濃緑青色	0.16	0.32	R.26
85	"	青色	0.3	0.4(?)	R.27
86	"	"	0.18	0.4	R.28
87	"	淡緑青色	0.15	0.2	R.29
88	"	青色	0.2 (?)	0.25 (?)	R.30
89	"	淡青色	0.1~0.15	0.3	R.31
90	"	青緑色	0.2~0.3	0.25	R.32
91	"	"	0.1~0.15	0.26	R.33
92	"	"	0.25	0.3	R.34
93	"	"	0.13	0.25	R.35
94	"	"	0.2	0.26~0.35	R.36

第7表 玉類観察表

遺物番号	種類	色・その他	厚さcm	径cm	備考
95	"	"	0.17	0.35	R.37
96	"	白濁薄緑色	0.2~0.25	0.27	R.38
97	小玉	黄緑色	0.15	0.32	R.39
98	"	"	0.17	0.3	R.40
99	"	赤茶色	0.15~0.2	0.25	R.41
100	"	"	0.15~0.2	0.26	R.42
101	"	"	0.15	0.3	R.43
102	"	"	0.15~0.25	0.25	R.44
103	"	濃青色	0.4	0.56	R.45
104	"	"	0.35	0.5	R.46
105	"	"	0.35	0.45	R.48
106	"	"	0.25~0.3	0.48	R.49

遺物番号	種類	色・その他	厚さcm	径cm	備考
107	"	"	0.3~0.35	0.44	R.50
108	碧玉製管玉	濃緑色	2.8	0.9	R.58(片側穿孔) No.5
109	"	"	2.5	1.0	R.59(") No.12
110	"	"	2.45	1.0	R.59(") No.12
111	"	"	2.5	0.8	R.61(") No.2
112	"	"	2.3	1.0	R.62(")
113	"	"	2.3	0.91.0	R.63(") No.9
114	"	"	2.35	0.9	R.64(") No.8
115	"	"	2.4	0.8	R.65(") No.6
116	"	"	2.3	0.9	R.66(") No.1
117	"	緑褐色	2.1	0.7	R.57(両側穿孔) No.14
118	埋木製ナツメ玉	黒色	1.3~1.4	最大径 0.5~0.7	R.56 No.11

ている。

縄文時代 下層小孔からサヌカイト製の石鏃と炭化した堅果や木片と焼土が少量出土した。石鏃(50)は凹基無茎式であり、側縁がやや外湾する打製であり、片面には剥離面を大きく残す。一部欠損しているが、現存長1.8cm、最大幅1.7cm、重さ0.31gを測る。縄文時代の早い時期に属するものであろう。

炭化したエゴノキの種子は、ほぼ完形のもので長径9mm、短径6mmを測る。果皮はない。

古墳時代 須恵器の小片が4点出土したのみである。杯蓋(41)は、口縁部が丸味を持って凹線状を呈する。陶邑のTK10型式に相当しよう。小形短頸壺(42)は、2本のヘラ描沈線を持つ。壺あるいは壺蓋の口縁部片(43)は、比較的しっかりした端面を持つが、

やはり凹端状を呈する。TK47型式からMT15型式に近い。無蓋高杯の脚部(45)は、長脚一段透しと推定される。MT15型式に近似する。甕の口縁部片(46)はやや軟質でセピア色を呈する。6本の目を持つスピード感のない櫛描波紋を施す。またこの文様により下位には、下からのヘラケズリを施している。

後世の遺物 布目瓦2片と山茶椀系練鉢1片と、鑄化して判読不能の銅錢1点が出土した。

布目瓦片(47・48)は共に軟質の丸瓦であり、布目は比較的密である。奈良時代あるいは平安時代前期の所産であろう。

山茶椀系練鉢(49)は、断面が丸棒状を呈する口縁部の小片である。12世紀頃のものであろう。

4 結語

(1) 前後の時代

A 下層遺構

墳頂部の北東寄り地山面で検出された、小穴1基のみである。土器等の時期決定資料を欠くが、片面に剥離面を大きく残した薄手小形の打製石鏃が出土しており、縄文時代の早い時期に属するものかと考えられる。

狭い尾根上に立地し、他に何らの遺構も検出されていない。小穴からは、他に炭化したエゴノキの種

子や炭化物等が出土しているのみである。したがって、縄文時代のキャンプサイトとしても全く一時的なものであり、住居を営む程に永続的なものではなかったと推測される。キャンプサイトの一形態を示すものとして興味深い事例である。

ところでエゴノキは、日本各地に一般的に分布する落葉樹であり、5~6月に白い花を咲かせ、8~9月に果実が熟すという。果皮には、エゴザポニンC、egosaponin=C₆₁H₉₆O₂₇というアルカロイドを含み、搾汁を河川に流してこの毒で魚をとったとい

う。また、その材はよく細工物に用いられた。当遺跡では、2点の種子が炭化物等と共に出土したのみであり、たまたまキャンプでの燃料となったものであろう。搾汁を漁毒とする目的なら、多量に採集し、つぶされているはずである。また眼下に河川が見えるとはいえ、尾根上のキャンプ地の出土でもある。このエゴノキの語るところは、キャンプは秋頃に営まれたものという点にあろう。エゴサポニンの毒性がある程度強く、即効性があれば、石鎚に塗って狩猟に用いたことも想像可能である。しかし毒性については未確認である。

B 後世の遺物

墳丘及び墳裾から、布目瓦2片と山茶椀系練鉢1片、鋳化して文字の読めない銅錢が出土したのみである。

布目瓦は軟質であり、奈良時代あるいは平安時代前期に属するものと推定される。当該期の最寄りの瓦を出土する遺跡としては、安楽川の対岸、北北東に直線約2kmの位置にあり、現在は鈴鹿市広瀬町に所在する長者屋敷遺跡がある。この遺跡は、伊勢国の国府の跡、あるいは軍団と推定されており、重圏・重郭文軒瓦等が出土している。

次に近距離の瓦を出土する遺跡は、鈴鹿川上流の対岸であり、西南西に約9km弱の位置に所在する、関町の萩原瓦窯跡である。当瓦窯の東隣接地は、「古廐」と呼ばれ、対岸には鈴鹿関跡が推定されている。萩原瓦窯は、鈴鹿関あるいは長者屋敷遺跡にその製品を供給していたものであろう。やはり重圏・重郭文軒瓦等が出土している。^⑪

谷山古墳出土瓦の供給源は特定できないが、少なくとも2km以上離れた対岸の丘陵上にまで搬出されているわけである。搬出した時代は不明だが、山茶椀系練鉢と同様に12世紀頃であろうか。ともかく当古墳に限らず、亀山バイパス関係調査遺跡からは、ほとんど例外なく多少の布目瓦片が出土している。この事実は、少量の瓦の出土から遺跡の性格を判断することの困難さをよく示しているといえよう。

(2) 副葬品

A 第一主体部

昭和50年に崖面から鉄刀（51）が出土している。

この出土位置は、今回の調査で検出した第一主体部に相当するらしい。この第一主体部は中心的な埋葬構造と考えられるが、今回の調査では、崖下の清掃区も含めて、遺物は全く認められなかった。

B 第二主体部

棺内出土遺物には玉類と鉄刀、掘形出土遺物には須恵器がある。

玉類 碧玉製管玉10点と埋木製ナツメ玉1点、中小のガラス小玉55点が、緒を切ることなく被葬者の首に着装状態で出土した。

碧玉製管玉は全体的に良質の石材を用いている。一方向穿孔で太く短いものの中には、1点のみが二方向穿孔のやや細身でより良質なもの（117）が目に付く。磨耗度も高く、これは伝世品の可能性が高い。やはり二方向穿孔で1点のみ出土したナツメ玉も磨耗が著しい。

小玉類は濃い青色が多いが、明るい青色や黄緑色、青緑色から赤茶色まである。しかし、小粒の赤茶色例（74～77）は軟らかく、透明度も低い。その素材はガラスではなく、岩石類かと考えられる。

勾玉や切子玉が伴出しないことも特徴といえよう。材質から見ると、硬玉や水晶、メノウ製品がない点も注目される。以上の様相は、全体として後期初頭的といえよう。

鉄刀 第一主体部出土例と同形態であるが、当例（52）の方がやや長大である。切先は短く鈍角である。刀身は平造であり、刃幅は関部に向けて徐々に広くなる。背関部は明瞭な差別を持たないが、刃関からは次第に細くなり、茎尻は丸味を持って幅を減ずる。このような形態は、5世紀後半から6世紀に入る頃に多い。

須恵器 一組の杯身・蓋と壺が掘形内から出土した。杯身には朱が充満していた。壺は極めて軟質で遺存状態が良くない。これらは、陶邑編年のTK10型式よりもむしろMT15型式の新しい部分に属しよう。

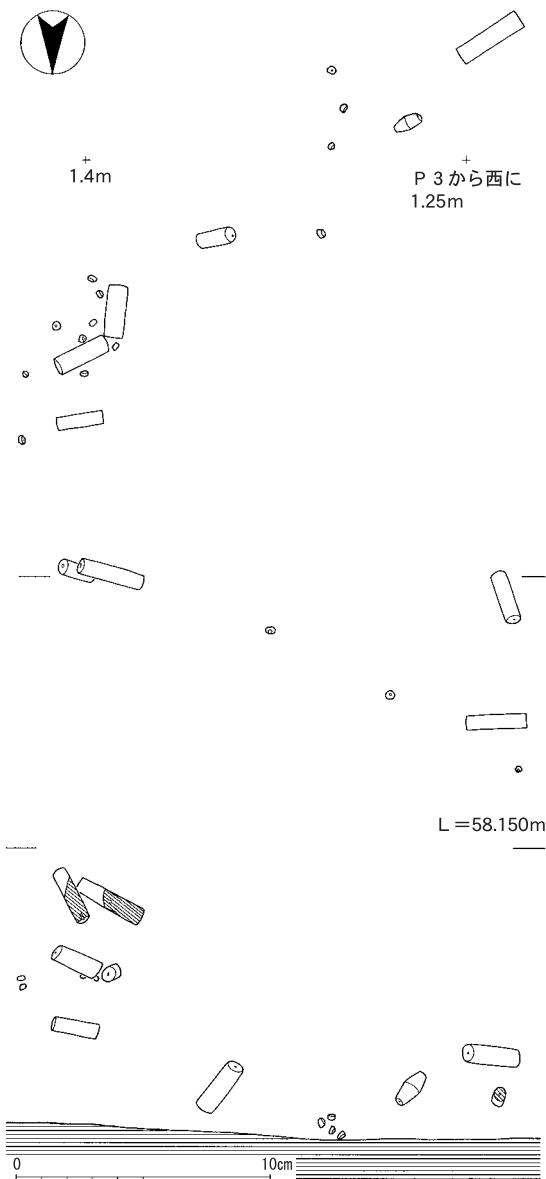
(3) 墳丘出土須恵器

転落した小片4点を検出したのみである。セピア色を呈したやや軟質の甕の口頸部片（46）は、スピード感のない6本目の櫛描波文を持つ。陶邑編年のTK216型式に類似するが、産地は異なる可能性が高い。

当遺物は谷山古墳に関わる最古の土器である。一方、杯蓋の小片（41）はTK10型式らしく、最も新しい土器である。これらは、伝世と追葬に至る時間幅を示しているものと思われる。

（4）埴輪

眺望の良い側の墳頂部に円筒埴輪だけを並べたものと推定される。全体的に齊一性が高く、既述のように以下の特徴を持つ。すなわち、普通円筒のみならず朝顔形円筒埴輪まで、いわゆる淡輪系の底部調整技法をもつこと、黒斑がなく、窯焼成であること、胎土や各技法が单一であること、口縁部はヨコナデによって端面を持つこと、二次調整C種ヨコナデは

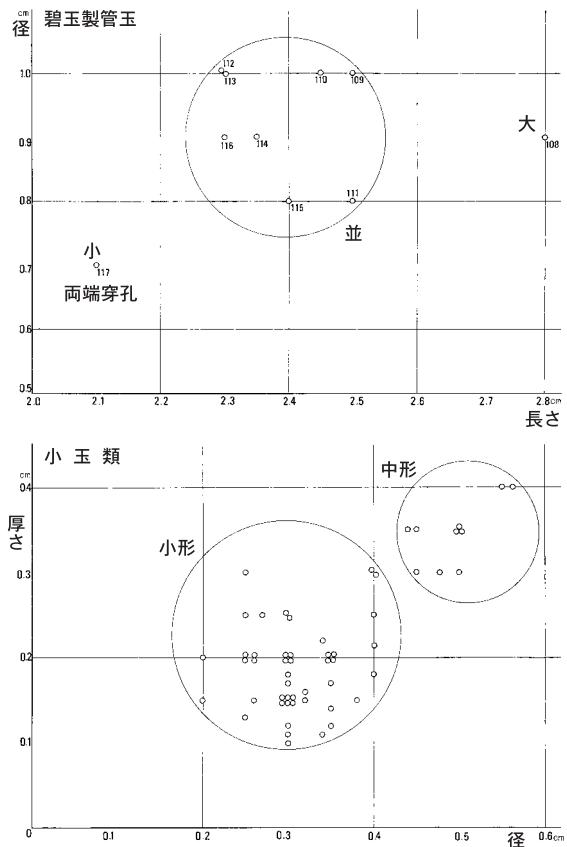


第26図 第二主体部玉類出土状況

衰退期にあり、基底部は一次調整タテハケを施すのみであること等である。おそらく全て、タガが二段で一对の円形透孔を持つものであろう。上述の特徴を持つ谷山古墳の埴輪は、近年の「伊勢の淡輪系円筒埴輪」の研究成果によれば、鈴鹿川流域を中心に淡輪系技法の最も盛行した時期のものに属し、TK47型式を中心とする時期にあたるという。したがって谷山古墳の築造時期は、5世紀末から6世紀初頭であろう。

また第二主体部は、MT15型式の新しい頃、すなわち6世紀前半に追葬されたと推定される。

なお、従来普通円筒に淡輪系底部調整技法が採用されている古墳では、朝顔形円筒埴輪は畿内系の底部調整技法である例だけが知られていた。しかし、谷山古墳では朝顔形円筒埴輪にも全て淡輪系底部調整技法が見られる。他の要素の齊一性の高さも考え併せると、小規模に少数が必要とされた当古墳の築造にあたっては、单一工人集団から供給されたものと推定される。



第27図 第二主体部出土玉類の比較

(5) 時代と性格

谷山古墳は、円墳の可能性も残すが、一辺13cm程の小規模な方墳と推定された。葺石はなく、眺望の良い方角の墳頂部にだけ少量の円筒埴輪を並べていた。明らかとなった第二主体部は追葬であり、長さ3m程の割竹形木棺の直葬であった。副葬品は玉類と鉄刀と須恵器のみであった。

当古墳は5世紀末から6世紀初頭に築造され、6世紀前半に追葬されたものであり、後期古墳に属す

るものである。しかし、同一丘陵上に立地し、画文帶獸鏡等を出土した横穴式石室を持つ井田川茶臼山古墳よりも眺望の良い地点を占める。また群集せずに単独で存在する。これらの要素は前期的である。したがって、谷山古墳の築造された時代は既に後期に属したが、その被葬者の系譜は前期首長層も連なるものであったと考えられる。

[註]

- ① なお、この丘陵の最高部にあたる第14図Aレンチの部分の試掘を行ったが、何らの遺構・遺物も認められなかった。
- ② 小玉道明『井田川茶臼山古墳』(三重県教育委員会、1988年)
- ③ 三重県教育委員会・亀山市教育委員会『亀山の古墳』(1988年)
- ④ 三重県教育委員会『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要』I～III(1985年～1987年)
- ⑤ 倉田直純『地蔵僧遺跡発掘調査報告』(亀山市教育委員会、1978年)
- ⑥ 2口の鉄刀については、レントゲン撮影を行ったが特に目立つた所見はなかった。
- ⑦ 以下、須恵器に関して逐一の注記は省略するが、主として下記の文献に拠った。

平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群I』(1966年)

- ⑧ 以下、逐一の註記は省略するが、埴輪に関しては主に下記の文献に拠った。
 - a川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻2号、1978年)
 - b鈴木敏則「伊勢の淡輪系円筒埴輪」(『Miehistory』vol.3三重県歴史文化研究会、1991年)
- ⑨ 実測・トレースは新田剛氏のご協力を得た。
- ⑩ 武田明正氏のご教示を得た。
- ⑪ 山田猛「IX 一志郡嬉野町天花寺廃寺」(『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1981年)
- ⑫ 註11に同じ。



航空写真（南上空から）



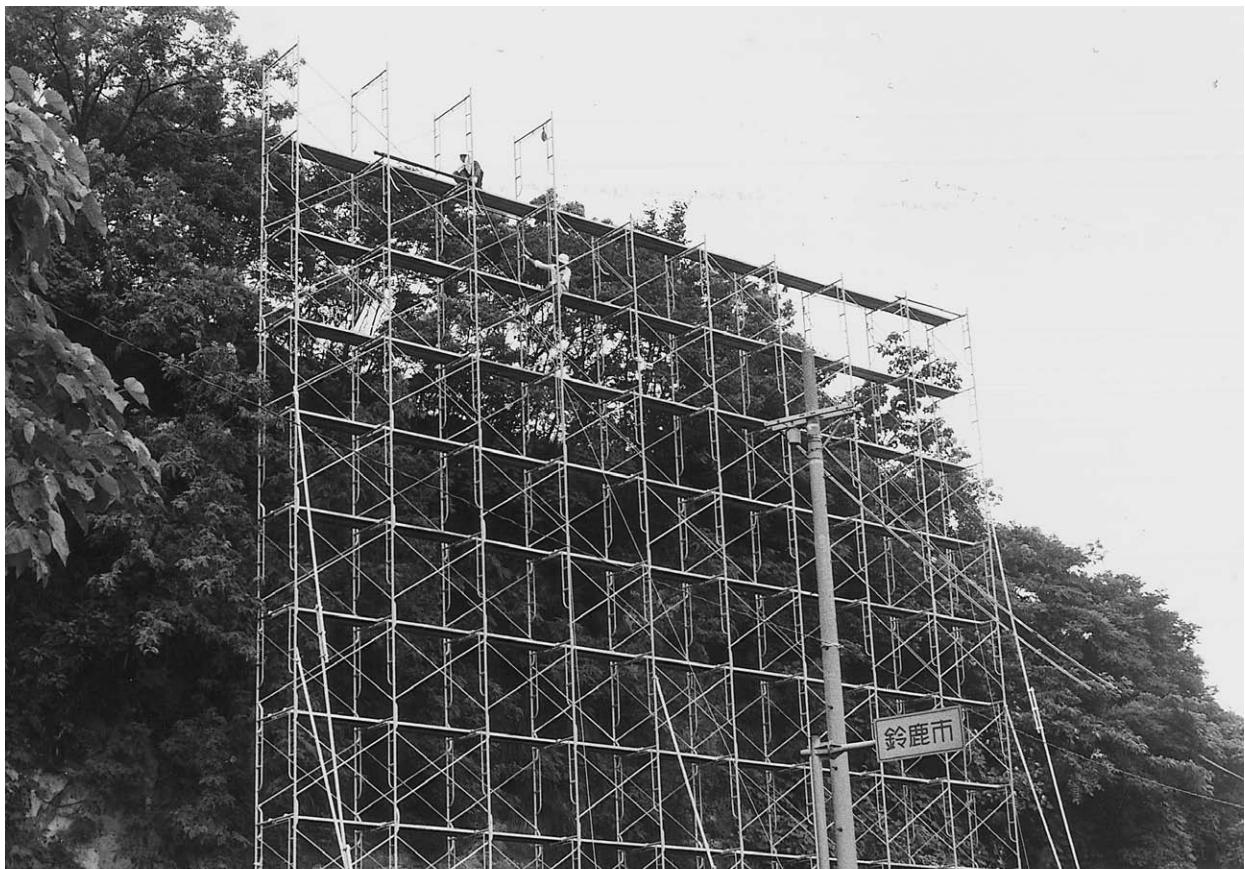
遠景（北から）



航空写真（北東から）



調査前古墳全景（南から）



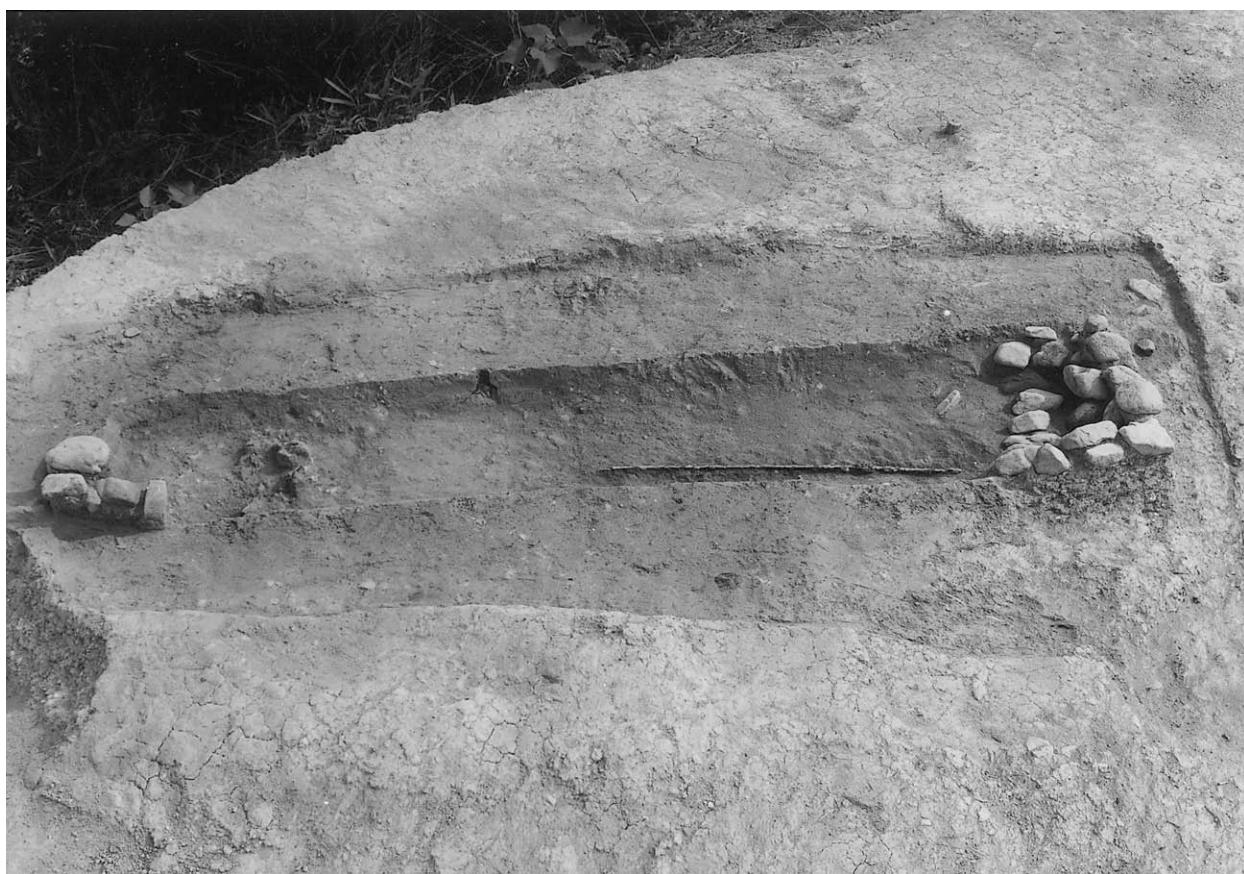
調査風景（東から）国道沿いの安全対策



調査風景（南から）



調査後古墳全景（南）



第二主体部全景（北から）



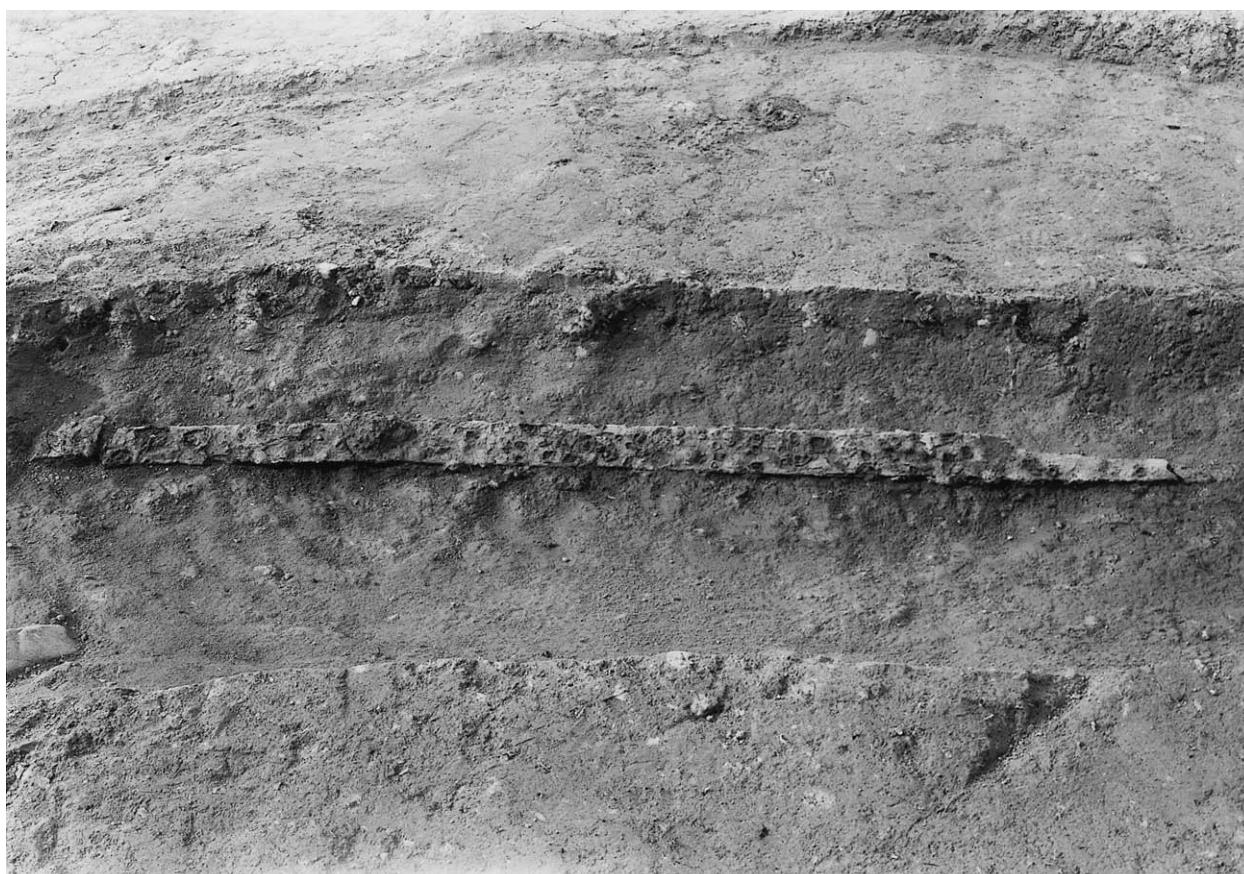
第二主体部西石組



第二主体部東石組



第二主体部棺内玉類出土状況



第二主体部棺内鉄刀出土状況



第二主体部棺外杯身・蓋出土状況



第1主体部（北東から）



周溝（北から）



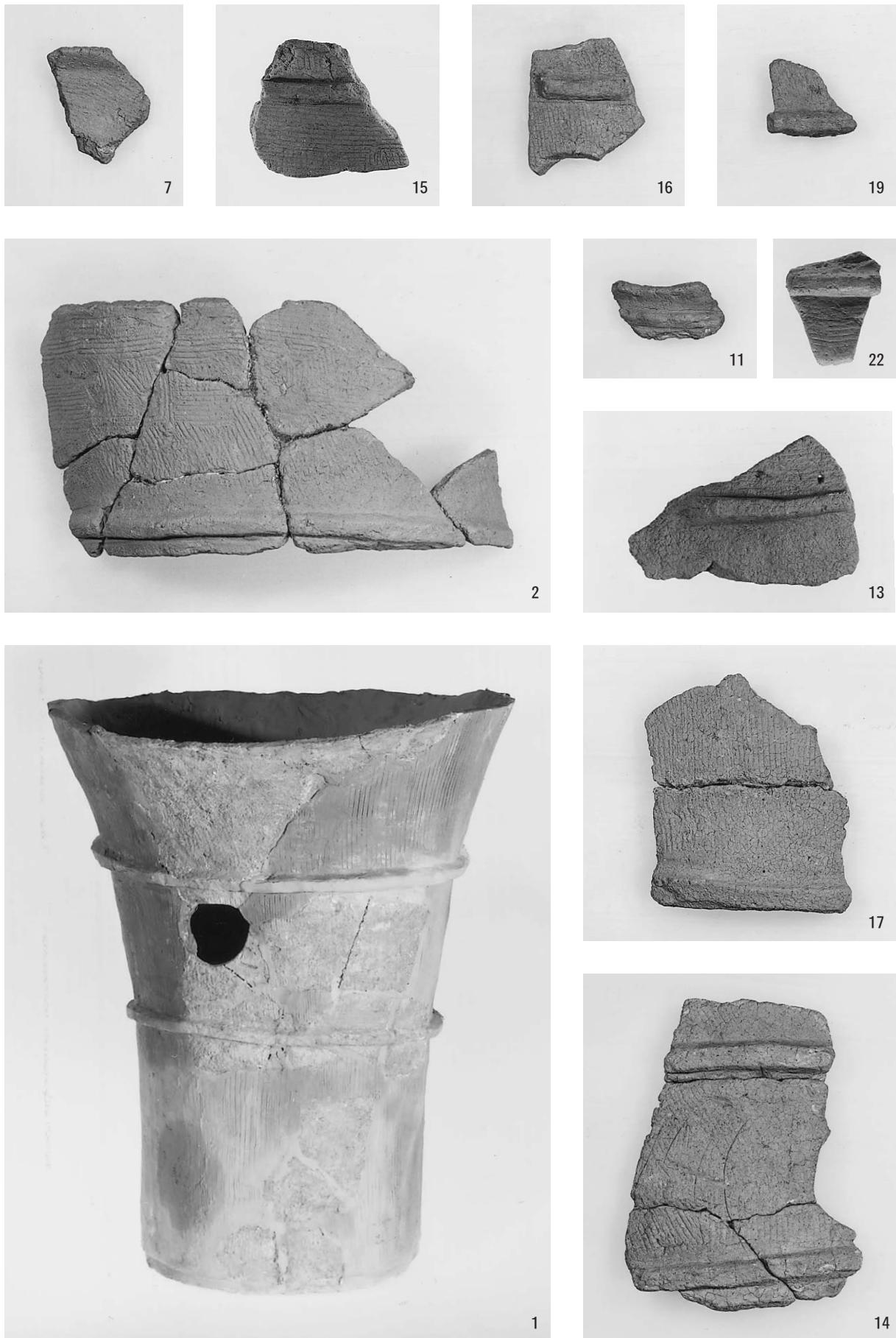
埴輪出土状況



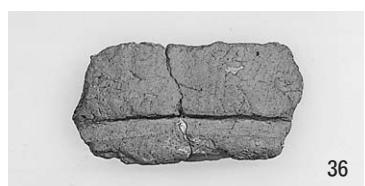
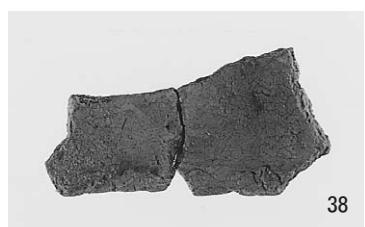
埴輪出土状況（Fセクション付近）



埴輪出土状況（Eセクション付近）



遺物 1:3 ただし、1は 1:4



6



18

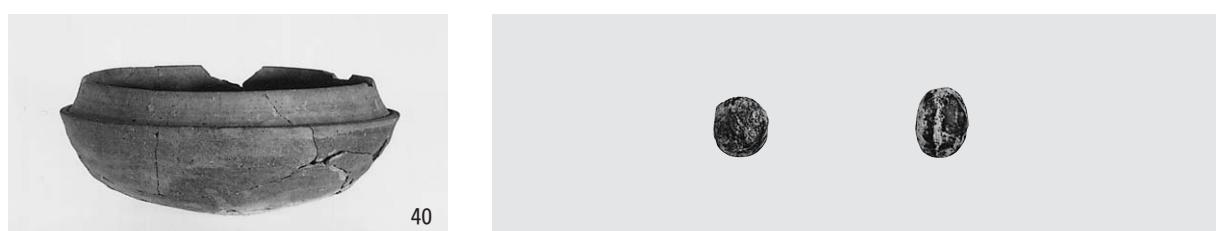
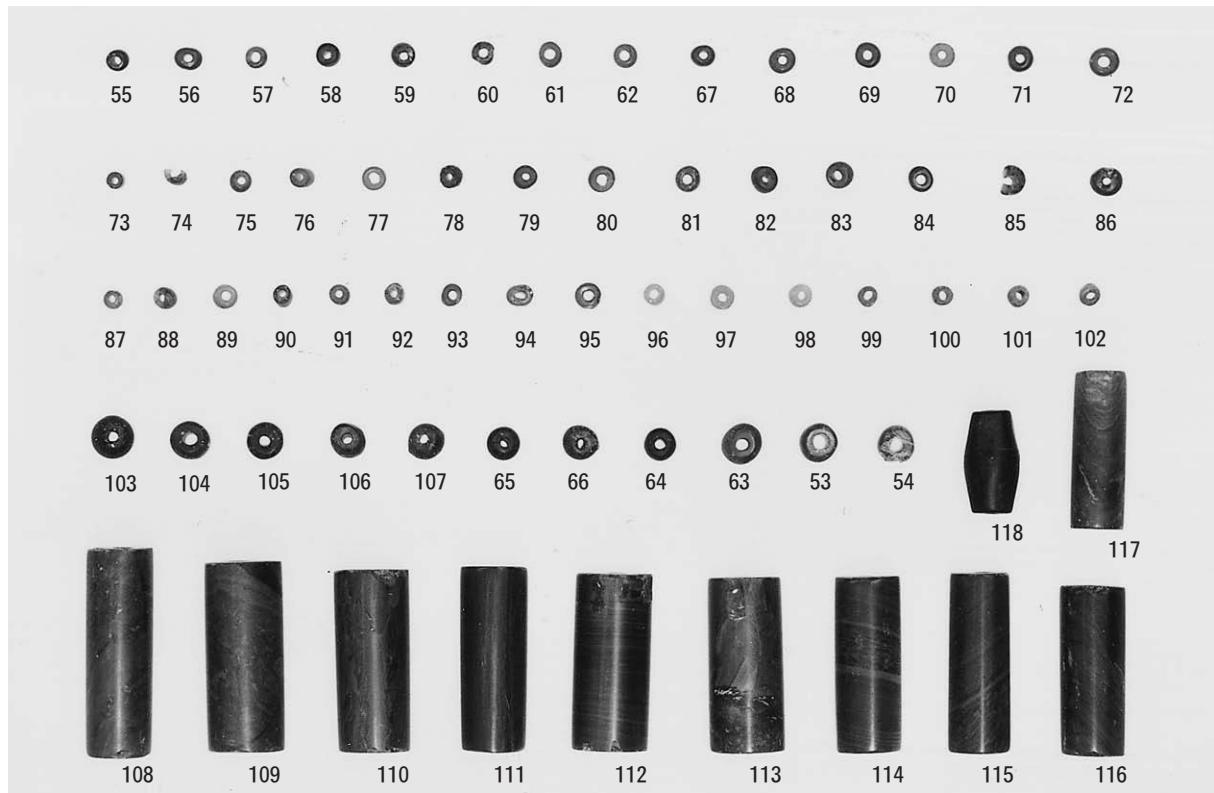


32



23

遺物 1:3 ただし、6は 1:4



遺物 50・55～116と植物種子は 1:1、39・46は 1:3 51・52は任意

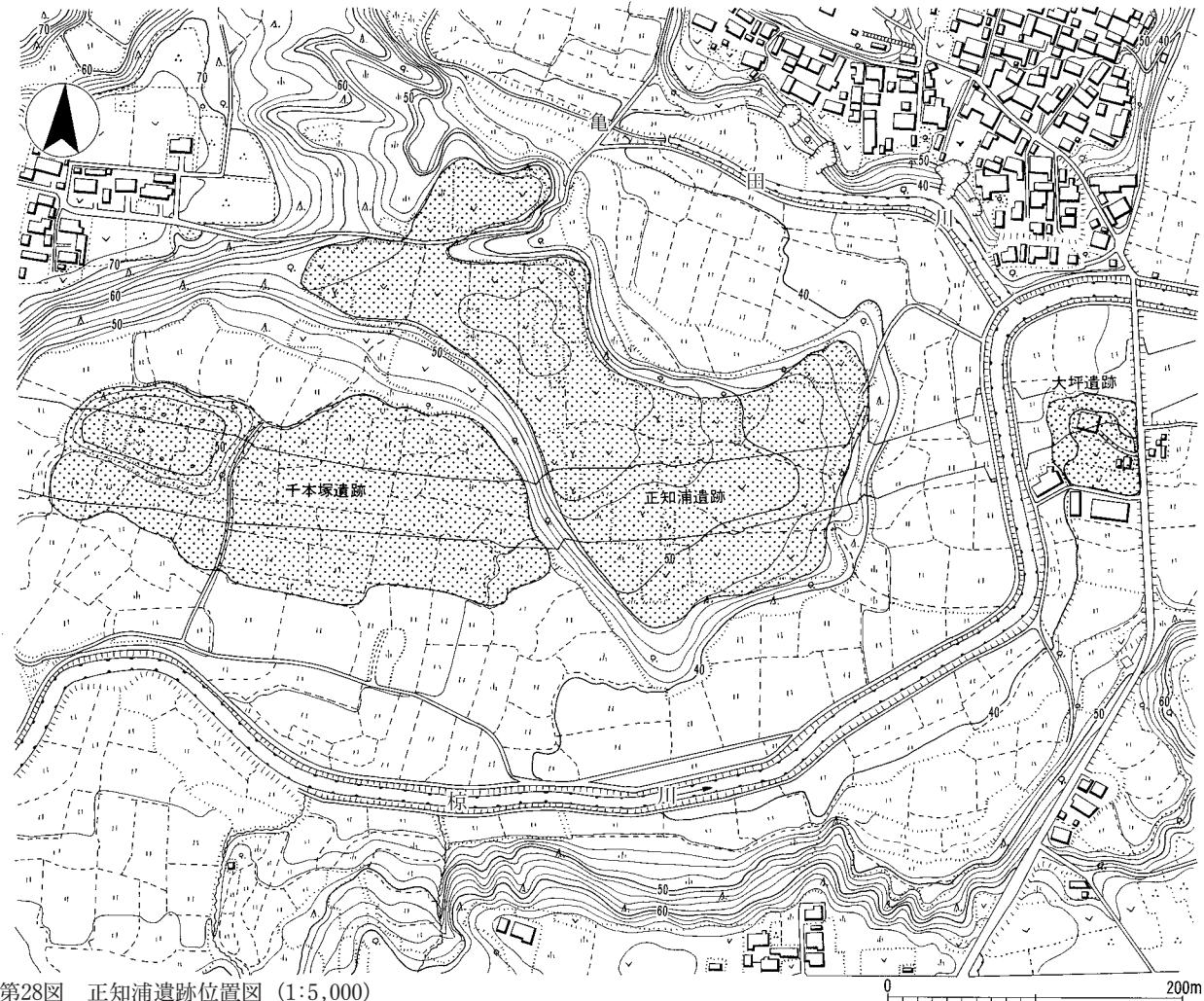
V 正知浦古墳群・正知浦遺跡

1 位置と地形

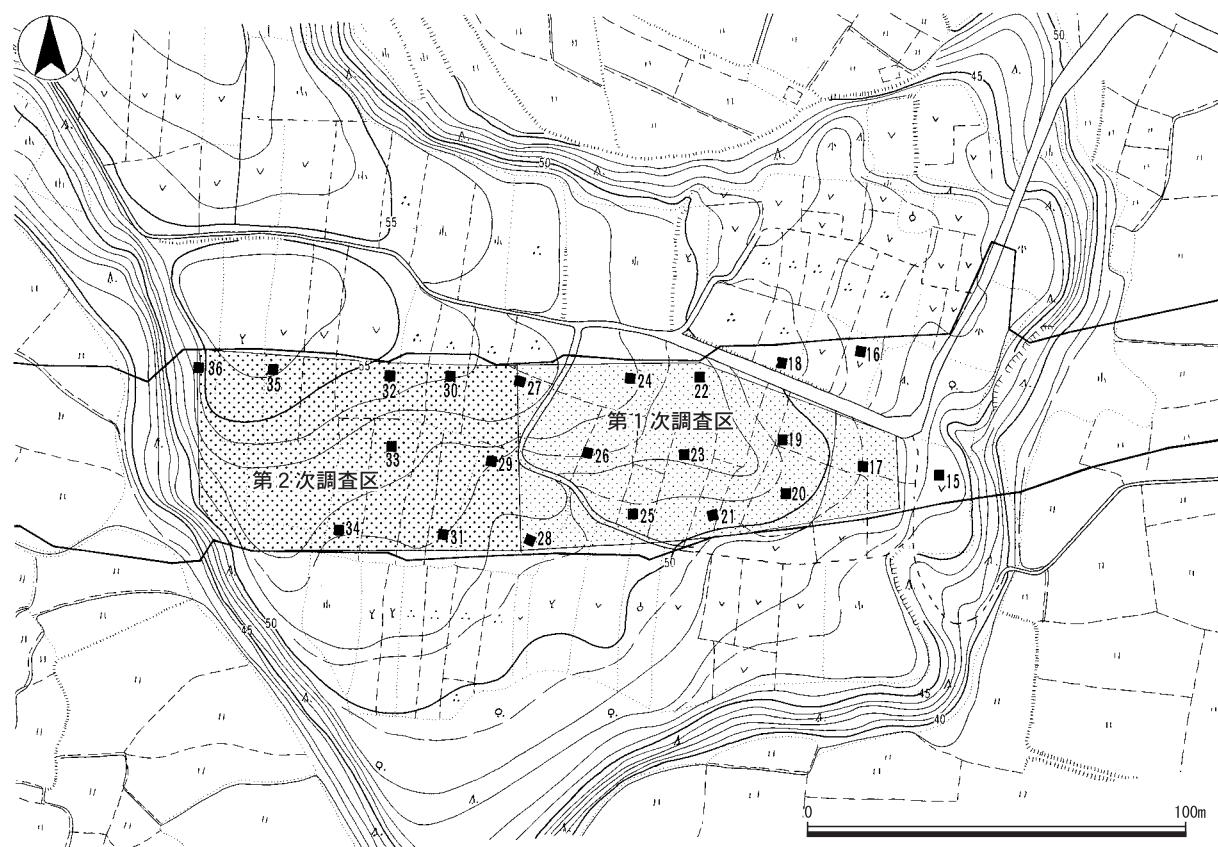
正知浦遺跡は、亀山市の市街地が発達した鈴鹿川北岸の高位段丘面の背後に広がる亀山丘陵の南端に位置する。この丘陵は、椿世川・亀田川・椋川などの小河川によって開析が進み、丘陵が樹枝状に発達している。正知浦遺跡は、椋川と亀田川にはさまれた丘陵先端部に立地する。遺跡は、西方丘陵より一段低い丘陵上にあり、先端部で大きく広がっている。丘陵上面は、北西部で標高56mと最も高く、南東方向へ緩かに傾斜し、丘陵先端部で標高46mである。遺跡の前面には、椋川によって形成された谷底平野が広がり、西側は大きく弯曲して平野が入りこんでいる。遺跡と水田面との比高は、約10mほどである。この谷

間には小さな独立丘陵状をなす高まりがあり、堅穴住居と堀建柱建物で構成される飛鳥時代から奈良時代の千本塚遺跡が所在する。

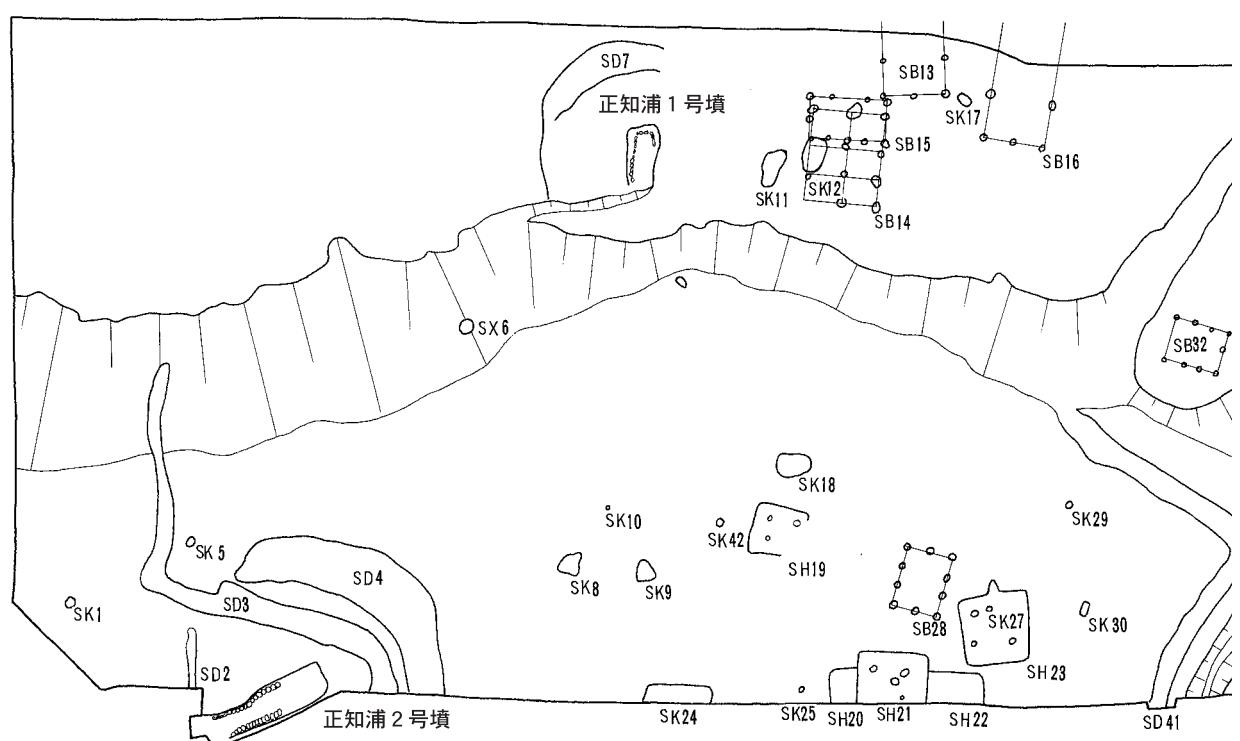
正知浦遺跡が立地する丘陵上は、開田され畠として利用されている。丘陵上には、土師器・須恵器片が少量ではあるが、丘陵ほぼ全域の約40,000m²にわたって散布している。今回、発掘調査を実施したのは、遺跡の南部分で約8,200m²である。バイパス路線にあたる東部分約(4,000m²)を第1次調査として昭和62年5月7日から7月30日まで行った。引き続き、西部分(4,200m²)を第2次調査として8月17日に着手し、翌年1月14日に調査を終了した。（駒田利治）



第28図 正知浦遺跡位置図 (1:5,000)



第29図 正知浦遺跡地形図・調査区域図 (1:2,000)



第30図 正知浦古墳群・正知浦遺跡遺構配置図

2 正知浦古墳群

1 正知浦1号墳

(1) 墳丘及び外部施設（第31図）

正知浦遺跡第2次調査中、調査区の中央北部で石室の一部が確認され、古墳と認識された。

従って調査前の墳丘は全く認められなかった。地形的には北から南に下る緩斜面上に位置し、旧墳丘の南端はやや急な崖下となる。主体部を中心に周溝の有無を精査するが、上面では明確な遺構が確認されなかつた。そこでサブトレンチを2箇所設定して掘り下げた結果、土層断面で周溝と考えられる落込みを確認し、その落込みを追う形で周溝（SD7）を検出した。現存する周溝は幅2.5m、検出面より最大0.3mの深さを測る。東側の周溝は後世の掘削により確認されるに至らず、また、南側は崖下のため周溝は元来存在しなかつたものと考えられる。従って墳丘の形状及び正確な規模は不明と言わざるを得ないが、主体部を中心に現存周溝の形状から径12m前後の円墳になるものと推察される。

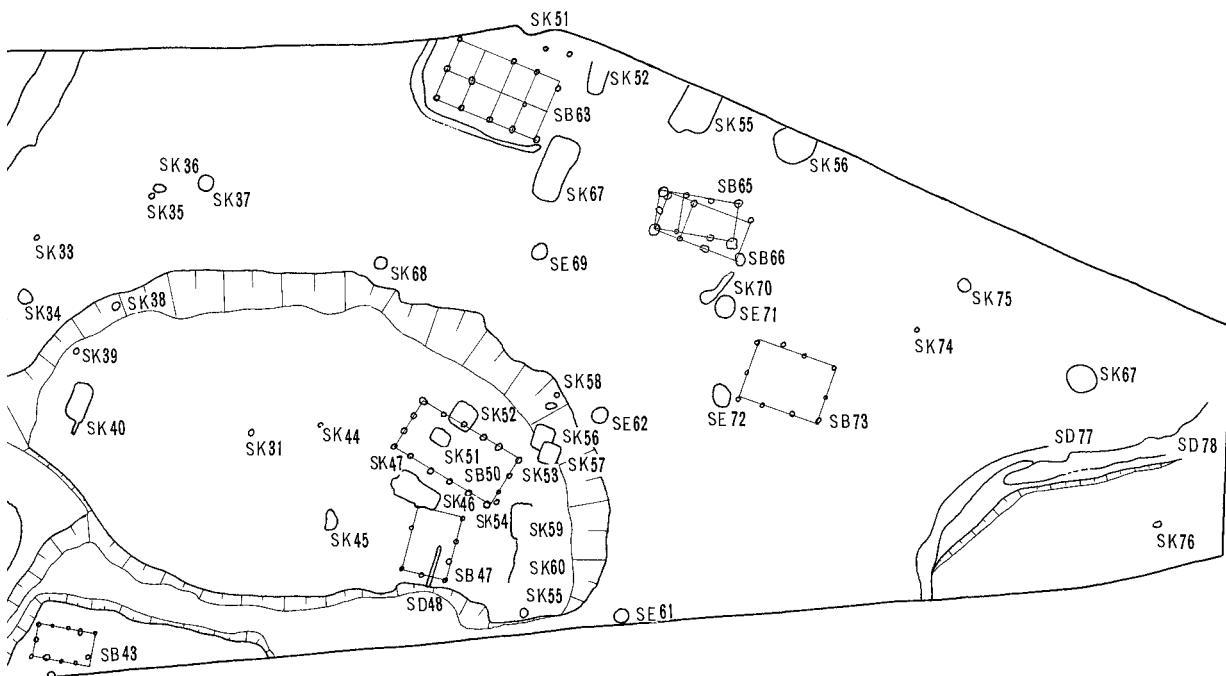
(2) 内部施設（第32図）

正知浦1号墳の内部施設は南に開口する横穴式石室である。主軸はN11°Eで、やや西に振る。奥壁は幅0.9mで、高さ0.6mの一枚石を用いている。側壁は最大2段（高さ0.4m）の残存で、幅40～50cmの自然石を用い、内面に面を合わせて積んでいる。床面は硬く突き固め、南にやや傾斜する。東側の側壁の石材は奥壁に近い3個を除き殆ど抜き取られていたが、現存で長さ3.3mを測る。石室はいわゆる「胴張り」が見られ、最大1.1mの幅で、南側に抜取り痕と考えられるピットを検出するが、石室規模から推測してこれ以上伸びているとは考えにくく、長さ3.6m前後の单室の石室になるものと考えられる。

(3) 遺物

A 出土状況（第32図）

奥壁に近い北部に石室石材の一部と考えられる石が数個散乱しており、遺物の出土状況から推察して盗掘が行われたものと判断する。奥壁のすぐ前方に平瓶が2個（6・7）床面直上に置かれてあり、唯



一、原位置をほぼ保っている遺物と考えられた。その他、須恵器の破片（2・5）、耳環（8～10）、鉄鏃（12・13）、石斧（11）などが出土しているが、総じて散乱しており、床面から浮いた出土状況であることから、攪乱後、二次的に移動したものと考えられる。

B 石室掘形内遺物（第33図）

須恵器蓋（1） 天井部を欠くが、推定口径14.0cm、器高3.6cm。外面は天井部に近い部分がヘラケズリ、その他ロクロナデ成形で、口縁端部は下方に細く、終わる。

須恵器杯（3・4） 口径は3が11.6cm、4が12.4cm、器高が共に2.8cm前後で、偏平な杯身である。口縁端部は共に細く終わり、3はやや内傾する。内外面共、全面ロクロナデ成形。

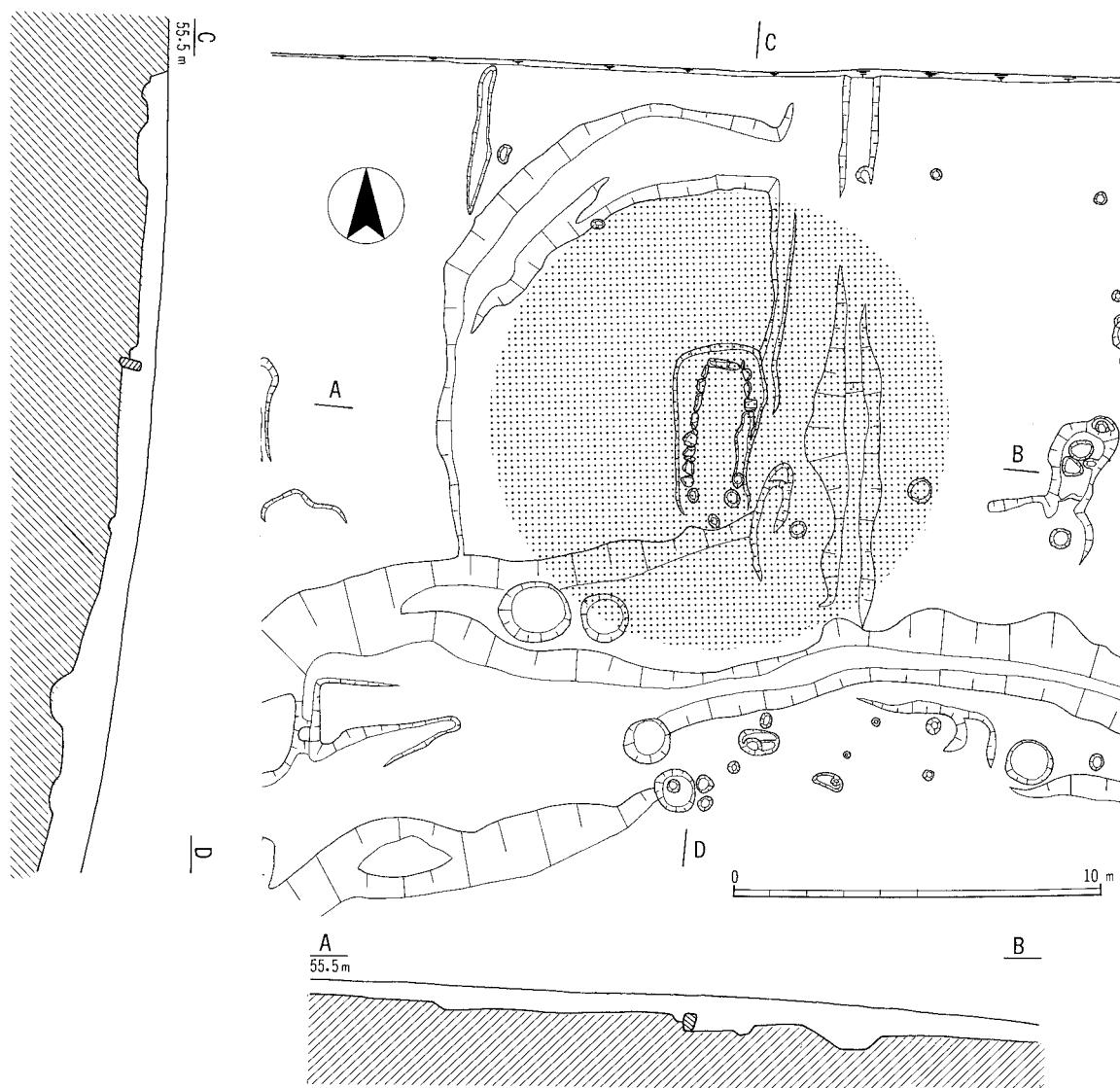
C 石室内遺物（第33図）

須恵器杯（2） 破片ではあるが、推定口径12.4cm、受部は水平に張り出し、口縁端部は上方に伸びて丸くおさまる。胎土は緻密で淡灰色を呈する。

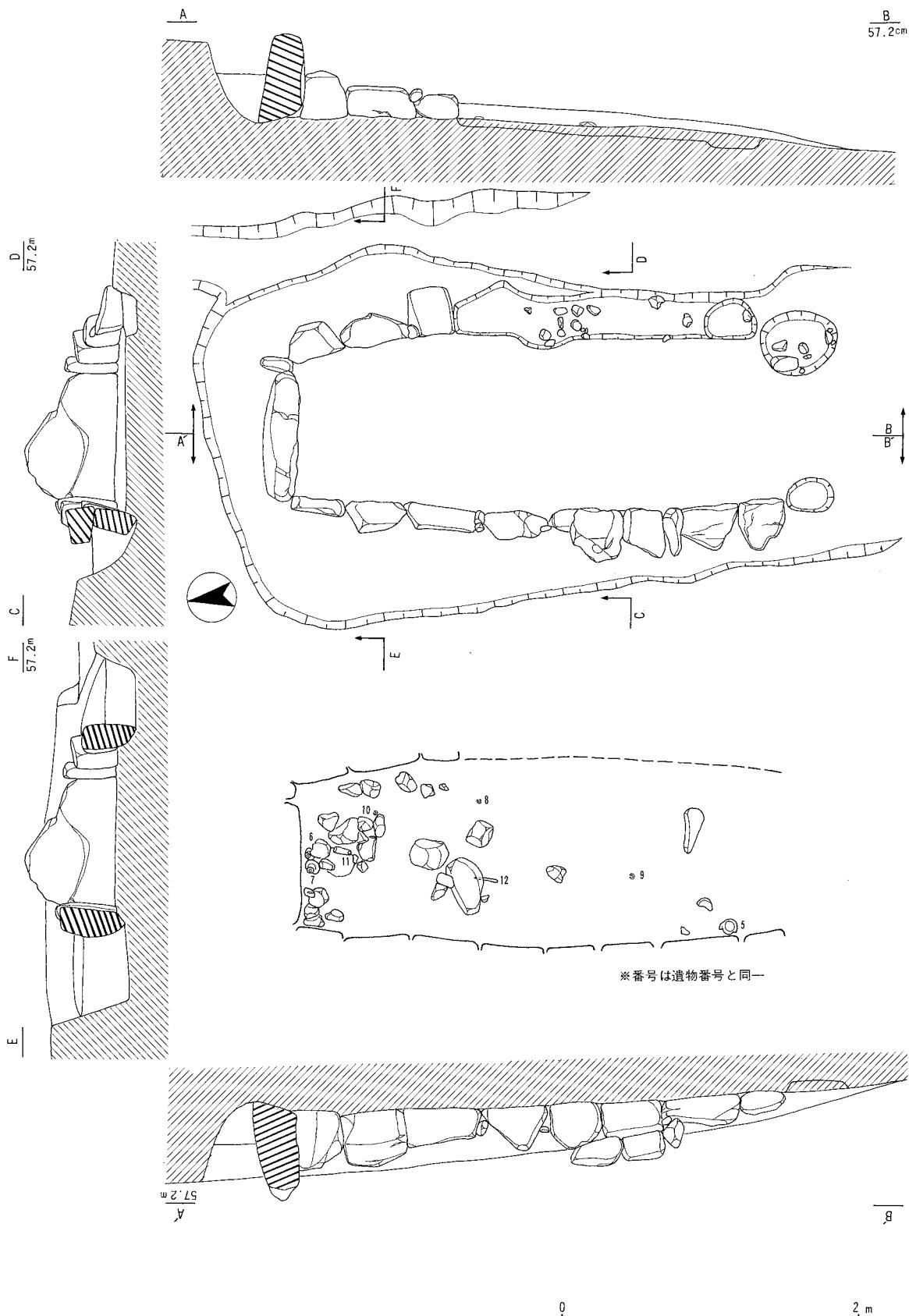
須恵器壺（5） 短頸壺あるいは長頸壺の底部と考えられ、胴径は15cm前後になる。残存の範囲内で底部外面は総じてヘラケズリ成形、底には縦線、横線を組み合わせたヘラ記号が見られる。

須恵器平壺（6・7） 唯一完形の小形平壺で体部断面形は6が四角形、7が楕円形を呈し、6がやや大振りである。共に体部中央に稜を持ち、その下方は丁寧なヘラケズリ成形されている。注口部は口縁でやや開き、ヨコナデ成形されている。

耳環（8～10） 金環（8・9）と銀環（10）の2種が出土した。金環は銅の地金に金を施しており、



第31図 正知浦 1号墳実測図（1:200）



第32図 正知浦1号墳石室実測図 (1:40)

保存状態がよく輝きを失っていない。長径2.4cm、短径2.2cmで法量的に共通しており、対をなすものであろう。銀環は胴地に銀を施しているが、所々剥げており、輝きを失っている。金環よりは大振りで、長径2.7cm、短径2.4cmを計測し、断面は橢円形を呈す。

石斧 (11) 砂岩製の大型蛤刃石斧で、全面研磨によって造り出している。全長11.2cm、最大幅4.7cmで、刃部は刃こぼれがみられる。

鉄鎌 (12、13) 12は柳葉式で、鎌身断面は両丸形、頸部断面は矩形を呈する。笠被は明確ではなく、全長11.4cmを測る。13は先端を欠くが、長頸片刃箭式鉄鎌と思われ、下方に刺突状の笠被が見られる。推定

全長14cm前後。

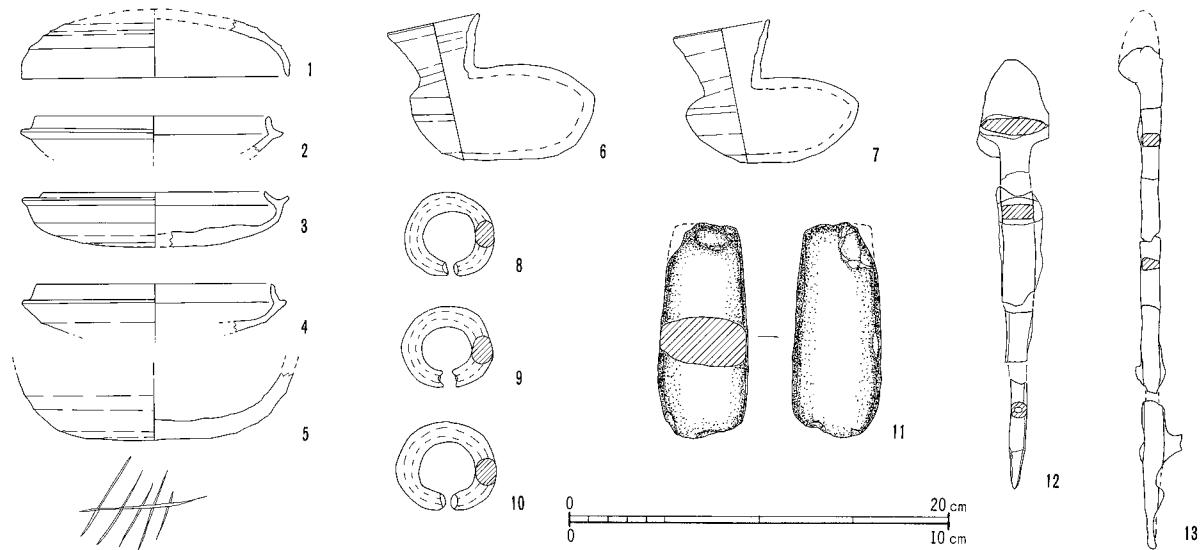
D 周溝内遺物 (第34図)

須恵器蓋 (14) やや偏平な杯蓋で体部はロクロナデ成形、口縁端部ヨコナデ成形で、やや開きぎみに細く終わる。推定口径12.5cm。

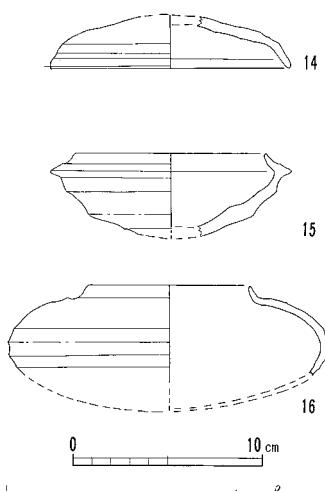
須恵器杯 (15) 受部と口縁端部の境は明確ではなく、ややきつく内傾する。底部未調整で、推定口径9.9cm。

須恵器短頸壺 (16) 底部を欠くが、胴部は橢円形状でやや偏平である。断面は全体に薄く、口縁端部はやや内傾しながら細く終わる。

(浅尾悟)



第33図 正知浦1号墳石室遺物実測図 (1:4、ただし 8~10, 12, 13は 1:2)



第34図 正知浦1号墳周溝遺物実測図 (1:4)

2 正知浦2号墳

(1) 墳丘及び外部施設（第35図）

調査区の西南隅で検出された。調査前、調査区内では墳丘等の高まりは全く認められなかつたが、南の調査区外に墳丘の一部と考えられる高まりが見られた。これは周知の亀田古墳（市遺跡番号113）と考えられるが、ここでは調査時の命名に従い、「正知浦2号墳」と名付けておく。調査区外の墳丘は東西5.5m、南北5.0m、高さは1.0mを計測し、形状は橢円形を呈しており、断ち割り調査は実施していないが、明らかに墳丘の一部と考えられる。葺石等の外部施設は全く見られない。

S D 4 は主体部を中心に弧を描いており、正知浦2号墳の周溝と考えられる。周溝は最大幅4.4m、最深部は遺構面より0.6mを計測する。周溝は東側でやや直線的に南に回り、西側では切れるが、主体部を中心には残存の墳丘を含む推定墳丘は径20m前後の円墳になるものと考えられる。

(2) 内部主体（第36図）

検出状況 当初、調査区南端で方形の土坑の一部（石室掘形）で検出され、掘り下げていくと30～50cmの石材が現れ、石室であることが確認されるに至った。検出された石室は西に開口する左片袖の横穴式石室である。

石室掘形 石室掘形は玄室部で東西5.7m、南北が東端で3.3m、西端で2.2m、羨道部が東西3.6m以上、南北2.2mを計測し、西には幅1.5mの墓道と考えられる窪みが続いている。

石室 玄室は盗掘と考えられる搅乱を受け、玄室の東半分は石材が全部抜き取られていた。埋土中には盗掘後投げ込んだと考えられる40～50cm程の石材が十数個混在していた。搅乱層中には山茶椀片を上限とする遺物が混入しており、鎌倉時代に盗掘を受けた可能性がある。また、上層では中世後半の土師器小皿の完形品も出土しており、ある程度の墳丘の残存と、信仰の対象にされていたことも考えられる。

玄室の西半分は北側で2段、南側で5段の石組が残存しており、基底部には60～70cmの比較的大きな石材を用い、2段目よりは20～40cmのやや小さい石材を積み重ねている。内面はやや内傾し、平らな面を揃

えているが、特に加工した痕跡はない。床面は径2～3cmの小石を敷き詰めており、また、棺台と思われる石も床面直上に置かれていたが、原位置はずれているものと判断した。袖石は幅50cm、高さ65cmの自然石を用いている。玄室の東側南部で抜取り痕と考えられるピットを検出し、玄室の寸法は東西4.8m、南北1.65m前後になるものと考えられる。

また、玄室にはいわゆる「胴張り」が見られる。

羨道は床面より高い位置から石積みが見られ、南側で1段、北側で4段、残存している。羨道入口附近に石材が多数集積しており、閉塞石とも考えたが、床面とかなり比高差があり、羨道側石の落下石と判断した。床面は凹面状を成し、そのまま外部へ続いているが、調査区の範囲では墓道が形成されていた。羨道は現状で長さ3.8m、西半分からやや開く形状をなすため、玄門付近で幅0.9m、羨道入口付近で幅1.6m前後を計測する。

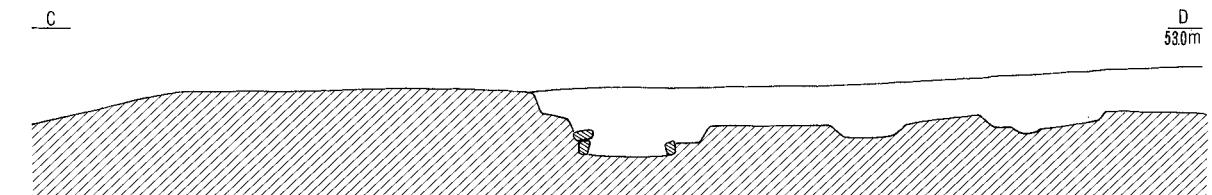
石室に使用された石材は花崗岩質を主体とし、他に玄武岩質が混在している。何れも付近の河川敷で容易に採集できる自然石である。

石室の築造方法は、先ず地山を掘り込んで石室プランに沿った土坑を掘り、次に石材を積み上げ、裏込めをして、天井石を置いて、盛土を施している。

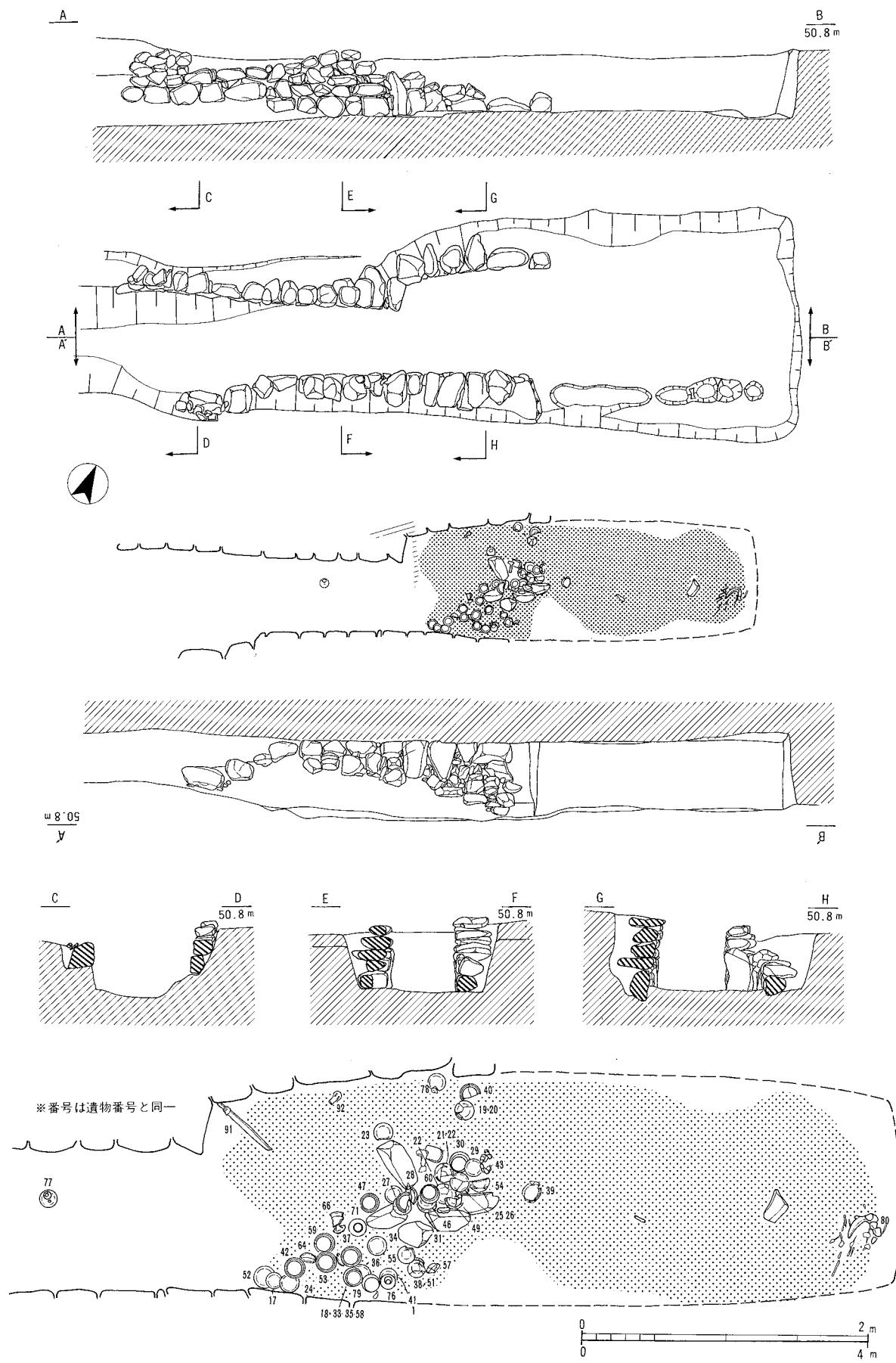
(3) 遺物

A 石室内出土遺物（第37・38図）

出土状況 玄室の東半分は完全に搅乱されていたため、原位置を保つものは皆無である。この範囲では破壊された須恵器片と鉄鏃の他、東南隅で鋤先が出土したに留まる。玄室の西半分では須恵器を中心にかなりの遺物の出土をみた。追葬等により二次的な移動はあるものの、ほぼ原位置を保っているものと考えられ、出土遺物の大半は完形品である。遺物は幅80cm、長さ150cmの範囲に集中し、中でも、須恵器杯類が大半を占める。杯の身と蓋が表裏セットで組み合わされているのは少なく、多くの場合、蓋を裏返し、身と蓋とを上下セットにして置かれていた。また、袖石付近では鉄刀が置かれていたが、やや浮いた状態で出土した。羨道部では脚部を欠いた高杯が3点とほぼ完形の平瓶（77）が1点出土した。



第35図 正知浦2号墳実測図 (1:200)



第36図 正知浦2号墳石室測図(1:80)・遺物出土状況(1:40)

(a) 土器類

須恵器杯は形態、胎土、成形技法、色調によりA～G種に分類する。

杯A (17～24) 杯蓋は稜が僅かであるが明瞭に見られるのが特徴である。天井部は全体の約2/3までヘラケズリされ、内面はロクロナデ、粘土紐巻き上げ痕が明瞭である。口縁部は僅かに弯曲し、口縁端部は内傾する明瞭な段を有する。口径は12.8～13.4cm、器高は3.8～4.5cmを計測する。胎土は1～2mmの長石粒を含み、淡青灰色を呈する。これとセットを成す杯身は胎土、焼成、色調が全く同一である。受部は、三角形状を呈してほぼ平行にのびている。立ち上がりはやや内傾しながら直線的に伸び、口縁端部は内面に浅い段を持つ。底部は全体の約2/3がヘラケズリ成形されている。口径は11.4～11.5cm、器高は3.8～4.2cmを計測する。

杯B (25～30) 杯Aと器形、法量、胎土、焼成、成形技法は全く同一であるが、ただ色調のみ相違する一群である。色調は光沢を持つ黒色を呈する。

杯C (31～40) 杯蓋の稜は完全に消失しているが、36などのように天井部のカーブから僅かに稜の名残りをとどめているものもある。天井部外面は丸みを帯び、約1/2がヘラケズリ成形、口縁端部は下方に細く終わる。35は口縁端部外面に細い刷毛目を施している。口径14.0～14.4cm、器高4.2～5.0cmで、1～4mmの長石粒を少量含み、焼成は良好、セピア色を呈する。これとセットをなす杯身は胎土、焼成、色調を同じくする。底部はやや丸みを帯び、約1/2がヘラケズリ成形、受部は比較的長く、やや上向く。立ち上がり部分は長く、内傾して細く終わる。40には渦巻状の籠記号が見られる。口径12.8cm～13.2cm、器高3.9～5.0cmを計測する。

杯D (41～45) 器形、成形技法は杯Cに類似するが、胎土は砂粒が少なく、焼成はあまく、暗褐灰色を呈する。杯蓋は天井部の約1/2がヘラケズリ成形、僅かに稜を意識したカーブが見られ、やや角張る。杯身は底部の約1/2がヘラケズリ成形され、45には窪みが見られる。

杯E (46～49) 杯蓋は粘土巻き上げ痕が明瞭で、天井部は肥厚し、1/3は未調整、口縁端部は内側に面を有する。胎土は1～5mmの砂粒を少量含み、焼成

はあまく、白色を呈する。口径13.8cm、器高4.3cmを計測する、これとセットをなす杯身は胎土、焼成、色調を同じくする。底部は約1/2が未調整、受部はやや短く、立ち上がり部分は細く、内傾して細く終わる。口径12.0～13.4cm、器高3.6cm～4.3cmを計測する。

杯F (50～53) 杯蓋は小振りで、口径は12.0～13.0cm、器高4.0cm前後を測り、天井部はより丸みを帯び、約1/3は未調整である。口縁部は下方に屈曲して端部は細く終わる。杯身は口径11.5～12.0cm器高4.5cmで、体部は粘土紐巻き上げ痕が明瞭で、凸凹している。底部は約1/2が未調整である。受部は細く、頸部がひき締まり、立ち上がりは細く、内傾しながら端部で上方に上向き細く終わる。蓋、身共、胎土は1～5mmの砂粒を少量含み、焼成は良好灰白色を呈する。

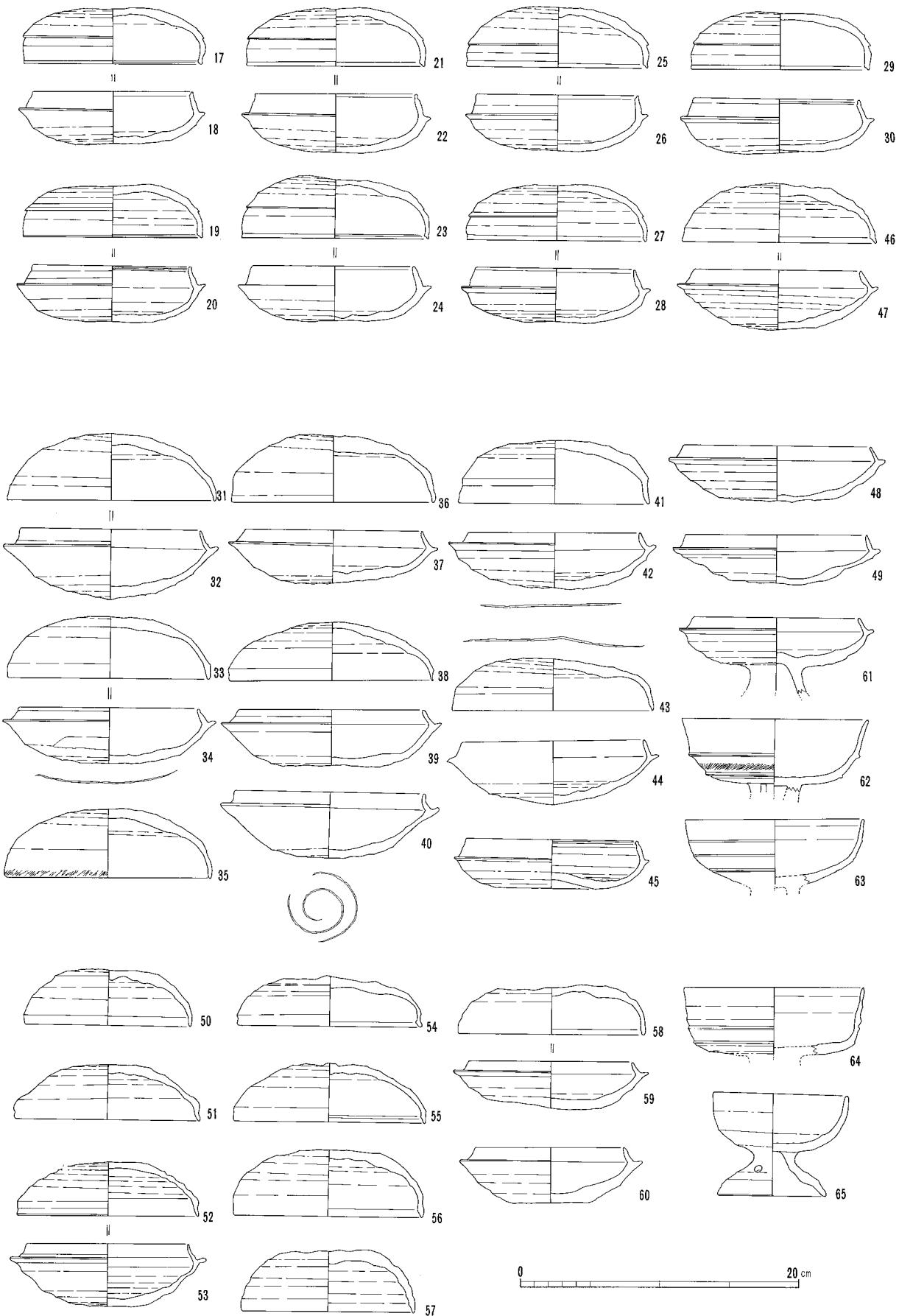
杯G (54～60) 杯蓋は形態が杯Cに類似するが、口縁端部内面に角度のある面を有するのが特徴である。天井部は約1/3が未調整、口径は13.2～14.0cm、器高3.5～4.7cmを測る。杯身は口径10.6～11.8cm、器高3.5～4.0cmと小振りで、立ち上がりは内傾の角度が緩やかで細く終わる。底部は約1/3が未調整で、直線的である。蓋、身共、胎土は1～2mmの砂粒を少量含み、焼成は良好、灰白色を呈する。

高杯総数8個体が出土しているが、全て形態が異なる。便宜的に形態の類似するものでA～C種に分類する。

高杯A (61) 有蓋高杯で、透かしは見られず、第60図429と同型の短脚の高杯になるものと考えられる。形態、手法は杯D種の杯身と同じである。口径13.0cm、器高は杯部分で3.4cmを測る。

高杯B (62～64、67・68) 無蓋の透かしを有する長脚の高杯である。杯部外面は何れも2ないし3段の突带上あるは沈線状の稜を有する。62は2つの稜の間に櫛状工具による文様が見られる。ロクロナデ成形ではあるが、64は底部にヘラケズリを施している。体形は全体に丸みを帯び、口縁部は直線的に立ち上がり、細く終わる。脚部は細くシャープに仕上げられており、長方形に2段3方透かしを持つ。67にはカキ目が見られる。端部は外面に面を持つが、67には間に沈線を有する。

高杯C (65) 無蓋の短脚の高杯で、脚部に3つの円形の透かしを持つのが特徴である。杯部は全体に

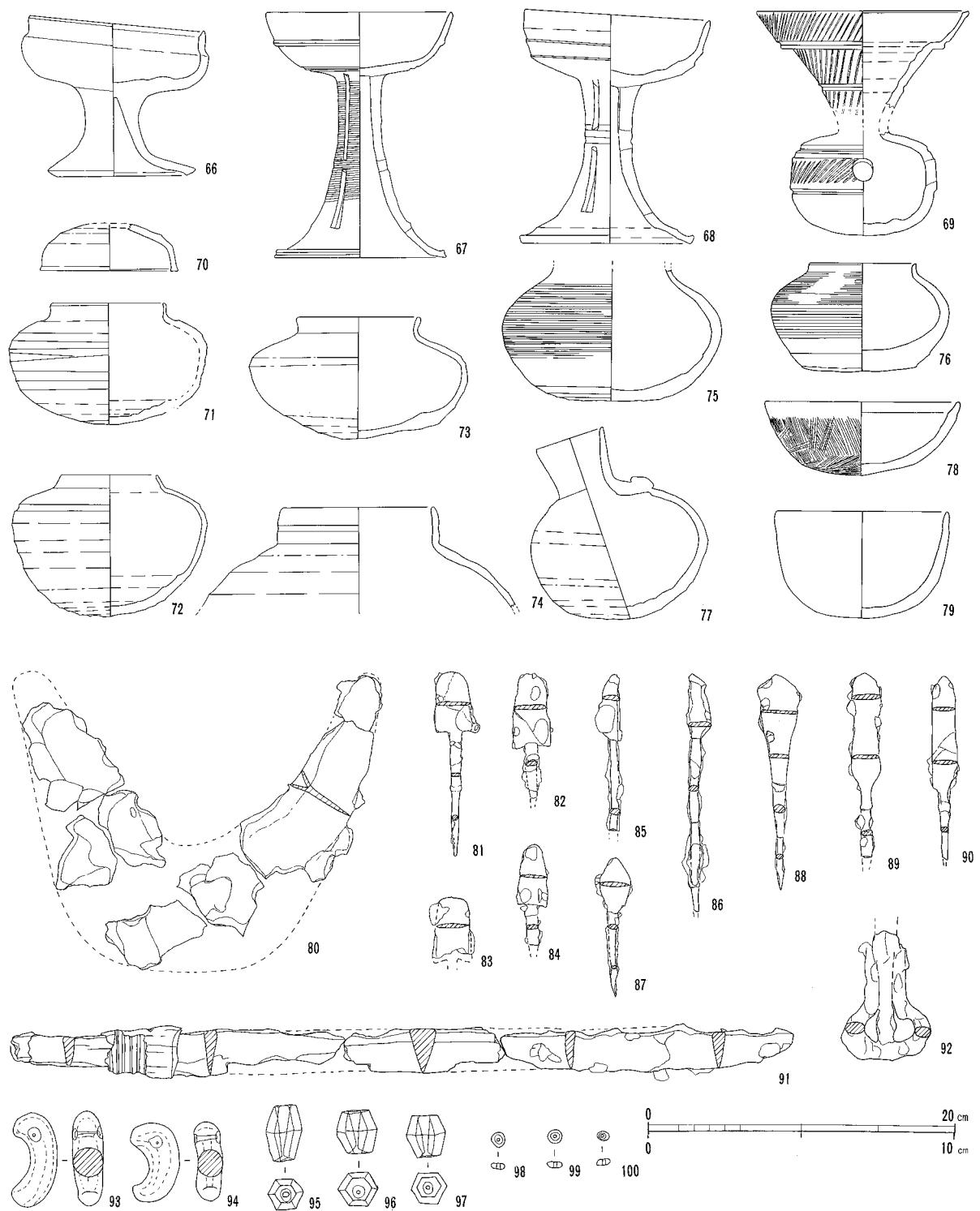


第37図 正知浦2号墳石室遺物実測図1 (1:4)

丸みを帯び、口縁端部は上方に細く終わる。脚部は頸部が細く、端部は「ハ」の字に開きながら丸く終わる。胎土は、緻密で、銀灰色を呈するが、2号墳出土土器中唯一、瓦質の土器である。

竈（69） 頸基部を欠くが、同一個体と判断する。
口頸部はラッパ状に開くが、胴径9.6cmに比べて口径

が13.8cmとやや大きい。口頸部は受け口状の口縁の形態で、段上と頸部中央部に2条の沈線を持ち、3段にわたり籠状工具による斜状の条痕を有する。口縁端部は上方にやや内傾する面を持つ。体部は偏平な八角形状を呈し、2条の沈線の間に斜状の条痕を配する。注口部は出張りはなく、ほぼ円形に穿孔され



第38図 正知浦2号墳石室遺物実測図2 (1:4、93~100は1:2)

ている。

脚付短頸壺 (66) 短頸壺は口径が広く、かつ偏平で、一見して杯身に類似し、端部は内面に面を持つ。全体にロクロナデ成形で、やや異質である。この形態の杯・壺類は鈴鹿市岸岡山古窯跡で確認されており、この窯跡からの製品であろう。

短頸壺 (70~76) 6個体を共形態を異にする。71は全体に丸く、体部の大半を回転ヘラケズリ成形によっている。口縁端部は上方に直線的に立ち上がる。これとセットをなす蓋70は天井部の1/2をヘラケズリ成形、口縁端部は肥厚し、面を持つ。72は底部がやや細くなり、下方1/3がヘラケズリ成形となる。肩は凹線的なへこみが有り、文様化している。口縁端部は内傾して細く終わる。73は肩が張ってやや偏平で、底部1/3はヘラケズリ成形、口縁部はやや外反して細く終わる。74は大型の短頸壺で、全形を知り得ないが、胴径は22cm前後になるとの考えられる。口縁部は直線的に立ち上がり細く終わる。75と76は大小の差はあるが、体形と成形技法が類似する。共に頸部から肩部にかけてカキ目を施し、底部は75がヘラケズリ、76が未調整である。76の口縁部は短く、上方に立ち上がり細く終わる。

須恵器平瓶 (77) 羨道部からほぼ完形で出土した。体部はほぼ円形で、底部の約1/3はヘラケズリ成形、上部に鉗状の飾りがつく。注口部はやや開きぎみで直線的に立ち上がり、端部は細く終わる。

土師器杯 (78、79) 器高の長短の2個体が出土している。78は体部は丸く、全面に刷毛目成形され、口縁はヨコナデで端部内面に面を持つ。79は底部は丸みを帯びるが、口縁は直線的に立ち上がり細く終わる。摩滅にて成形技法は不明。

(b) 鉄製品

鉄製鋤先 (80) 鉄刀を除く鉄製品は全て玄室東半分の搅乱部分から出土しており、原位置を知り得ないが、奥壁に近い位置に置かれていたもの思われる。鋤先は奥壁に近い位置で発見され、原位置は保っていないが、発見時は原形をよく留めていた。鋤先は両端がやや開くU字形を呈し、両端幅22cm、長さ19cmを測り、断面形はY字形を呈する。

鉄鎌 (81~90) 鎌身の形態から5種類に分類される。81~84は短頸柳葉式鉄鎌で84は先端が尖るが他

は丸い。81は刺籠被が見られる。85、86は長頸片刃箭式鉄鎌で、鎌身断面は片切刃状を呈する。87は短頸で鎌身が現況では菱形を呈するが、本来は逆刺がある長三角形式の可能性もある。88は鎌身が五角形状を呈し、籠被が明確でない。89、90は短頸の柳葉式の鉄鎌で、刀子状を呈するが逆刺を有する可能性もある。共に刺籠被を有する。

鉄刀 (91) 玄門袖口付近で刀身部を玄室に向け、床面よりやや浮いた状態で出土した。全長51.0cmの平棟平造の直刀である。刀身部の長さ39.6cm、鋒と関近くの棟幅0.8cm、中央部で幅2.9cm、棟幅1.7cmと中央部の棟幅が広い。鍔口部分で木質を残し、柄部には樹皮と思われる巻が現存で6巻見られる。

馬具 (92) 鉄製の鉸具で輪金の頭部が丸く膨らむタイプである。地金はやや偏平な橢円形を呈し、刺金は頸部で鉢によって固定されているようである。

(c) 玉類

勾玉 (93、94) いずれも瑪瑙製の勾玉で、93は長さ3.1cm、幅1.0cm、94は長さ2.6cm、幅0.8cmで穿孔方向は一方向である。褐色を呈する。

切子玉 (95~97) いずれも水晶製で、6面カットしている。長さは95が1.9cm、幅1.1cm、96と97は長さが共に1.4cm、幅1.3cmと1.4cm。穿孔方向は一方向である。

ガラス小玉 (98~100) ガラス製小玉で、長さ0.2cm、幅0.5cm、マリンブルー色を呈する。

B 周溝内出土遺物（第39図）

須恵器 (101、102) 101は杯身で底部を欠くが、推定口径14.5cm前後、底部はヘラケズリ、受部は短く、端部は内傾して細く終わる。102は壺で、体部全面にカキ目が見られ、底部は未調整。

土師器 (103、104) 103は蓋で、宝珠つまみを有し、全体にヘラケズリ成形で、丁寧な仕上げである。104は甕で推定口径16.8cm、口縁部は「く」の字に外反し、端部は外面に面を有する。

（浅尾悟）

3 小 結

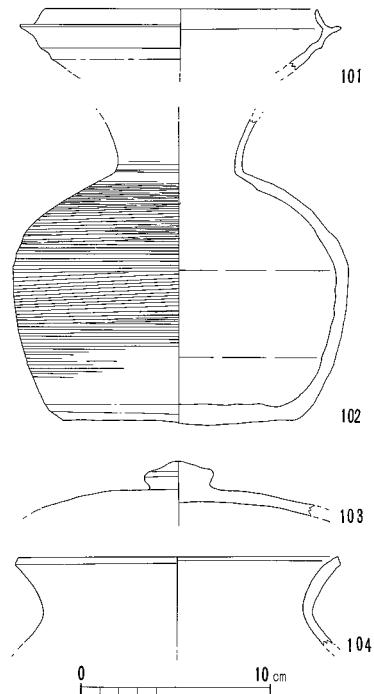
(1) 正知浦 1号墳について

正知浦 1号墳は横穴式石室を内部施設とする推定径12m前後の円墳である。石室は南に開口し、石室の基底部の一部が残存するのみではあるが、最大幅1.1m、長さ3.3m以上の胴張りを有する单室の横穴式石室である。石室内出土遺物は平瓶2個を除き原位置を保っていないが、平瓶は田辺編年のTK209からTK217形式の間に比定される。また、掘形内から出土した須恵器杯蓋はすでに稜を留めず、杯身は器高矮小化し、口縁端部は立ち上がりが短く内傾化することからTK209形式に比定される。これは周溝内出土須恵器とも一致する。従って正知浦 1号墳の築造時期をTK209形式を下限とするが、内部搅乱を受けて追葬を是認するものは認められない。

(2) 正知浦 2号墳について

正知浦 2号墳もまた横穴式石室を内部施設とする径約20m前後の円墳である。石室は玄室の東半分を欠くが、全長8.6m前後の左片袖の横穴式石室であり、玄室には胴張りが見られる。羨道は石墨の底を掘り抜いて通路とし、そのまま墓道につなげている。

出土土器は須恵器杯類を中心に多数出土した。杯A類とB類は色調を異にする以外は形態、成形技法、



第39図 正知浦 2号墳周溝遺物実測図 (1:4)

胎土を同じくし、同一技術集団による同一生産地のものある。杯身は立ち上がりがやや内傾化し、口縁端部は、細く丸く仕上げられている。杯蓋はやや形骸化されていると言え、明瞭な稜を持ち、口縁端部は明確な段を持つ。身蓋共、器高が低く、やや偏平な感を与え、1/2以上にヘラケズリ成形が見られることからTK10形式に併行されよう。杯C類と杯D類もまた、色調を異にする以外は形態、成形技法、胎土を同じくする。杯身の立ち上がりは短く、底部は丸い。杯身は体部の稜はほとんど消え、口縁端部は段を有さない。天井部・底部のヘラケズリも1/3～1/2に挟まることからTK43形式に併行する。杯E～Gは法量的には杯C・Dに比べやや小型化するが、器形的にはさほど変化は無く、天井部及び底部の成形が箇切り未調整になることからTK209形式に併行されよう。

ここでは杯A・B類と杯C・D類はその形態と成形技法において同一時空間における形式差及び時期差として捉えた。しかし、この形態の差は産地の相違によるものであって時期差によるものでは無いという見解が出されている⁽¹⁾。それによると、須恵器杯を在地系と外来系（尾張、美濃系）に大別し、それぞれの器高と口径の法量の分布の傾向を考察して、そのまとまりを地域差として捉えている。しかし、窯跡群の調査や胎土分析が十分為されていない現状では「在地系」と「外来系」を厳密に区別することは困難である。例えば「在地系」と呼ばれる一群であっても、陶邑系統を引く鈴鹿市徳居古窯跡群や在地系の鈴鹿市岸岡古窯跡群のごとく、同一地域内であっても別系統の窯群跡が存在することが知られる。またサンプルの資料が全て横穴式石室内出土須恵器であり、当然ながら追葬の事実が予想され、形態、胎土等が異なる2タイプの須恵器を同時期だと断じるには無理がある。確かに正知浦 2号墳出土の杯A・B類と杯C・D類は胎土、焼成からみて、明かに産地の異なることは容易に想像がつく。実見では青木川 2号墳出土須恵器杯B類は胎土が極めて正知浦 2号墳出土須恵器杯A・B類に類似し、同一産地の可能性がある⁽²⁾。「在地系」と「外来系」の土器が混在することを否定するのではないが、法量の変化は大勢では編年的に変化を遂げて、形態差、時期差の一要

因に成り得るが、各地域による法量の変化は同一時間の中で同形式に変化していくとは限らず、同一時期として捉えられる遺構の出土遺物の検討や成形技法及び他器類との組合せの中で考えるべきであろう。

(3) 北勢地方の横穴式石室について（第40図・第8・9表）

三重県内でも最古の横穴式石室を有する古墳は阿児町志島11号墳（おじよか古墳⁽³⁾）とされ、側壁は偏平な板石を用い、奥が広がる玄室と羨道が逆開きする形式（羽子板形）は、開行丸古墳等の北九州佐賀平野に系譜が求められ、およそ5世紀後半の時期が想定される。北九州より直接伝播したと考えられるこの横穴式石室も、現在のところ、このおじよか古墳のみで、それ以降は発展しなかった。

6世紀初頭前後になると、やはり北九州に系譜を求められる堅穴系横口式石室が導入され、安濃町平田18号墳⁽⁴⁾が築造される。その後は近辺の平田17号墳、中大谷13号墳⁽⁵⁾、大塚1号墳などに引き継がれていくが、広範囲な影響を及ぼすことなく、通常の石室形態に吸収されていく。

6世紀前半には、玄室平面形が矩形で、羨道は短く、基本的に袖は立柱石を用いない畿内型石室が、畿内から名張一雲出川ルートで導入される。嬉野町釜生田A-5号墳や松阪市瑞巖寺6号墳はその初現で、MT15形式に比定される。この形態の石室は嬉野、松阪地域で濃密に分布するが、その後、志摩から渥美半島→東三河→遠江地方に伝播したようである。

北勢地方は伊賀、中勢以南の石室のあり方と様相を異にする。この地方はその分布状況から大きく鈴鹿川流域、内部川流域、三滝川流域、朝明川流域、宇賀川流域、員弁川上流域に細分される。

この地方で最も早く横穴式石室を導入したのは、畿内からのルート上に位置する鈴鹿川流域であろう。1972年に発掘調査された亀山市井田川茶臼山古墳⁽⁶⁾はこの地方最古（MT15形式）の横穴式石室を内部施設とする古墳である。石室構造は袖に長い立柱石を配する両袖式で、短い羨道と長い玄室には胴張りが見られる。玄門部の袖間には2個の仕切り石が置かれ、羨道と玄室との間には若干の段差が見られることから、堅穴系横口式石室の影響も指摘されるが、

全体としての系譜を明確にし得ない構造である。井田川茶臼山古墳と同型あるいは直接的な系譜を辿れる石室は現在までのところ発見されていないが、時期的には正知浦2号墳と太岡寺4号墳⁽⁷⁾（3）が井田川茶臼山古墳に続いて構造される。これらは片袖式と無袖式の違いはあるものの、玄室には胴張りが見られること、石材は余り大きいものを用いないことが共通点としてあげられ、概ねTK209型式の時期まで継続する。鈴鹿川流域ではその後も深溝狐塚古墳⁽⁸⁾や蛸田古墳⁽⁹⁾（18）のように石室の築造は見られるものの例外的であり、そのほとんどを停止する。しかし、鈴鹿川流域以北の内部川流域及び三滝川流域ではTK209型式の時期より複室型式の石室が築造されるようになり、TK217型式の時期まで存続するようである。このように北勢地方の横穴式石室は確固たる系譜を辿れないものの、ある程度の時期的、地域的な石室形態の在り方を概観できる。従来より鈴鹿川流域は横穴式石室の受容に消極的な地域として捉えてきた。井田川茶臼山古墳の時期以降の古墳の調査でもその多くは主体部を木棺直葬とする。同時期の伊賀や中勢地方、尾張の古墳の大半が横穴式石室であることを考えればやはり異質の地域である。その確固たる理由は不明である。石材の入手困難さを指摘する意見もあるが、現在の鈴鹿川上中流域河川敷の大きな自然石の状態からするとその考えは採用し難い。むしろ方墳との関連を指摘したい。現在、調査、未調査を問わず方墳であることがほぼ明らかな古墳は、

谷山古墳、保子里古墳群5基、愛宕山3号墳、深溝狐塚古墳、北野古墳、白鳥塚7号墳、丸山古墳陪塚1基、蛸田古墳、沖ノ坂古墳群4基、中尾山古墳群10基、寺田山古墳群8基、高岡山2号墳などがある。その他、鈴鹿川流域からは外れるが、四日市市広古墳群4基、鈴鹿市郡山町寺谷古墳群⁽¹⁰⁾11基などがあり、他地域に比べて比較的方墳の数が多い。これらの方墳の在り方を子細に観ていくと、愛宕山3号墳などの古式古墳を除くと、中型円墳の陪塚的に築造されるもの（寺田山古墳群、寺谷古墳群）と小さな方墳のみが集中して築造されるもの（中尾山古墳群、沖ノ坂古墳群）などがある。前者は、出土遺物から5世紀末から6世紀初めの横穴式石室導

入以前の築造であり、後者は、7世紀前後の古墳終末期に築造されている。すなわち横穴式石室導入期にあたり、石室を積極的に導入した集団とそれまで従属的であった方墳の築造集団をはじめとする石室を導入しない集団に分化したとは考えられないだろうか。しかし、方墳築造集団の中でも狐塚古墳、北野古墳のごとく⁽¹⁵⁾横穴式石室を導入した一群もあったが、導入時期は最終末であり横穴式石室を内部主体とする群集墳は鈴鹿川流域においては発達しなかった。どういった集団が横穴式石室を受容し、また受容しなかったのかは今後に残された課題としたい。

同じ北勢地方でも美濃に近い北部地方では横穴式石室のあり方は異なった様相を見せる。井田川茶臼

山古墳とほぼ同時期に築造されたと考えられる古墳に員弁町岡3号墳⁽¹⁶⁾(69)がある。岡3号墳は玄室の大半を失っているが、胴張りの無い矩形と考えられ、左片袖の長大な羨道と石材の大型化は畿内型石室の範疇に入り、白石編年⁽¹⁷⁾の第3期で、須恵器の標識となっている「岡型式時期」と矛盾しない。⁽¹⁸⁾岡古墳は鈴鹿川流域からの系譜ではなく、北近江、西美濃地域からの系譜として捉えるべきであろう。また、宇賀水系の古墳群も未調査ながら、その大半は、横穴式石室を内部施設とする古墳群と考えられ、員弁川上流域と共に今後の調査の進展により尾張や美濃との強い関連を指摘できるものと考えている。

(浅尾悟)

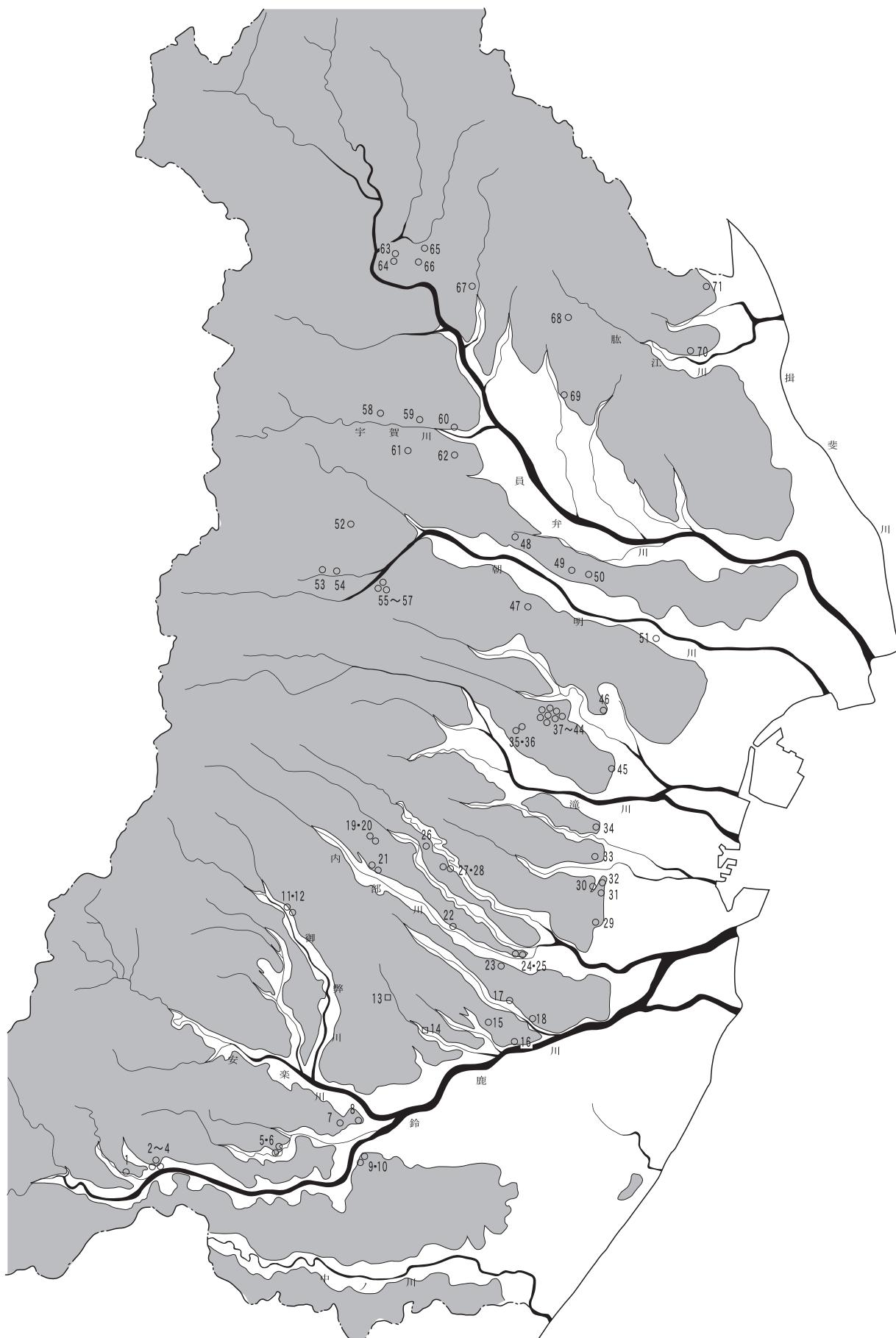
註

- (1) 春日井恒「北勢地域における須恵器蓋杯の法量の変化について」『青木川古墳群』四日市市教育委員会 1992 渡辺博人「須恵器と後期古墳」『美濃の後期古墳』美濃古墳文化研究会 1992
- (2) 四日市市教育委員会・春日井恒氏の御好意による。
- (3) 小玉道明「志摩・おじよか古墳発掘調査概要」阿児町教育委員会 1968
- (4) 伊藤秋男他「平田古墳群」安濃町遺跡調査会 1987
- (5) 浅生悦生「中大谷13・16号墳発掘調査報告」安濃町遺跡調査会 1988
- (6) 小玉道明「井田川茶臼山古墳」三重県教育委員会 1988
- (7) 真田幸成「太岡寺古墳群」『名阪国道敷地内埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1964
- (8) 仲見秀雄、大場範久「鈴鹿市深溝狐塚古墳調査報告」『神戸史談・8号』神戸高等学校郷土史研究クラブ 1972
- (9) 新田剛「蛸田古墳」鈴鹿市教育委員会 1991
- (10) 「四日市市史・史料編考古5」四日市市 1988
- (11) 1992年、鈴鹿市教育委員会が発掘調査。
- (12) 1990~91年、鈴鹿市教育委員会が発掘調査
- (13) 1989~90年、鈴鹿市教育委員会が発掘調査

- (14) 1991年、鈴鹿市教育委員会が発掘調査
- (15) 大場範久「北野古墳」『三重県水加佐登調整池関係遺跡発掘調査報告』鈴鹿市教育委員会 1978
- (16) 三重大学歴史研究部原始古代史部会「三重県員弁町岡古墳群調査報告」『古代学研究63』古代学研究会 1972
- (17) 白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試行」『古代学研究42・43』古代学研究会 1966
- (18) 植崎彰一「後期古墳時代の諸段階」『名古屋大学10周年記念論集』1959

※全般的に参考させていただいた文献

1. 石太一郎「日本における横穴式石室の系譜」『先史科学研究5』
2. 村上喜雄「横穴式石室の形態と歴史的変遷について」三重大学学芸学部卒業論文
3. 「東日本における横穴式石室の受容」第10回三県シンポジウム資料 1989
4. 土生田純之「東海地方の横穴式石室」『断夫山古墳とその時代』第6回東海埋蔵文化財研究会 1989
5. 「横穴式石室を考える」帝塚山考古学研究所古墳部会 1990



第40図 北勢地方の横穴式石室古墳位置図（番号は、第8表と対応）

No.	古 墳 名	所 在 地	墳 形	石 室 形 態 ・ 規 模	出 土 品	時 期 (陶邑編年)	文 献
1	引 地 古 墳	鈴鹿郡閑町小野	不 明	(L3.3m×W1.5m)	須恵器(平瓶)	TK217	①
2	太 岡 寺 3 号 墳	亀山市太岡寺町	円 墳 (C17.8m ×H1.5m)	S F (P(L1.7m×W1.4m) (R(L5.3m×W1.7m)	須恵器(杯、高杯、短頸壺、金環、鉄鏃、ガラス玉、馬具)	TK43 ～TK209	②
3	〃 4 号 墳	〃	円 墳 (C17.8m ×H1.5m)	S F (P(L3.3m×W1.2m) (R(L4m×W1.4m) S 3° E	須恵器(杯、短頸壺、横瓶、提瓶、金環、鉄鏃、鉄刀、人骨)	TK10 ～TK209	〃
4	〃 6 号 墳	〃	不 明	S F (P(L1.9m×W1.7m) (R(L2.9m×W2.1m) W14° N	須恵器(杯、高杯、匙、提瓶)、土師器杯、鉄鏃、鉄釘、刀子	MT15 TK209	〃
5	正 知 浦 1 号 墳	亀山市亀田町	円 墳 (C12m)	S R (L3.3m×W1.1m) S 11° E	須恵器(杯、平瓶)、金環、銀環、石斧	TK209	本報告
6	〃 2 号 墳 (亀田古墳)	〃	円 墳 (C12m)	S F (P(L3.8m×W1.6m) (R(L4.8m×W1.65) W23° S 墓道	須恵器(杯、高杯、短頸壺、平瓶)、土師器一、鉄刀、鉄鏃	TK10 ～TK43	〃
7	井 田 川 茶 白 山 古 墳	亀山市みどり町	円 墳? (C20m前後)	WF (P(L1.75m×W1.3m) (R(L5.5m×W2.5m) N85° W 箱式石棺2基	須恵器(杯、高杯、裝飾壺、匙)銅鏡2面、冠、馬具類、玉類	MT15 ～TK10	③
8	宮 上 道 古 墳	鈴鹿市小田町	円 墳	不 明	須恵器(杯、広口壺、長頸壺、匙)土師器蓋	MT21	④
9	保 子 里 1 号 墳	鈴鹿市国府町	双円墳	不 明	須恵器(杯、壺、器台、提瓶、高杯)銅鏡、金製耳飾、勾玉	TK10	⑤
10	保 子 里 18 号 墳	〃	円 墳 (C13.3m)	S F (P(L1.5m×W0.75m) (R(L4.7m×W1.1m)	須恵器高杯、鉄刀、鉄鏃、勾玉、管玉	TK209	⑥
11	双 児 塚 1 号 墳	鈴鹿市長沢町	円 墳 (C18.4m ×H2.9m)	S R (L2.7m×W1.5m×H1.3m) 南開口	不明	—	⑤
12	〃 3 号 墳	〃	円 墳 (C20m ×H3 m)	S F ? P (L3.2m×W2.2m) R (L4.5m×W2.6m) 西開口	須恵器、鉄刀	—	〃
13	深 溝 狐 塚 古 墳	鈴鹿市深溝町	方 墳 (東西17m ×南北19m)	S F (P(L-m×W1.1m) (L4.5m×W2.6m) N25° W 墓道	須恵器(杯、甕)、土師器皿、鉄鏃	TK217新	⑦
14	北 野 古 墳	鈴鹿市加佐登町	円 墳 (W15m × H 2 m)	S F (P(2.4Lm×W1.2m) (R(L4.6m×W1.4m) S 10° E 墓道(50.5)	須恵器杯、土師器皿、無文銀鏡、人骨	TK209 ～TK217	⑧
15	南 町 古 墳	鈴鹿市石薬師町	前方後円墳 (L50m ×H6.5m)	不 明	須恵器(高杯、長頸壺、甕)金環、環頭把頭、金具	—	⑨⑩
16	南 山 6 号 墳	鈴鹿市上野町	円 墳 (C10m × H 1 m)	S F ? (P(L3.5m×W1.4m) (R(L1.3m×W-m) S 6° W	須恵器(杯、高杯、直口壺)土師器(高杯、直口蓋、鉄鏃、刀子)	TK10 ～TK43	⑪
17	大 谷 号 墳	鈴鹿市木田町	前方後円墳 (L43m)	不 明	須恵器(杯、高杯、直口壺、子持壺、匙)金環、直刀	TK10新	⑫
18	蛸 田 古 墳	〃	方 墳 N14.3～15.5m ² ×H1.3m)	S F ? (P(L2.3m×W1.3) (R(L-m×W0.7m) S 6° E 墓道(8m以上)	須恵器(杯、蓋、壺)	TK43 ～TK46	⑬
19	青 木 川 1 号 墳	四日市市水沢町	不 明	不 明	須恵器(杯、高杯、提瓶)	TK43	⑭
20	青 木 川 2 号 墳	〃	不 明	S F ? (P(L1.4m×W-m) (R(L5.0m×W1.4m) N55° W	須恵器(杯、高杯、短頸壺、提瓶)銀環、鉄鏃	TK10新 ～TK43	〃
21	大塚野3・4号墳	四日市市堂ヶ山町	円 墳 (C6.8m ×H1.6m)	不 明	須恵器(杯、長頸壺)土師器甕、鉄鏃	TK10新 ～TK217	⑯
22	東 起 古 墳	四日市市六名町	円 墳 (C10m × H1m)	不 明	須恵器(杯、高杯、短頸壺、台付匙、提瓶)土師器甕	TK209	⑯
23	西 野 1 号 墳	四日市市南小松町	不 明	不 明	不 明	—	⑯
24	北 小 松 2 号 墳	四日市市北小松町	不 明	(規模不明) S 19° E	須恵器(杯、高杯、直口壺、短頸壺、提瓶)	TK43	⑰
25	〃 3 号 墳 (ひょうたん塚)	〃	不 明	S F (P(L3.5m×W1.5m) (R(L5.0m×W2.2m) E 5° N 墓道	須恵器杯、土師器(杯、高杯、甕)金環、鉄鏃、直刀	TK43 ～TK209新	〃
26	平 野 古 墳	四日市市西山町	不 明	S R (L8～9m×W1.8m)	須恵器(杯、直口壺、短頸壺、提瓶)土師器甕、鉄鏃、刀子	TK209	⑯
27	和 田 ヶ 平 1 号 墳	四日市市山田町	円 墳 (C13.5m ×H0.75m)	S R (L4.5m×W1.65) N51° E 墓道(6.4m)	須恵器(杯、高杯、提瓶)土師器	TK10新 ～TK209	〃
28	〃 2 号 墳	〃	円 墳 (C13.4m ×H0.75m)	WR (F(L1.7m×W1.1m) (R(L2.9m×W1.4m) N43° W 墓道(2.95m)	須恵器提瓶、土師器甕、鉄鏃	TK209新	〃
29	谷 口 古 墳	四日市市前田町	円 墳 (C8m ×H1.0m)	S R ? (L4.25m×W1.2m) N 5° E	須恵器(台付長頸壺、平瓶)	TK209	〃
30	登 城 山 2 号 墳	四日市市日永町	不 明	不 明	不 明	—	⑯

第8表 北勢地方の横穴式石室古墳一覧表 羨道(P)、玄室(R)、前室(F)、長さ(L)、幅(W)、径(C)、高さ(H)
石室形態(WF; 両袖式、SF; 片袖式、WR; 複室式、SR; 無袖式)

No.	古 墳 名	所 在 地	墳 形	石 室 形 態 ・ 規 模	出 土 品	時 期 (陶邑編年)	文 献
31	茶 白 3 号 墳	四日市市日永町	円 墳 (C12.9m × H1.3m)	不 明	須恵器	—	⑯
32	日 永 貝 之 谷 古 墳	"	不 明	S R (L5.0m × W2.0m) S 28° W	須恵器(杯、高杯、長頸壺、壺、躰)、土師器壺、耳環、鉄鏡	TK43	⑰
33	城 山 1 号 墳 (御立山古墳)	四日市市西日野町	円 墳 (C10~15m × H2m)	不 明	須恵器(杯、高杯、台付短頸壺、躰) 鉄刀	TK209	⑯
34	ヒ バ リ 山 古 墳	四日市市松本町	円 墳	不 明	須恵器、金環	—	⑯
35	狐 塚 1 号 墳	四日市市平尾町	円 墳 (C14~17m × H1.8m)	WR (F (L3.0m × W1.5m) R (L3.0m × W1.7m) S 0° 墓道(4.2m))	須恵器(杯、高杯、長頸壺)、土師器甕	TK209	⑯
36	" 2 号 墳	"	円 墳 (C10~15m × H1.2m)	S R (L5.0m × W1.3m) 60° 墓道(3.8m)	須恵器杯、金環	TK209	⑯
37	御 池 1 号 墳	四日市市坂部町	円 墳 (C13m × H1.8m)	S F (P (L1.3m × W0.5m) R (L3.7m × W1.4m) S 22° W)	須恵器杯、金環	TK217	⑰
38	" 2 号 墳	"	円 墳 (C15m × H1.8m)	S F ? (P (L-m × W0.9m) R (L4.7m × W1.5m) S 3° E 墓道(4.2m))	須恵器平瓶、土師器甕、耳環	TK217	"
39	" 4 号 墳	"	円 墳 (C12m × H1.2m)	WR (F (L2.3m × W1.2m) R (L2.7m × W1.5m) S 7.5° W)	須恵器(杯、平瓶、甕)、鉄鏡	TK209 ~ TK217	"
40	" 5 号 墳	"	円 墳 (C13m × H1.2m)	WR (F (L2.9m × W1.4m) R (L2.6m × W1.5m) N 37° E)	須恵器(杯、高杯、平瓶、躰、甕) 金環、刀子、鞘金具	TK217	⑯
41	" 6 号 墳	"	円 墳 (C12m × H1.4m)	WR (F (L-m × W-m) R (L2.5m × W1.2m) S 22° W)	須恵器(杯、高杯) 土師器甕	TK217	⑰
42	" 7 号 墳	"	円 墳	不 明	須恵器壺	TK209 ~ TK217	"
43	" 8 号 墳	"	円 墳 (H1.6m)	WR (F (L3.0m × W1.3m) R (L2m 以上 × W1.4m) S 16° W)	須恵器(杯、平瓶)、耳環	TK209 ~ TK217	"
44	" 13 号 墳	"	円 墳	WF ? (P (L2.2m × W0.7m) R (L1.9m × W0.9m) S 17° W)	須恵器(杯、壺)	TK217	"
45	二 ノ 谷 古 墳	"	不 明	不 明	須恵器、銀環	—	⑯
46	大 谷 2 号 墳	四日市市生桑町	不 明	(L2.7m × W2.7 × H1.8m)	須恵器(台付壺、提瓶) 金環	TK209	"
47	大 沢 古 墳	四日市市上海老町		不 明	須恵器、鉄刀、金環	—	"
48	留 山 古 墳	四日市市市場町	円 墳 (C14.5m × H1.6m)	不 明	不 明	—	"
49	若 宮 古 墳	四日市市小牧町	円 墳 (C15m × H2.4m)	S R ? (L2.8m × W1.8m)	須恵器(杯、壺)、鉄鏡、金環	—	"
50	筆 ケ 嶺 1 号 墳	"	円 墳 (C10.7m × H0.7m)	不 明	不 明	—	"
51	八 輛 古 墳	四日市市平津町	円 墳 (C 6 m × H0.8m)	WR (F (L1.7m × W1.3m × H1.4m) R (L2.8m × W1.3m × 1.6m) N 29° W)	須恵器(杯、高杯、長頸壺、平瓶)	TK43	⑯
52	高 塚 5 号 墳	三重郡菰野町杉谷	円 墳	S R (L1.8m × W1.5m × 1.5m)	不 明	—	⑰
53	黒石原古墳群(15)	"	円 墳 (経11~16m)	不 明	不 明	—	"
54	七ッ塚古墳群(4)	三重県菰野町千種	円 墳 (C7~16m)	不 明	不 明	—	"
55	奥 郷 浦 1 号 墳	"	円 墳 (C19m × H2.4m)	S F ? (L10m × W2m) S 13° E	須恵器(杯、高杯、躰)、土師器(ミニチュア竈、鍋)、金環	MT15 ~ TK209	⑯
56	" 2 号 墳	"	円 墳 (C17m × H1.5m)	S F ? (L7m × W1.5m)	不 明	—	"
57	" 3 号 墳	"	円 墳 (C10m × H1.5m)	S F ? (L8m × W1.5m)	不 明	—	"
58	南 林 古 墳 群 (6)	員弁郡大安町石榑	6号墳-円墳 (C15.5m)	不 明	不 明	—	㉑
59	上 小 原 古 墳 群 (8)	"	円 墳 (C8~16m)	不 明	不 明	—	⑩
60	下 小 原 11 号 墳	"	円墳?	S R (L-m × W0.8m)	須恵器(杯、高杯、短頸壺)	TK43	"

No.	古 墳 名	所 在 地	墳 形	石 室 形 態 ・ 規 模	出 土 品	時 期 (陶邑編年)	文 献
61	宇賀新田 1号墳	員弁郡大安町宇賀新田	不 明	WF ? (L2.7m×W0.7m×H1.8m)	土器、和同開珎	—	㉓
62	大辻古墳群(16)	員弁郡大安町大井田	円墳・方墳 (C6~14m)	不 明	不 明	—	〃
63	別 当 古 墳	員弁郡北勢町阿下喜	円 墳	形態不明(L1.5m×W0.7m)	須恵器杯	—	㉔
64	町 割 古 墳	員弁郡北勢町町割	円 墳	形態不明(L6.75m×W1.1~1.47m)	須恵器杯	—	〃
65	鳥 坂 古 墳	員弁郡北勢町谷坂	円 墳	形態不明(L1.5m×W0.7m×H1m) 西方向開口	須恵器(杯、長頸壺、広口壺)、銀環、刀子	—	〃
66	堂 ノ 上 1号 墳	員弁郡北勢町阿下喜	不 明	不 明	須恵器(杯、匙)、切小玉、管玉、勾玉	—	〃
67	二 子 塚 古 墳	員弁郡北勢町其原	前方後円墳?	不 明	須恵器(杯、高杯、提瓶、壺)、土師器、刀子	—	〃
68	平古古墳群(3)	員弁郡員弁町平古	円 墳	不 明	不 明	—	〃
69	岡 3 号 墳	員弁郡員弁町東一色	円 墳 (C18m ×H3.5m)	S F (P(L4.5m×W0.75m×H0.7m) R(L-m×W1.2m×H1.2m) S12° W)	須恵器(高杯、台付壺、器台、匙)	MT15 ~TK10	㉕
70	宇賀神社古墳群(3)	桑名郡多度町柚井	1号-前方後円墳 2・3号-円墳	不 明	須恵器、土師器、鉄劍、埴輪	—	㉖
71	一ノ谷古墳群(10)	〃	円 墳	不 明	須恵器、勾玉、管玉	—	〃

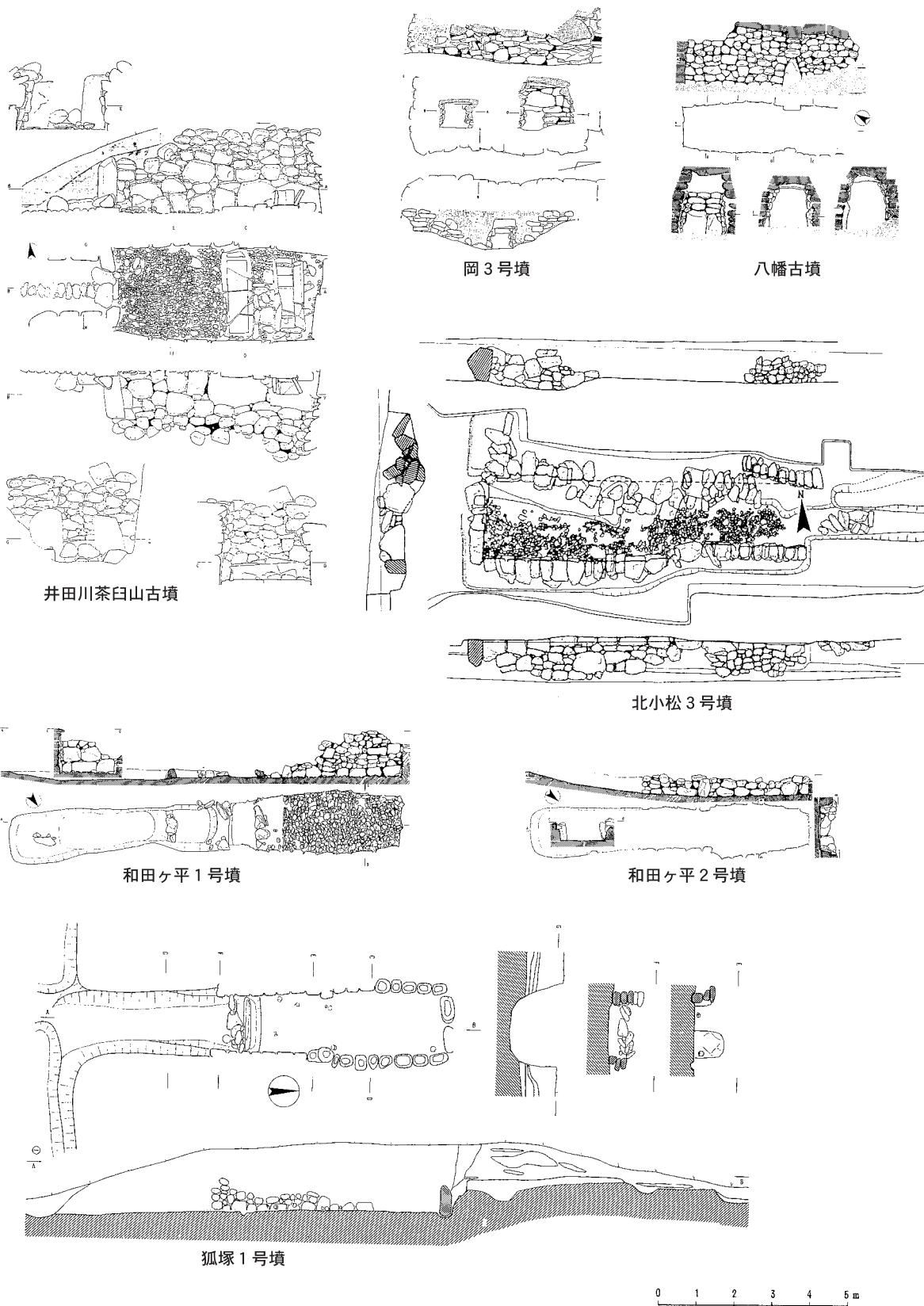
※ 文 献

- ① 「閼町史(上巻)」閼町教育委員会 1982
- ② 真田幸成「太岡寺古墳群」『名阪国道敷地内埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1964
- ③ 小玉道明「井川茶臼山古墳」三重県教育委員会 1988
- ④ 「鈴鹿市遺跡地図」鈴鹿市教育委員会
- ⑤ 仲見秀雄、大場範久「鈴鹿市史・第1巻」鈴鹿市教育委員会
- ⑥ 仲見秀雄、真田幸成「保子里18号墳発掘調査報告」『神戸史談・第4号』神戸高等学校郷土史研究クラブ 1964
- ⑦ 仲見秀雄、大場範久「鈴鹿市深溝狐塚古墳調査報告」『神戸史談・第8号』神戸高等学校郷土史研究クラブ 1972
- ⑧ 大場範久「北野古墳」『三重用水加佐登調整池関係遺跡発掘調査報告書』鈴鹿市教育委員会 1978
- ⑨ 鈴木敏雄「白鳥塚古墳」『三重県知事指定史跡名勝天然記念物』三重県 1940
- ⑩ 「東京国立博物館図版目録・古墳遺物篇(近畿5)」東京美術 1988
- ⑪ 新田剛「南山遺跡・南山6号墳」鈴鹿市教育委員会 1991
- ⑫ 鈴木敏雄「三重県安芸郡河曲村考古誌考」 1936
- ⑬ 新田剛「蛸田古墳」鈴鹿市教育委員会 1991
- ⑭ 春日井恒「青木川古墳群」四日市市教育委員会 1992
- ⑮ 「四日市市史・史料編考古5」四日市市 1988
- ⑯ 小玉道明、早川裕己「四日市の後期古墳」四日市市教育委員会 1973
- ⑰ 北野保「北小松古墳群・日永貝之谷古墳」四日市市教育委員会 1977
- ⑱ 小玉道明「狐塚1号墳発掘調査報告」三重県教育委員会 1970
- ⑲ 谷本銳次、井上光夫「狐塚2号墳」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1970
- ⑳ 「御池古墳群発掘調査現地説明会資料」四日市市遺跡調査会 1991
- ㉑ 「菰野町史・上巻」菰野町教育委員会 1987
- ㉒ 新田洋、野原宏司「奥郷浦古墳群について」『この文化財だより(創刊号)』菰野町教育委員会 1987
- ㉓ 久志本鉄矢「下小原古墳群発掘調査報告」大安町教育委員会 1989
- ㉔ 「埋蔵文化財包蔵地調査カード」三重県教育委員会 1969・70
- ㉕ 三重大学歴史研究会原始古代史部会「三重県員弁町岡古墳群調査報告」『古代学研究63』古代学研究会 1972

(WF; 兩袖型、SF; 片袖型、SR; 無袖型、WR; 複室型、ER; 墓穴系横口式)

須恵器型式	両袖型	片袖型	单室(無袖)型	複室型	中勢地方	南勢地方	伊賀地方	志摩地方
(5 c 後半)								おじょか古墳 (WF)
T K 47								
M T 15	井田川茶臼山古墳	岡3号墳 太岡寺6号墳 (奥郷浦1号墳)			平田17号墳 (ER) 大塚1号墳 (WF)	金生田A-5号墳 (SF) 瑞巖寺6号墳 (SF)	鳴塚古墳 (SF)	岩屋山古墳 (WF) 狐塚古墳 (SR)
T K 10		正如浦2号墳 (南山6号墳)	太岡寺4号墳		中大谷13号分 (ER)	天保1号墳 (SF)	下中島2号墳 (WF)	
T K 10 新		青木川2号墳	和田ヶ平1号墳			庄古墳 (SF)	桐ヶ谷15号分 (SF) 筒御前古墳 (SF)	日和山古墳 (WF)
T K 43		太岡寺3号墳 北小松3号墳	日永貝之谷古墳		四反田1号墳 (WF) 大名塚1号墳 (SF)	天保6号墳 (WF)	辻堂古墳 (WF) 平林1号墳 (WF)	
T K 209		保子里18号墳 北野古墳	狐塚2号墳 平野古墳 正知浦1号墳	大施山6号墳 八幡古墳 狐塚1号墳		平林6号墳 (SF) 高倉山古墳 (SF)	横枕2号墳 (SF) 向山2号墳 (SF)	塚六古墳 (SF)
T K 209 新				和田ヶ原2号墳		上野山13号墳 (SF)	神林9号墳 (SR)	
T K 217					御池5・13号墳		横尾1号墳 (SF) 上野山12号墳 (WF)	
T K 217 新			深瀬狐塚古墳					

第9表 北勢地方の横穴式石室古墳変遷表



第41図 北勢地方の横穴式石室実測図 (1:160)

3 正知浦遺跡

正知浦遺跡の立地する丘陵は、南東方向へ緩やかに傾斜する。調査の結果、調査区北部及び東部は表土層も薄くて遺構が検出されたが、南部は遺物包含層の堆積が厚く、地区によっては上下2層にわたって遺構を確認したところもある。

調査区中央部第1次と第2次調査区境の南北ラインの土層観察による基本的層序は、上層から第I層；暗灰色砂質土（表土）、第II層；黄茶色砂質土（遺物包含層）、第III層；黄茶色粘質土（遺物包含層）、第IV層；茶黄色粘質土（遺物包含層）、第V層；明茶黄色粘質土（地山）に分層できる。第II層から第IVの遺物包含層は、上層から下層に移行するほど砂の含有が少くなり、色調も暗くなる変化であり漸次的である。また、第V層の地山層は、一段高い北側では黄褐色砂礫層を地山とし、中央部では黄褐色から灰色粘土となり、地山を構成する堆積層が褶曲していることが観察された。北部の壇上では、第IV層の堆積は認められず表土下約40cmの第V層上面で遺

構を検出した。南部の一段低い低地では、第IV層が南へ行くほど厚く堆積し表土下約40cmの第IV層上面で遺構が認められる地区もある。最終遺構検出面は、この第IV層を10~20cm除去した第V層上面である。

第二次調査区の中央部に設定した南北ラインの土層観察では、第I層；暗灰茶色砂質土（表土）、第II層；暗茶色砂質土、第III層；暗茶褐色粘質土（遺物包含層）、第IV層；黒茶褐色粘質土（遺物包含層）、第V層；茶褐色粘土層（地山）が基本的層序となる。また、北部の壇裾には、長さ約6m・厚さ約0.4mの黒色粘質土の黒ボク層が認められた。北部の壇上では、第I・第II層直下の20~30cmで黄褐色砂礫層の地山上面で遺構検出を行い、南部では第IV層上面で確認される遺構もあった。最終的には第V層上面で遺構検出を行なったが、この第V層上面での遺構検出は、困難をきわめ第V層をある程度削りこんで遺構の確認に努めた。

（駒田利治）

1 遺構

検出された遺構は、古墳時代から江戸時代に及ぶ遺構群である。また、横穴式石室を埋葬施設とする正知浦1号墳・同2号墳も新たに確認された。古墳群の調査報告については、本報告書前章のV-2で取り上げたので、ここではその他の遺構について報告する。

検出された遺構は、ほぼ調査区全域に広がっているが、古墳時代から奈良時代の遺構・遺物は南部の一段低い地区で主に検出している。平安時代後半から江戸時代にかけての遺構・遺物は、北部及び東部の一段高い壇上で検出される。

古墳時代では、後期の竪穴住居4棟・土坑12基・溝4条、奈良時代では、掘建柱建物3棟・竪穴住居1棟・土坑5基・焼土1基、平安時代後半から鎌倉時代では、掘建柱建物7棟・土坑墓1基などが検出された。また、第1次調査区中央部では、江戸時代の掘建柱建物3棟・土坑7基等が確認された。

構

(1) 古墳時代

古墳時代の遺構は、竪穴住居4棟・土坑12基・溝4条などがある。

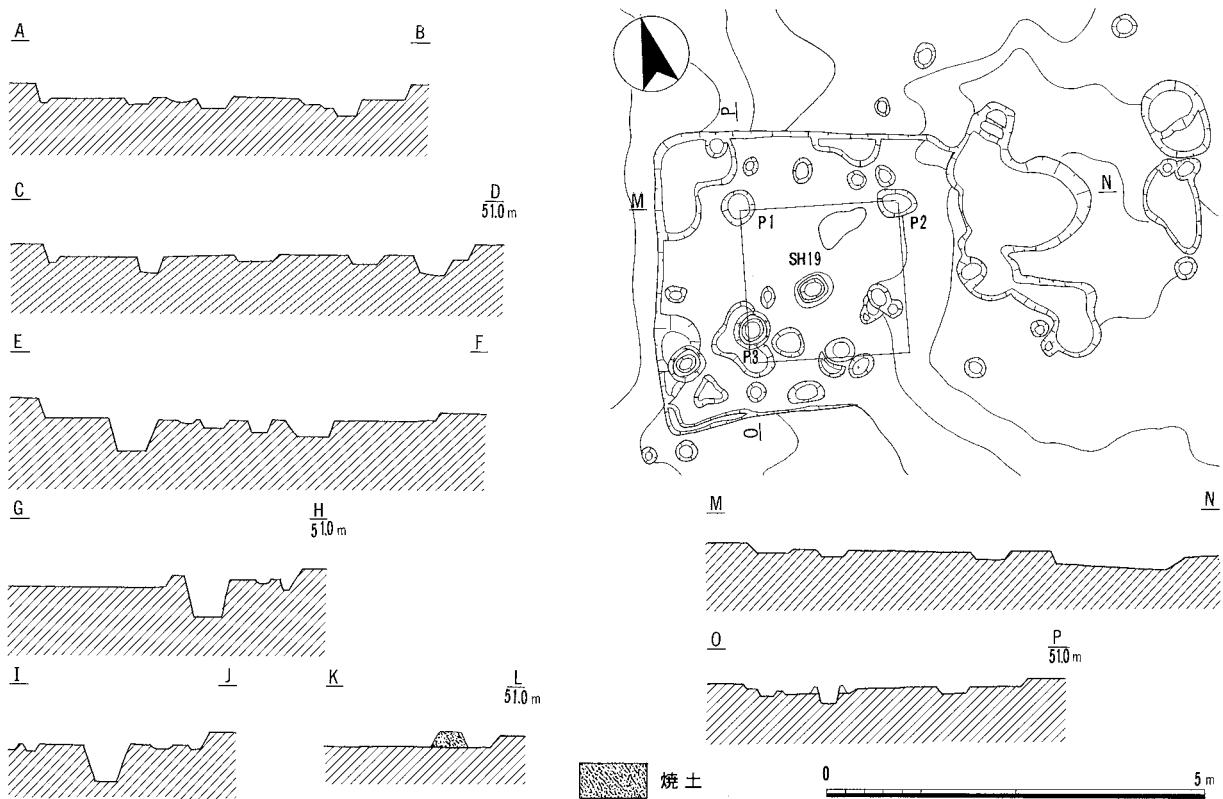
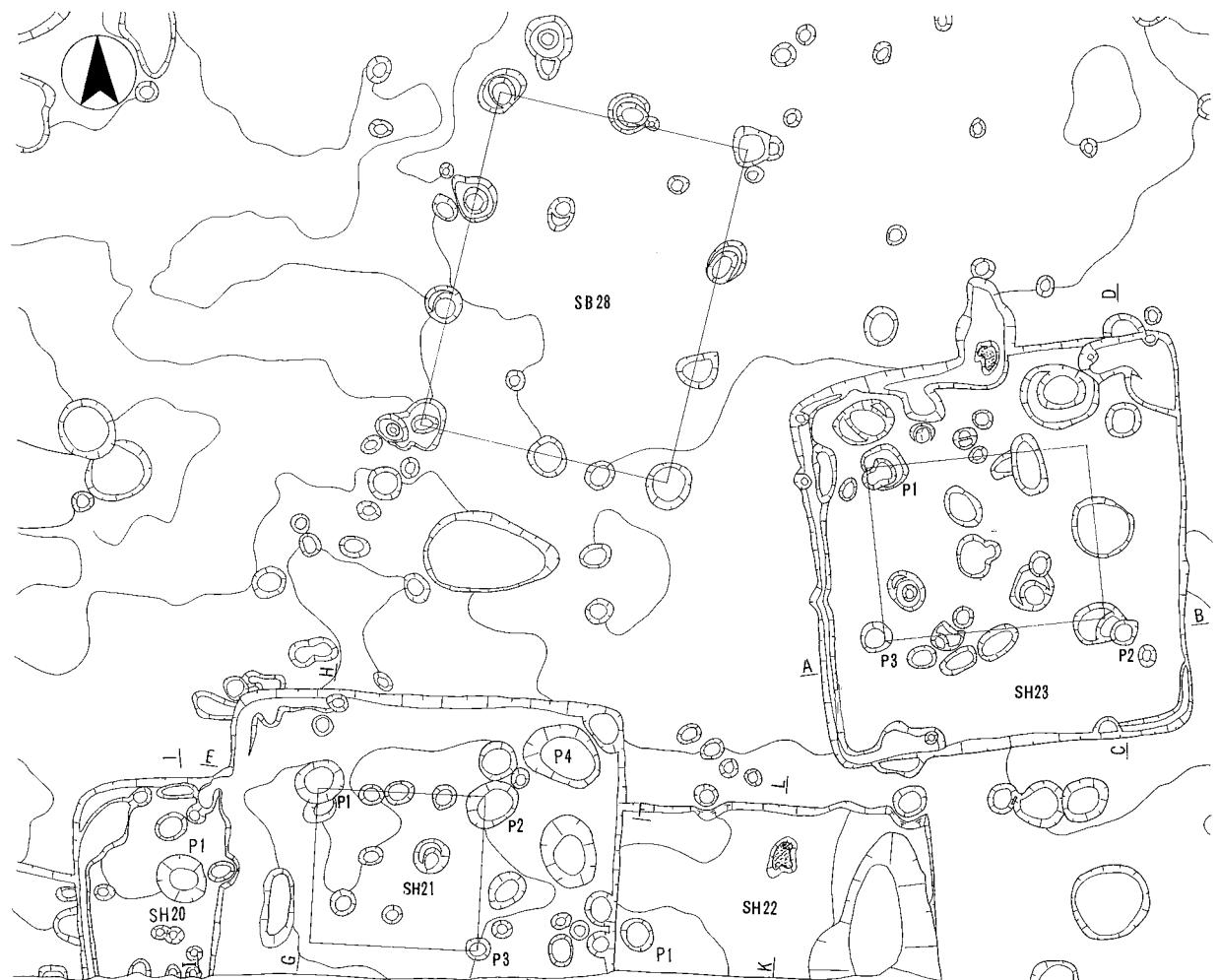
A 竪穴住居（第42・51図）

竪穴住居は、調査区の中央部南端で検出され、3棟は重複している。ともに6世紀後半に属する。

S H20 S H21に先行する竪穴住居で北東隅部のみの検出である。検出面から床面までの深さは、約17cmである。西壁には、幅約20cm・深さ約7cmの溝がめぐり、北壁でも断続的にその痕跡が認められる。主柱穴と考えられるP1は、径約60cm・深さ約50cmである。

出土遺物は、土師器・須恵器片のみの出土で時期を決定し得るものはない。

S H21 東西約5.3m・南北3.9m以上で、南部分は調査区外へひろがる。検出面からの深さは、約25cmである。周溝は認められない。主柱穴は、南西部のものを除いて、P1~P3が検出された。北側のP1・



第42図 S H19～23実測図 (1:100)

P 2 が径約50～70cm・深さ20～40cmであるのに対し、南西部のP 3 は径約30cm・深さ約19cmと小さい。主柱穴の柱間は、東西2.3m・南北2.0mで竪穴住居の平面プランを正方形と推定すれば、対角線状に位置する。北東隅部には、不整形で深さ約30cmのP 4 があり、貯蔵穴と考えられる。

出土遺物は、土師器甕B (128～130)・E (131～134)、須恵器蓋B (135・136)、同杯B (137)、C (138) がある。

S H22 S H21に劣る竪穴住居で、東西4.1～4.3m以上・南北2.3m以上が検出され、南の調査区外へ拡がる。検出面からの深さは約15cmである。東側は後世の土坑により搅乱される。南西部の床面のP 1 は、径約45cm・深さ約30cmで主柱穴と考えられる。北壁から約0.7mはなれたところに焼土が認められカマド痕と考えられる。これがカマド痕とすれば、カマドは中央よりやや東寄りに付設されていたと考えられる。S H20とは、重複関係も想定され、また近接関係から時期差が考えられるが、前後関係は不明である。出土遺物は、土師器・須恵器片のみでの出土で時期を決定し得るものはない。

S H23 S H22の北東に位置し、東西4.9～5.3m、南北5.0～5.4mのやや歪な平面形をなす。検出面からの深さは、約10cmである。北壁中央部にカマドを付設し、西壁及び南東部に幅20cm・深さ約10cmの壁周溝が巡る。床面で数多くのピットを検出したが、この内には竪穴住居の平面形を確認した段階で検出し得なかった後世のピットも含まれている。竪穴住居の家屋構造を4本柱の主柱穴と想定すれば、P 1～P 3 のピットが主柱穴と考えられる。径約35cm・深さ8～17cmとやや不揃いである。北東部には、深さ約20cmの二つの細長い穴が認められ貯蔵穴と考えられる。

出土遺物は、土師器碗 (142)、甕B (140) C (139) G (141)、須恵器杯B (143・144)、高杯A (145)、及び土製丸玉 (146) がある。

B 土坑（第43図・52図）

大小の土坑が検出された、図示得る出土遺物を伴う土坑は12基ほどである。以下、遺構の概要について触れていく。古墳時代の土坑と考えられる遺構は、S K17、S K70以外は、すべて南の一段低い地区で検出されている。

S K1 長径0.8m・短径0.7mの楕円形で、深さ15cmである。須恵器鉢 (157) と蓋A (158) がともに正立の状態で出土した。

S K5 長径0.6m、短径0.4mの土坑基底部のみの検出である。須恵器蓋A (169)・坏Bが (170) がセットで出土した。

S K24 東西5m、南北1.2m以上が検出され、南の調査区外へ拡がる。深さ約20cmである。形態から竪穴住居の可能性もある。土師器甕G (159) が出土した。

S K17 長辺1.2m×短辺0.6m。深さ0.3mの長方形状の土坑である。埋土中から滑石製白玉2点 (173・174) が出土した。

S K25 径40cm・深さ8cmの浅い土坑から、土師器甕B (165・166)・F (168)、須恵器蓋B (167) が重なって出土した。

S K26 竪穴住居S H21と重複して検出されたが、S K26が重複関係から後出する。一辺1.05mの方形をなし、深さ20cmである。土坑内からは、土師器杯 (147)、甕B (148・149)・E (150)・F (151・152)、須恵器蓋D (153) が出土した。

S K29 径40cm・深さ3cmの浅い土坑である。須恵器蓋A (164) が出土した。

S K44 調査区中央で、上層遺構確認面で検出された。須恵器高杯A類 (163) が出土した。

S K45 長辺1.7m×短辺1.1mの楕円形状をなし、深さは約15cmである。埋土から耳環 (172) が1点出土した。

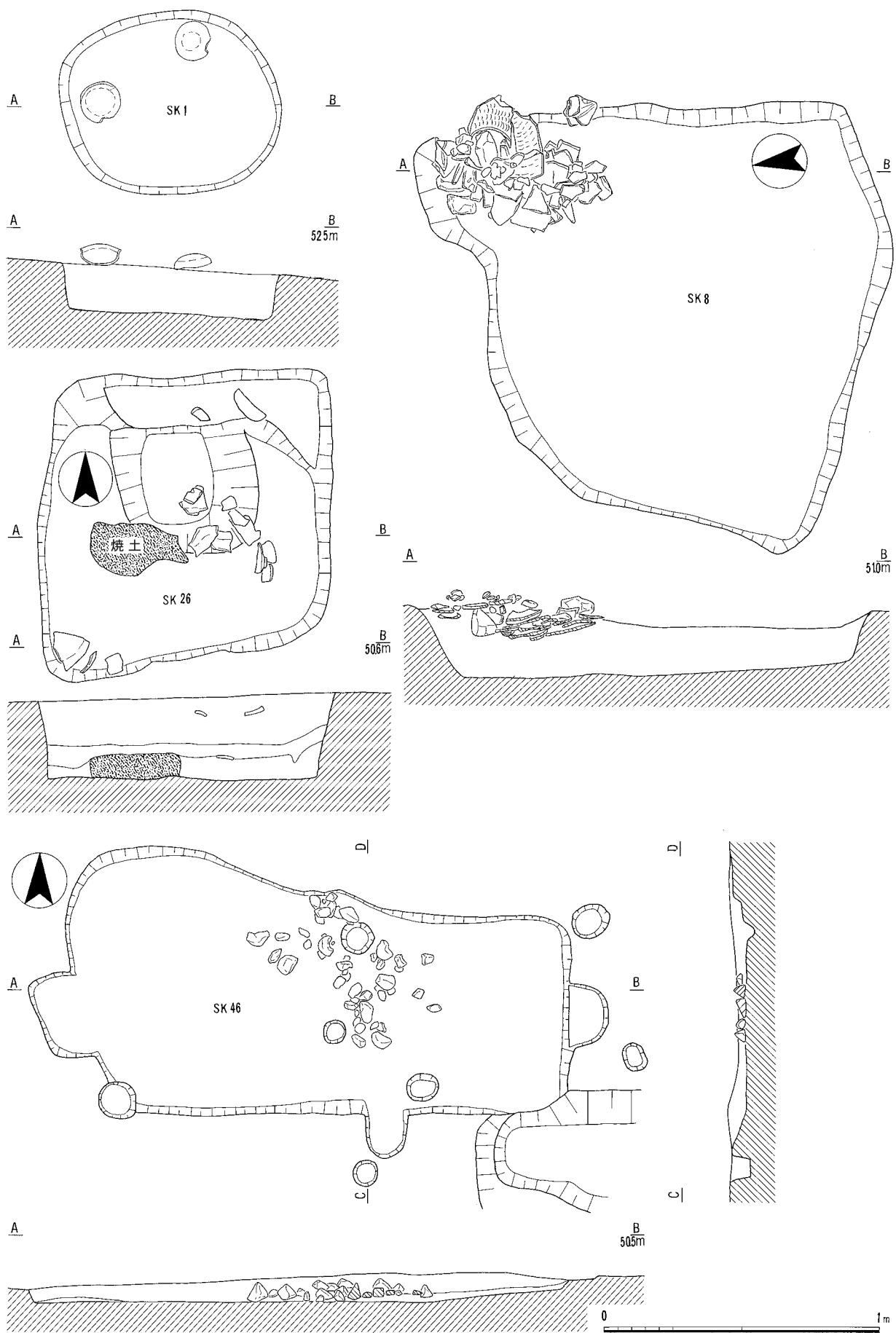
S K46 掘建柱建物柱S B50の南に位置する。長辺約4m×短辺1.5～2.0mの長方形状をなし、深さは約10cmである。土師器鉢 (154)、高杯A (155)、同D (156) が出土した。

S K70 調査区東部の一段高い壇上に位置する。長さ3.3m、幅0.5～0.9mの溝状の土坑である。深さは、5cm程の浅いもので南へ傾斜している。土師器甕B (162) が出土している。

C 溝

溝は、新しい時期のものを含めると数条が確認されている。また古墳の周溝と考えられるS D4・7などもあるが、これらを除いて古墳時代の溝と考えられるものは、S D2の1条である。

S D2 正知浦2号墳の西に位置し2号墳の盛土中



第43図 SK1・8・26・46実測図 (1:20)

に含まれてしまうことから後世のものと思われるが、須恵器杯B（160）高杯C（161）が出土している。

(2) 飛鳥・奈良時代

調査区中央部の一段低い地区を中心に竪穴住居1棟・掘立柱建物3棟・土坑5基・焼土1基などが確認された。

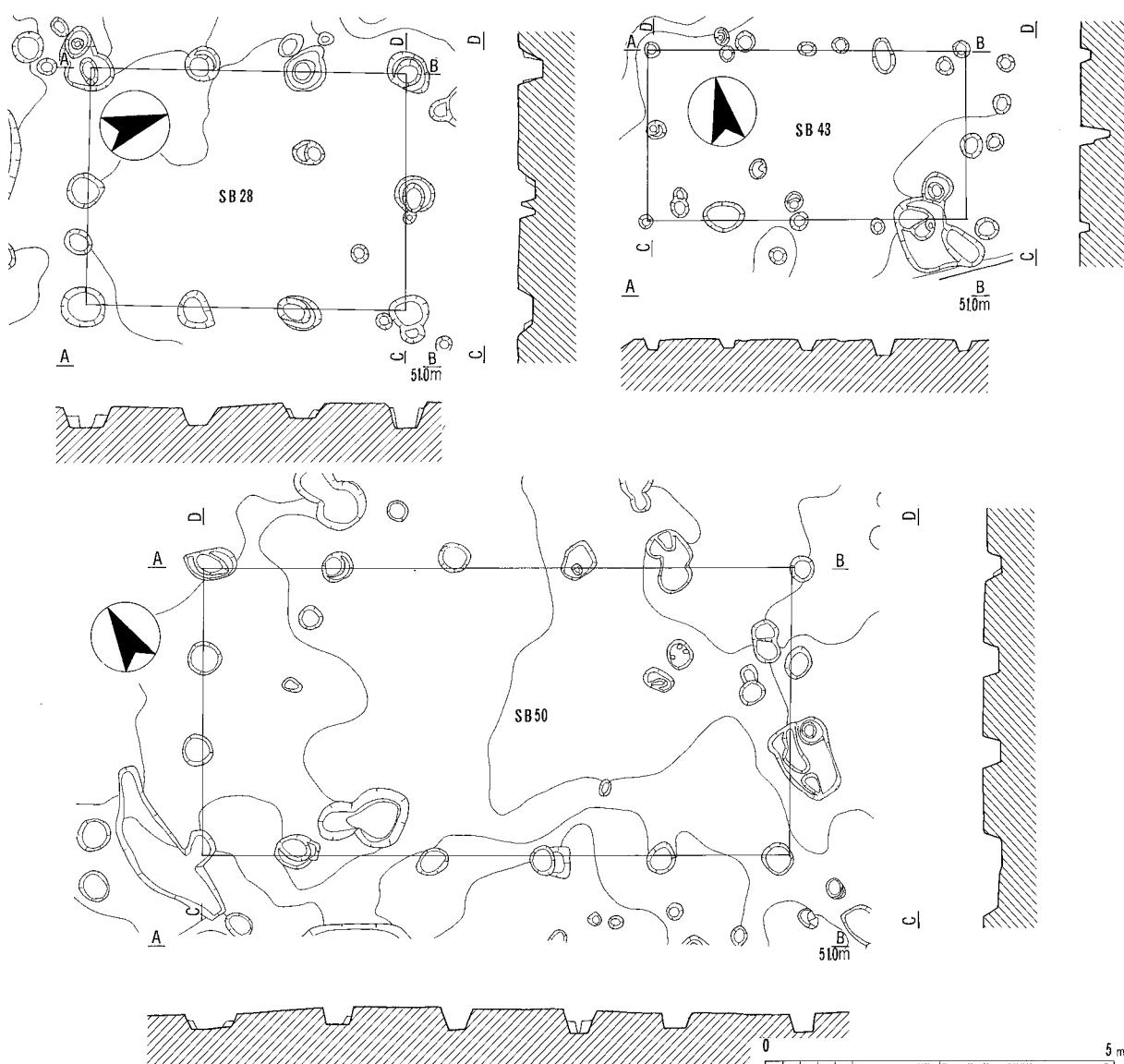
A 竪穴住居（第42・57図）

S H19 調査区中央部のやや西寄りで、古墳時代の竪穴住居群近くに位置する。検出面での削平が著しく、東壁及び南壁の東側は検出できなかった。東西3.7m、南北3.6～4.0mのやや歪な平面形をなす。検出面からの深さは、西側の遺存状況の良いところ

で10cm程度である。柱穴は、主柱穴の内南東隅部の柱穴を欠く、P 1～P 3の3柱穴が検出された。径30cm・深さ10cmである。カマドの付設は不明である。床面から須恵器（307）が出土した。

B 掘立柱建物（第44・57図）

S B28 調査区中央部で竪穴住居SH19の東方に位置する。桁行3間（4.5m）×梁行2間（3.4m）の南北棟の建物である。桁行の柱間は1.5m等間、梁行の柱間は1.7m等間である。柱穴の多くで径約30cmの柱根痕を確認した。柱穴掘形は、径50～60cm・深さ21～50cmと不揃いであるが30cm前後のものが多い。須恵器甕F（308）が出土した。



第44図 SB28・43・50実測図（1:100）

S B 43 調査区中央部南端に位置し、桁行4間(4.4m)×梁行2間(2.5m)の東西棟の建物である。桁行の柱間は1.1mの等間、梁行の柱間は1.25mの等間である。柱穴掘形は、径20cm前後、深さは6~44cmと不揃いであるが、15cm前後のものが多い。土師器甌(316)が出土したが、柱穴の形状からやや時期の降る可能性もある。

S B 50 調査区中央部のやや東寄りの、一段低い地区に位置する。桁行5間(8.6m)×梁行3間(4.2m)の東西棟の建物である。桁行の柱間は、南側柱列と北側柱列でやや不揃いであるが、北側柱列で西から1.8m+1.8m+1.8m+1.4m+1.8mと東2間目の柱間が狭い。梁行の柱間は1.4mの等間である。柱穴掘形は径40cm前後・深さ12~33cmと不揃いであるが20cm前後が多い。出土遺物はない。

C 土坑(第43・57図)

S K 8 調査区西部の下層に位置する。東西約1.5m、南北1.4m、深さ20~25cmの略方形をなす。北東隅部にピット状の張出部をもち、底から約15cm上で須恵器甌B(311)が口縁部を下にしてつぶれた状態で出土した。また、土坑埋土から土師器甌B(309)須恵器壺(310)が出土した。

S K 18 壇穴住居S H19の北に位置する上層で検出した。東西約2m・南北約1mの橢円形状を呈し、深さは検出面から約10cmである。

土師器皿(312)と須恵器杯B(313)・同杯O(314)が出土しているが、須恵器杯は時期差が大きく313は混入物と考えられる。

S K 68 径50cm・深さ17cmの円形土坑である。土師器甌F(315)が出土した。

S K 47 古墳時代の土坑S K46の上層で検出された。径20cm・深さ30cmのピット状の土坑である。須恵器杯L(317)が出土。

S F 72 調査区東部で、壇斜面の上層で検出された。屋外炉かと推定される焼土塊に混入して、土師器甌F(318)と須恵器杯E(319・320)が出土した

(3) 平安・鎌倉時代

平安時代後半から鎌倉時代にかけての遺構は、調査区全域に広がっているが、概して調査区中央部から東部にかけての一段高い部分で検出された。

検出された遺構は、掘建柱建物7棟・土坑墓1基・

溝などである。

A 掘建柱建物(第45図・46図・61図)

S B 13 調査区中央部の一段高い地区に位置し、数棟の建物群が検出された1棟である。S B 13は、南北棟の建物と推定され桁行1間以上(2.7~2.9m)×梁行2間(4.7m)である。柱間は、桁行では東西の側柱で不揃いとなる。梁行の柱間は、2.35mの等間である。柱穴掘形は、径30~60cm・深さは12~53cmで不揃いである。柱穴からは、土師器・瓦質土器片が出土している。

S B 14 調査区中央部の一段高い地区に位置し、数棟の建物群が検出された1棟でS B 15・S K 12と重複する。桁行3間(6.8m)×梁行2間(5.4m)の南北棟の総柱建物である。桁行の柱間は、不等間となり北から2.6m+2.0m+2.2mである。梁行の柱間は、2.7mの等間である。柱穴掘形は径50cm前後・深さは16~49cmで30cm前後のものが多い。梁行北側柱中央の柱内には、3個人頭大の河原石が置かれる。P 1から土師器碗(447)、P 2から灰釉碗(448~450)が出土している。

S B 15 調査区中央部の一段高い地区に位置し、S B 14・S K 12と重複関係にある。桁行4間(5.8m)×梁行2間(3.2m)の東西棟の建物である。桁行の柱間は、東から2間目を1.3mと狭くする他は、1.5mの等間である。梁行の柱間は、1.6mの等間である。柱穴掘形は、径30~50cm・深さ9~35cmであるが、径30cm・深さ20cm前後のものが多い。柱穴からは、土師器・灰釉片が出土している。

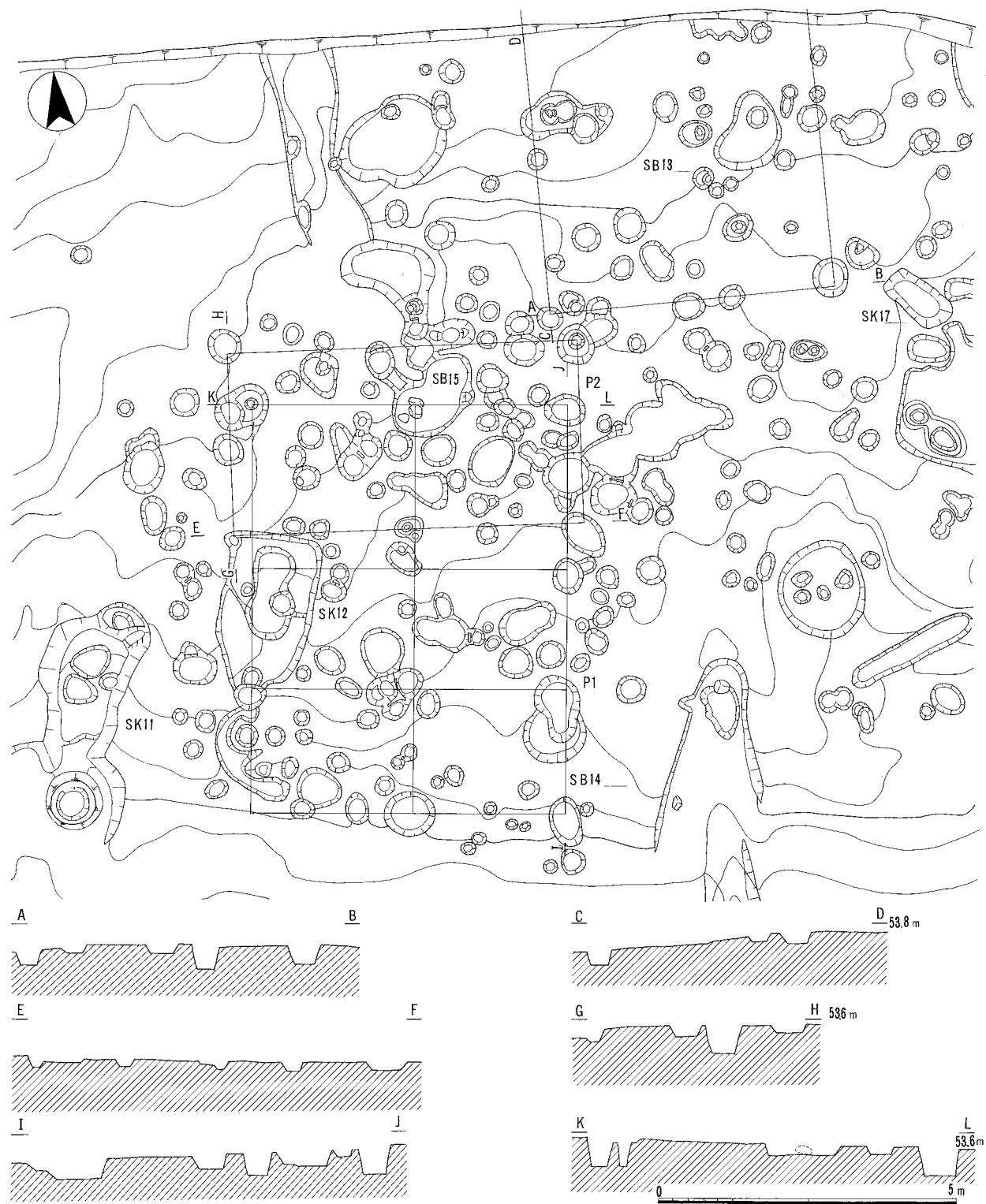
S B 16 調査区中央部の一段高い地区に位置し、S B 13~15の東に位置する。桁行3間以上(4.8m)×梁行2間(4.5m)の南北棟の建物である。柱間は、桁行で1.6m。梁行で2.25mの等間である。柱穴掘形は、径50cm前後・深さ20~30cmでわずかに方形に近い形態をなす例もある。柱穴から土師器甌(451)と灰釉碗(452)が出土している。

S B 32 調査区中央部に位置する。桁行3間(3.9m)×梁行2間(3.4m)の方形に近い東西棟の建物である。柱間は、桁行で西から1.5m+1.1m+1.3mである。柱穴掘形は、径20~40cm、深さ10~30cmと小さい。柱穴からの出土遺物はない。

S B 47 調査区中央部の南の一段低いところに位置

する。SK47・SD48と重複関係にある。桁行3間(5.1m)×梁行2間(3.4m)の南北棟の建物である。柱間は桁行でやや不揃いで北から1.4m+1.5m+1.5m、梁行は1.7mの等間である。柱穴掘形は、径20~40cm・深さ15~30cmで小さい柱穴が多い。柱穴からの出土遺物はない。

SB73 調査区東部に位置し、建物北側近くには新しい溝が行走して東流し、南西に隣接して井戸SE72がある。SB73は、桁行3間(6.4m)×梁行2間(4.4m)の東西棟の建物である。柱間は、桁行で不揃いで西から1.9m+2.3m+2.2m、梁行は2.2mの等間である。柱穴掘形は、径20~40cm、深さ20~50cmと全



第45図 SB13~15, SK11~12実測図(1:100)

体的に小さい。柱穴から、山茶椀底部（453）が出土している。

B 中世墓（第47・62図）

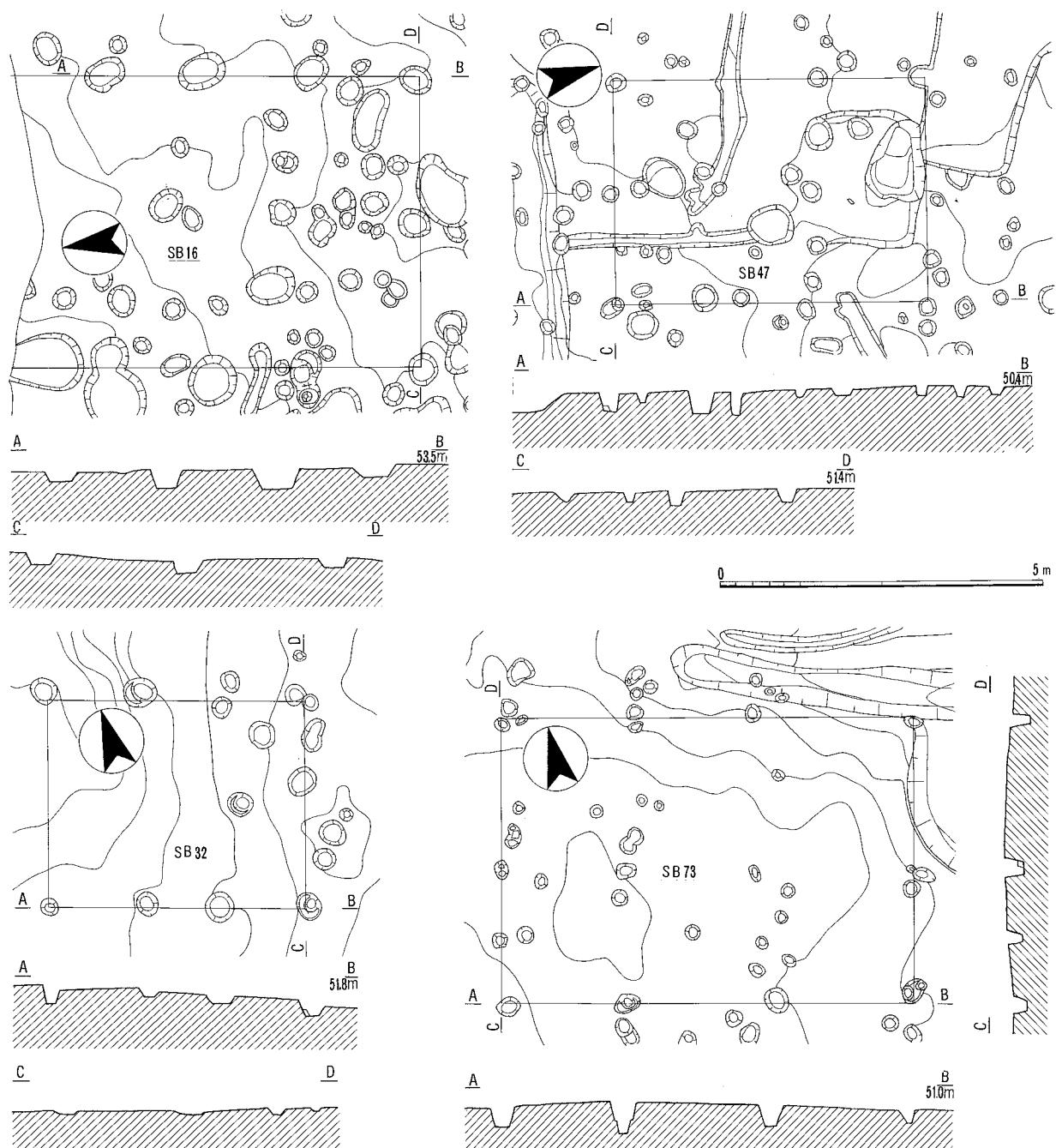
S X 6 調査区西部の壇の南斜面に位置する。上面径0.95~1.1m、底部径0.5m、深さは検出面から約0.8mで素堀の土坑内に偏平な石を棺台として据えたものと思われる。土坑上部の斜面に山茶椀（477）、中央部斜面に山茶椀底部（478）が出土しており、供獻用の土器の一部と考えられる。形状から、座棺を用いた

中世墓と推定される。

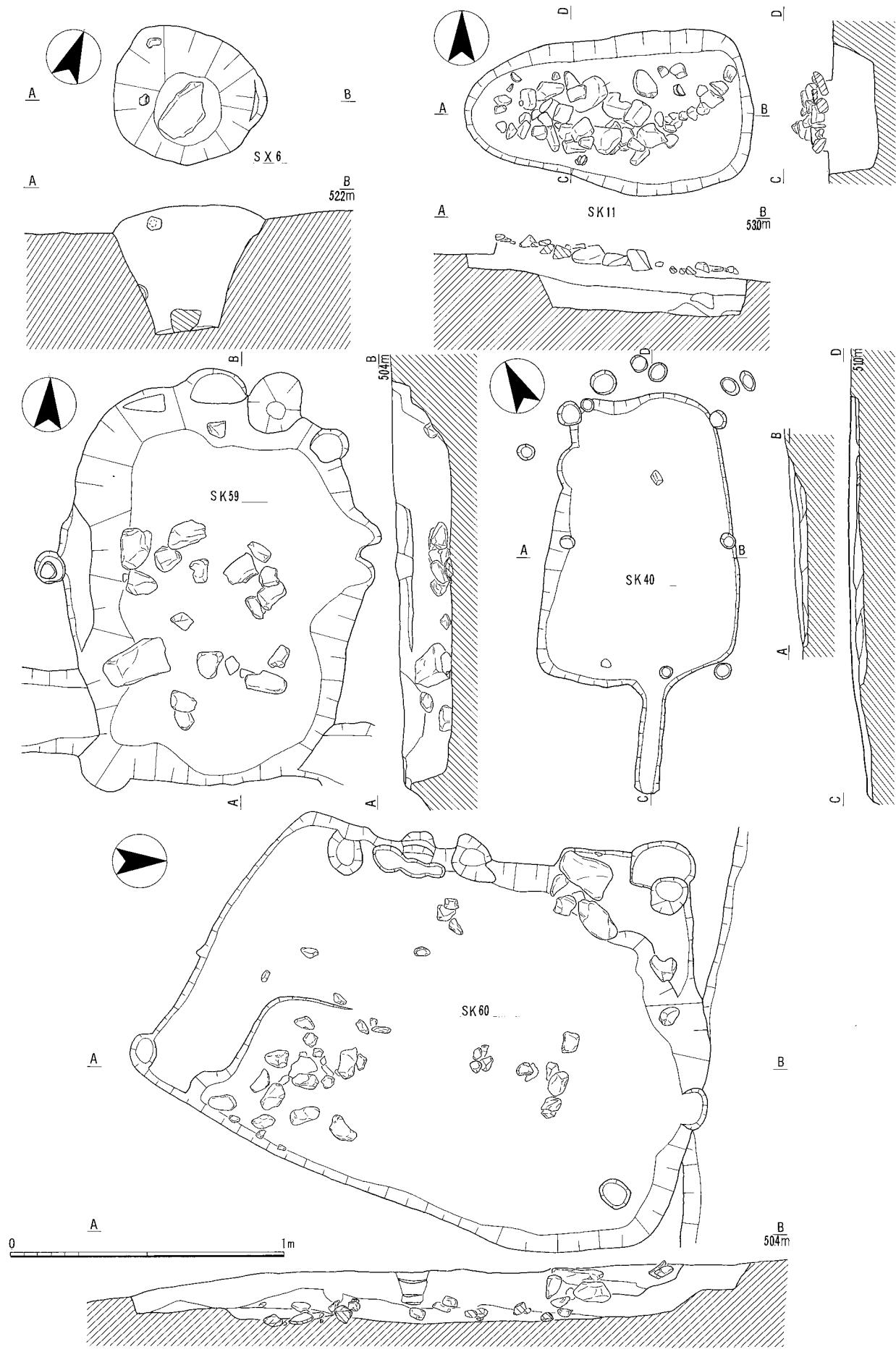
C 土坑（第47図・61図）

S K 26 長径0.6m・短径0.4m・深さ6cmの浅い土坑内に、径0.1m・深さ9cmの小坑をもつ小土坑である。灰釉椀（465）が出土。

S K 9 調査区中央西寄りの壇下低地の上層で検出した不整形の土坑である。検出面からの深さは、10cmほどの浅い土坑である。土師器皿（454）、灰釉椀（455）の他土錐が出土。



第46図 S B 16・32・47・73実測図 (1:100)



第47図 S X 6 SK 11・40・59・60実測図 (1:20)

S K10 調査区中央西寄りの低地の上層で検出され、S K 9 の北に位置する。径0.4m・深さ0.35mのピット状の小土坑である。灰釉椀（462）が出土。

S K42 調査区中央西寄りの低地の上層で検出され、S K 9 の北東に位置する。径0.5m・深さ0.4mの円形のピット状の小土坑である。ほぼ完形の灰釉椀（466・467）2点が出土。

S K11 堀建柱建物SB14～15の西に位置する。楕円形で、長径2.5m・短径1.5m・深さ0.2mの土坑である。土坑埋土土層には、拳大から人頭大の石が不規則に詰められていた。土師器皿（456）・椀（457）、清郷型甕（458）、灰釉椀（459～461）が出土。

S K12 S K11の東側でS B 14・15と重複関係にある。略方形で長辺2.5m・短辺1.5m・深さ5cmの浅い土坑で、内部に径0.4m前後・深さ0.2mのピット状の小穴をもつ。土師器小皿（463）、灰釉椀（464）が出土。

S K27 調査区中央の低い地の上層で検出され、古墳時代の竪穴住居のSH23と重複関係にある。径0.3m・深さ0.2mのピット状の小土坑である。底部近くから、土師器皿（468）、ロクロ土師器台付皿（469・470）が折り重なるように出土。

S K30 調査区中央南の低い地の上層で検出された。長辺0.5m・短辺0.3m・深さ0.2mの方形の土坑である。灰釉椀（471～473）が出土。

S K36 径0.3m・深さ0.2mの小さな土坑である。灰釉椀（474）が出土。

S K58 径0.4m・深さ0.3mのピット状の土坑である。灰釉長頸壺（475）が出土。

S K60 調査区東部の壇上で検出された。径0.3m・深さ0.3mのピット状の小土坑で、製塩土器（476）が出土。

S K33 径0.2m・深さ17cmのピット状小土坑である。山茶椀（479）と山皿（480）が出土。

S K34 堀立柱建物SB32の北東に近接して位置する。長径1.0m・短径0.9mのほぼ円状で、深さ45cmの土坑である。土師器小皿（481）山茶椀（482～484）が出土し、その他破片も多いことから廃棄土坑と考えられる。

S K35 径0.3m・深さ0.2mのピット状小土坑である。山皿（487）が完形で、正立の状態で出土。

S K37 S K35と近接した位置にある。径1.0m・深さ0.4mの円形の土坑で、底部に入頭大の石が3個並べられている。埋土から完形の山皿（497）が出土。

S K38 径0.4m・深さ0. mのピット状の小土坑である。山茶椀（485）が出土。

S K39 径0.4m・深さ0.2mのピット状の小土坑である。山茶椀（486）が出土。

S K40 東へ緩かに傾斜する調査区中央の壇裾部に位置し、南北方向に細長い長方形形状をなす。南北長約4.2m・東西2.0～2.8mで南側がやや広くなる。深さは、約0.2mで南側に傾斜し、南辺東部には、溝が設けられる。南東隅部を除いた各辺には、ピットが認められ、1間（3.7m）×1間（2.1m）の覆屋が想定できる。南の床面及び南辺には、白色粘土が残されていた。土坑内からは山茶椀（488～493）・山皿（494）、白磁（495・496）が出土。

S K51 調査区東部で壇が弯曲した地区の上層では、大小の方形の土坑群が検出された。S K51はこれらの土坑群で最も西に位置する。1.5m×1.2mの方形土坑で、土師器皿（498）、山茶椀（499）が出土。

S K52 調査区東部の方形土坑群の一つで、1.8m×1.7mの方形に近い土坑である。山茶椀（500・501）が出土。

S K53 調査区東部の方形土坑群の一つである。1.9m×1.1mのやや台形状を呈する。土師器羽釜（502）・山茶椀（503・504）が出土。

S K54 調査区東部の方形土坑群の間に位置する。径0.4m・深さ0.2mのピット状の小土坑である。片口鉢（509）の破片が出土。

S K55 調査区東部の方形土坑群の南に位置する。径0.6m・深さ45cmの円形土坑である。埋土から砥石（514）が出土。

S K56 調査区東部の方形土坑群の一つであり、S K57と重複関係にあり、SB56が古い。一辺1.2mの方形で深さは0.2mである。土師器・山茶椀片が出土。

S K57 調査区東部の方形土坑群の一つであり、S K56と重複関係にあり S K57が新しい。一辺1.2mの方形で深さは0.3mである。S K56と同じく土師器・山茶椀片が出土。

S K59 調査区東部の方形土坑群の一つで、S K60と重複関係にあり S B59が新しい。南北長約2.9m・

東西最大幅約2.0mで、中央部がわずかに張り出す長方形形状の土坑で、深さは約0.3mである。土坑内中央部に、長さ0.2~0.5mの比較的角張った石が不規則に置かれている。石群内から山茶椀（505・506）、壺（507）、砥石（508）の他、土師器・山茶椀片が出土。

S K 60 調査区東部の方形土坑群の一つであり、S K59と重複関係にあり、S K60が後行する。長さ3.2~3.8m×幅2.6mの台形状をなし、深さは0.3mほどである。土坑内の北西隅部の肩、南東部及び中央北部には、大小の石が認められた。土師器・山茶椀片が出土。

S K 74 調査区東端部に位置し、径0.2m・深さ10cmのピット状の小土坑である。山茶椀（511）出土。

S K 75 調査区東端部に位置する。径0.9~1.0m・深さ21cmの円形土坑である。土師器鍋片（512）、山茶椀底部（513）が出土。

S K 76 調査区東端部に位置し、径0.2m・深さ31cmのピット状の小土坑である。砥石（515）が出土。

S K 29 調査区中央部に位置する。径0.2m・深さ13cmのピット状の小土坑である。白磁椀（510）が出土。

D 溝

S D 48 調査区東部壇下の下層で検出された溝で、堀建柱建物 S B 47と重複関係にあるが新旧は不明である。S D 48は、幅0.2m・深さ0.2mで長さ3mほどの小さな溝であり、溝内から完形の山茶椀（522）が倒立して出土。

S D 77 調査区南東隅部は弯曲した壇があり、その壇上を弯曲してめぐる溝である。溝の幅は、0.7~1.4mであり中央部で2条に分岐している。深さは0.2~0.3mである。土師器の鍋（516）の他山茶椀片などが出土。

S D 78 調査区の南東隅部に位置し、弯曲する壇上を東西方向に流れる溝である。幅1.1~1.4m・深さ0.1mほどの浅い溝である。土師器鍋（517）・羽釜（518）、山茶椀（519~521）などが出土。

（駒田利治）

(5) 戦国・江戸時代

戦国末期から江戸時代初頭にかけての遺構は調査区の東北区域に集中している。検出された遺構は掘立柱建物3棟、井戸4基、土坑7基などである。また、遺構周辺の直交する数多くの溝は出土遺物こそないが、この時期の遺構と考えられる。なお、この正知浦遺跡は、亀山市亀田町地内に属するが、「九九五集」（元禄15年）には「亀田村家屋敷21」との記録がある。江戸時代以前の記録には「亀田」の村は無く、「椿世」の分村として独立したと考えられる。また、地元の伝承として『元々亀田村はこの正知浦の地に村があったが、江戸時代の初めになって、今の地（正知浦遺跡の西北約500m）に移ってきた』とあり、この伝承と遺構との関連が注目されるところである。

A 掘立柱建物（第48図）

S B 63 調査区の北端で検出された掘立柱建物である。4間×2間の総柱の東西棟で、棟方向はN68°W、桁行8.3m、梁行4.8mを測る。柱間は桁行方向南側が2.1+2.4+1.8+2.0m、梁行方向西側が2.4mの等間で、柱穴幅0.3~0.4m、深さは検出面より0.4~0.6mである。建物の南側と西側に雨落溝を伴い、北側に棟方向とやや方向を異なる東西の柵列を有する。

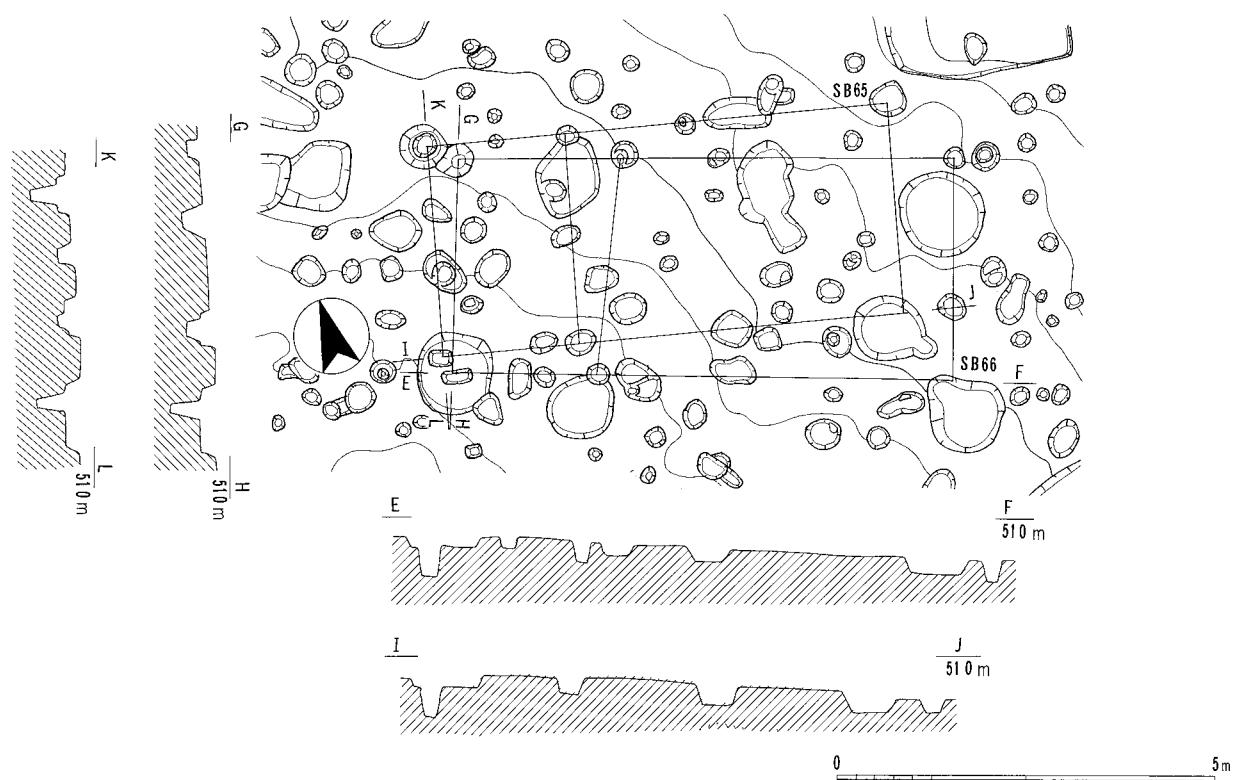
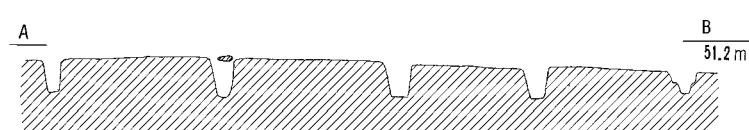
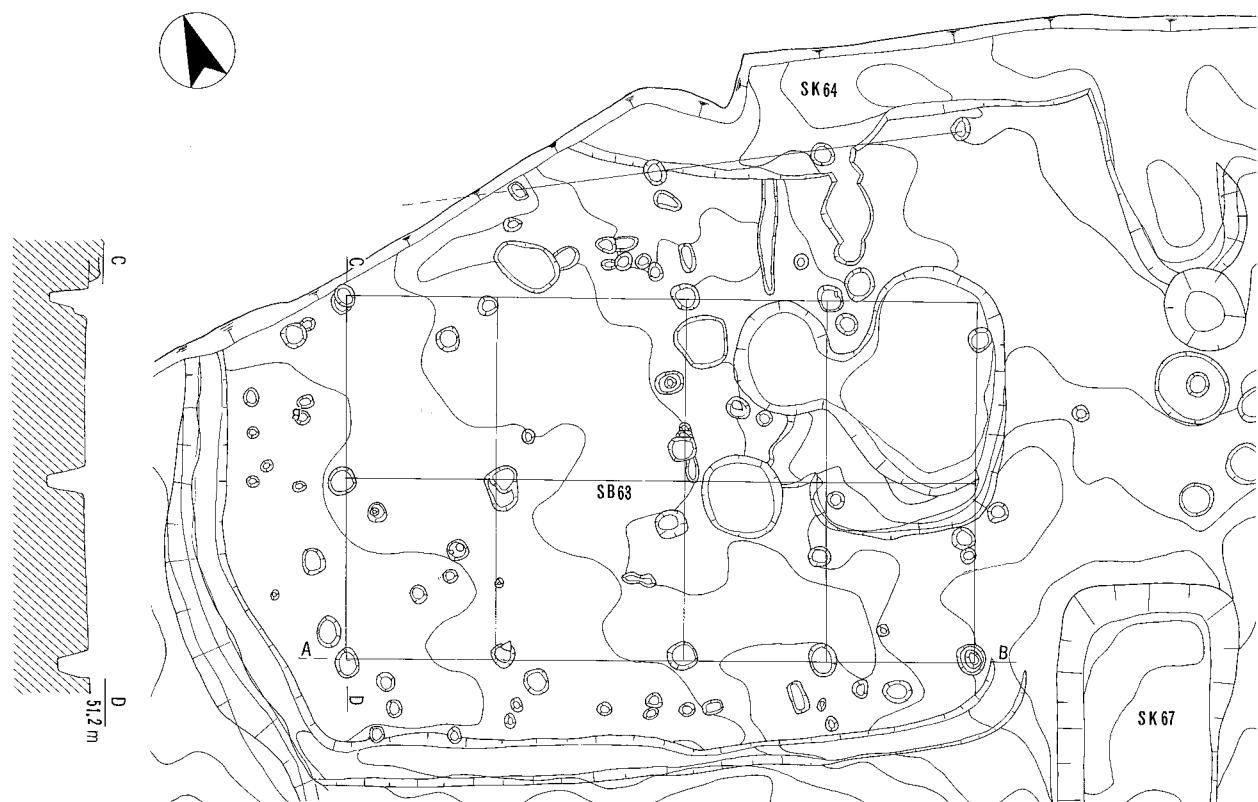
S B 65 S B 63の東南約20mの位置する掘立柱建物である。3間（6.5m）×2間（3.1m）の東西棟で、棟方向はN72°Wである。柱間は不揃いで、柱痕跡径は0.3~0.4、深さは検出面より0.3~0.5を測る。

S B 66 S B 65と重なる掘立柱建物である。3間（6.1）×2間（2.8m）の東西棟で、棟方向は80°Wである。柱間は不揃いで、柱穴にもバラつきがある。深さは検出面より0.3~0.4mである。

B 井戸

S E 69 S K 67の南方で検出された素掘りの井戸で、ほぼ真円に近い形状であり、径1.1m、深さは検出面より2.20mを測る。以下の井戸共、岩盤をくり抜いて造られており、保水性のよい井戸である。出土遺物は擢鉢、鍋類を中心に出土したが、天目茶碗（629）がS K 67出土遺物と接合関係にある。

S E 71 S B 66の南側に位置する素堀りの井戸である。二重構造で、上段は径1.5m、検出面より1.85mの深さで段を持ち、さらに径0.5m、深さ1.65mで底



第48図 SB63 SB65・66 実測図 (1:100)

に達する。幅0.5~0.7mの南北溝と重複するが、同時に存在していたのだろう。出土遺物は擂鉢、土師器羽釜類の破片に留まる。

S E 62 S E 69の南方に位置する素堀りの井戸であるが、4つの井戸は互いに14~15mの等間隔の位置にある。口径は長径1.3m、短径1.0mの楕円形を呈するが、底は径0.8mの円形である。深さは検出面より2.65mを測る。出土遺物は擂鉢の破片（639）のみである。

S E 61 調査区の南端で検出された素堀りの井戸で、径1.2m前後のやや異質な円形を呈する。深さは検出面より2.25mを測る。出土遺物は実測不能な近世初頭の土器片のみである。

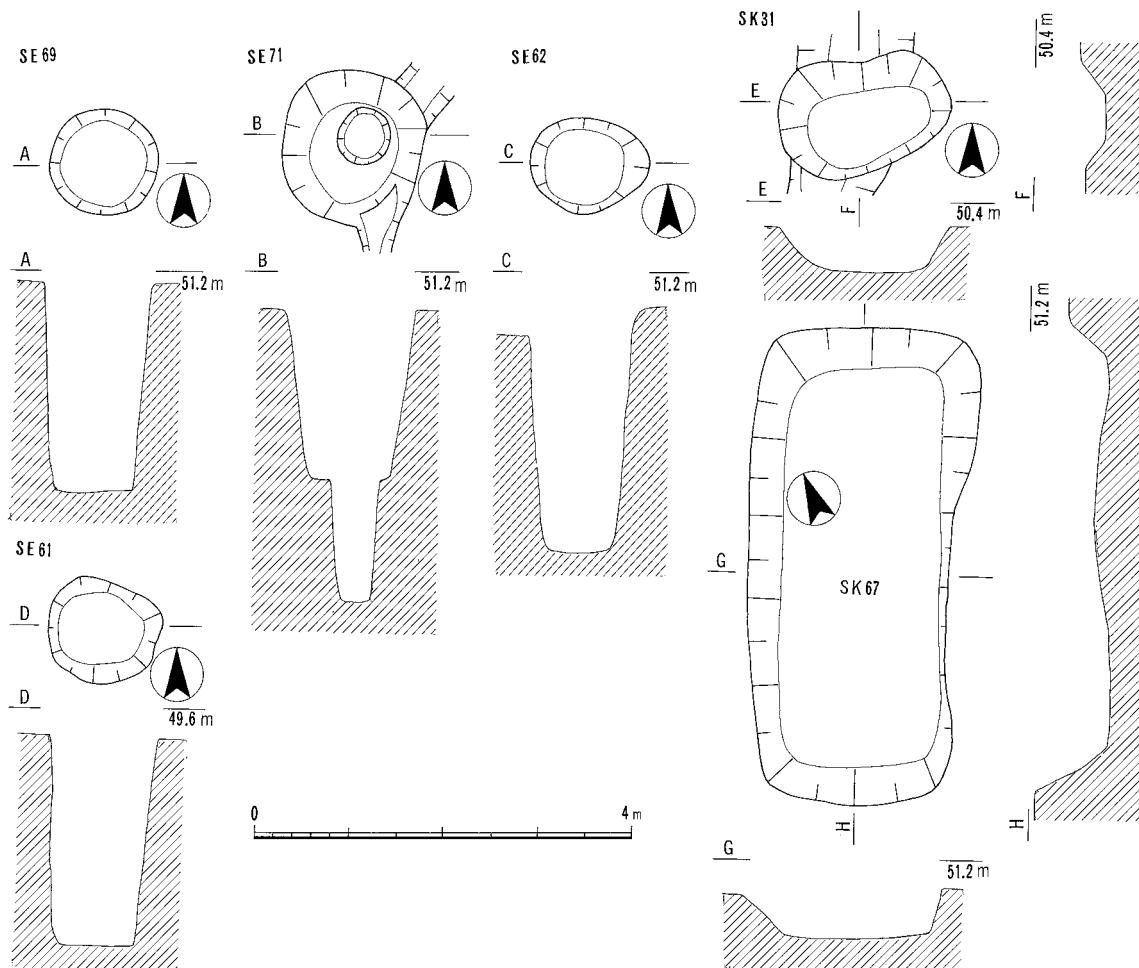
C 土坑

S K 31 調査区のほぼ中央下方で検出された土坑で、近代と思われる溝と重複している。長径1.8m、短径1.25mの楕円形を呈し、深さは検出面より0.5mである。土師器小皿片が数点出土したに留まる。

S K 64 S B 63の北方で検出された。調査区外に広がっているため全形は不明であるが、現況で東西幅6.8m以上測る。最大深度は検出面より0.3mと浅く、土坑というより落込み的なものと考えられる。瀬戸・美濃系の皿、碗、鉢、伊万里系染付等土器類が多数出土している。

S K 79 S K 64と北側で重複しており、全形は不明であるが、南北に細長い。東西1.6m、南北2.8m以上を測る。深さは0.35mと浅い。出土遺物は土器小片に留まる。

S K 67 S B 63の南側で検出された。東西2.4m、南北5.0mの隅丸長方形を呈し、最大深度は検出面より0.75mと深い。S B 63と桁方向を同じくし、出土遺物などからも S K 64、S E 69に付属するものである。遺物の出土状況から廃棄土坑と考えられ、出土遺物も常滑系擂鉢、瀬戸・美濃系鉄軸陶器、志野、伊万里系染付等、多種多量である。



第49図 S E 61・62・69・71、S K 31・67実測図 (1:80)

S K80 S K79とS K81の間にある土坑で、上端は調査区外で全形状は不明であるが、やや変形した四角形を呈している。東西4.8m、南北5.5m以上で最大深度は検出面より0.5mを測る。出土遺物は土師器皿、羽釜の破片が出土したに留まる。

S K81 S K80東方約10mに位置し、北端調査区外、南は溝によって切られているため、全体の形状は不明であるが、矩形を呈するものと考えられる。東西4.0m、南北2.5m以上、最大深度は検出面より0.4m

を測る。出土遺物は常滑甕、土師器羽釜、砥石等がある。S K79、S K67、S K80、S K81は方向を同じくし、出土遺物からも同時期の遺構であろう。

S K82 S K74の南で検出された土坑である。南側は東西溝によって切られているが、楕円形になるものと考えられる。東西1.1m、南北1.7m以上で最大深度は検出面より0.25mである。出土遺物は土師器鍋、羽釜等の破片である。

(浅尾悟)

2 遺物

(1) 縄文時代

正知浦遺跡からは、包含層から約20点の縄文時代の土器・石器が出土している。

縄文土器はすべて深鉢の破片で、口縁部片から底部片まであり、おそらく3個体以上あるとみられる。

口縁部は、頂部がやや内弯する山形突起をもつ近畿地方の北白川C式C類に属するもの（108）と、波状口縁になるとみられるもの（109,110）がある。また、（108・109）は口縁端面にも縄文が施される。頸部は（111・112）のようにやや内弯気味になるものと、同一個体とみられる（113～120）のように、やや外反する頸部からすばり気味に胴下部に続くものがある。底部は2点あり、いずれも平底で底面には網代痕などはみられない。

器表面の文様は、棒状工具による口縁部文様帶の渦巻沈線文・蛇行沈線文・橢円窓枠状区画文・木葉形区画文・頸部の連弧文、胴部の3条1単位の垂下沈線文があり、それらの間に主として粗いLR縄文を施す。

これらはほぼ同時期のものと考えられるが、山形突起状口縁のもつ（108）に施される文様は、地文の縄文を除き、沈線によるもののみで、隆帯はみられない。現在鈴鹿川流域付近で北白川C式C類の土器が出土した遺跡には、鈴鹿市東庄内B遺跡、同市北一色遺跡、同市起遺跡などがあるが、沈線を主体とする点や、発達した連弧文を持つ資料が含まれる点、ラフな蛇行垂下沈線をもつなど、これらは在地的といえる共通点を持ち、資料点数の制約があるが、北白川C式の中でも比較的新しい段階に併行するものと考えられる。

石器は5点出土している。（123～126）は石鏃で、（124）はチャート製、他はサヌカイト製である。（127）はチャート製の有舌尖頭器で、茎部を欠損する。残長4.4cm、幅2.4cm、厚さ0.7cm、重さ5.33gを測る。側縁がややふくらむプロポーションで、刃部には細かい鋸歯状のタッチがあるが、石材は節理が入るやや粗雑な物を使用している。

（大川勝宏）

(2) 古墳時代

古墳時代の遺物は、当遺跡出土遺物の中心である。しかし、遺構から一括して出土しているものは少なく、SH21・SH23から比較的まとまった出土はあるものの、その大部分は包含層出土である。土師器は、大部分が甕で若干の杯、壺、鉢、甌が、須恵器では、杯、蓋を中心に壺、甕、高杯、提瓶等が出土した。また、多数出土した器種については以下の基準で分類を行った。

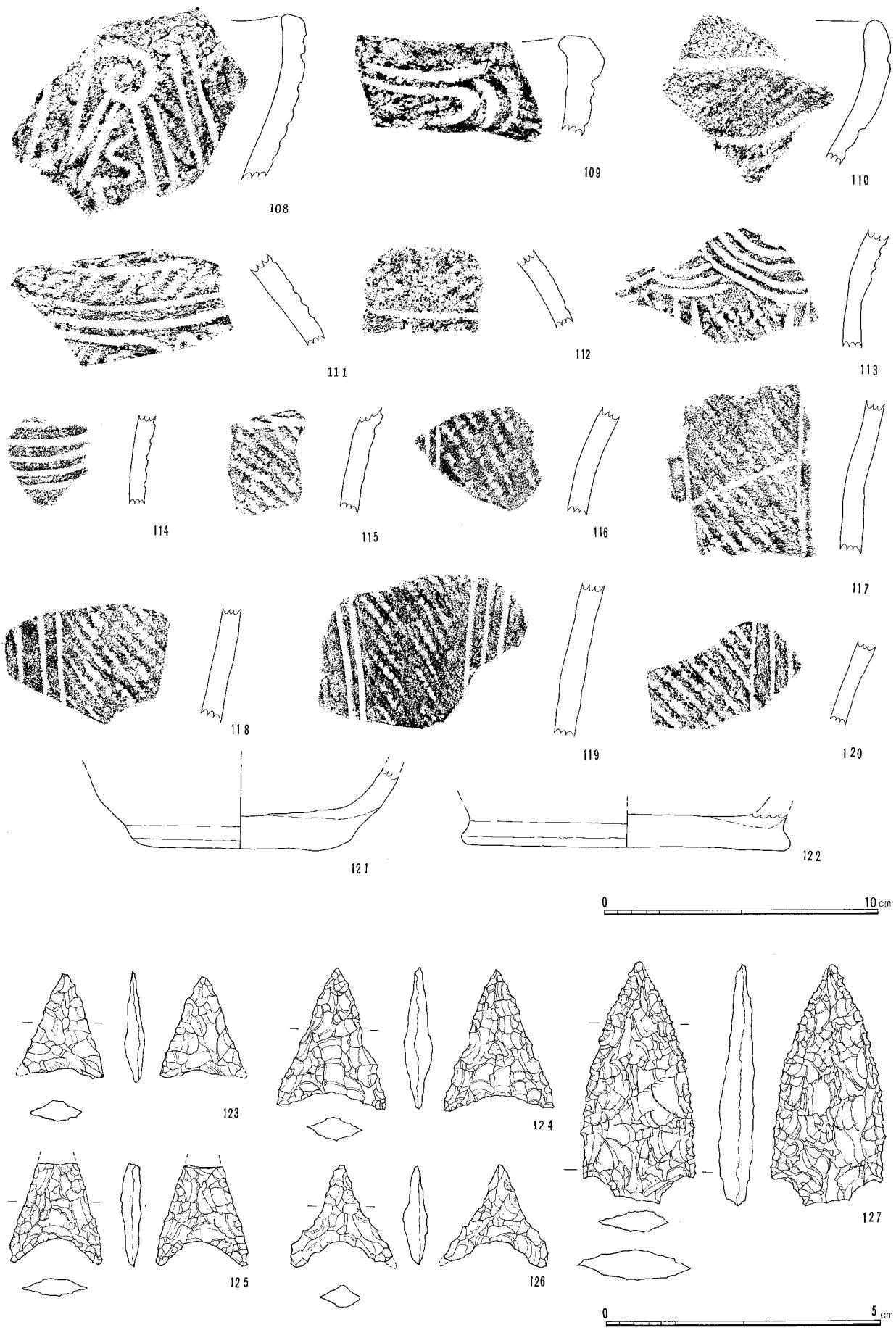
A 遺物の分類

(a) 土師器

甕 球形の体部に外反する短い口縁部が付くものを甕A、外反する比較的長い口縁部が付くものを甕B、外反する口縁部が付くが、頸部の締まりが弱く下脹れの体部になるものを甕C、体部の張りがなく鉢に近い形態のものを甕D、長胴で脹らみを残すものを甕E、体部の脹らみがなく甕Dを長胴にした形態のものを甕F、球形の体部に直立する短い口縁部が付くものを甕G、壺に近い特殊な形態、調整のものを甕H、脚台の付くものを甕Iの以上9形態に分類した。甕Bは口縁端部の形態によりさらに細分され、つまり上げるものを甕Ba、やや肥厚して丸くおわるものを甕Bb、そのまま丸くおさめるか外に弱い面をもつものを甕Bc、細くなつておわるものを甕Bdとした。また、甕Fは飛鳥・奈良時代にも存在するが、体部内面のハケ目をナデ消すものをこの時代のものとした。さらに口縁端部の形態により細分され、軽くつまり上げ外に面をもつものを甕Fa、そのまま丸くおさめるものを甕Fbとした。

(b) 須恵器

蓋 丸味をもつ天井部から内弯ぎみに下がる口縁部をもつものを蓋A、平らな天井部から内弯ぎみに下がる口縁部をもつものを蓋B、平らな天井部から「ハ」の字に開く口縁部をもつものを蓋C、偏平なつまり高杯の蓋と思われるものを蓋D、蓋Aと同様な形態だが、器高に比して口径が小さく壺の蓋と思われるものを蓋Eの5形態に分類した。さらに各形態とも共通の基準で細分を試みた。天井部と口縁部の境に段や沈線の残るものをa、消失しているもの



第50図 石器 (1:1)、縄文土器実測図 (1:2)

をbとして、口径によっては12cm未満の小形のものを2、それ以上のものを1とした。

杯 立ち上がりが比較的高いものを杯A、立ち上がりが低く内傾するものを杯B、杯Bと同様な形態だが口径に比して器高が低い偏平な形態のものを杯C、立ち上がりが極めて低く、受部との高低差がほとんどないものを杯Dの4形態に分類した。さらに、蓋と同様に共通の基準で細分を試みた。口縁端部内面に段か面をもつものをa、丸くおさめるものをbとし、口径が10cm未満の小形のものを2、それ以上のものを1とした。

壺 球形の体部に緩やかに外反する長い口縁部が付くものを壺A、若干外方へまっすぐ延びる比較的短い口縁部をもつものを壺B、脚台の付くものを壺C、一対の環状把手が付くものと思われ、あまり類例をみない特殊な形態のものを壺Dの4形態に分類した。

甕 外反する口縁部で、端部は外に面をもちやや上方に肥厚し、さらに口縁端部近くの外面に凸線を巡らすものを甕A、外反する口縁部をもち、端部は上下に突出し外に面をもつものを甕B、外反する口縁部で、端部は外に折り返すものを甕C、外反する口縁部で端部は上下にやや肥厚し外に面をもつものを甕D、短く外反する口縁部で、端部は大きく上下に肥厚するものを甕Eの5形態に分類した。甕B、甕C、甕Dは飛鳥・奈良時代にも存在するが、全体に鋭利な仕上げのものを甕Ba、口縁端部の折り返した先が凸線になるものを甕Ca、口縁端部の肥厚がやや大きいものを甕Daとし、それぞれこの時代のものとした。

高杯 有蓋で短脚のものを高杯A、有蓋で長脚一段透かしのものを高杯B、有蓋で長脚二段透かしのものを高杯C、無蓋で短脚のものを高杯D、無蓋で長脚のものを高杯Eの5形態がある。高杯Dは基部の太いものをDaと細いものをDbに細分される。

B 壱穴住居出土の遺物

S H21、S H23から比較的まとまって出土した

S H21 図示できた土師器はすべて甕である。128～130は甕B、131～134は甕Eで、甕BはすべてBaである。129・130は口縁部の外反が小さく別形態ととらえることも可能である。甕B、甕Eとも大小2形態がある。調整はすべて1cmに7本前後のハケが中心で

あるが、甕Eは体部内面をナデ消している。129は口縁端部近くの外面に一条の浅い沈線を巡らしている。須恵器には蓋と杯がある。135・136は蓋Ab1、137は杯Ba1、138は杯Cb1である。135の天井部外面のヘラケズリはロクロを使用していない。

S H23 土師器の杯・甕、須恵器の杯・高杯、土玉が出土した。土師器では、139は甕C、140は甕Bc、141は甕Gで、いずれも小形のものである。体部外面は3者とも1cmに6～8本のハケで調整するが、内面は139・140はナデ、141はヘラケズリで調整されハケ目は認められない。また、142は椀と呼ぶべきかも知れない。須恵器では143・144は杯Bb1、145は高杯Aである。145の底部内面には焼成後鋭利な工具で「+」の記号が刻まれている。

C 土坑出土の遺物

S K26 比較的まとまって出土した。土師器では147は粗製の杯、148～152は甕で、148は小形の甕Bb、149は中型の甕Bc、150は中型の甕E、151・152は甕Fbである。甕の調整はすべて体部外面1cmに8本のハケ目、内面ナデである。153は須恵器の蓋Dである。天井部外面にカキ目を施すが自然釉が厚くかかり重ね焼きのためか別個体片が釉着している。

S K46 154～156が出土した。154は粗製の土師器の鉢である。155は須恵器の高杯A、156は高杯Daである。156の外面全面と杯部内面には自然釉がかかり正立状態で焼成されたものらしい。

S K1 157・158が出土した。157は須恵器の鉢、158は蓋Aa1である。157は一ヶ所に片口を設け、調整にはロクロを使用しておらず外面ヘラケズリ、内面は板状工具によるナデである。

S K24 159が出土した。中型の土師器甕Gであるが、ハケ目は施さず外面未調整、内面板状工具によるナデか。

S K25 165～168が出土した。165は土師器甕Ba、166は同じくBd、168はFaである。甕Bは口径13cm～14cmの小形のものであるが、甕Fは口径30cm以上の大形のものである。165の体部外面は1cmに7本のハケ目、内面はやはりナデで調整する。166は摩滅により調整を観察することができない。167は須恵器蓋Bb2である。

S K5 169・170が出土した。169は須恵器蓋Ab1

で、170は同じく杯Bb1で両者は対になるものである。

S K31 171は土師器の壺である。しかし外面の調整にはロクロを使用し上半をカキ目、下半をヘラケズリする。

162は、SK70出土の土師器甕Ba、163はSK44出土の須恵器高杯Db、164はSK29出土の須恵器蓋Ab2、172はSK45出土の金属製耳環、173・174はSK17出土の滑石製白玉である。

D 溝出土の遺物

160・161はSD2出土で、160は須恵器の杯Bb1で、161は高杯Cである。

E 包含層出土の遺物

(a) 土師器

前述のように大部分が甕である。しかし当地方の6世紀から8世紀の甕の編年は確立されておらず、古墳時代としたものの中に飛鳥・奈良時代のものが混入している危険は十分にありうる。しかし当遺跡や近辺の大鼻遺跡⁽¹⁾、地蔵僧遺跡⁽²⁾の竪穴住居出土遺物によると、飛鳥・奈良時代のものが外面縦ハケ、内面横ハケの調整が多いのに対し古墳時代のものは内

面の横ハケをナデ消したりえ、ヘラケズリを行う傾向にあるようである。

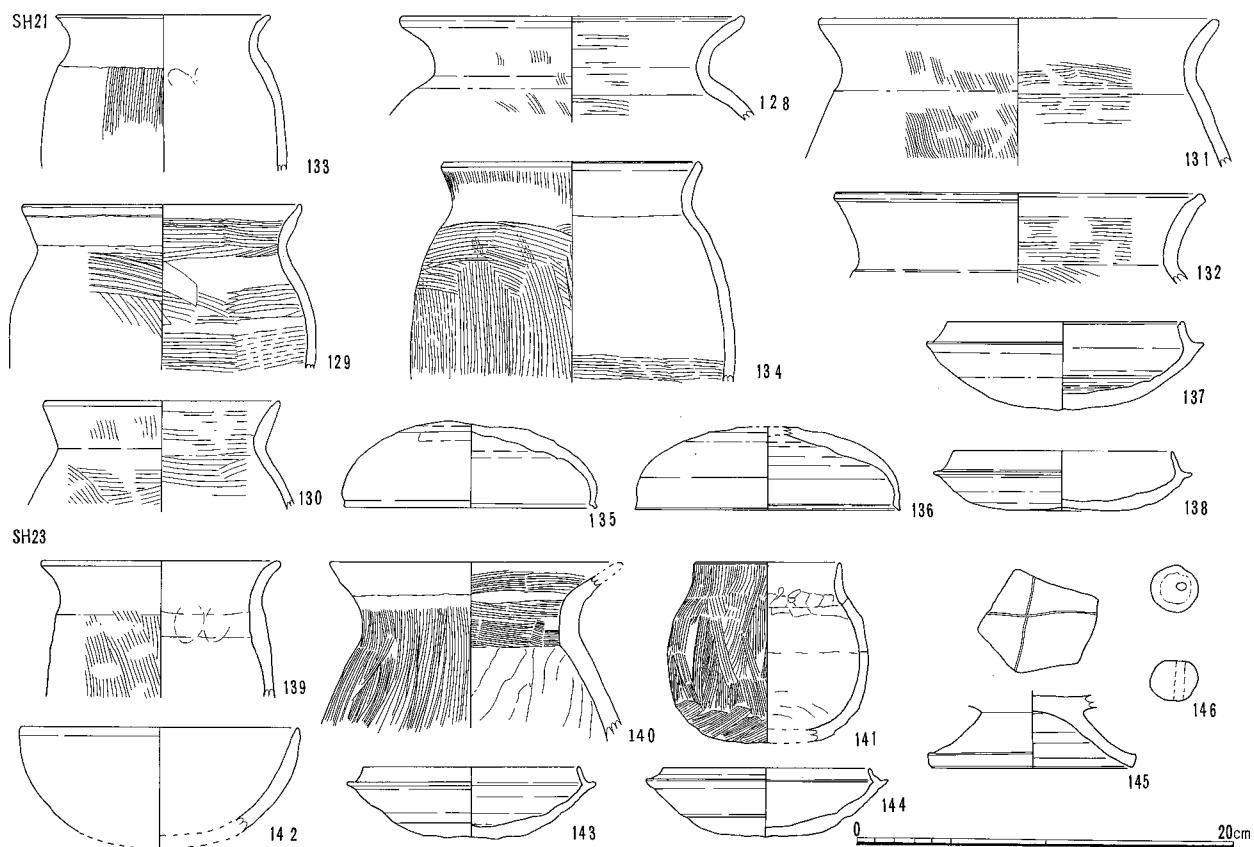
杯 図示したものは175のみである。器壁が非常に厚く重いが内面のナデは丁寧である。

壺 同じく176のみである。内面には板状工具によるナデも痕跡が残る。

甕A 口径15cm前後の中形のもの179・180と11cm前後の小形のもの177・178があり大形のものは出土していない。177のハケ目は体部、底部の順に施されている。また中から白玉8個299～306が発見された。179の内面はハケ目が残るがナデにより調整している。

甕B 181が口径16.8cmで若干大きいほかは、すべて約14cmの小形のものである。181・182は甕Ba、183は甕Bb、184は甕Bcで、甕Bdは包含層ではなく、SK25出土の166のみである。182・184は摩滅が激しく調整が不明確であるが182の内側にははけ目が施されていたようで、184の外側にはもともとハケ目は施されていなかつたかも知れない。

甕C 大形のものは出土せず191・192とも比較的小形のものである。両者とも内面のハケはナデ消していない。



第51図 S H21・23遺物実測図 (1:4, 146は1:2)

甕D 口径24.4cmの大形のもの187、15cm～17.4cmの中形のもの188～190、8cmの小形のもの186と大きさは様々である。しかし調整はすべて内面ハケ、内面ナデで、186は粗製である。

甕E 口径20cm前後の大形のもの195・196と15cmの小形のもの194がある。196の内面はナデにより調整される。

甕F 図示したものは197のみである。遺構出土のものも含めて、すべて口径26cm以上の大形の甕F bのみである。内面はハケ目が残るものナデにより調整される。

甕H 193のみの出土である。形態、調整とも特殊なもので、器壁は全体に薄くよく焼き締まっている。

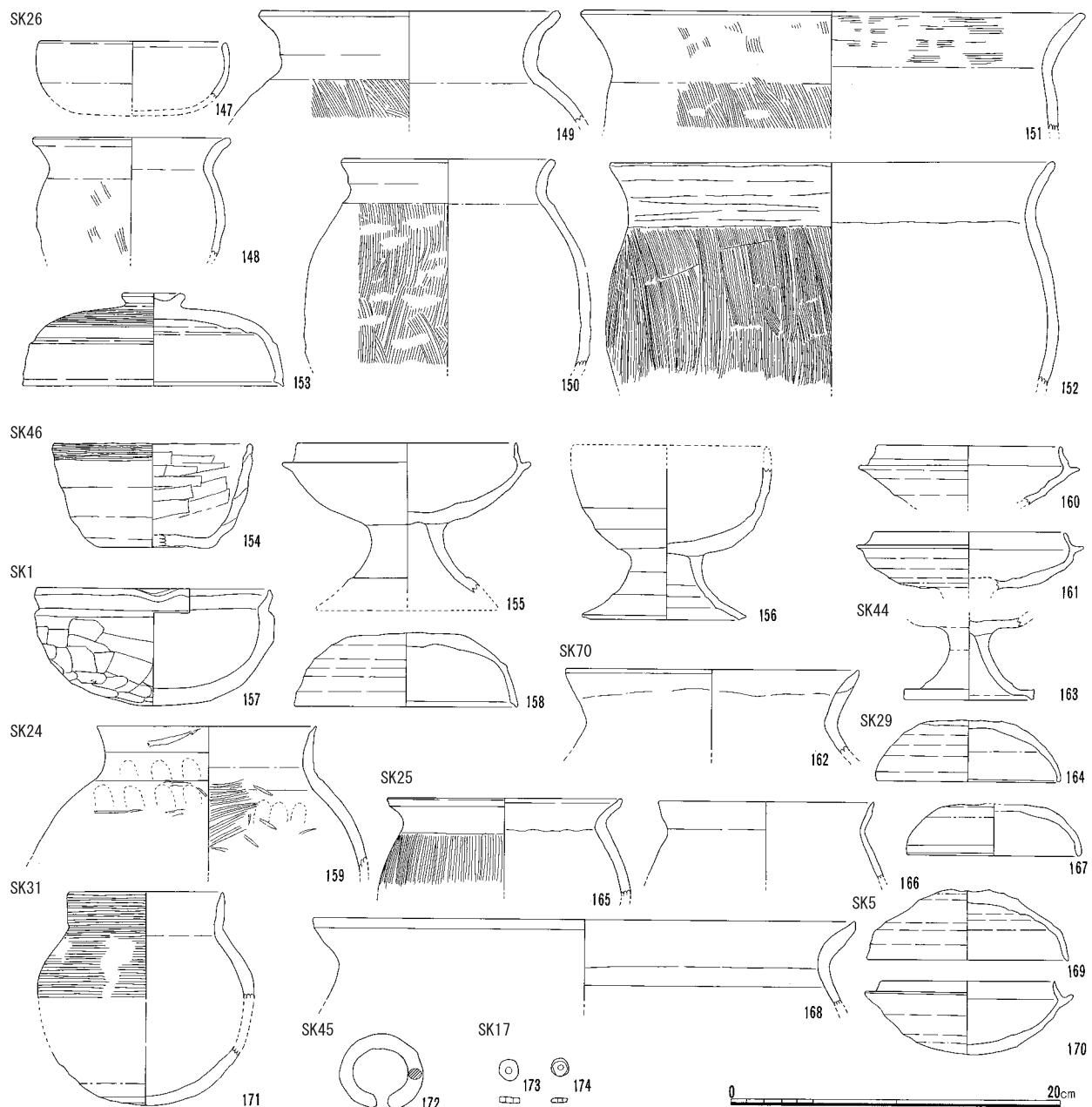
甕I 185のみで他のものとは時期差がある。

甕 198・199があり、199にも一对の把手が付くものと思われる。

鉢 200のみである。全体に雑な調整である。

(b) 須恵器

蓋A 201・202・206は蓋Aa 1、209は小形の蓋Aa 2である。口縁端部内面の段や面は非常に弱いもので、特に202では口縁端部を丸くおさめ、天井部外面が未調整であるなど新しい要素が大きい。また、206



第52図 古墳時代遺構遺物実測図（1:4 172～174は1:1）

天井部外面のヘラケズリはロクロを使用していない。203~205・207・208・214・215は蓋Ab1、210~213は蓋Ab2である。しかし大形とした蓋Ab1の口径は12cm~13cmのもの204・205・207とそれ以上のものに細分できそうである。203の口縁部内面には明瞭な面を持つが、他のものは丸くおさめている。また、天井部外面の調整は、ほとんどのものがロクロケズリするが、未調整のもの204、口縁部との境を若干ロクロケズリし他はナデるもの210、210と同様だが未調整のもの(203・211)がある。また、205口縁端部外面をロクロケズリし、208の天井部外面には「|」のヘラ記号がある。

蓋B 216~219は蓋Bb1、220~223は蓋Bb2である。蓋Bでは、Baタイプは出土していない。また、蓋Bb2には壺の蓋が含まれる可能性がある。蓋Bb1の口縁端部内面には沈線か面をもつものに対し、蓋Bb2はすべて丸くおさめる。また、天井部外面の調整は蓋Bb1が、未調整のもの216・217、ロクロケズリするもの212、ナデるもの219と様々であるのに対し、蓋Bb2はすべて未調整である。218は焼成不良で瓦質に焼けており、220の天井部外面には窯塊片が釉着している。

蓋C 225のみで、蓋Cb1である。蓋Cでは、小形のものや口縁端部内面に段や面をもつものは出土していない。杯の可能性もある。

蓋D 226・227があり、高杯の蓋であろう。227は焼成不良で瓦質に焼けている。

蓋E 図示できるものは、224点のみである。前述したように壺の蓋であるものと思われる。

杯A 228~230は杯Aa1、231~233は杯Ab1で、小形のものは出土していない。すべて底部外面をロクロケズリするが、その範囲は1/2以下である。

杯B 234~243は杯Bb1、244~247は杯Bb2で、Baタイプは出土していない。236・237は杯Dとすべきかもしれない。杯Bb1、Bb2とも底部外面の調整は、自然釉のために不明なものもあるが、ロクロケズリするもの234・236・237・241・246と未調整のもの238・239・241~243・245が混在する。246の受部は、ほとんど引き出されてない特異な形態である。

杯C 248~252はすべて杯Cb1で、他のタイプは出土していない。しかし、小形のものが出土していない

いものの、その口径には差があり、16cmを測る248、12cm強の249~251、11.3cmの252に分けることができる。底部外面の調整は、最も口径の大きい248がロクロケズリ、小さい252が未調整である。249は底部と体部の境を若干ロクロケズリするのみで、250は未調整、251はロクロケズリと調整は一定ではない。

杯D 253・254は杯Db2で他のタイプのものは出土していない。底部外面は未調整だが254は体部との境を雑に一周ロクロケズリする。

壺A 255~257がある。255は口縁部外面に13本1単位の波状文を2段に施すのに対し、256は無文、257は2条の沈線と口縁端部の間に櫛状工具による縦方向のハケ目状の文様を施す。さらに257は赤味の強い特殊な胎土である。

壺B 258・259がある。両者とも口縁部外面に2条の浅い凹線を巡らす。

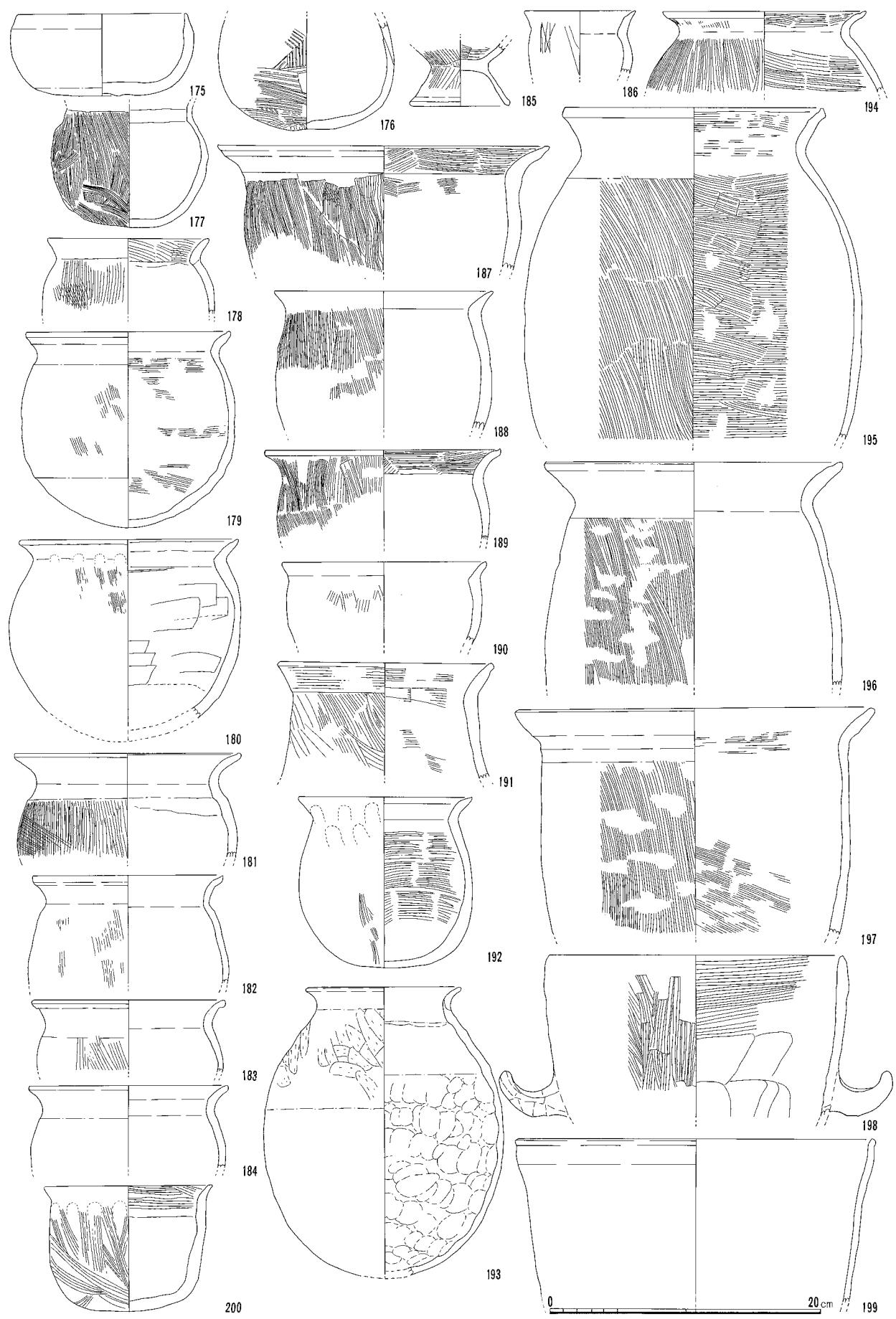
壺C 275~277がある。脚は、低いもの275、高いもの276、透かし孔をもつ277と様々である。275は肩部の2条の沈線間に櫛状工具による刺突文を巡らすのに対し、276では凹線によって強調された1条の凸線が巡る。277は体部外面を平行タタキで成形した後、上半をカキ目で調整し、中央にカキ目と同一原体で横方向に軽くハケ目を施す。内面は板状工具により不定方向にナデて、ロクロは使用している。

壺D 274のみである。一対の環状把手をもつ特殊な形態のもので、体部外面上半をロクロケズリし下半はロクロを使用せずにヘラケズリを行っている。

壺A 260・261がある。260は口縁部外面に2条の凸線を巡らし、その間に波状文を施す。凸線は凹線によって強調された弱いものである。波状文は櫛状工具の刻みが浅いためほとんど板状工具で波状に施文したような状態である。また、肩部には自然釉がかかり、底部は焼成不良のため一部酸化焼成している。このことにより、焼成は正立状態で行われたものと考えられる。261の口縁部外面の凸線は非常に退化し痕跡程度となっている。

壺B 262・263があり、両者ともシャープな仕上げの壺Baである。

壺C 269~273がある。いずれの口縁部も折り返した先が凸線となる壺Caである。しかし口径は一様ではなく、大形の269・270と小形の271~273に細分するこ

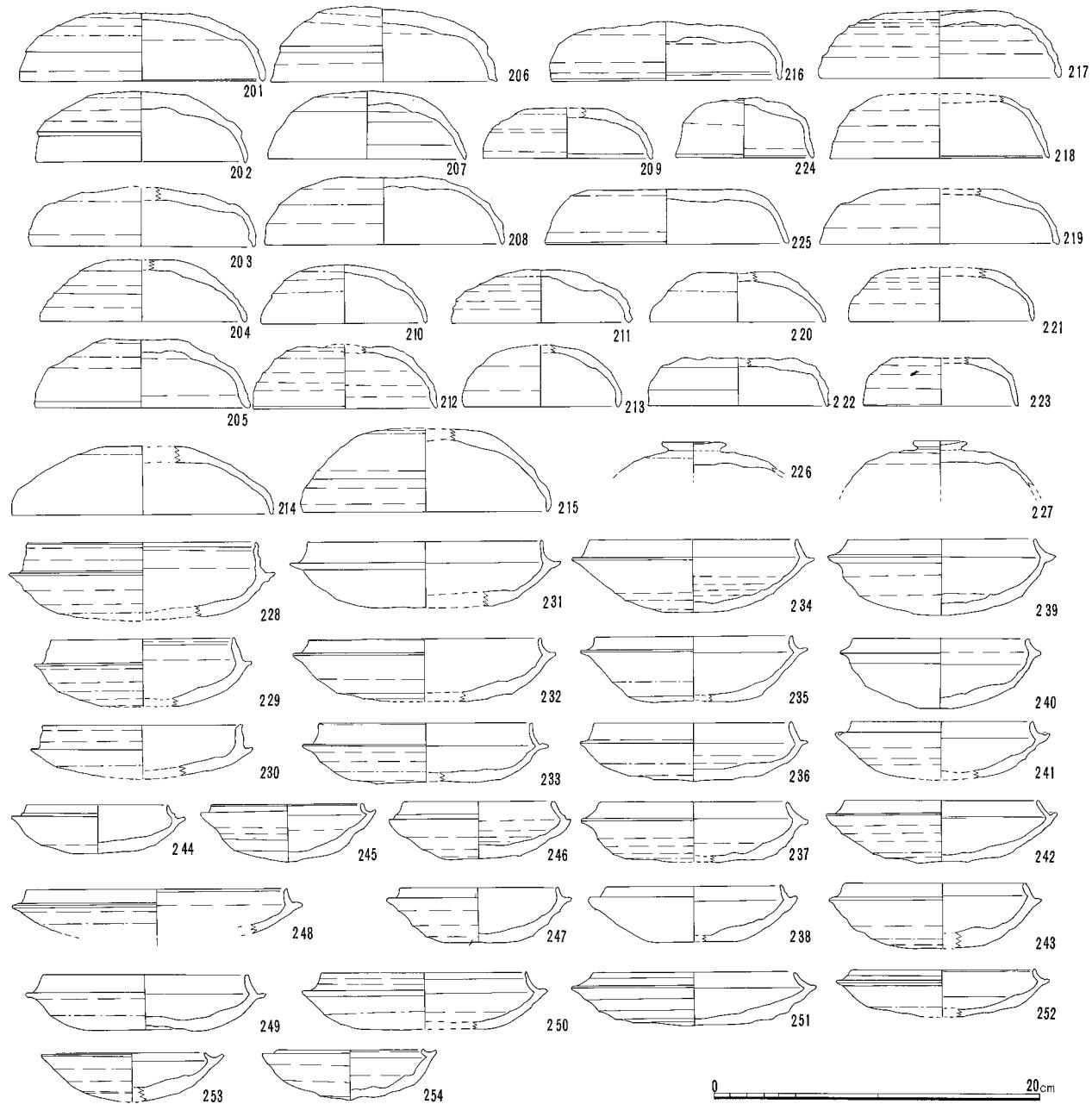


第53図 古墳時代包含層土師器実測図 (1:4)

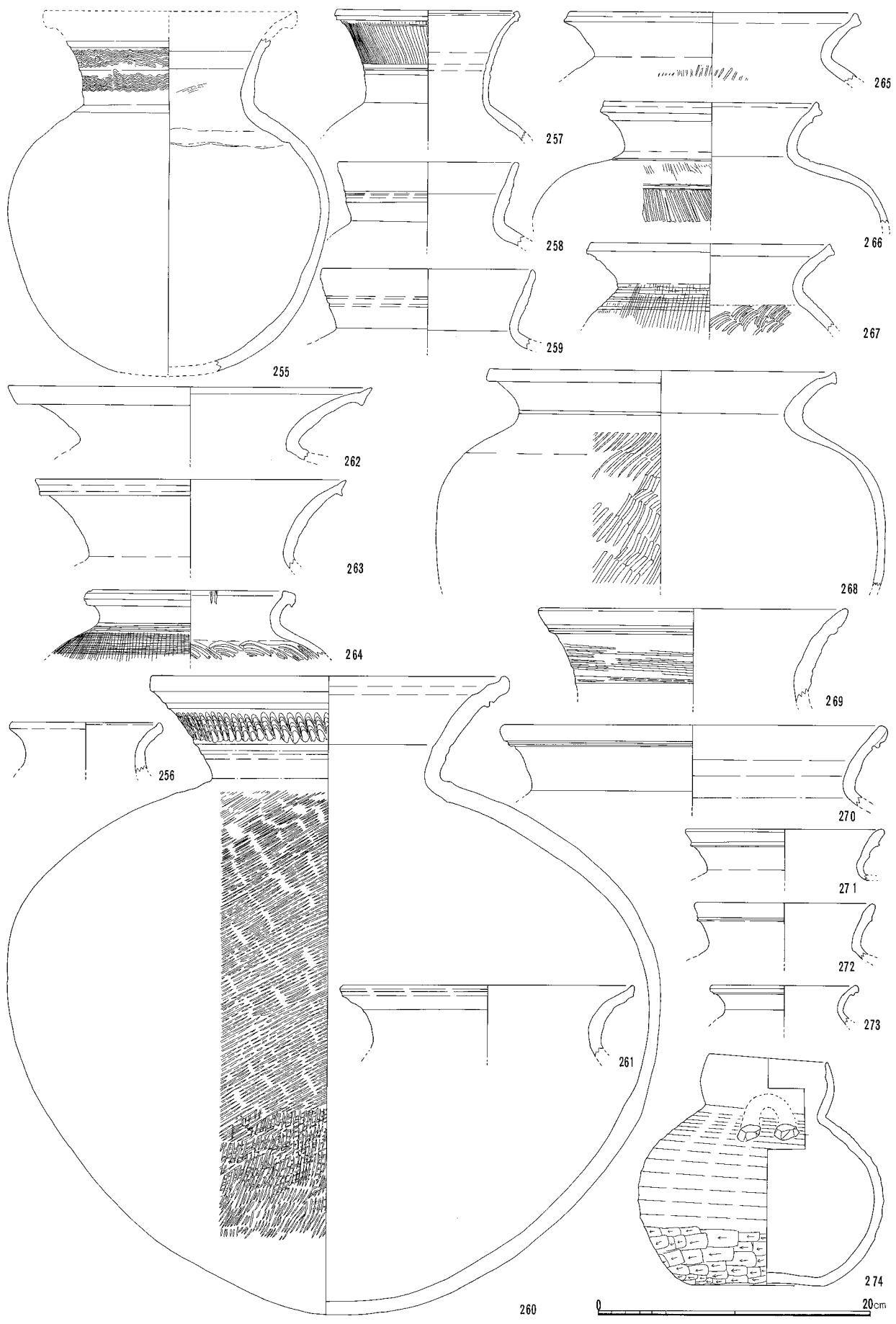
とが可能である。269は口縁部外面をカキ目で調整する。

甕D 265～268があり、すべて甕Daである。口径は15cm～25cmまで様々で分類の基準になり得ない。体部内面の工具痕は267に若干残るものすべてナデ消されている。266の口縁部外面には1条の弱い凸線が巡り、甕Aの要素を合わせもつ。271は完全な酸化焼成である。

甕E 264のみである。体部外面はタタキの後カキ目、内面は同心円分をナデ消していない。口縁部内面に焼成前に刻まれた2条の平行沈線が施されている。これも記号の一種なのだろうか。また口縁端部には小さな凹みが観察される。口径の残存度から推測すると3～4ヶ所にあるものと思われ、重ね焼きの時にトチン状のものを挟んだために付いたものと思われる。



第54図 古墳時代包含層須恵器実測図1 (1:4)



第55図 古墳時代包含層須恵器実測図 2 (1:4)

高杯A 278～280がある。280には3方に透かし孔が空けられるが他のものにはない。

高杯B 281～284は高杯Bである。いずれも3方に方形透かし孔が空けられる。

高杯C 285～289がある。285・286は脚中央に1条の凹線を巡らすのに対し、289は2条の細い沈線ある。

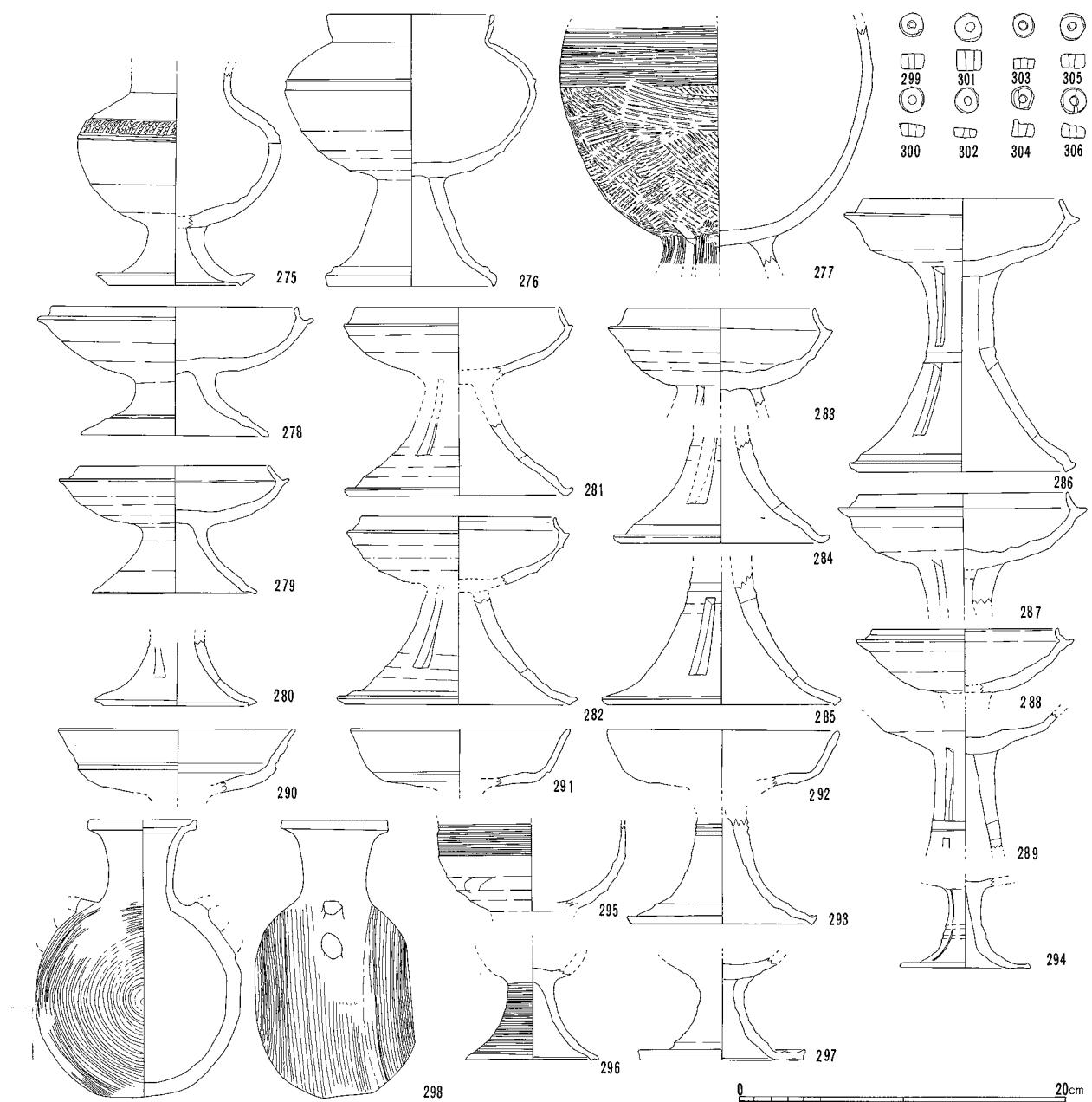
高杯D 295～297があり、すべて高杯Dbである。296の脚外面はカキ目で調整されるが、297はロクロナデ

である。

高杯E 290～294がある。290・291は口縁部と体部の境に段や凹線をもつが、292では消失している。294の透かし孔は鋭利な工具で3方2段に施されるが貫通していない。

提瓶 298のみで、肩部の一対の把手は欠損する。

土製品 299～306は白玉である。すべて甕177の中に入れられていたものである。304は、半裁されている。



第56図 古墳時代包含層須恵器・玉類実測図 (1:4, 299～306は 1:1)

(3) 飛鳥・奈良時代

飛鳥・奈良時代の遺物は、古墳時代のものと同じように遺構から一括して出土しているものは少なく、その大半は包含層出土である。土師器は、やはり大部分が甕で若干の杯、皿、鉢、高杯が出土し、さらに黒色土器の杯、土錘もまれにみられる。須恵器では、蓋、杯の出土が多く、他に椀、盤、壺、鉢、甕、高杯、櫛、平瓶がある。多数出土した機種については、古墳時代に統いて以下の基準で分類を行った。

A 遺物の分類

(a) 土師器

杯 底部から丸みをもって立ち上がる口縁部をもつものを杯A、屈曲して立ち上がるものを杯B、形態は杯Aに似るが暗文を施すものを杯C、粗製のものを杯Dの4形態に分類した。

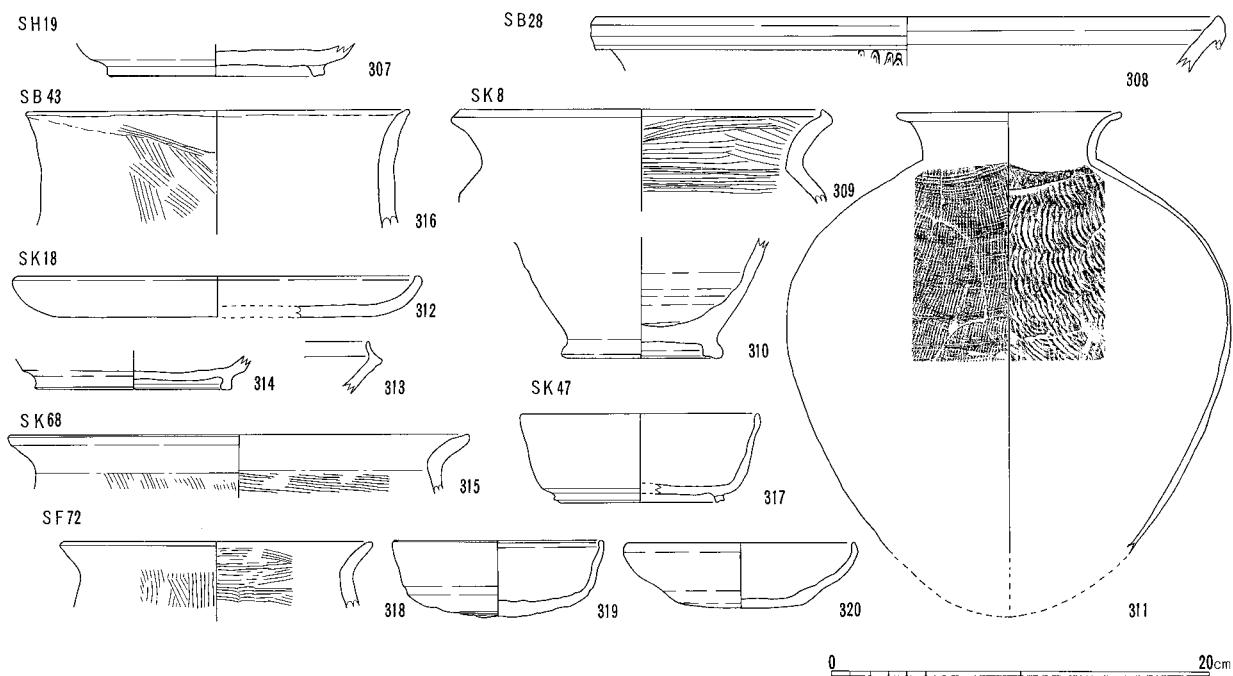
皿 底部から内弯気味に立ち上がる口縁部をもち端部を丸くおさめるものを皿A、端部が内に肥厚するものを皿Bの2形態に分類した。

甕 古墳時代から継続する甕B、甕Fと新たに、鋭く「く」の字に屈曲する口縁部をもつ甕J、口縁部が内弯する甕Kが出現し、4形態の分類である。甕A、甕C、甕D、甕E、甕G、甕H、甕Iは古墳時代のもののみである。甕Bは、古墳時代のものと比べ口縁部の屈曲がやや鋭くなる傾向にある。口縁端

部の形態によりさらに細分され、外に面をもつものをBe、鋭くつまみ上げて外に面をもつものをBf、やや内弯気味のものをBg、外反が弱いものをBh、大きく外反し、上下に肥厚して外に面をもつものをBiとした。口径では、古墳時代の甕と異なり、20cm前後の大型のものが出現し、13cm前後の小形のものとに分かれる。甕Fは、前述したように体部内面にハケ目が残るものをこの時代のものとし、ナデ消すものを古墳時代のものとした。従って形態には差がなく、口縁端部による細分も古墳時代と同様、ややつまみ上げ外に面を持つものをFa、そのまま丸くおさめるものをFbとした。甕Jも口縁端部の形態により細分され、外に面をもつものをJa、若干つまみ上げて外に面をもつものをJbとした。

(b) 須恵器

蓋 宝珠つまみをもつもので口縁部内面のかえりは口縁端部より下に出るものを蓋F、口縁端部とほぼ同じ高さのものを蓋C、小さく痕跡程度に退化したものを蓋H、口縁部内面のかえりは消失し、丸味のある天井部に偏平なつまみの付くものを蓋I、偏平な形態で、平らな天井部から若干内弯気味に下がる口縁部をもつものを蓋J、天井部中央が落ち込むために非常に偏平な形態となるものを蓋K、の6形態に分類した。蓋Fと蓋Iには天井部中央が平らなもののが



第57図 飛鳥・奈良時代遺構遺物実測図 (1:4)

存在するため、これを蓋F b、蓋I bとし、一般的なもの（蓋F a、蓋I a）とに細分した。また蓋Gでは半球状の特殊なつまみをもつものが存在するため、これを蓋Gbとし、一般的な宝珠つまみのもの（Ga）とに細分した。さらに各形態とも口径による細分も行い、細分基準は古墳時代の蓋と共通である。

杯 丸味をもつ底部から内弯気味に立ち上がる口縁部をもつ古墳時代の蓋Aと区別がつきにくいものを杯E、杯Eと同様な形態だが口径に比して器高が低い偏平な形態のものを杯F、平らな底部から丸味をもって立ち上がる口縁部をもつものを杯G、杯Gと同様な形態だが口径に対して器高が低い偏平な形態のものを杯H、平らな底部から屈曲してまっすぐ外方へ立ち上がる口縁部をもつものを杯I、杯Iと同様な形態だが口径に比して器高が低い皿に近い形態のものを杯J、平らな底部から屈曲して立ち上がる口縁部で、端部近くで大きく水平近くまで外反する特殊な形態のものを杯K、底部と口縁部の境に角形の高台を張り付け、器高が高く深い形態のものを杯L、杯Lよりも浅い形態で、直立する高台は外端面で接地するものを杯M、杯Mと同様な形態であるが高台は低部と口縁部の境より内側に張り付けられ、外に踏んばる形でその接地は内端面であるものを杯N、杯M、Nと同様な形態だが、張り付けられた高台は低面全面で接地するものを杯Oの11形態に分類した。さらに細分の基準は各形態共通で、口縁端部がまっすぐなものをa、外反するものをbとした。口径による細分は古墳時代の杯と共通である。

甕 古墳時代の甕Baと比べシャープな仕上げはなくなり、口縁端部の上方への肥厚もなくなるものを甕B b、古墳時代の甕Caと同様な形態であるが口縁部の折り返し端部の凸線は消失しているものを甕C b、古墳時代の甕Daと同様の形態であるが口縁端部の肥厚や面は弱く小さいものを甕Db、口縁端部が垂下するものを甕F、口縁部の屈曲は弱く内弯気味に立ち上がり端部は内に面をもつものを甕G、頸部の締まりがなく鍋に近い形態で口縁端部は外に面をもつものを甕H、体部に比して口径の非常に小さい壺に近い形態のものを甕Iの7形態に分類した。古墳時代の甕A、甕Eに相当するものは存在しない。また甕Iは、口縁端部上面に面をもつ甕I aと、つまみ上げ

外に面をもつ甕I bに細分される。

B 竪穴住居出土の遺物

図示できたものはS H 19の須恵器杯Ob 1（307）だけである。焼成不良のためか摩滅が激しい。

C 掘立柱建物出土の遺物

308はS B 28出土の須恵器甕F、316はS B 43出土の土師器甕で、308の口縁部外面には粗い波状文が施される。

D 土坑出土の土器

309～311はSK 8出土である。309は土師器の甕B f、310は須恵器壺、311は須恵器甕B bで309の外面はハケ目による調整を行っていない。310の底部内面には自然釉がかかる。成立状態で焼成されたであろう。

312～314はSK 18出土である。312は土師器皿B、313は須恵器杯B b、314は同じく杯O 1である。314の底部外面は丁寧にロクロケズリされる。313は古墳時代のものとした形態である。小片のため混入物と考えるのが自然であろう。

315はSK 68出土の土師器甕F b、317はSK 47出土の須恵器杯La 1である。

E その他遺構出土

318～320はSF 72出土である。318は土師器甕F bで内外面のハケ目は同一原体である。319・320は須恵器杯E a 1である。

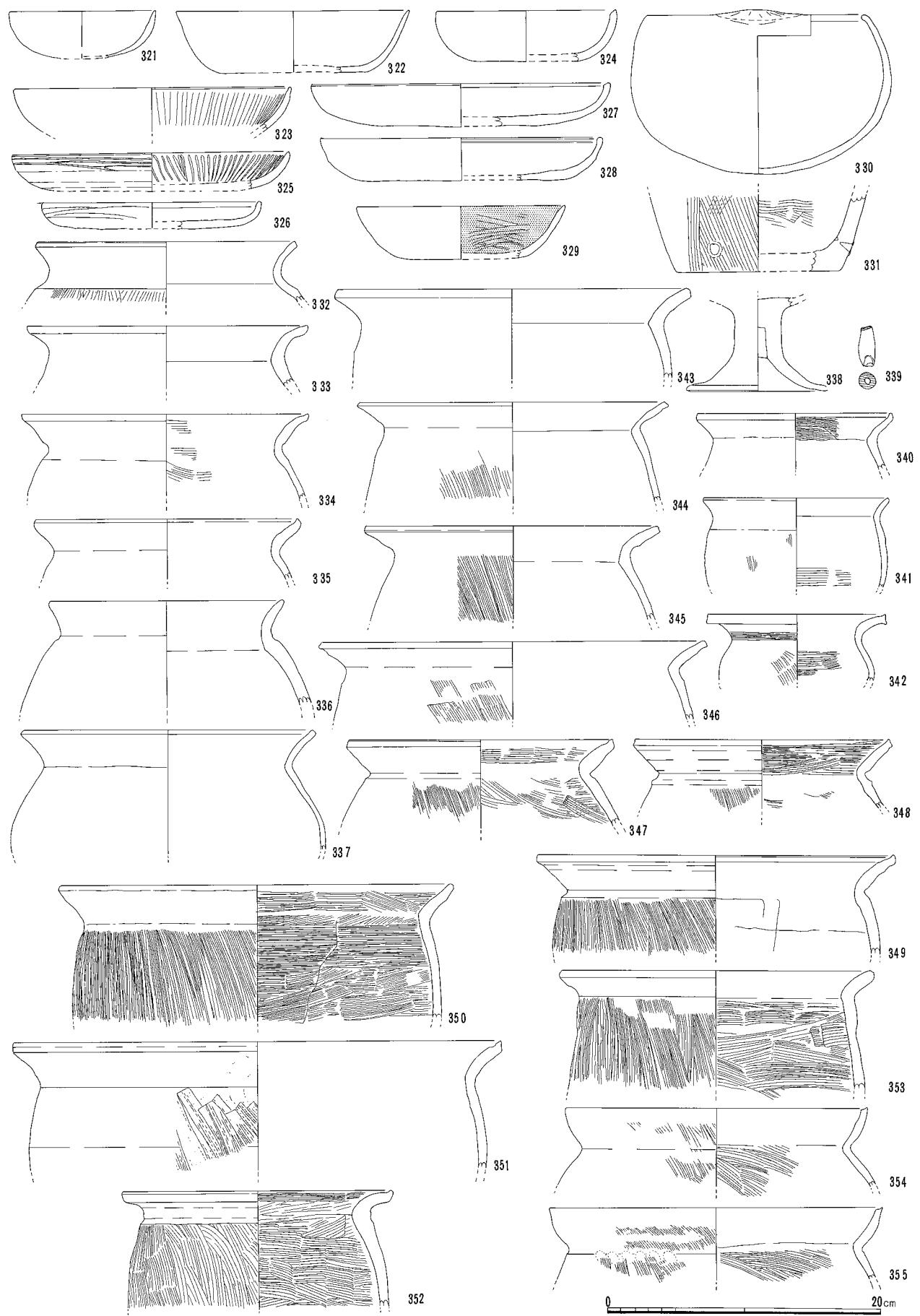
F 包含層出土の土器

(a) 土師器

古墳時代と同様出土の中心は甕である。前述したように甕には古墳時代のものが混入している可能性が残る。しかし、344は遺構とは認められないが不定形な浅い落ち込みから382・386と一緒に、341・351・355は同じように357・431・435と共に出土しているのでこれらは飛鳥・奈良時代のものとしてよさそうである。

杯 321は杯A、322は杯B、323は杯C、324は杯Dである。323は口縁端部内面に1条の沈線を巡らす。小片からの無理な復元のため、口径は不確実で、もう少し小さいかもしれない。

皿A 325・326がある。325は雑な幅の広い放射暗文を施すが、326には認められない。さらに前者が底部外面をヘラケズリするのに対し、後者は未調整である。



第58図 飛鳥・奈良時代包含層土器実測図 (1:4)

皿B 327・328がある。327は摩滅が激しく調整不明であるが、328と同様に底部外面をヘラケズリするものと思われる。

鉢 330・331は鉢である。330は半球状の体部に1ヶ所の片口を設けた特殊な形態である。大藪遺跡土坑5出土のものに類例がある。331の底部近くには直径8mmの穿孔がある。穿孔は内外面両側から空けられているが貫通していない。外側は焼成前、内側は焼成後の作業である。

甕B 332～334・337・341・343は甕Be、340は甕Bf、335は甕Bg、336は甕Bh、342は甕Biである。口径は一様でなく、甕Beでは、25cm以上の大形のもの343、19cm～21cmの中形のもの332～334・337、13.6cmの小形のもの341に分類可能である。甕Bg、甕Bh、は中形のもののみで、甕Biは小形のものしか出土していない。甕Bfは小形のものであるが、SK8で中形のものが出土している。摩滅が激しくハケ目が図示できないものが多いが337の体部外面は未調整のままで、336もその可能性がある。また、332の体部内面はナデで調整する。341は体部外面をハケ目後ナデ、内面の上半をナデ、下半をハケ目で調整し、古墳時代の甕Bの調整に近い。しかし前述したようにその出土状況から飛鳥時代のものと考えられここに掲載した。

甕F 351・352は甕Fa、350・353は甕Fbであるが、353は口縁部が非常に短く、別形態ととらえることも可能である。口径は約19cmの中形のものから36cmを測る大形のものまで様々である。351は、摩滅により体部内面のハケ目が図示できない。350が内外面とも1cmに8～9本の同様なハケ目で調整するのに対し、353は内側の方が若干粗いもので、逆に352は外側が若干粗いもので調整する。また、352の外側のハケ目は原体が確認でき、1.6cmに8本である。

甕J 344～346は甕Ja、347～349は甕Jbである。口径は約18cm～25cmまで様々であるが、15cm未満の小形のものは出土していない。344・345は摩滅によりハケ目の有無が確認できず図示していないが、346の体部内面はナデ、349はヘラケズリで調整。347の体部内面は1.2cmに7本のハケ目の原体が確認でき、外面はそれとは別の1cmに9本で、原体は不明であるが非常に細かいハケで調整している。

甕K 354・355があり、口縁部が内湾する近江系のも

のである。いずれも口径20cm以上の大形のものである。

高杯 図示できるものは338のみである。筒部はヘラケズリにより両取りされているようだが摩滅により不明確である。

(b) 黒色土器

杯 329はA類の杯である。内面は幅の広いヘラミガキを雜に行う。

(c) 須恵器

蓋F 大形のものは出土しておらず、356・357・359～361は蓋Fa2、358は蓋Fb2である。356・360以外は天井部内面に仕上げナデを行う。361は全体にシャープな仕上げ、358は酸化焼成している。

蓋G 362は蓋Gb1、363は蓋Ga1である。口径は蓋Fと異なり、12cm～14cmの比較的大形のものである。362は半球状のつまみをもつ特殊な形態のもので当遺跡ではこれ一点のみである。

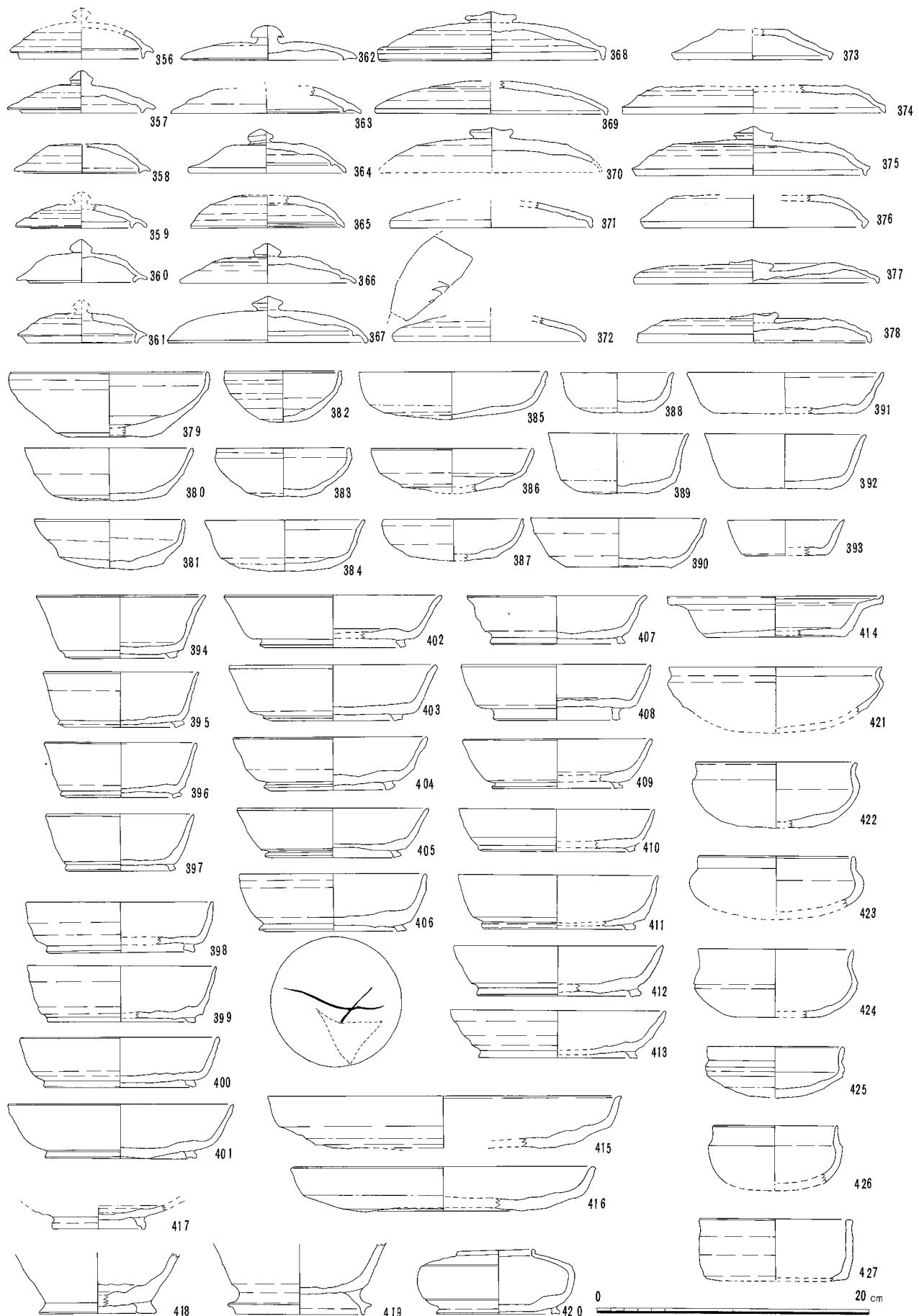
蓋H 364・365は蓋H2、366・367は蓋H1である。364・366は天井部外面のロクロケズリを行わず、すべてロクロナデで調整し、366は全体に雑な仕上げである。365は酸化焼成しており、天井部外面に「|」の記号が焼成前に刻まれている。これが記号として機能するならば、元々つまみは付いていなかったことも考えられる。

蓋I 368～372は蓋Ia1、373は蓋Ib2である。蓋Ia1の口径は14～17cmと様々であるが、小形の蓋Ia2は存在しない。369は内面に自然釉の付着があり倒立状態で焼成されたものらしい。370は焼成不良でしかも酸化焼成しており、371は胎土精良の精製品である。372の天井部外面には焼成後刻まれた記号があるが、欠損のためその全体は不明である。

蓋J 374～376があり、すべて蓋J1で、小形のものは存在しない。やはり口径は15.8～19.4cmと様々である。374の天井部外面はロクロケズリの後ナデを行う。

蓋K 377・378があり、すべて蓋K1で、小形のものは存在しない。378は天井部外面をロクロケズリするが377はロクロナデで調整する。

杯E 379～381は杯Ea1、382・383は杯Ea2、384は杯Eb1である。杯Ea1と杯Eb1は底部内面に仕上げナデを行うが杯Ea2では行っていない。底部外面はロクロケズリするが、380だけは未調整で、切り離しに失敗したためか底部外面に粘土を補充してい



第59図 飛鳥・奈良時代包含層須恵器実測図 1 (1:4)

る。381は胎土精良であるが粗雑な仕上げである。

杯F 385～387があり、すべて杯Fa 1である。しかし、口径は10.2cm～13.7cmと様々である。385は底部外面をロクロケズリするが他は未調整である。

杯G 388は杯Gb 2、389は杯Gb 1でGaタイプは出土していない。

杯H 図示できたものは390のみで、杯Ha 1である。切り離しは糸切りによって行われている。

杯I 392は杯Ib 1、393は杯Ib 2である。両者とも底部外面は未調整のままである。393は酸化焼成している。

杯J 図示できたものは391のみで、杯Ja 1である。底部外面は未調整のままで、焼成不良である。

杯K 414のみの出土であり、底部外面はロクロケズリする。

杯L 395～397は杯La 1、394は杯Lb 1である。杯La 1は3者とも口径約11cm、器高4.1cmの等しい法量である。さらに調整もすべて底部外面未調整である。しかし、397は全体に丁寧な仕上げである。394は杯La 1と違い、底部外面をロクロケズリする。焼成不良で酸化焼成している。

杯M 398～401があり、すべて杯Ma 1である。Mbタイプや口径の小さいものは出土していない。全体に丁寧な仕上げのものがほとんどだが、401は焼き歪が大きく高台の形態などは杯Nに近い要素をもつ。また、底部外面に自然釉が厚くかかり倒立状態で焼成されたものらしい。398は焼成やや不良で酸化焼成に近い。399・400は焼成良好であるが、赤味の強い発色である。調整は399のみ底部外面未調整、他はロクロケズリを丁寧に行う。

杯N 403～406は杯Na 1、402は杯Nb 1である。杯Nでは底部外面未調整のものがほとんどで、403だけがロクロケズリを行っている。402の口縁部には重ね焼きの痕跡と思われるくぼみがある。406の底部外面には「 \sim 」の記号が焼成前に刻まれている。

杯O 408～413は杯Oa 1、407は杯Ob 1である。底部を欠損するものが多いが、407は底部外面未調整、408・409はロクロケズリ、413はナデと多様である。

盤 415・416があり、両者とも焼成不良である。

壺 417～420は壺である。417は球形の体部が付くものと思われ精製品である。焼成も良好だが、赤味の

強い発色をする。418・419は長頸壺であろう。419は外面に自然釉がかかり別個体片が釉着している。倒立状態で焼成されたものか。420は体部外面上部と下部に1条づつの沈線を巡らせる。自然釉のかかる様子から蓋を乗せて成立状態で焼成されたことが推測される。

椀 421～426は椀で、424・425は体部に凹線を1条巡らす。椀の口径は15.6～15.9cmと様々である。底部を欠損しているものが多いがすべてロクロケズリされるものと思われる。しかし、425はロクロの回転が非常に弱いか、ロクロ不使用による雑なヘラケズリである。423は焼成が不良で瓦質に焼けており、425は赤味の強い発色をし自然釉のために窯塊片が釉着する。426は精良で赤味の強い異質の胎土である。

鉢 図示したものは427のみである。外面は口縁端部近くまでロクロケズリする。

高杯 428～433は高杯である。433以外は古墳時代の高杯Eと同様な形態であるが、より小形のものが多い。429・430の脚端部は外に面をもたず、すべてロクロナデで調整する。

醴 434～436がある。434・435は古墳時代としてもよさそうだが、注口が隆起しているのと、435の出土状況が前述したように357と密接であったため飛鳥時代のものと判断した。両者とも底部外面をロクロケズリし、体部に2条の沈線を巡らすが、435が沈線間に1cmに3本の櫛による刺突文を施すのに対して434は無文である。436は底部外面を面取り状にヘラケズリする。

平瓶 437～439がある。438の口縁端部は外反するが、439はそのまま丸くおさめている。437は底部外面までカキ目で調整する。438の胎土は赤味の強い異質なもので精良である。439の口縁部内面には別個体片が付着するが、自然釉はかかるておらず焼成不良時のものではなく、乾燥時に付着したものであるかも知れない。

甕 440は甕Bb、441は甕Dd、442は甕Cbでいずれも古墳時代のものと同系列である。443は甕G、444は甕H、445は甕Ia、446は甕Ibである。444は内面の同心円分をナデ消し、445は完全な同心円分にならず、ちょうど丸太をあてたような痕跡が残っている。

土製品 339は土錘である。端部の一部を欠損してい

る。この時代のものとは限らないが409と共に出土したため一応奈良時代のものとしておく。

(森川常厚)

(4) 平安・鎌倉時代 (第61~64図)

平安・鎌倉時代の遺物には、土師器・灰釉陶器・綠釉陶器・山茶椀・山皿のほか出土量は少ないが、瓦器・製塙土器・青磁・白磁・砥石・瓦・刀子などがある。

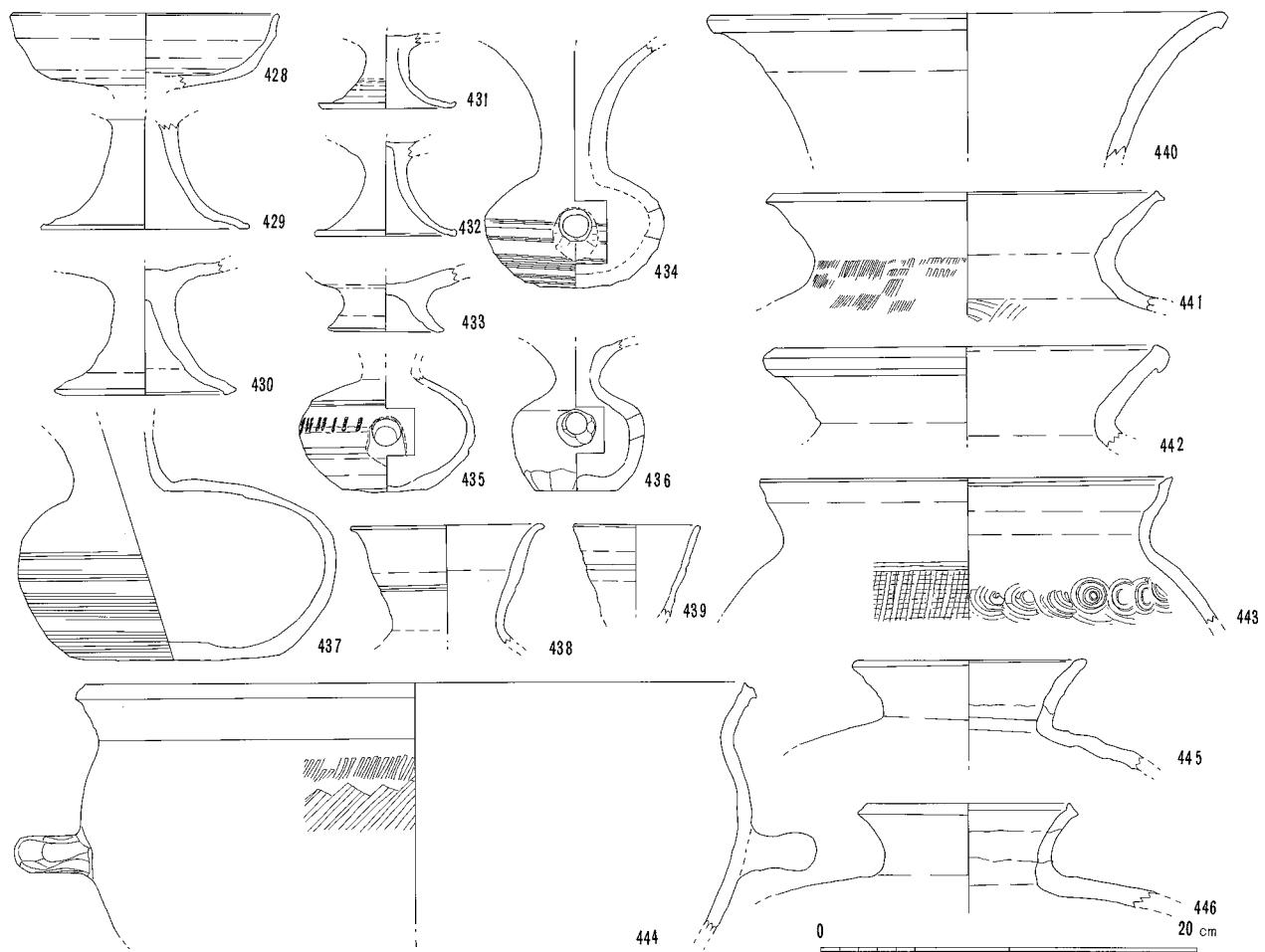
以下、個々の遺構に従って遺物の記述を進めていきたいが、あらかじめこの遺跡で出土している主な土器について概観し、分類基準を示しておきたい。

A 遺物の分類

(a) 土師器

土師器には、椀・皿・鍋・羽釜・甕の器種がある。

椀には、体部が丸みをもって内弯するもので杯に近い椀A、ロクロで成形され高台をもつ椀Bがある。皿には、ロクロで成形され段状の高台をもつ皿A、形態にかなりのバラツキが認められるが大別して体部が丸みをもち口縁部との境が不明瞭な皿B、体部と口縁部の間が屈曲して稜線をもつ皿Cにわけることができる。また、皿B・Cには法量の差があり、口径が8.3cm以下をI、9.9cm前後をII、13.2cm前後をIII、16.5cm前後をIV、19.8cm前後をVとした。鍋は、口縁部のみのものが大半であり、全体を窺える例は546だけである。口縁部の形態から、口縁部が緩く「く」の字状に外反して端部が内側に折り返され肥厚する鍋A、口頸部が直立気味に外開し「く」の字状に外反し端部は内側に折り返され段状となる鍋B、口頸



第60図 飛鳥・奈良時代包含層須恵器実測図2 (1:4)

部が短く「く」の字状に外反し端部が内側に折り返され段状となる鍋C、口縁部が「く」の字状に外反し端部が小さく内側に折り返される鍋Dがある。

羽釜は、口縁部が直立し鍔部が水平に付けられる羽釜Aと口縁部が内傾し鍔部が短い羽釜Bがある。

甕は、愛知県清郷地方で多く見られる清郷型甕があり、口縁部の形態により口縁端部が上方に面をもつ甕Aと斜上方に面をもつ甕Bに細分される。

(b) 灰釉陶器

体部は浅く、緩く内弯して開き口縁部はわずかに端部で外反し、三日月高台は直線的であるが高い椀A、体部の形状は腰部の張りではなく直線的で、口縁部は端部でわずかに外反し、三日月高台は低く粗雑で端部は丸みを帯びる椀B、体部は深く腰部の張りが強く口縁端部で強く外反し、高台は直線的に長く外反する椀Cに分類できる。

灰釉陶器には、椀類のほかに壺がある。

(c) 山茶椀・山皿

山茶椀は、各型式のものが出土している。ここでは、藤澤編年に依拠して分類する。

山茶椀A 体部が大きく内弯し腰部に張りをもち、口縁端部が外反する。高台は、三日月高台のなごり

をとどめ高台内面が弯曲する。口縁部に輪花をもつものもある。藤澤編年の第II段階第3型式に相当する。

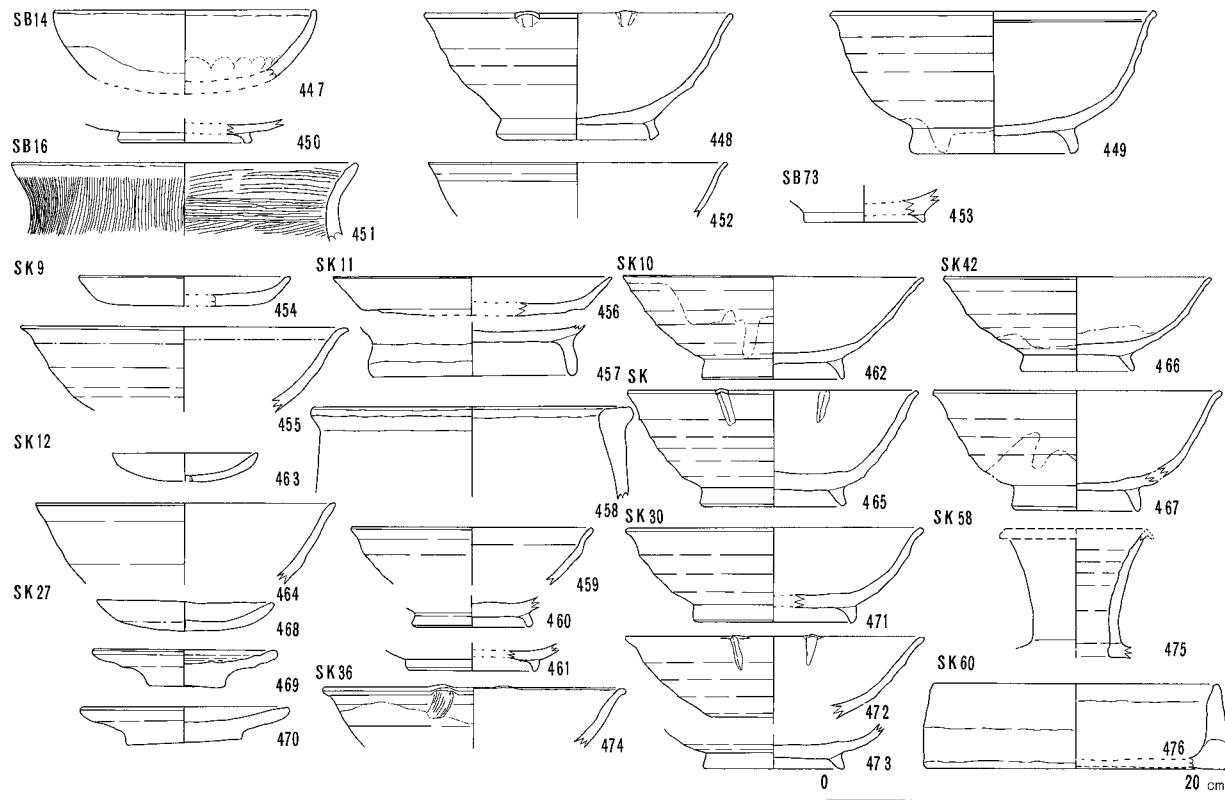
山茶椀B 口径が広くなり全体に浅く偏平化し、口縁端部は外反する。高台は、低くなり方形となる。器壁は、底部で厚い。藤澤編年の第II型式第4段階に相当する。

山茶椀C 口径14~15cmで体部は内弯し、口縁部は、外反する。高台は低く、糊殻痕が目立つ。藤澤編年の第III型式第5段階に相当する。

山茶椀D 口径・高台径の割りに器高の低い形状となり、口縁端部の外反度は小さい。体部が内弯するもののほかに直線的に外開するものもある。高台は、低く三角形状となるものがおおい。藤澤編年の第III段階第6型式に相当する。

山茶椀E 体部が直線的に外開し口縁端部外反もほとんど認められない。口縁端部は、外側に面をもつ。体部内面と底部中央との接点が浅く凹む。高台は、きわめて低く三角形状のものが張りつけられる。藤澤編年の第III段階第7型式に相当する。

山茶椀F 口径13~14cmと小形化し、体部は直線的に外開し、口縁端部が外開する面をもつ。高台は消失する。胎土には、長石粒の吹き出し多くなる。藤澤



第61図 平安時代遺構遺物実測図 (1:4)

編年の第IV段階第8・9型式に相当する。

一方、山皿は個体差が大きい割りに形態変化は、緩慢であり、大別して3類に分類できる。

山皿A 梱を小形化した形態を示し、内湾する体部に高台が張りつけられる。器高の高いものと低い2種がある。出土量は、少ない。藤澤編年の第II段階第4型式に相当し、山茶椀Bに共伴すると考えられる。

山皿B 高台を消失しているが、高台を意識し底部がわずかに突出する。体部は、わずかに内湾するものが多い。口縁端部は、丸くおさめられるもの、外面に面をもつものがある。藤澤編年の第III段階第5型式に相当し、山茶椀C共伴すると考えられる。

山皿C 器高が低くなり、体部は内湾度が弱くなり、直線的なものが多くなる。藤澤編年の第III段階第6・7型式に相当し、山茶椀D・Eに共伴すると考えられる。

B 平安時代

(a) 掘建柱建物

S B14 土師器椀A（447）と灰釉椀C（448～450）が柱穴から出土している。448は、内湾する体部の器壁が薄く、口縁部には指圧による小さな輪花が施される。449は、大きく内湾する深めの体部の器壁が薄く、口縁端部はわずかに外反し、内面直下には沈線がめぐる。高台は、三日月高台のなごりを残す。ともに灰釉は、漬け掛けされる。折戸53号窯式に続く車山72号窯式の段階のものであり、10世紀後半の時期が考えられる。

S B16 土師器甕（451）は、口頸部が緩く外反し、口縁端部は丸い。外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整する。452は、灰釉椀の口縁部であり。器壁は薄く口縁部はわずかに外反する。

S B73 山茶椀の底部（453）が出土。453は、高台は低く三角形状となる。

(b) 土坑

S K9 土師器皿C III（454）と灰釉椀B（455）が供伴する。455は、体部が緩く内湾し口縁端部が外反する。漬け掛けする。

S K11 土師器皿C IV（456）・椀B（457）・甕A（458）及び灰釉椀（459～461）が出土している。灰釉椀は、残存が良くないが高台の高さが低く幅も広くなっていることから東山72号窯期の時期と考えられる。

S K12 土師器皿B I（463）と灰釉椀B（464）が共伴している。464は、口縁部の破片であり端部の外反度が弱いことからやや時期の降る可能性がある。

S K27 土師器皿A（469・470）と皿B II（468）が共伴している。皿Aは、ロクロ製であり県内では、斎宮跡S E 1730を指標とする平安時代後二期（百代寺窯式）の11世紀前半のものと考えられる。

S K10 灰釉椀（462）は、体部が直線的に開き、器壁が薄く、口縁端部の外反度は弱い。高台は直線的に開き、高く、断面形は方形となる。体部上半部で漬け掛けされる。

S K26 灰釉椀（465）は、体部の深い椀であり、体部は内湾気味である口縁端部が外反する。口縁部にはヘラ状工具による輪花が4か所施される。高台部まで漬け掛けされる。

S K30 灰釉椀（471・472）は器高の浅い椀で、471の体部は内湾し、472の体部は直線的に開く。471の高台は、三日月高台となり、472の口縁部にはヘラ状工具による輪花が施される。淡緑色の灰釉が薄く漬け掛けされる。

S K42 灰釉椀（466・467）が出土。466は、わずかに内湾する体部が体部中央部からわずかに外反する口縁部となる。高台は、直線的に外開する。467は、深い椀形をなし、わずかに内湾する体部は、口縁端部で外反する。高台は、高く、三日月高台となる。ともに、体部下半部まで漬け掛けされる。

S K58 灰釉長頸壺（475）は、わずかに外反して開く壺の口頸部であるが、口縁端部を欠く。内外面ともに薄緑色の灰釉が掛かる。

S K60 製塙土器（476）は、直立する口縁部が端部で内面にわずかであるが凹んだ面をもつ。

C 鎌倉時代

鎌倉時代の遺構から出土した遺物には、土坑・溝の遺物があり、掘建柱建物からの出土遺物は細片であり、図示し得ない。

(1) 土坑

S K6 山茶椀Dが2点出土している。477は、完形であるが高台は、焼成時に剥離している。478は、底部のみの出土であり、出土位置も土坑上部からであり土坑の埋没過程で混入したものである。ともに第

6型式のものである。

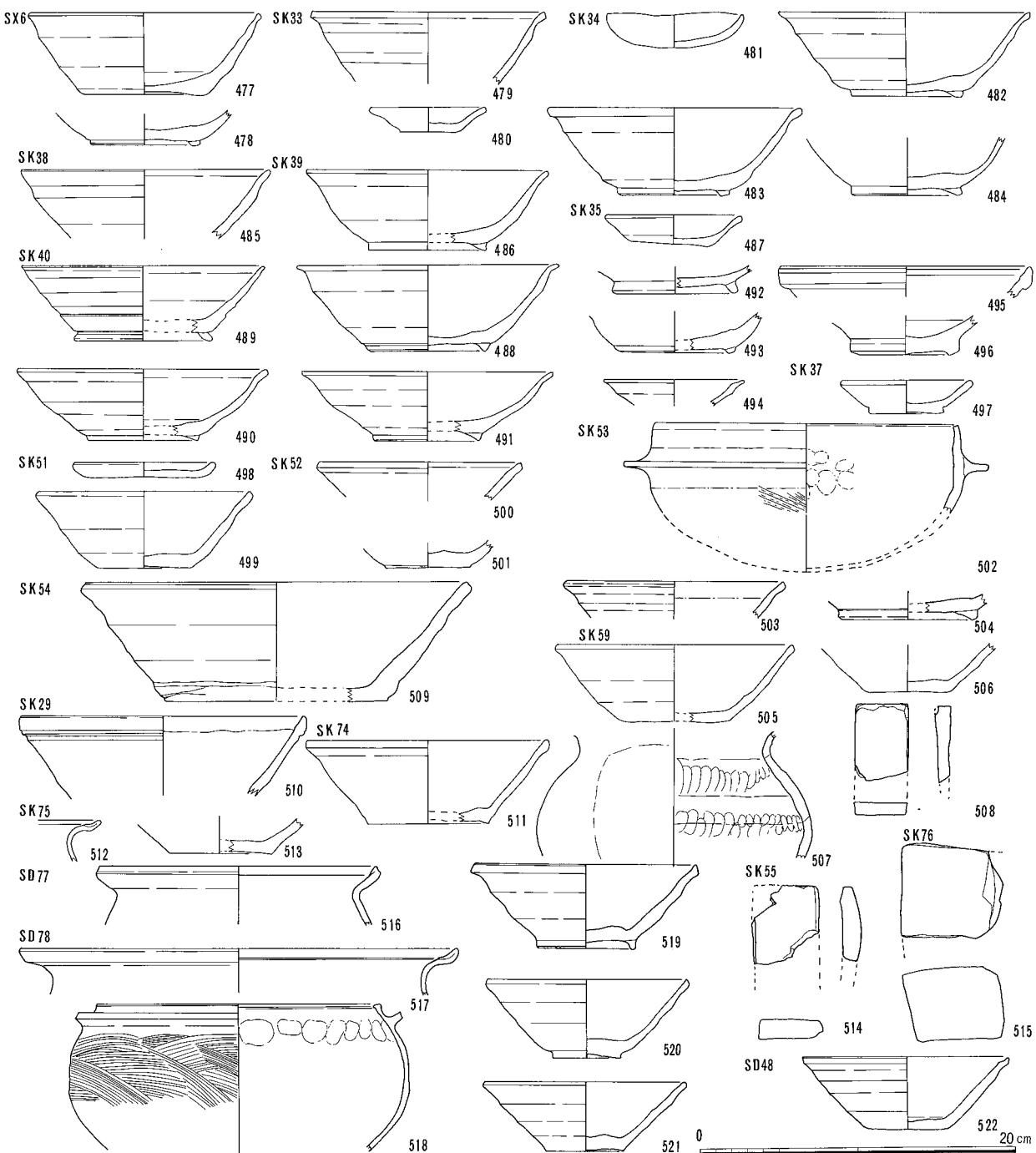
S K 33 山茶椀D (479) と山皿C (480) が出土している。479の口縁部は強いヨコナデにより外反するが、端部は外側に面をもつ。480の口縁部は、わずかに外反する。ともに第6型式のものである。

S K 34 土師器皿B (481) と山茶椀C (482~484) が出土している。全体が窺える482・483の山茶椀は、体部に丸みをのこし、口縁部が外反し端部も丸みをのこしていることから第5型式と考えられる。

S K 35 山皿C (487) が出土しており、体部はわずかに外反し、丸みをもち第5型式のものである。

S K 37 山皿C (497) が出土している。497は、口縁端部は直線的に開き、端部は角張る。高台は、低く幅の広い高台を張り付ける。

S K 38・39 山茶椀がそれぞれ出土しており、ともに体部に丸みをのこし、口縁ぶが外反し端部にも丸みをのこすことから山茶椀Cで、第5型式のものである。



第62図 鎌倉時代遺構遺物実測図 (1:4)

S K40 山茶椀 (488~493)・山皿 (494) と白磁 (495・496) が出土している。488は他の山茶椀より体部は直線的に外開し、高台は断面方形のものが外開して付けられる。489~491は、体部に丸みをのこし口縁部は外反し、第5型式のものである。山皿は、口縁部が肥厚する。白磁は、玉縁状口縁となる。

S K51 土師器皿C (498) と山茶椀F (499) が出土。498は、底部が平坦で口縁部が短く立ち上がる。山茶椀は、口径13.4cmの小振りなもので、体部は直線的に開く。

S K52 山茶椀F (500・501) が出土。500は口縁部、501は底部の破片で全体を窺えないが、ともに山茶椀Fと考えられる。

S K53 土師器羽釜A (502) と山茶椀 (503・504) が出土。502は、口縁部が直立し口縁部端面が内傾する面を持つ。鍔は、水平に引き出される。内面に鍔を張りつけた時の指圧痕がのこる。

S K54 捏鉢 (509) は、推定口径24cm・器高7.5cmの鉢であり、片口鉢になるものと考えられる。体部は直線的に開き、口縁端部は外上方に面をもつ。底部外面は、ヘラ切り未調整である。

S K55 砥石 (514) は、偏平であり、表裏両面に使用痕をのこす。

S K59 山茶椀F (505・506)、陶器甕 (507) と砥石 (508) が出土。505は、体部がわずかに内弯して開き、時期的にやや遅る可能性もあるが、高台を消失しているので第IV段階7・8型式のものとした。507は、推定胴部最大径35cmで、肩部は撫肩となる。粘土輪積で成形され、内面に粘土接合痕と指圧痕をのこす。外面は、ヨコナデ調整する。内面は黒色、外面は黒灰色から淡褐色である。生産地は、不明。

S K29 白磁 (510) は、口縁端部が玉縁状となる。

S K74 山茶椀E (511) は、口縁部が直線的に開き口縁端部がわずかに肥厚する。底部には、低い高台が張りつけられる。

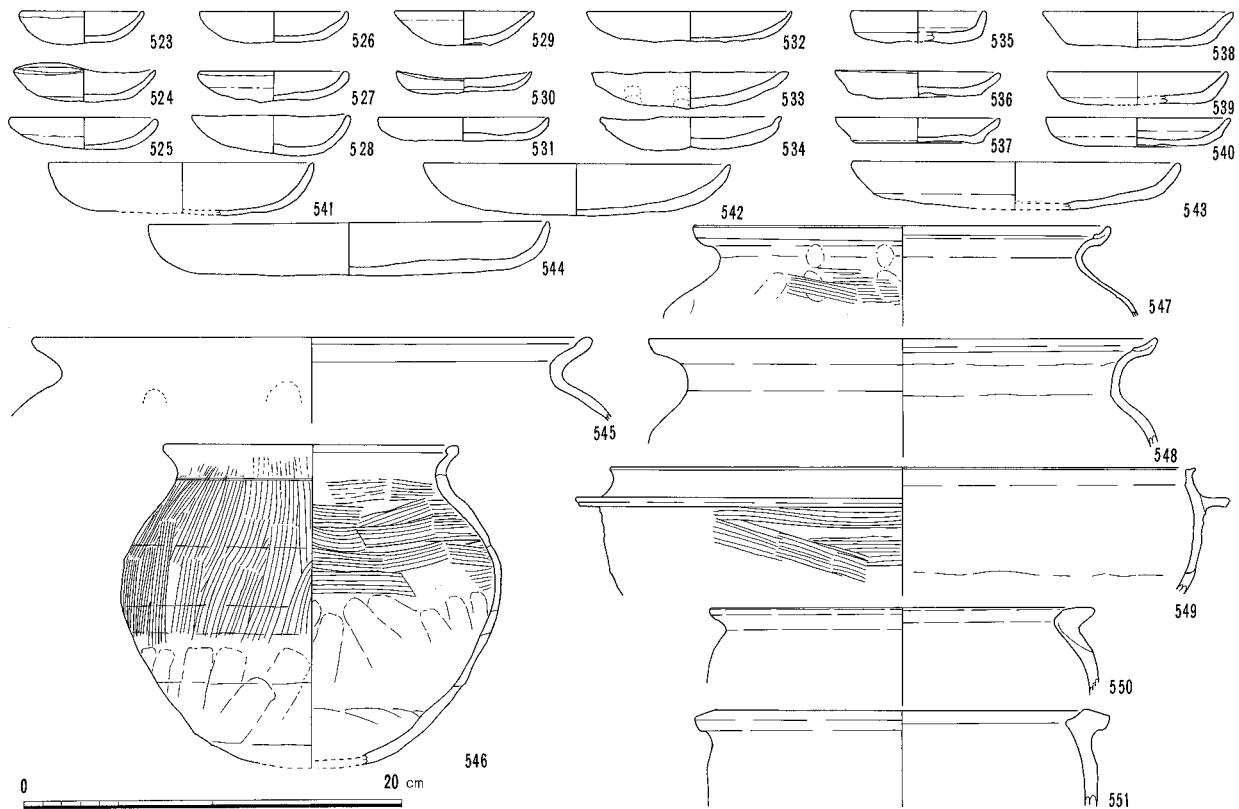
S K75 土師器鍋B (512) と山茶椀F (513) が出土。

S K76 砥石 (515) は、方柱状のものであるが、両面を欠損する。2面に使用痕がのこされる。

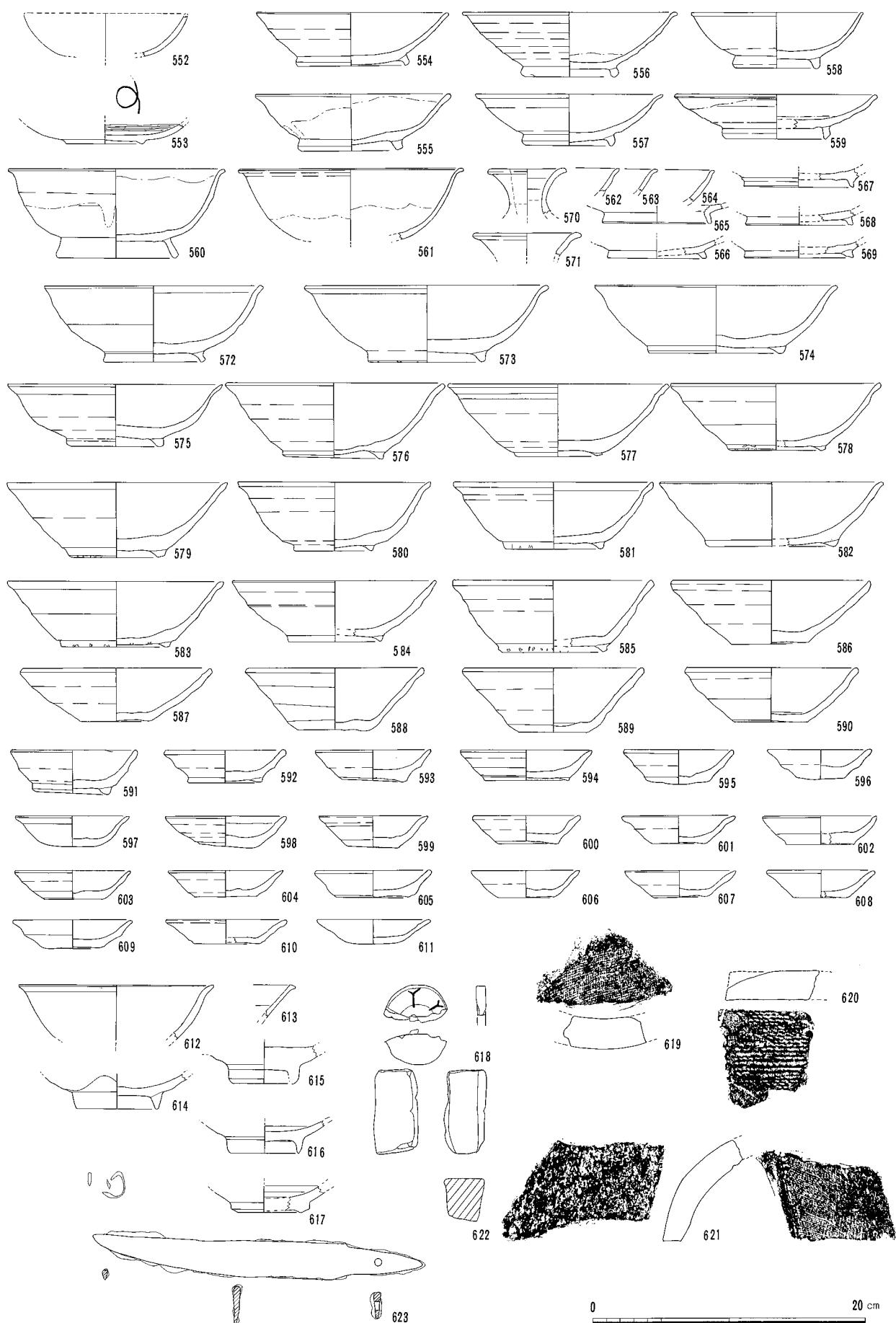
(2) 溝

S D48 山茶椀F (522) は、体部は直線的に開き、口縁端部がわずかに外反し、内面が凹む。

S D77 土師器鍋D (516) は、口縁部が「く」の字



第63図 平安・鎌倉時代包含層土師器実測図



第64図 平安・鎌倉時代包含層遺物実測図 (1:4)

状に開き、端部が内面に折り返される。

S D 78 土師器鍋B（517）、羽釜B（518）と山茶椀D（519）E（520）F（521）が出土している。517は、口頸部が直立気味に外開し、端部が内側に折り返され段状になる鍋Bである。518は、口縁部が内傾し鍔部が短い羽釜Bである。山茶椀は、DからFまで各型式があり、溝の存続時期の長さあるいは溝への流入が考えられる。

D 平安時代・鎌倉時代の包含層遺物

平安・鎌倉時代の遺物の概要及びその分類基準については、前項の述べたところである。本項では、その分類基準に従い、包含層出土の遺物についてその組合せに留意して報告する。

(1) 土師器

土師器には、椀・皿・鍋・羽釜及び甕がある。

椀A（552）は、体部が丸みをもって内弯するもので、杯に近い形態を示す。

皿には、体部が丸みをもつ皿Bがあり、法量から皿B I（523～531）、皿B II（532～534）、皿B III（541）、皿B IV（542）、皿B V（544）が出土している。

また、体部と口縁部の間が屈曲して稜線をもつ皿Cには、皿C I（535～537）、皿C II（538～540）及び皿C IV（543）がある。量的には、小皿とよばれる皿I・IIが多い。

鍋には、口縁部が緩く「く」の字状に外反して端部が内側に折り返され肥圧する鍋A（545・546）、口頸部が直立気味に外開し「く」の字状に外反し端部は内側に折り返され段状となる鍋B（548）、口頸部が短く「く」の字状に外反し端部が内側に折り返され段状となる鍋C（547）がある。

羽釜には、口縁部が直立し鍔部が水平に付けられる羽釜A（549）がある。

甕は、清郷型甕があり口縁端部が上方に面をもつ甕A（550）と斜上方に面をもつ甕B（551）がある。

これらの土師器以外に、瓦器椀（553）がある。553は、低い三角高台を張りつけ、内面に粗いヘラミガキを施し、底部内面に粗いラセン状のヘラミガキをほどこす。13世紀前半期のものと考えられる。

(2) 灰釉陶器

灰釉陶器には、椀及び壺口縁部の出土がある。

椀は、体部は浅く、緩く内弯して開き口縁部がわ

ずかに端部で外反し、三日月高台は直線的であるが高い椀A（559）、体部の形状は腰部の張りはなく直線的で、口縁部はわずかに外反し、三日月高台は低く粗雑で端部は丸みを帯びる椀B（554～557）、体部は深く腰部の張りが強く口縁端部で強く外反し、高台は直線的に長く外反する椀C（560・561）がある。

(3) 山茶椀・山皿

山茶椀は、各型式のものが出土している。

山茶椀B（572～575）は、藤澤編年第II段階4型式に相当するもので、山皿A（591～594）を伴う。

山茶椀C・D（576～585）は、藤澤編年第III段階5型式及び6型式に相当し、山皿B（595～611）を伴う。

山茶椀E・F（586～590）は、藤澤編年第IV段階7・8型式に相当する。

(4) その他の遺物

A 青磁・白磁

青磁には612・613・615がある。612は、体部が緩く内弯し口縁端部が外反する。613は、体部が直線的に開き口縁端部が肥圧する。615の高台は高く直立する。

白磁には、614・616・617の底部破片がある。614と616の高台は、高く直立するが、617の高台は、低く断面が方形をなす。

B 土製品

618は、直径4.6cmの円盤状のもので、中央部に直径3mmの小孔を穿ち、厚さ6mmの外縁をもつ。外縁片面に「Y」の字状のヘラ描文を2か所以上刻む。土製紡錘車と考えられる。

C 瓦片

平瓦（619・620）と丸瓦（621）がある。619は、わずかに弯曲し、凸面には繩目压痕、凹面には布目压痕がのこる。620は、端部の破片で619と同様に片面に繩目压痕、反対の面に布目压痕がのこる。621は、丸瓦の破片であり、凸面には繩目压痕、凹面には布目压痕がのこる。

D 石製品

砥石（622）は、遺構出土のものと併せると4点の出土がある。ともに粘盤岩系の石材を用いている。

E 金属製品

長さ24.2cm、刃部長18.7cm、最大幅2.7cmの刀子である。目釘孔を1か所もつ。

（駒田利治）

(5) 戦国・江戸時代

この時期の遺物の遺構に伴う遺物が大半で、包含層遺物は遺構周辺に限られる。

A 掘立柱建物柱穴内出土遺物

(a) S B 63

志野皿 (624～626) 624は鉄絵皿で、高台は既に無く、糸切り痕のままである。625は器高が低く、逆に底径が広くなっている。僅かに高台を意識した盛り上がりがみられる。626には痕跡程度の高台が付く。鉄絵皿には円錐ピン3個の重ね焼痕が見られる。

天目茶碗 (627) 高台部分のみである。高台は削り出しによって成形され、底部厚みは比較的薄い。

砥石 (628) 砂岩製の砥石で、楔形を呈しており、よく使い込んでいる。側面の一面を除く3面に使用痕を持つ。

B 井戸内出土遺物

(a) S E 69

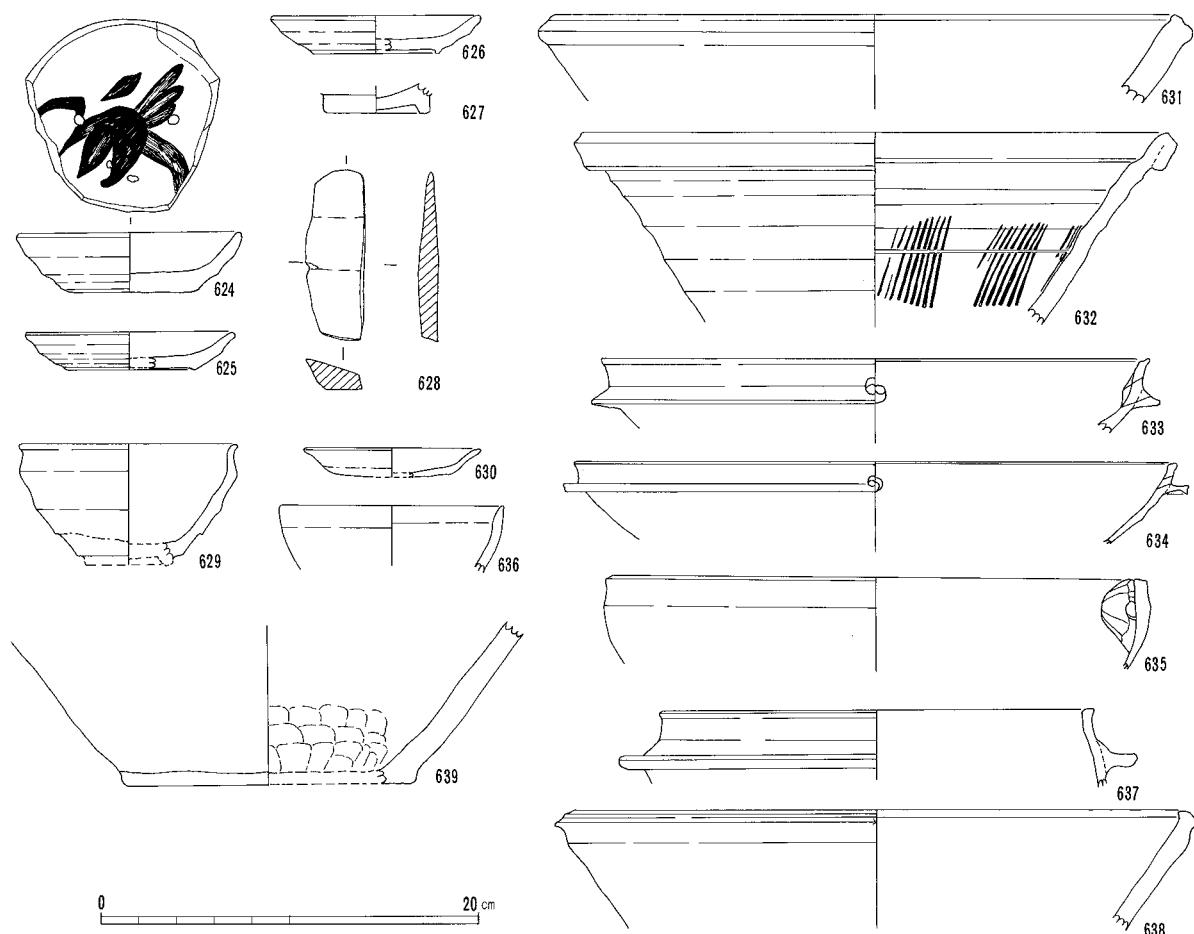
天目茶碗 (629) 体部は直線的に立ち上がり、口唇部はやや丸みをもって屈曲し、端部は短く外反して

丸く終わる。藤澤編年第3型式(17世紀第3四半期)。

土師器皿 (630) 口径9.4cmの小皿で、底部はオサエ、口縁部はヨコナデ成形で、やや外反して細く終わる。
擂鉢 (631・632) 631は常滑系の擂鉢(真焼)で、卸目は無く、口縁端部は直角に面を持つ。632は瀬戸系の擂鉢で、口縁部は段を持ち、落ち返しによる玉縁状口縁となる。卸目は幅2.5～3.0cmで、5cm間隔にある。全体に鋳釉を施している。

土師器羽釜 (633・634) 633は口縁部は一旦内傾し、端部で外反する。上面に面を持ち、鍔は端部が丸い三角形状断面である。634は口縁部は逆「ハ」の字に開くが、やや内湾ぎみであり、端部上部に面を持つ。鍔は鉄挺状の断面を呈する。両者とも吊り下げ用の2つの丸い穿孔を持つ。

土師器鍋 (635) 内耳鍋で、口縁部は直線的に立ち上がって、上端に面を持つ。内耳部分は両取りによって成形されている。外面にはよくススが付着している。



第65図 S B 63 S E 69・71・62遺物実測図 (1:4)

(b) S E 71

天目茶碗 (636) 口縁部のみの出土である。端部は屈曲することなく上方に細く終わる。他の天目茶碗よりも前出のもので、大窯 I 期のものと考えられる。

土師器羽釜 (637) 口縁部は内傾し、上端で面を持つ。鍔は厚く端部が丸い。

擂鉢 (638) 常滑系の擂鉢で、端部上面は山形に面を持ち、両端に凹線を持つ。

(c) S E 62

擂鉢 (639) 常滑系の擂鉢で、卸目は無く、内面下方には指頭圧痕が見られる。

C 土坑内出土遺物

(a) S K 31

土師器皿 (640~644) 口径8.8cmの小さいタイプ (640~624) と口径10cm前後のやや大きいタイプ (643、644) の2タイプがある。口縁部をヨコナデし、底部はオサエ。

(b) S K 51

擂鉢 (645) 瀬戸系の擂鉢で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部内面に段を持ち端部は膨らみ外側に面を持つ。体部下方は箇削り成形、底部は糸切り痕を残す。卸目は幅4cmでやや密である。藤澤編年のB 2類、I-3型式（17世紀第3四半期）に該当する。

緑釉大皿 (646) ほぼ完形の瀬戸、美濃系の折縁大皿で、体部から口縁にかけてはやや内弯曲ぎみに立ち上がり、端部内面は折曲して外反し、端部は丸く終わる。高台は細く尖る。内面にはトチダンゴの痕跡を残す。鉄絵風の模様があり、全体を銅緑釉の釉薬で被っているが、発色がやや還元ぎみで、緑色というよりも薄い焦げ茶色に発色している。口縁端部が折曲する点など古い様相を示し、17世紀でも前半に比定されよう。

志野織部皿 (647~649) 647・649は美濃産織部で649は鉄絵皿である。口縁部は外反屈曲し丸く収まる。釉薬は647が体部のみ、649が高台部分まで全体に掛かっている。元和年間。648は瀬戸、美濃産の志野丸皿で、口縁部はやや外反して肥厚する。削り出し高台は小さく、トチダンゴ跡が3箇所見られる。元和年間。

灰釉丸碗 (650) 瀬戸系の灰釉（御深井釉）の丸碗で、体部は内傾して立ち上がり、端部で上方に向

を変えて細く終わる。底部、体部ともに箇削り成形。釉はやや青味がかり、貫入が見られる。元和～寛文年間。

(c) S K 52

染付ぐい呑 (651) 伊万里系の染付で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部で外反して細く終わる。底部は無釉の削り出し高台で、草木状の模様が対に2箇所見られる。長崎県平戸市幸橋遺跡出土土器に類似品がある。17世紀末～18世紀初頭。

灰釉壺 (652) 灰釉の小型壺で、口縁部はのみの出土である。頸部断面は細く、端部にいくに従ってやや外反しながら肥厚し、上方外面に面を持つ。

擂鉢 (653) 瀬戸系の片口の擂鉢で、体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部内面に段を持ち、上端は外折し、端部は折り返され、縁帶を形成する。卸目は4cm幅に10本が認められる。藤澤編年C-2類、I-5型式（18世紀第1四半期）。

(d) S K 67

擂鉢 (662~666) 産地別に3種類が認められる。662~664は常滑系の擂鉢で、卸目が無く、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部はほぼ直角に面を持つのが特徴で、均一な砂目の胎土で、淡黄褐色を呈している。664の口縁端部には2条の凹沈線が認められる。665は信楽系の擂鉢で、器壁が薄く、口縁端部は外面に折曲した面を持つ。卸目は幅1cm前後と細く、約3cm間隔にある。胎土は大粒の砂粒を含む。666は瀬戸系の擂鉢で、体部は急で直線的に立ち上がり、口縁端部は外折して、端部は折り返しによる縁帶びを形成する。卸目は3.5cm幅で下部でつながっている。全体に錆釉を施し、胎土は少量の砂粒を含む。藤澤編年のC 2類、I-55型式（18世紀第1四半期）に該当する。

土師質土器 (667~669) 667は羽釜で、体部は内傾しながら立ち上がり、口縁端部は内面に面を持つ。鍔は三角状でシャープさに欠ける。668は焙烙で体部は直線的に立ち上がり、口縁ぶは肥厚して内傾し、端部は細く終わる。外側全面に濃いススが付着している。669は茶道具の風炉で、上部を欠くが、全面を窓状に大きく切り裂いている。基本的にヨコナデ成形。内部にはススが付着している。同型のものが久居市戸木遺跡から出土している。

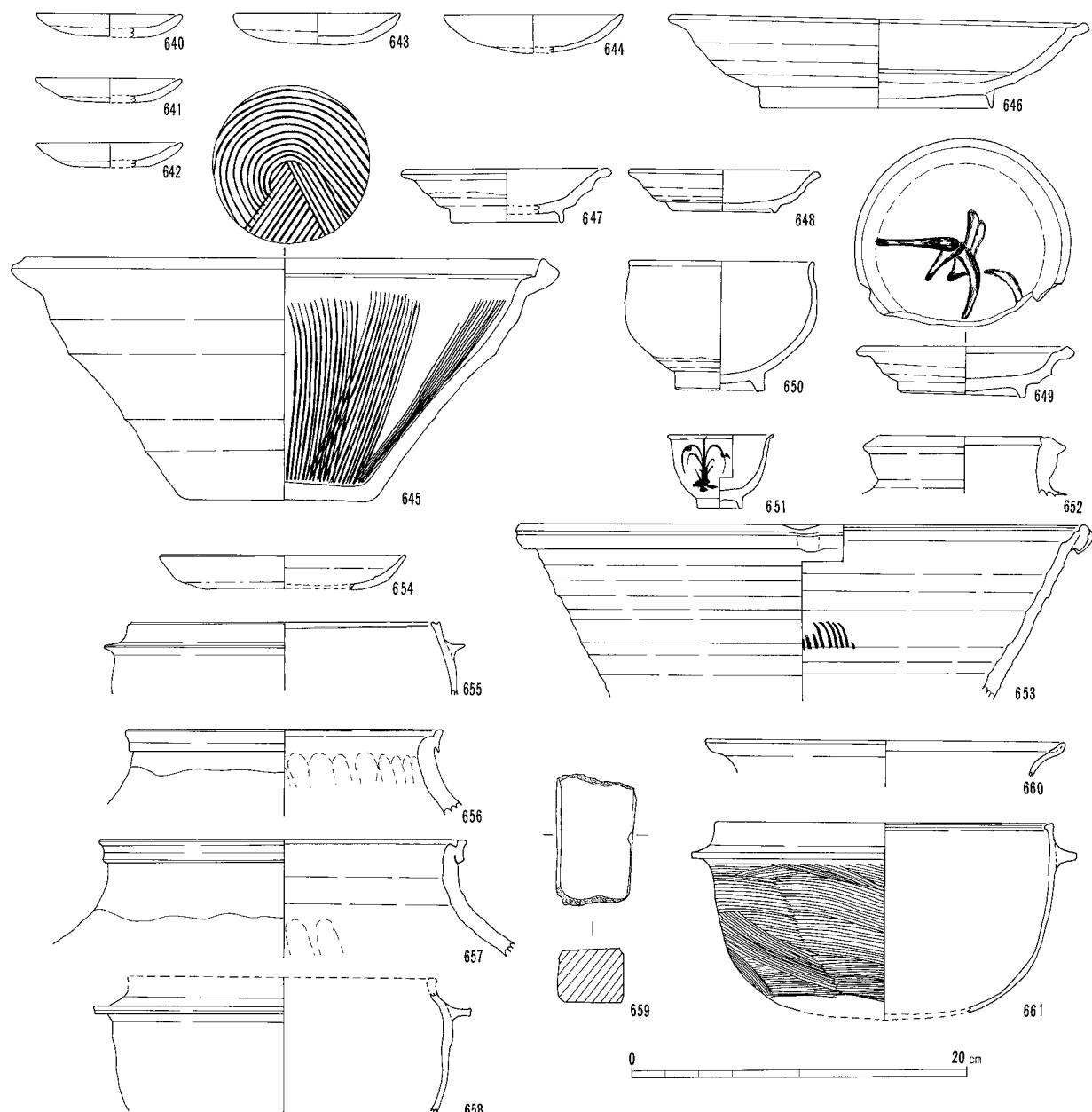
壺 (670) 瀬戸系無釉の壺である。体部は直線的に立ち上がり、肩部で最大径35.0cmを測る逆三角形状を呈する。頸部小さく、口縁端部はやや外反し、折り返して玉縁をつくる。指オサエとヨコナデを交互になして成形しており、底部には板状の圧痕が認められる。

天目茶碗 (671~673) 体部は直線的に立ち上がり、口唇部はやや内傾し、端部は外反して丸く收まる。削り出し高台で、高台端部はやや丸みを帯びる。藤澤編年第3型式 (17世紀第3四半期)。

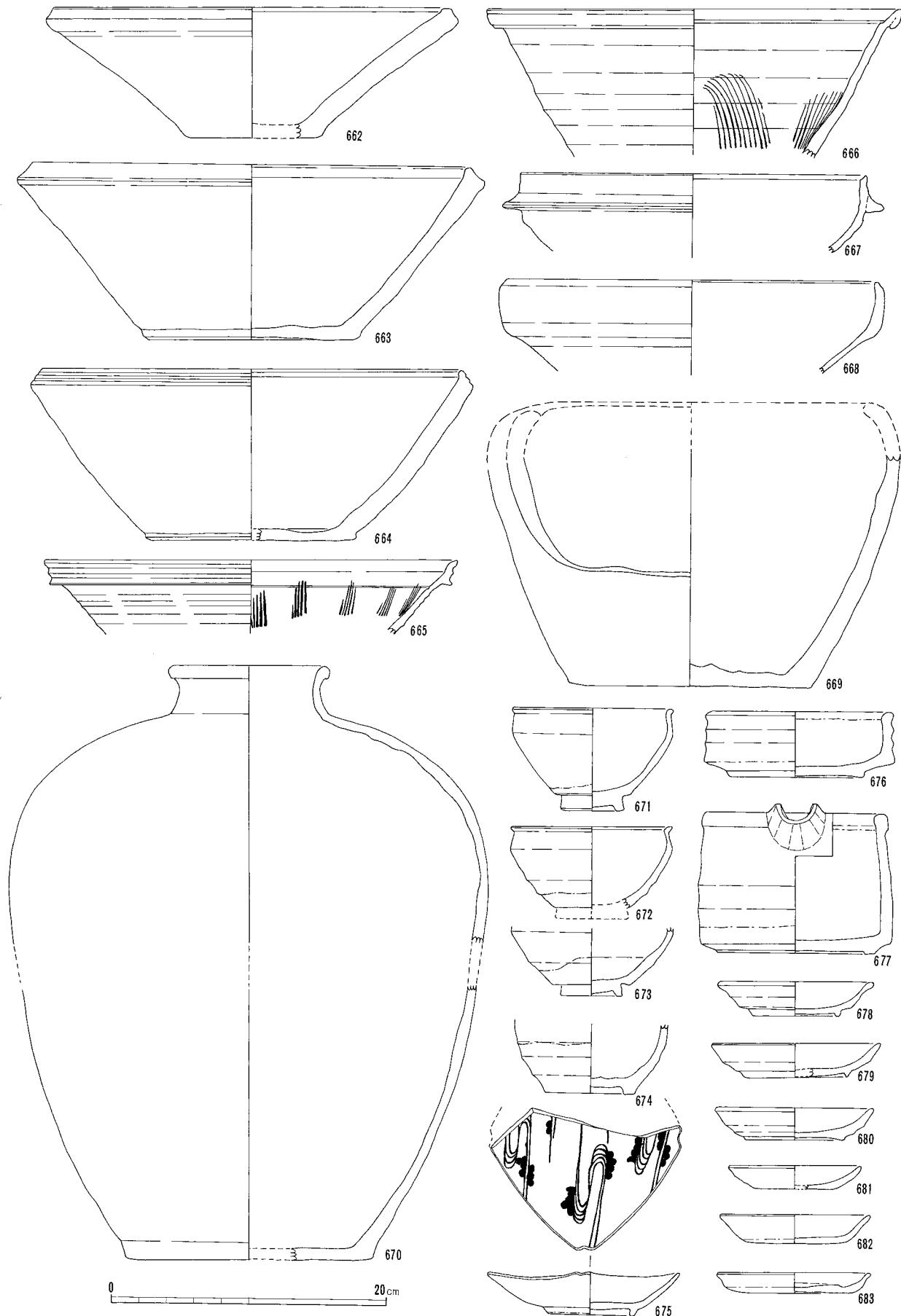
染付皿 (675) 伊万里系の角皿で、菱形を呈し、角

はハート形に割れている。造りだし高台で、砂目が見られる。文様は流水文で、大橋編年II-C期(17世紀末)。図示しなかったが、SK64からも同型同文の伊万里系染付皿が出土している。

鉄釉陶器 (674・676・677) 674はいわゆる尾呂徳利で、高台は削り出し、体部はロクロケズリ成形で、上部は鉄釉、下部は錆釉が施されている。676は鉄釉の香炉で、口縁は直線的で丸く收まる。底部は削り出しによって高台を意識した作りである。内面は灰釉、口縁から体部にかけては鉄釉が施されるが、口縁上部は摩滅によって釉が剥がれている。677は鉄釉



第66図 SK31・51・52・55・56・66・67遺物実測図 (1:4)



第67図 S K67出土遺物 (1:4)

の片口鉢で、口縁部は角張り、上端に面を持つ。底部は僅かな削り出し高台を有する。内部は灰釉、口縁部から体部にかけては鉄釉を施す。3個体共、瀬戸、美濃系で、藤澤編年I—4期（17世紀末）。

志野皿（678～680）瀬戸、美濃系の志野丸皿で、口縁端部が外反して丸く収まるもの（678）と外反することなく直線的に細く終わるもの（679, 680）がある。678, 679は削り出し高台で、680は底部糸切り痕のままである。

土師器小皿（681～683）3個体とも口径が異なる。体部から口縁にかけて直線的に立ち上がるるもの（681）と口縁端部でやや外反するもの（682・683）がある。口縁から内面ヨコナデ、底部がユビオサエ成形による。

(e) SK 55

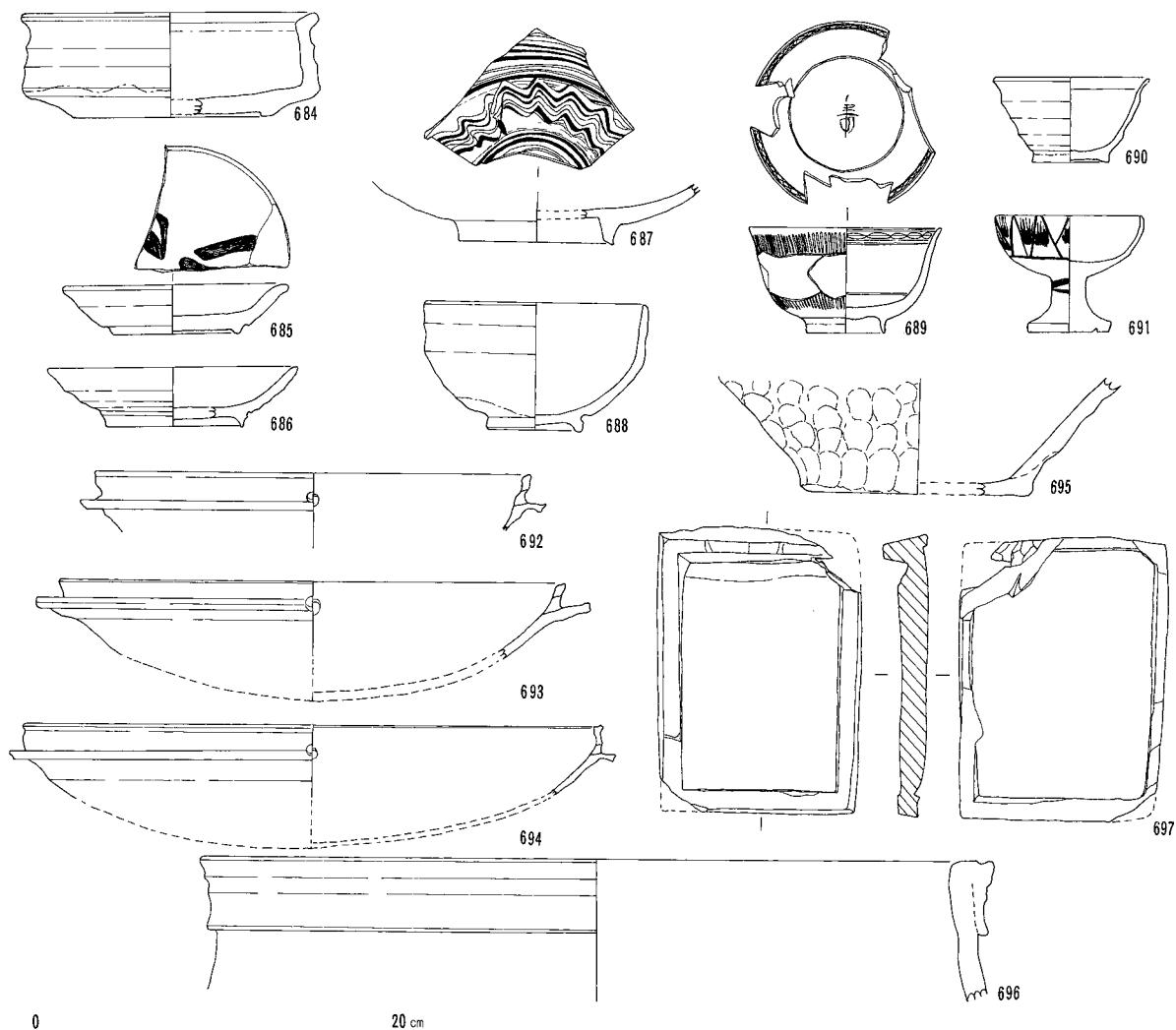
土師器皿（654）推定口径14.5cmのやや大きめの皿で、口縁部は逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がり、細く終息する。

土師器羽釜（655）やや小型の羽釜まで、体部から口縁部にかけては内傾してやや弯曲しながら立上がり、口縁部はやや肥厚して上方に面を持つ。鍔は先端がやや上向きの三角形状の断面を呈する。

(f) SK 56

常滑壺（656・657）N字状口縁を持つ小型の壺で、折り返し部分は密着寸前の状態で、内面に段差の面を持つ。口縁部はヨコナデ、体部はタタキの後、きれいにナデ消している。杉崎編年第3段階後半（14世紀後半）。

土師器羽釜（658）口径、形態とも665に類似するが、



第68図 戦国時代包含層遺物実測図（1:4）

鍔部の断面が矩曲を呈し、先端に面を持つ。

砥石 (659) 砂岩製の砥石で、4.0×3.2cmの柱状の両端は欠落しているが、4面とも使用痕を持つ。

(g) SK 67

土師質土器 (660、661) 660は鍋で、口縁部は外反して端部を内部に折り返している。いわゆる「伊勢型鍋」の系統を引くものである。661は羽釜で、体部から口縁部にかけてはほぼ直線的に立ち上がり、端部はやや肥厚して上方に面を持つ。鍔は断面が台形状を呈し、先端に面を持つ。鍔部から底部にかけては全面、ハケ目調整を行っている。

D 包含層出土遺物

鉄軸香炉 (684) 口縁部が外反する他は676とよく類似している。口径はやや大振りで16cm前後。

志野皿 (685・686) 濑戸、美濃系の志野皿で、685は鉄絵皿である。底部は平たく、体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部が僅かに外反して細く終わる。内面に円錐ピンによる重ね焼き痕が見られる。高台は共に削り出し高台で、先端が685は平たく、686は尖る。

唐津皿 (687) 唐津系の皿で、体部はやや内傾しながら立ち上がっている。削り出し高台で、断面は台形状を呈している。模様は円弧と波状文とからなるハケ目文を用いている。

灰釉丸碗 (688) 650とほとんど同形、同種である御深井釉の丸碗で、ただ口縁端部が内傾することなく上方に直線的に立ち上がっていることが異なる。

染付碗 (689) 伊万里系の染付碗で、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁端部で僅かに外反して細く終わる。高台は細く尖っている。染付は外面が柵状文、内面上部に連続楕円文があり、底部見込み部分に「寿」の文字がある。

灰釉ぐい呑 (690) 濑戸、美濃系と考えられる灰釉ぐい呑で、底部から弯曲することなく直線的に立ち上がり、口縁端部で僅かに外反して細く終わる。

染付仏餉具 (691) 杯部は体部が口縁端部まで弯曲して細く終わる。高台部は底部に削り出しによるへこみを持つ。染付は鋸歯文の中に刷毛目状文様を配

する文様である。

土師器羽釜 (692~694) 何れも高台が浅い偏平な羽釜で、体部はやや内傾しながら立ち上がり、口縁部でそのまま上方に向かうもの(692・693)と内折するもの(694)がある。鍔部は断面が矩形を呈するもので、やや先端が肥厚する。何れも外面にススが付着している。

擂鉢 (695) 常滑系の擂鉢で、底部から屈曲して体部が直線的に立ち上がる。底部外面はユビオサエ成形による。

常滑甕 (696) 口縁は折り返され、僅かにN字状口縁の名残を留めている。口縁部ヨコナデ、体部はタタキの後きれいにナデ消している。杉崎編年第3段階終末期後半(15世紀後半)。

硯 (697) 粘版岩製の長方硯。硯面は削り出しによって成形され、裏面も周堤部を持つ。海部は幅が狭く、陸部は中央付近で使用痕によってよく摩滅している。たて15.5cm、幅11.2cm、厚み1.0~2.2cm。

(浅尾悟)

※戦国・江戸時代出土遺物の編年観は次の文献による。

〈常滑窯〉

- ・杉崎章「福住古窯址群と知多窯製品の編年」『福住古窯址群』新翼ヶ丘団地関係遺跡調査団1978
- ・杉崎章「知多古窯の終末と常滑窯の出現」『常滑市民俗資料館研究紀要I』常滑市教育委員会1983

〈瀬戸・美濃窯〉

- ・田口正二『美濃焼』ニューサイエンス社 1983
 - ・藤澤良祐「本業焼の研究」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VI、VII』瀬戸市歴史民俗資料館 1987, 88
 - ・藤澤良祐、他『尾呂』瀬戸市教育委員会 1990
- 〈肥前陶磁〉
- ・大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館 1984
 - ・大橋康二『肥前陶磁』ニューサイエンス社 1989

[註]

- (1)三重県教育委員会『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概報V』1989.3
- 三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概報VII』1991.3
- (2)倉田直純『地蔵僧遺跡発掘調査報告』亀山市教育委員会 1978
- (3)三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概報VII』1990.3
- (4)小笠原好彦「近畿地方の七、八世紀の土師器とその流通」考古学研究 第26巻 第4号 考古学研究会 1980.3

4 結語

正知浦遺跡は、亀山市の市街地の北方に広がる亀山丘陵の南端の椋川と亀田川にはさまれた丘陵南端に位置する。この丘陵上には、土師器・須恵器のほか山茶椀等の土器片が少量ではあるが、ほぼ全面に散布しており、遺跡はこの丘陵全域に広がっているものと考えられる。今回の調査は、バイパス建設に伴う調査であり、遺跡の南端部約8,200m²で調査を実施した。

当地区では、既に亀田古墳の所在が知られており、今回の調査で確認した正知浦2号墳がこれに該当すると判断された。また、この古墳以外にも横穴式石室の古墳を確認したので、亀田古墳の名称を正知浦古墳群と変更した。

調査の結果は、前項で報告したとおりであるが、今回の調査結果と今後の課題について簡単に触れて結語といたしたい。

旧石器・縄文時代の遺構は、確認されなかつたが、チャート製の有舌尖頭器1点が出土しており、亀山市内では田村町名越遺跡出土例に続き2例目となつた。

縄文土器は、近畿地方の編年による中期の北白川C式に属する範疇で捉えることができる。類例は、鈴鹿川流域の鈴鹿市東庄内B遺跡・同北一色遺跡・同起遺跡等で確認されており、沈線を主体とし、発達した連弧文をもつ等北白川C式C類に認められない点もあり、今後の資料の増加をまって、この地域の編年を検討を進める必要がある。

古墳時代の遺構には、6世紀後半の竪穴住居4棟のほか横穴式石室を内部主体とする古墳を2基確認した。正知浦2号墳は、この地域で最初に横穴式石室を採用した井田川茶臼山古墳に引き続き築造された墳墓の一つと考えられ、群集墳が盛行する初期の段階に位置づけられる。2号墳出土の須恵器は、TK10形式・TK43形式・TK209形式に併行する形式のものが認められ、杯類では7類に分類される。A・B類とC・D類では、明らかに産地の異なることが推定されるが、その産地を特定するには至っていない。また、この形式差が産地の相違によるもので時

期差でないとする見解もあるが、追葬の想定される石室出土の遺物からでは、この点を明らかにしがたく、法量の変化は編年上の一つの要素であると考えておきたい。

石室構造については、1・2号墳とも玄室の平面形に「胴張り」プランが認められる点は、先行する井田川茶臼山古墳や同時期の太岡寺4号墳にも共通している。また、後続する鈴鹿市保子里18号墳・同深溝狐塚古墳・南山6号墳でも認められ、TK209形式の時期まで存続する。この「胴張り」プランは、鈴鹿川以北の内部川・三滝川及び朝明川流域の後期古墳には、一般的に認められ、三河地方と関係が論じられている。一方、美濃に近い員弁川流域の古墳では、現在のところ「胴張り」プランは確認されておらず、畿内型石室の範疇に属すると考えられているが、北勢地方の古墳文化を解明するためには美濃・尾張・三河地方との比較検討を行うことが重要である。

古墳時代以降の遺物は、土師器・須恵器を中心となっており、この地域の土器編年を考究するうえで貴重な資料を得ることができた。土師器は、杯・甕・甌・鉢があり、主体をなすものは甕である。甕は、9形態に分類され、飛鳥・奈良時代のものが外面縦ハケ、内面横ハケの調整が多いのに対し、古墳時代のものは内面横ハケのをナデ消したり、ヘラケズリを行う傾向が認められる。次の飛鳥・奈良時代には古墳時代から継続される甕B・Fに加え口縁部が「く」の字状に屈曲する甕Jと口縁部が内弯する甕Kの2種が新たに加わり4形態の構成となることが認められた。

これら土師器の6世紀から8世紀の編年は、地域差も大きく今後の大きな課題である。

(駒田利治)

付 表

(遺物観察表)

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
1	須恵器	蓋	B 6-16 1号墳壺形	口径 14.0 器高 (3.5)	1/10	口縁端部は下方に細く終わる	天井部外面1/2はロクロケズリ、他はロクロナデ 1mm砂粒少量	ロクロ回転不明	1090	
2	"	杯	A10-22石 室内セクション	口径 12.4 器高 —	1/10	受部は短く三角形状を呈し、口縁端部は上方に細く終わる	内外面ともロクロナデ	緻密	ロクロ回転不明	1224
3	"	"	1号墳 西壺形 No.7	口径 11.6 器高 2.9	1/3	器形は偏平で、口縁部はY字状を呈する。	"	"	ロクロ右回転	204
4	"	"	1号墳 壺形内	口径 12.4 器高 —	1/5	受部は短く、立ち上がりはやや内傾して細く終わる。	"	"	ロクロ回転不明	1225
5	"	短頸壺?	1号墳 石室内 No.6	口径 — 器高 —	底部のみ	底部はやや肥厚し、内面には指頭圧痕が残る。	外面ロクロケズリ、内面ロクロナデ	"	ロクロ右回転底部 ヘラ記号	203
6	"	平瓶	1号墳 石室内 No.1	口径 5.0 器高 7.8	完形	小型の平瓶で、体部断面は梢円状を呈し、口を大きく開く	体部下方1/2がヘラケズリ、他はヨコナデ	"	上方わずかに自然釉	201
7	"	"	1号墳 石室内 No.2	口径5.1 器高7.6	完形	"	"	"	"	202
8	耳環	金環	1号墳 石室内 No.5	2.2×2.4 厚0.5×0.7	完形	銅地に金張り、真円に近い 保存状態は良い				205
9	"	"	1号墳石室 内セクション	2.2×2.4 厚0.5×0.7	完形	"				206
10	"	銀環	1号墳 石室内 No.4	2.4×2.7 厚0.5×0.7	完形	銅地に銀張り、真円に近い				207
11	石製品	石斧	1号墳 石室内 No.3	11.4×4.7 厚さ2.6	ほぼ完形	砂岩製の大型蛤刃石斧				210
12	鉄製品	鉄鎌	1号墳 石室内	11.4×1.9 厚0.9×0.4	ほぼ完形	柳葉式鉄鎌				209
13	"	"	1号墳 石室内 No.8	14.2×1.2 厚0.5×0.4	ほぼ完形	長頸方刃箭式鉄鎌				208
14	須恵器	蓋	B 6-23 満1	口径 12.5 器高 2.9	1/4	体部はやや偏平で、口縁端部はやや外傾して細く終わる	内外面ロクロナデ	1~3砂粒 少量	ロクロ回転不明	1143
15	"	杯	A10-10 1号墳周満	口径 9.9 器高 (4.7)	1/5	受部はT字状を呈し、底部はやや肥厚する。	底部1/2が未調整、他はロクロナデ	1~2mm砂粒 少量	ロクロ右回転	1226
16	"	短頸壺	A10-10 1号墳周満	口径 8.4 器高 —	1/5	器壁が細く、頸部はやや内傾して細く終わる。	体部下方1/2がロクロケズリ、他はロクロナデ	1mm砂粒 少量	ロクロ回転不明	1091
17	"	杯A (蓋)	2号墳玄室 No.32	口径 12.8 器高 4.0	完形	稜が明瞭、天井部が平らで端部は内面に面を持つ。薄灰色	体部外面2/3をヘラケズリし、他はロクロナデ	1mm前後砂 粒少量	ロクロ右回転18と セット	1033
18	"	" (身)	2号墳玄室 No.38	口径 11.4 器高 3.5	完形	立ち上がりは内傾し端部は丸い。天井部は平ら。薄灰色	底部外面ヘラケズリ、他はロクロナデ	"	ロクロ左回転	1034
19	"	" (蓋)	2号墳玄室 No.4	口径 13.1 器高 3.8	完形	稜が明瞭、天井部が平らで端部は内面に面を持つ。薄灰色	体部外面2/3をヘラケズリし、他はロクロナデ	"	ロクロ右回転20と セット	1048
20	"	" (身)	"	口径 11.5 器高 4.1	ほぼ完形	立ち上がりは内傾し端部は丸い。天井部は平ら。薄灰色	底部外面ヘラケズリ、他はロクロナデ	"	ロクロ左回転	1049
21	"	" (蓋)	2号墳玄室 No.21	こうけい 12.8 器高 4.2	完形	稜が明瞭、天井部が平らで端部は内面に面を持つ。薄灰色	体部外面2/3をヘラケズリし、他はロクロナデ	"	ロクロ右回転22 セット	1031
22	"	" (身)	"	口径 11.5 器高 4.2	完形	立ち上がりは内傾し端部は丸い。天井部は平ら。薄灰色	底部外面ヘラケズリ、他はロクロナデ	"	ロクロ左回転	1033
23	"	" (蓋)	2号墳玄室 No.18	口径 13.4 器高 4.6	完形	稜が明瞭、天井部が平らで端部は内面に面を持つ。薄灰色	体部外面2/3をヘラケズリし、他はロクロナデ	"	ロクロ右回転24 セット	1037
24	"	" (身)	2号墳玄室 No.31	口径 11.5 器高 4.0	完形	立ち上がりは内傾し、端部は丸い。天井部は平ら。薄灰色	底部外面2/3をヘラケズリ、他はロクロナデ	"	ロクロ右回転26 セット	1063
25	"	杯B (蓋)	2号墳玄室 No.10	口径 13.0 器高 4.4	完形	稜が明瞭、天井部が平らで端部は内面に面を持つ。黒色	体部外面2/3をヘラケズリし、他はロクロナデ	"	ロクロ右回転26 セット	1063
26	"	" (身)	"	口径 11.7 器高 4.0	完形	立ち上がりは内傾し、端部は丸い。天井部は平ら。黒色。	底部外面2/3をヘラケズリ、他はロクロナデ	"	ロクロ左回転	1064
27	"	" (蓋)	2号墳玄室 No.23,25	口径 12.9 器高 4.0	完形	稜が明瞭、天井部が平らで端部は内面に面を持つ。黒色	体部外面2/3をヘラケズリし、他はロクロナデ	"	ロクロ右回転28 セット	1081
28	"	" (身)	2号墳玄室 No.22	口径 11.4 器高 4.4	完形	立ち上がりは内傾し、端部は丸い。天井部は平ら。黒色	底部外面ヘラケズリ、他はロクロナデ	"	ロクロ左回転	1082
29	"	(蓋)	2号墳玄室 No.6	口径 12.8 器高 4.1	完形	稜が明瞭、天井部が平らで端部は内面に面を持つ。黒色	体部外面2/3をヘラケズリし、他はロクロナデ	"	ロクロ右回転	1068

正知浦古墳群出土遺物観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
30	須恵器	杯B (身)	2号墳玄室 No.7	口径 11.8 器高 4.0	完形	立ち上がりは内傾し、端部は丸い。天井部は平ら。黒色	底部外面ヘラケズリ、他はロクロナデ	"	ロクロ左回転	1074
31	"	杯C (蓋)	2号墳玄室 No.13, 16	口径 14.0 器高 4.8	完形	外面天井部は丸みを帯び、口縁端部は細く終わる。セピア色	体部外面1/2ヘラケズリし、他はロクロナデ	1~4mm砂粒少量	ロクロ右回転32とセット	1051
32	"	" (身)	2号墳玄室 No.17	口径 12.8 器高 5.0	ほぼ完形	底部は丸く、受部と立ち上がりは長く端部は細い。セピア色	底部外面1/2をヘラケズリし、他はロクロナデ	"	ロクロ左回転	1054
33	"	" (蓋)	2号墳玄室 No.37	口径 14.4 器高 4.5	完形	外面天井部は丸みを帯び、口縁端部は細く終わる。セピア色	体部外面1/2ヘラケズリし、他はロクロナデ	"	ロクロ右回転34とセット	1058
34	"	" (身)	2号墳玄室 No.26	口径 13.0 器高 4.0	完形	底部は丸く、受部と立ち上がりは長く端部は細い。セピア色	底部外面1/2ヘラケズリし、他はロクロナデ	"	ロクロ左回転底部ヘラ記号	1059
35	"	" (蓋)	2号墳玄室 No.36	口径 14.7 器高 5.0	完形	外面天井部は丸みを帯び、口縁端部は細く終わる。セピア色	体部外面1/2ヘラケズリし、他はロクロナデ	"	ロクロ右回転端部外面刷毛	1052
36	"	" (蓋)	2号墳玄室 No.41	口径 14.4 器高 4.9	完形	"	"	"	"	1060
37	"	" (身)	2号墳玄室 No.37	口径 12.8 器高 3.9	完形	底部は丸く、受部と立ち上がりは長く端部は細い。セピア色	底部外面1/2ヘラケズリし、他はロクロナデ	"	ロクロ左回転	1061
38	"	" (蓋)	2号墳玄室 No.45	口径 14.6 器高 4.2	ほぼ完形	外面天井部は丸みを帯び、口縁端部は細く終わる。セピア色	体部外面1/2ヘラケズリし、他はロクロナデ	"	ロクロ右回転	1053
39	"	" (身)	2号墳玄室 No.2	口径 13.2 器高 4.0	1/2	底部は丸く、受部と立ち上がりは長く端部は短い。セピア色	底部外面1/2ヘラケズリし、他はロクロナデ	"	ロクロ左回転	1057
40	"	" (身)	2号墳玄室 No.3	口径 13.6 器高 4.8	4/5	"	"	"	ロクロ左回転底部ヘラ記号	1056
41	"	杯D (蓋)	2号墳玄室 No.43	口径 13.6 器高 4.5	完形	天井部は丸みを帯び、稜を僅かに意識する。暗灰色	体部外面1/2ヘラケズリし、他はロクロナデ	1mm前後砂粒少量	ロクロ左回転	1071
42	"	" (身)	2号墳玄室 No.30	口径 12.4 器高 4.0	完形	底部は丸く、受部と立ち上がりは内傾し細く終わる。暗灰色	底部外面1/2ヘラケズリし、他はロクロナデ	"	ロクロ左回転底部ヘラ記号	1073
43	"	" (蓋)	2号墳玄室 No.5	口径 14.4 器高 3.7	完形	天井部は丸みを帯び、稜を僅かに意識する。暗灰色	体部外面1/2ヘラケズリし、他はロクロナデ	"	ロクロ左回転	1044
44	"	" (身)	2号墳玄室 No.9	口径 13.0 器高 4.6	1/2	底部は丸く、受部と立ち上がりは内傾し細く終わる。暗灰色	底部外面1/2ヘラケズリし、他はロクロナデ	"	ロクロ左回転	1050
45	"	" (身)	2号墳玄室	口径 12.3 器高 3.5	1/3	"	"	"	ロクロ右回転	1022
46	"	杯E (蓋)	2号墳玄室 No.15	口径 13.9 器高 4.3	完形	上部が丸くて肥厚し、末調整で焼があまい。白色	体部外面1/3が未調整、他はロクロナデ	1~5mm砂粒を少量	ロクロ右回転47とセット	1083
47	"	" (身)	2号墳玄室 No.20	口径 11.9 器高 4.3	完形	やや偏平で立ち上がりが短く内傾し焼が甘い。白色	底部外面1/2が未調整、他はロクロナデ	"	ロクロ左回転	1084
48	"	" (身) 2号墳 玄室	No.21	口径 13.4 器高 3.9	ほぼ完形	"	"	"	ロクロ回転不明	1085
49	"	" (蓋)	2号墳玄室 No.12	口径 13.0 器高 3.5	3/4	"	"	"	ロクロ回転不明	1086
50	"	杯F (蓋)	2号墳玄室 No.53	口径 12.0 器高 4.0	完形	小振りで天井部は丸く、口縁端部は細く終わる。灰白色	体部外面1/3が未調整、他はロクロナデ	1~3mm砂粒少量	ロクロ左回転	1035
51	"	" (蓋)	2号墳玄室 No.46	口径 13.4 器高 4.0	完形	"	"	"	ロクロ左回転	1039
52	"	" (蓋)	2号墳玄室 No.33	口径 13.5 器高 3.9	完形	"	"	"	ロクロ左回転27とセット	1079
53	"	" (身)	2号墳玄室 No.27	口径 12.0 器高 4.5	完形	体部は粘土巻き上げ痕が明瞭受部が細い。灰白色	底部外面1/2が未調整、他はロクロナデ	"	ロクロ右回転	1080
54	"	杯G (蓋)	2号墳玄室 No.9	口径 13.0 器高 3.6	ほぼ完形	天井部が未調整、口縁端部内面に面を有する。灰白色	体部外面1/3が未調整、他はロクロナデ	1mm前後砂粒少量	ロクロ右回転	1070
55	"	" (蓋)	2号墳玄室	口径 13.8 器高 4.2	1/2	"	体部外面1/5が未調整、2/5がヘラケズリ、他はロクロナデ	"	ロクロ左回転	1042
56	"	" (蓋)	2号墳玄室 No.44, 50	口径 14.0 器高 4.7	ほぼ完形	"	体部外面1/3が未調整、他はロクロナデ	"	ロクロ左回転	1062
57	"	" (蓋)	2号墳玄室 No.47	口径 12.3 器高 4.4	1/2	"	"	"	ロクロ左回転	1046
58	"	" (蓋)	2号墳玄室 No.39	口径 13.4 器高 3.5	完形	"	"	"	ロクロ右回転59とセット	1066

正知浦古墳群出土遺物観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
59	須恵器	杯G(身)	2号墳玄室 No.28	口径 11.8 器高 3.5	完形	底部1/3が身調整で直線的、灰白色	底部外面1/3ろくろなは未調整、他はロクロナデ	1mm前後砂粒少量	ロクロ左回転	1067
60	"	"(身)	2号墳玄室 No.14	口径 10.6 器高 4.0	完形	"	"	"	ロクロ右回転	1072
61	"	高杯A	2号墳玄室	口径 11.8 器高 —	杯部 1/2	底部は丸く、立ち上がりは内傾し細く終わる。短脚か?	底部外面1/2をヘラケズリし、他はロクロナデ	1~2mm砂粒少量	ロクロ右回転	1075
62	"	高杯B	2号墳玄室	口径 13.4 器高 —	杯部 1/2	2段の突帯とその間に櫛書き文様、3方透かし	内外面ともロクロナデ、2段の突帯を有する。	"	ロクロ右回転	1077
63	"	"	2号墳玄室	口径 12.8 器高 —	杯部 1/3	2つの沈線を有し、体部は丸い無蓋高杯。	内外面ともロクロナデ、2つの沈線を有する。	緻密	ロクロ右回転	1076
64	"	"	2号墳玄室 No.29	口径 12.8 器高 —	杯部 1/3	立ち上がりがほぼ垂直直角無蓋高杯。	内外面ともロクロナデ、	1mm砂粒少量	ロクロ右回転	1078
65	"	高杯C	2号墳玄室	口径 9.5 器高 7.4	1/2	杯部は丸く、短脚で3カ所の円孔を有する。瓦室土器	杯部外面2/3がロクロケズリ、他はロクロナデ	緻密	ロクロ回転不明	1065
66	"	脚付短頸壺	2号墳玄室 No.24	口径 11.4 器高 10.3	ほぼ完形	高杯に類似する。口縁部に段を有する。短脚。	内外面ともロクロナデ	1mm砂粒少量	ロクロ回転不明	1026 1027
67	"	高杯B	2号墳玄室	口径 12.0 器高 16.0	ほぼ完形	杯部は1つの段と2条の沈線脚部は2段3方透かし。黒色	内外面ともロクロナデ、きやつくぶはカキ目成形。	緻密	ロクロ右回転	1036
68	"	"	2号墳玄室	口径 12.1 器高 15.2	ほぼ完形	杯部は2カ所の段があり、脚部は2段3方透かし。薄灰色	内外面ともロクロナデ、	1mm砂粒少量	ロクロ右回転	1029
69	"	銚	2号墳玄室	口径 13.8 器高 (14.5)	口縁部 1/5	口縁部3段、体部1段のへラ条痕と体部に2条の沈線	内外面ともロクロナデ、口縁部は3段のへラ条痕、	1mm砂粒少量	ロクロ回転不明	1045
70	"	短頸壺蓋	2号墳玄室	口径 9.0 器高 3.1	1/3	口縁端部は下方に面を持つ。	天井部外面1/2をヘラケズリ、他はロクロナデ	1~2mm砂粒少量	ロクロ右回転71とセット	1025
71	"	短頭壺	2号墳玄室 No.25	口径 7.4 器高 8.0	完形	体部は丸く、頸部は垂直に立ち上がり細く終わる。	体部前面にロクロケズリ、他はロクロナデ	1~2mm砂粒少量	ロクロ回転不明	1024
72	"	"	2号墳玄室	口径 6.1 器高 9.1	1/4	体部は丸く、頸部はやや内傾して細く終わる。	底部はロクロケズリ、他はロクロナデ	4~6mm砂粒少量	ロクロ左回転	1047
73	"	"	2号墳玄室	口径 7.8 器高 8.0	1/2	体部はやや偏平で、頸部はやや外反して細く終わる。	"	緻密	ロクロ右回転	1043
74	"	"	2号墳玄室	口径 9.8 器高 —	口縁部 1/3	頸部は垂直に立ち上がり細く終わる。	内外面ともロクロナデ	"	ロクロ回転不明	1069
75	"	"	2号墳石室 A19-19 SK 1	口径 — 器高 —	体部のみ完存	体部は丸く、底部は偏平となる。	体部はカキ目、底部はロクロケズリ、他はロクロナデ	1~2mm砂粒少量	ロクロ右回転	1040
76	"	"	2号墳玄室 No.42	口径 6.8 器高 7.1	完形	体部は丸く、底部は偏平で肥厚する。	体部上段はカキ目、下段はロクロケズリ、底部は未調整。	1mm砂粒少量	ロクロ左回転	1023
77	"	平瓶	2号墳玄室	口径 6.8 器高 12.5	ほぼ完形	体部は球体、丈夫に鉗状の飾り、注口部はやや開く。底部はロクロケズリ、他はロクロナデ	"	緻密	ロクロ右回転	1030
78	土師器	杯	2号墳玄室 No.8	口径 12.6 器高 4.8	1/2	底部は丸く、口縁部は直線的に立ち上がり内側に面を持つ。	体部から底部にかけ刷毛目、口縁部はヨコナデ	1mm砂粒少量		1041
79	"	"	2号墳玄室 No.40	口径 11.2 器高 6.9	完形	底部は丸く、口縁部は直線的に立ち上がり上方に細く終わる丸	(摩耗にて調整技法不明)	緻密		1028
80	鉄製品	鋤先	2号墳玄室	全長 19.0 最大幅 2.4	2/3	U字形鋤先、断面はY字形丸				1108
81	"	鉄鎌	2号墳玄室	全長 12.0 最大幅 2.4	完存	短頸柳葉式、先端が丸い刺被あり。				1100
82	"	"	2号墳玄室	全長 — 最大幅 2.6	ほぼ完存	短頸柳葉式、先端が丸い				1101
83	"	"	2号墳玄室	全長 — 最大幅 2.8	鎌身のみ	短頸柳葉式、先端が丸い				1135
84	"	"	2号墳玄室	全長 — 最大幅 2.2	鎌身のみ	短頸柳葉式、先端が劣る				1102
85	"	"	2号墳玄室	全長 — 最大幅 2.2	1/2	長頸片刃箭式、鎌身断面が片切刃状を呈する				1133
86	"	"	2号墳玄室	全長 16.0 最大幅 —	ほぼ完形	"				1132
87	"	"	2号墳玄室	全長 9.0 最大幅 2.1	完存	短頸で鎌身が菱形を呈する				1103

正知浦古墳群出土遺物観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
88	鉄製品	鉄鎌	2号墳玄室	全長 14.0	最大幅 2.0	完存	短頭で鎌身が五角形を呈する			1105
89	"	"	2号墳玄室	全長 — 最大幅 2.0	鎌身のみ	短頭柳葉式、刃子状呈する刺被あり。				1106
90	"	"	2号墳玄室	全長 (13.0) 最大幅 1.7	ほぼ完存	"				1104
91	"	鉄刃	2号墳玄室 袖口	全長 51.0 最大幅 3.5	ほぼ完存	平棟平造。中央部の棟幅が厚い。柄部に木質と樹皮巻き残存				1109
92	"	馬具(紋具)	2号墳玄室	全長 8.2 最大幅 5.8	ほぼ完存	輪金の頭部が丸くふくらむ。刺金は頭部で鉄によって固定				1107
93	玉類	勾玉	2号墳玄室	全長 3.1	最大幅 1.0	完存	瑪瑙製。褐色。穿孔方向は一方向。			1092
94	"	"	2号墳玄室	全長 2.6 最大幅 0.8	完存	"				1093
95	"	切子玉	2号墳玄室	全長 1.9 最大幅 1.1	完存	水晶製。6面体。無色透明。穿孔方向は一方向。				1094
96	"	"	2号墳玄室	全長 1.4 最大幅 1.3	完存	"				1096
97	"	"	2号墳玄室	全長 1.4 幅 1.4	完存	"				1095
98	"	ガラス小玉	2号墳玄室	径幅 0.2 0.5	完存	ガラス製。マリンブルー色。				1097
99	"	"	2号墳玄室	径幅 0.2 0.5	完存	"				1098
100	"	"	2号墳玄室	径幅 0.2 0.5	完存	"				1098
101	須恵器	杯(蓋)	A20-16 2号墳周溝	口径 12.4 器高 —	口縁部1/3	受部は細く、口縁部は内傾して細く終わる。薄灰色。	口縁部はロクロナデ	1~2mm砂粒 少量	ロクロ左回転	1088
102	"	壺	A19-5 2号墳周溝	口径 — 器高 —	口縁部のみ欠	体部は丸く弯曲し、底部は平底。暗灰色。	体部はカキ目、底部は未調整、口縁部はロクロナデ	"	ロクロ右回転	1089
103	土師器	蓋	A19-5 2号墳	口径 器高 — —	つまみ部分	宝珠形のつまみ、赤茶色。	内外面共ロクロナデ成形。	緻密	ロクロ回転不明	1215
104	"	甕	A20-11 2号墳周溝	口径 17.0 器高 —	口縁部のみ	口縁部は外反して、短部は外部に面を持つ。肌色。	口縁部はヨコナデ、他は不明	緻密		1087

正知浦古墳群出土遺物観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
108	縄文土器	深鉢	A14-20包	—	口縁部山形突起のみ	内湾しながら大きく立ち上がる山形口縁に、渦巻き・蛇行・縦位の沈線文を施す。	外面にLR縄文を地文に施す。内面はナデ調整。突起頂部端面にもLR縄文を施す。	1~3mmの小石を多量に含む。	4本の山形突起のひとつ。	2103
109	縄文土器	深鉢	A14-20包	—	口縁部のみ	内湾する波状口縁の一部。端部によいわい縫帶を持ち、弧状の沈線で窓状区画文を作る。	外面にLR縄文を地文に施す。内面は横位のナデ調整。口縁端部にもLR縄文を施す。	1~3mmの小石を多量に含む。	山形口縁の谷部の可能性もある。	2102
110	縄文土器	深鉢	A14-25包	—	口縁部のみ	内湾する口縁部。木葉形になる横位沈線文を施す。	外面にLR縄文を地文に施す。内面はナデ調整。	1mm前後の金雲母砂粒を多量に含む。		2115
111	縄文土器	深鉢	A15-16包	—	肩部のみ	丸くゆるやかに張る形部。横位の併行沈線文の下に弧状・斜行沈線を施す。	外面にLR縄文を地文に施す。	1~2mmの小石を多量に含む。		2114
112	縄文土器	深鉢	A14-20包	—	肩部のみ	丸くゆるやかに張る肩部。横位の沈線を施す。	外面にRL縄文を地文に施す。内面はナデ調整。	1~2mmの小石を多量に含む。		2112
113	縄文土器	深鉢	A14-20包	—	頸部のみ	ゆるく「く」の字にくびれる頸部。沈線による連弧文に縦位沈線がつく。	外面にLR縄文を地文に施す。内面はナデ調整。	1~3mmの小石を多量に含む。		2113
114	縄文土器	深鉢	A14-20包	—	頸部のみ	ゆるやかにくびれる頸部。沈線による連弧文を施す。	内面はナデ調整。	1~2mmの小石を多量に含む。		2110
115	縄文土器	深鉢	A14-20包か?	—	頸部のみ	ゆるやかにくびれる頸部付近。横位沈線が交差し、縦位の沈線がつく。	外面にLR縄文を地文に施す。内面はナデ調整。	1~3mmの小石を多量に含む。		2111
116	縄文土器	深鉢	A15-16包	—	胴部のみ	ゆるやかに外反する胴部。縦位の平行沈線文を施す。	外面にLR縄文を地文に施す。内面はナデ調整。	1~3mmの小石を多量に含む。		2106
117	縄文土器	深鉢	A14-20包	—	胴部のみ	ゆるやかに外反する胴部。縦位の平行沈線文を施す。	外面にLR縄文を地文に施す。内面はナデ調整。	1~3mmの小石を多量に含む。		2109
118	縄文土器	深鉢	A14-20包	—	胴部のみ	若干内湾気味の胴部。3本1単位の縦位沈線を施す。	外面にLR縄文を地文に施す。内面はナデ調整。	1~7mmの小石を多量に含む。		2108
119	縄文土器	深鉢	A14-20包	—	胴部のみ	直線的に広がる胴部に3本1単位の縦位の沈線を施す。	外面にLR縄文を地文に施す。内面はナデ調整。	1~5mmの小石を多量に含む。		2101
120	縄文土器	深鉢	A14-20包	—	胴部のみ	やや外反する胴部に3本1単位の縦位沈線を施す。	外面にLR縄文を地文に施す。内面はナデ調整。	1~5mmの小石を多量に含む。		2107
121	縄文土器	深鉢?	A11-19包	推定底径7.9cm	底径の60%程度	平底から屈曲して胴下部に立ち上がる。	内外面ナデ調整。	1~4mmの小石を多量に含む。		2104
122	縄文土器	深鉢?	A11-13包	推定底径11.7cm	底径の70%程度	平らな円盤状の底部。	内面はナデ調整、底面に爪形の圧痕あり。施す	1~2mmの小石を大量に含む。		2105
128	土師器	甕Ba	S H21 №.3	口径 18.0	口縁部完存	体部より「く」字に屈曲して開く比較的長い口縁部をもち、端部は軽くつまみ上げる。	口縁部内外ともハケ目がやや残るが、ヨコナデ	0.5~4mmの小石若干含		2029
129	"	"	"	口径 14.8	1/2	"	体部内外面、頸部内面ハケ目、口縁部ヨコナデ	口縁部外面に1条の沈線が巡る。		1166
130	"	"	"	口径 12.4	1/12	体部より「く」字に屈曲して開く比較的長い口縁部で端部は外に面をもち軽くつまみ上げる。	体部内外面ハケ目、口縁部は内外面にハケ目を残るヨコナデ	2~3mmの砂粒若干含	ハケ目原体1.3cmに6本	2036
131	"	甕E	S H21 №.4	口径 21.0	1/5	腰味を残す長胴の体部に「く」字に屈曲する口縁部がつき、端部は内面をもつ。	体部外面ハケ目、内面ナデ、口縁部はハケ目を残すがヨコナデ	1~4mmの小石含		2030
132	"	"	"	口径 19.2	1/2	腰味を残す長胴の体部に「く」字に屈曲する口縁部がつき、端部は外に面をもつ。	口縁部は内面にハケ目を残すがヨコナデ	1mm以下の微砂粒含		2031
133	"	"	S H21 №.5	口径 11.4	"	腰味を残した長胴の体部に「く」字に屈曲した口縁部がつき、端部は丸くおさめる。	体部外面ハケ目、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	細砂含	器高の剥離が激しく調整不明確	1165
134	"	"	S H21 №.2	口径 13.6	1/2	腰味を残した長胴の体部に「く」字に屈曲する口縁部がつき、端部は外に面をもち内側はわざかに凹む。	体部外面ハケ目、内面上半はナデ、下半はハケ目、口縁部は外に面をもつハケ目を残すがヨコナデ	細砂含		1167
135	須恵器	蓋Ab1	S H21 №.10	口径 13.3 器高 4.6	3/4	天井部と口縁部の境の段は消失しているが、口縁部内面に面をもつ。	天井部の1/4をヘラケズリ、他はロクロナデ	1~2mmの砂粒多含	ロクロ右回転	1169
136	"	"	S H21	口径 14.4 器高 4.4	1/2	"	天井部の1/3をロクロケズリ、他はロクロナデ	2mm以下の砂粒含	"	1170
137	"	杯Ba1	S H21 №.13, №.14	口径 12.5 器高 4.7	ほぼ完形	口縁部は、低くやや内傾するが、端部は内に面を残す。	体部外面の2/3をロクロケズリ、他はロクロナデ	微砂粒多含	焼成やや不良で、外面器壁の剥離あり。クロ右回転	1163
138	"	杯Cb1	S H21 №.11, №.12	口径 10.7 ~11.4 器高 3.2	完形	口径に比べて器高が低く偏平な形態。口縁部は短く内傾する。	体部外面2/3へラ切り、後粗いケズリ。底部内面仕上げナデ、他はロクロナデ	細粒若含		1162
139	土師器	甕C	S H23 №.2	口径 12.4	1/10	「く」字に弱く屈曲する口縁部で、体部は下脛になるものと思われる。	体部外面ハケ目、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	1mm以下の砂粒若干含	外面摩滅が激しい、内面に黒斑	2015
140	"	甕Bc	S H23 №.7	口径 15.4	1/8	「く」字に屈曲して開く比較的長い口縁部が付き、端部は丸くおさめるものと思われる。	体部外面ハケ目、内面ナデ、口縁部内面ハケ目、外ヨコナデ	細粒含	体部外面ハケ目の後ナデしているかもしがれない。	1160
141	"	甕G	S H23 №.9	口径 7.8 器高 9.6	1/2	球形に近い体部に短く直立する口縁部がつき、端部は外反ぎみに丸くおさめる。	体部外面ハケ目、内面ヘラケズリ、口縁部外面ハケ目、内面未調整	2mmの砂粒、雲母含	体部外面に黒斑、底部外面剥離あり	1171

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
142	土師器	杯	SH23 №.4	口径 14.6 器高 6.3	1/6	半球状の深い杯で口縁部は尖りぎみに仕上げる。	ナデか	2~7mmの小石多含	摩滅が激しく調整不明	2014
143	須恵器	杯Bb 1	SH23 №.1	口径 11.4 器高 3.7	1/4	口縁部は低く内傾し、端部は丸くおさめる。	底部外面ヘラ切り未調整、内面仕上げナデ、他はロクロナデ	細粒若干含	体部外面に自然釉かかる。	1157
144	"	"	SH23 №.6	口径 11.6 器高 3.6	"	"	"	砂粒含	焼成不良ロクロ右回転	1158
145	"	高杯A	SH23 №.5	脚径 10.6	脚部完存	「く」字に大きく開く短い脚部で、透し孔は施さない。	ロクロナデ	砂粒多少含	底部内面に「+」のヘラ記号	1159
146	土師器	小玉	SK23	長径 1.3 短径 1.2 高 1.05 重 1.4 g	完形	楕円柱状を呈し、中心よりやや外寄りに2~2.5mmの孔を施す。		精良		1161
147	土師器	杯	SK26	口径 11.2 器高 4.5	1/5	内弯ぎみに立ち上がる口縁部で、端部はやや肥厚し内に弱面をもつ。	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ	2mm以下の砂粒若干含	粗製	2023
148	"	甕Bb	SK26 №.6	口径 11.6	1/6	体部より「く」字に屈曲して開く口縁部で端部は若干肥厚する。	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ目、内面ナデ	0.5mm以下の微砂若干	内外面摩滅が激しい	2206
149	"	甕Bc	"	口径 18.0	1/6	脹味を残した長脣の体部がつくものと思われ、口縁端部は外に面をもつ。	"	2mm以下の砂粒若干含		2025
150	"	甕E	"	口径 12.6	口縁1/12 体部1/6	脹味を残した胴部に「く」字に開く口縁部が付き端部は丸くおさめる。	口縁部強いヨコナデ、体部外面ハケ目、内面ナデ	0.5mm以下の砂粒若干含	一部に器壁の剥離あり	2024
151	土師器	甕Fb	"	口径 30.0	1/12	胴部の張りのない長脣の体部のために頸部の縮りがない形態	口縁部は、ハケ目を残すがヨコナデ、体部外面ハケ目、内面ナデ	1~3mmの小石若干含	器体に歪みがあり、口径不明確	2027
152	"	"	SK26 №.7	口径 26.8	1/4	胴部の張りが弱いことにより、頸部の縮りが小さい。	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ目、内面ナデ	細粒を含む		1168
153	須恵器	蓋D	SK26 №.8	口径 16.0 器高 4.8	1/2	偏平なつまみを張り付け、天井部と口縁部の境に沈線を巡らす。	天井部外面カキ目、他はロクロナデ	砂粒ほとんど含まず	多少歪みあり、焼きぶくれが多い。外面自然釉がかかる。	1164
154	土師器	鉢	SK46	口径 12.0 器高 6.3 底径 7.0	1/4	平らな底部から屈曲して立ち上がる口縁部で口径に比して器高が高い。	内面ヘラケズリ、外面未調整	2mm以下の砂粒若干含	歪みあり粗製	391
155	須恵器	高杯A	"	口径 13.3 器高 10.1	口縁部1/2、脚部欠損	有蓋で、太く短い脚部をもつ。透かし孔は施さない。	杯底部外面浅いロクロケズリ、他はロクロナデ	1~2mmの砂粒含	焼成にむらがあるロクロ右回転	155
156	"	高杯Da	"	口径 12.0 器高 10.6 脚径 9.2	口縁部のみ欠損	半球状の杯部に太く短い脚部がつく。	"	砂粒を若干含むが精良	杯部外面と脚外面に自然釉が若干かかる。	156
157	"	鉢	SK 1 №.1	口径 14.2 器高 7.1	完形	半球状の体部で、口縁部は「く」字に屈曲し、一ヶ所に片口を設ける。	体部外面ヘラケズリ、内面ナデだが、板状工具の痕跡あり	精良	ロクロ不使用	1001
158	"	蓋Aa 1	SK 1 №.2	口径 13.6 器高 4.5	口縁部若干欠損	天井部と口縁部の境の段は、わずかに痕跡をとどめる。	天井部外面未調整、他はロクロナデ	0.5~1mmの砂粒を若干含む	焼成不良	1002
159	土師器	甕G	SK24	口径 13.4 ~14.0	上半部完存	やや外反ぎみに上方へ伸びる口縁部で端部は細くなつておわる。	体部外面未調整、内面は板状工具によるナデか。口縁部ヨコナデ	2mmの砂粒若干含	口縁部外面の一部に黒斑あり。	1154
160	須恵器	杯Bb 1	SD 2	口径 11.2	1/6	比較的高い口縁部であるが、端部は丸くおさめる。	ロクロナデ	2~4mmの砂粒を含む	ロクロ右回転、底部外面に自然釉がかかる。	2006
161	"	高杯C	"	口径 11.6	1/5	偏平な杯部に長脚二段透かしの脚が付くと思われる。	杯底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	1~2mmの砂粒多含	ロクロ右回転杯底部外面から受部まで自然釉がかかる。	2005
162	土師器	甕Ba	SK70	口径 17.8	1/4	口縁多くは外に面をもち、若干つまみ上げられる。	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ目か。	5mm以下の砂粒含	摩滅が激しく調整不明確	283
163	須恵器	高杯Db	SK44	脚径 8.0	1/3	大きく「ハ」に開く短い脚部で基部は細い。	ロクロナデ	1mm以下の砂粒含		370
164	須恵器	蓋Ab 2	SK29	口径 11.2 器高 3.7	1/2	丸みのある天井部から内弯ぎみに下がる口縁部で端部は内に肥厚する。	天井部外面未調整、内面ナデ、他はロクロナデ	1mm以下の砂粒含		1155
165	土師器	甕Ba	SK25	口径 14.2	1/8	「く」字に屈曲する口縁部で端部はつまみ上げ外に面をもつ。	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ目、内面ナデ	2mm以下の砂粒、雲母含		1175
166	"	甕Bd	"	口径 13.2	1/8	「く」字に弱く屈曲する口縁部で端部は細くなつておわる。	口縁部ヨコナデ	2mm以下の砂粒、雲母多含	剥離が激しく調整不明	1176
167	須恵器	蓋Bb 2	"	口径 10.5 器高 3.2	1/3	平らな天井部から内弯ぎみに下がる口縁部で端部は丸くおさめる。	天井部外面未調整、内面ナデ	細粒ほとんど含まず		1174
168	土師器	甕Fa	"	口径 33.4	1/9	張りのない体部にゆるやかに外反する口縁部がつき、端部は上方へつまみ上げる。	口縁部ヨコナデ、頸部外面指押さえ	2mm以下の砂粒含		1177
169	須恵器	蓋Ab 1	SK 5	口径 12.2 器高 4.3	1/2	四凸があるが、全体として丸みのある天井部から下がる口縁部で端部は若干外反する。	天井部外面未調整、他はロクロナデ	1~3mmの砂粒少量含		1150
170	須恵器	杯Bb 1	"	口径 10.5 器高 4.5	完形	深い形態だが、口縁部は低く、内傾し端部は丸くおさめる。	底部外面未調整、他はロクロナデ	1~3mmの砂粒少量含		1151

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
171	土師器	甕	S K31	口径 9.4 器高 13.0	1/10	球形の体部に直立する口縁部がつく。	体部外面上半カキ目、下半へラケズリ、内面ナデ	1~5mmの砂粒多合	調整はロクロを使用して行われている。右回転	2093
172	金属製品	耳環	S K45		ほぼ完形				表面はほとんど剥離地金は暗紫色	1244
173	石製品	白玉	S K17	径厚 0.7 0.2	完形			滑石		1193
174	"	"	"	径厚 0.6 0.2	"			"		2099
175	土師器	杯	A19-2 No.1	口径 12.4 (推定) 器高 6.0	1/8	底部から内湾ぎみに立ち上がる口縁部で、端部は尖りぎみになる。	外:底部未調整、口縁部底面近くまでヨコナデ。 内:丁寧なナデ	密雲母片若干合		2008
176	"	壺	B14-22包(II)		1/6 体部上半欠損	やや下膨れの球状の胴部	外:ハケ目 内:板状工具によるナデ	直径2mmの砂粒若干合		372
177	"	甕A	B14-7包	体部最大径 11.7	口縁部欠損	球形の体部に「ハ」字に開く短い口縁部が付く	外:ハケ目 内:ナデ	直径2mmの砂粒若干合		152
178	"	"	B13-5包II	口径 11.6	1/4	球形の体部に「ハ」字に開く短い口縁部が付き、端部は丸くつまみ上げる。	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ目 内:ヘラケズリ	1mm以下の微砂、雲母多合		259
179	"	"	B10-11包	口径 14.8 (推定) 器高 14.5	1/5	球形の体部に「ハ」字に開く短い口縁部が付き、端部は軽くつまみ上げる。	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ目、体部下半へラケズリ 内:ナデ(ハケ目が残る)	直径1~2mmの砂粒多合	口縁部内面に煤付着摩滅が激しく調整不明確	2061
180	"	"	B16-4包	口径 15.8 器高 15 (推定)	1/2	"	外:口縁部ヨコナデ(指頭圧痕が残る)。体部上半ハケ目、下半は未調整か 内:ヘラケズリ	"	体部内面に黒斑あり	1242
181	"	甕Ba	B14-19包	口径 16.8 (推定)	1/4	体部より「く」字に屈曲して開く比較的長い口縁部をもつ。端部は外に面をもち軽くつまみ上げる。	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ目 内:ナデ	微細砂多合		140
182	"	"	B19-3包II	口径 14.0	1/6	"	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ目 内:ハケ目か	0.5~4mmの小石多合	体部の剥離が激しく調整不明確	348
183	"	甕Bb	B14-7包	口径 14.0	1/5	体部より「く」字に屈曲して開く比較的長い口縁部をもち、端部は肥厚して丸くおさめる。	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ目 内:ヘラケズリ	1mmの砂粒若干合		252
184	"	甕Bc	B15-22 竪穴群直上	口径 14.4	1/10	体部より「く」字に屈曲して開く比較的長い口縁部をもち、端部はそのまま丸くおさめる。	外:口縁部ヨコナデにより調整か 内:ナデ	密(1mmの微砂若干合)	内外面とも摩滅がはげしく、調整不明確	2016
185	"	甕I	B14-25包	脚径 7.0	1/2 (脚部)	「ハ」字に開く脚が付く。脚端部はそのまま丸くおさめる。	体部外外面ハケ目、脚部外面ハケ目、内面ナデ	1~2mmの砂粒若干合		392
186	"	甕D	B14-22包II	口径 8.0	1/4	体部の張りが小さく鉢に近い形態で小型	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ目 内:ナデか	2~3mmの砂粒少量合	剥離が激しく調整不明確。全体に粗製である。	218
187	"	"	B14-17包II	口径 24.4	1/8	比較的大型で、体部の張りが小さく鉢に近い形態	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ目 内:口縁部ハケ目、体部ナデ	2mm以下の砂粒多合		147
188	"	"	B20-3包II	口径 16.0	1/10	中型で、体部の張りが小さく鉢に近い状態	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ目 内:ナデ	5mmの小石合	口縁部外外面と、体部外面上半に黒斑	393
189	"	"	B14-17包II	口径 17.4	1/8	中型で、体部の張りが小さく鉢に近い形態、口縁端部をつまみ上げる。	外:口縁部ヨコナデ、頭部～体部ハケ目 内:口縁部ハケ目、体部ナデ	2mm以下の砂粒合		148
190	"	"	B19-2包II	口径 15.0	1/6	中型で、体部の張りが小さく鉢に近い状態	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ目 内:ナデ	3mm以下の砂粒合		258
191	"	甕C	B14-23包II	口径 15.6	1/5	下膨れの体部に弱く「く」字に屈曲する口縁部が付く	外:口縁部ハケ目で調整し、後に口縁部をヨコナデする	4mm以下の小石多合		357
192	"	"	B16-4	口径 12.8	1/2	"	外:口縁部ヨコナデ、体部未調整か 内:ハケ目	1~4mmの砂粒多合	口縁部内面に黒斑、摩滅により調整不明確	1243
193	"	甕H	B17-3包	口径 11.0 器高 21.3	1/3	長球状の体部に短く「く」字に屈曲する体部が付く。	外:口縁部ヨコナデ、体部上半へラケズリ、下半ナデ(肩部以上をナデ、他は未調整)	密、1~5mmの小石若干合	体部外下面下半に若干煤付着	2062
194	"	甕E	B14-4包	口径 15.0	1/4	脛味を残した長胴の体部に「く」字に屈曲する口縁部が付き端部はやや上方につまみ上げる。	外:口縁部ハケ目を残すがヨコナデ、他は外面を縦、内面を横方向のハケ目	2mm以内の砂粒若干合		185
195	"	"	B11-25包II	口径 19.0	1/6	"	"	1mmの砂粒合		2075
196	"	"	B17-3包	口径 21.6	1/3	"	外:口縁部ヨコナデ、体部縦方向ハケ目	1~3mmの砂粒合		2064
197	"	甕Fb	B15-22 SK2	口径 26.0	1/12	体部の張りがなく、甕Dを長胴にした形態	外:口縁部ヨコナデ、体部縦方向ハケ目内:横方向ハケ目を残すが、ナデ	3mm以下の砂粒若干合		2018
198	"	甕	B14-15包	口径 21.6	1/6	筒状の体部からそのまま直立する口縁部をもち、一対の把手が付く	外:縦方向のハケ目 内:上半を横方向のハケ目、下半へラケズリ	1.5mm以下の砂粒合		434
199	"	"	B 8-18包	口径 26.2	1/5	筒状の体部からそのまま直立する口縁部をもち、端部は外に面をもつ。	外:口縁部ヨコナデ、他は不明	0.5~2mmの砂粒合	摩滅が激しく調整不明	360

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
200	土師器	鉢	B16-4包	口径11.8 器高9.3	完形	比較的平らな底部より直立する体部をもち、口縁部は短く外反する。	外:口縁部ヨコナデ、体部雑なハケ目 内:口縁部横方向のハケ目を残すヨコナデ、他はナデ	1mmの砂粒若干含	体部外面に黒斑	1228
201	須恵器	蓋Aa1	B8-13包	口径14.8 器高4.6	1/4	丸みの残る天井部で口縁部との境に段を有する	天井部の2/3をロクロケズリ、他はロクロナデ、天井部内面はナデ	1mmの砂粒含	口縁部外面に自然釉がかかる。	21
202	"	"	A19-1包	口径12.8 器高4.3	2/3	天井部と口縁部の境に段を有するが、口縁端部は丸くおさめる。	天井部上半未調整、他はロクロナデ	0.5mmの砂粒少量含	ロクロ右回転	1019
203	"	甕Ab1	B14-17包	口径13.6 器高3.7	1/2	天井部と口縁部の段は消失するが、口縁内面に面をもつ	天井部上半未調整、下半ロクロケズリ、内面と口縁部ヨコナデ	2mmの砂粒含	ロクロ右回転	224
204	"	"	B14-18包	口径12.6 器高3.8	口縁部細片	やや丸みをもつ天井部で、口縁部との境に段はなく、端部も丸くおさめる。	天井部未調整、他はロクロナデ	0.5~2mmの小石少量含		113
205	"	"	B14-17包II	口径12.9 器高4.2	1/6	やや丸みをもつ天井部で、口縁部との境に段はなく、端部外面にヘラケズリによる面をもつ	"	2mm以下砂粒多含	ロクロ右回転	213
206	"	蓋Aa1	A19-16包	口径13.7 ~13.9 器高4.6	完形	天井部と口縁部の境に段を有し、口縁端部内面に凹面状の面をもつ	天井部の1/3をヘラケズリ、他はロクロナデ	1mm以下の微砂少量含		1214
207	"	蓋Ab1	B7-6包	口径12.2 器高4.2	1/4	"	天井部外面の1/3をロクロケズリ、他はロクロナデ	5mmの小石含	口縁部外面に自然釉がかかる。ロクロ左回転	1202
208	"	"	B14-16包II	口径14.6 器高4.1	1/4	"	天井部の1/2をロクロケズリ、他はロクロナデ	1~3mmの砂粒含	天井部外面に「一」のヘラ記号ロクロ左回転	256
209	"	蓋Aa2	B13-19包II	口径10.4 器高3.1	"	丸みの残る天井部で、口縁部との境に沈線を巡らす。	天井部の1/3をロクロケズリ、他はロクロナデ	1mm以下の微砂若干含		340
210	"	蓋Ab2	B12-22包II	口径10.0 器高3.6	口縁部若干欠損	丸みをもつ天井部からやや内弯きみ下がる口縁部で、端部は丸くおさめる。	天井部外面はヘラ切り後ナデ、口縁部との間をロクロケズリし、口縁部と内面はロクロナデ。天井部内面に一方向のナデあり。	1mmの砂粒含		1227
211	"	"	B14-25包	口径10.8 器高3.2	1/8	"	天井部外面未調整、口縁部との間をロクロケズリし、他はロクロナデ	1~3mmの砂粒多含	ロクロ右回転	190
212	"	"	B14-22包II	口径11.2 器高4.0	1/15	丸みをもつ天井部からやや内弯きみ下がる口縁部で、端部は外反ぎみに丸くおさめる。	"	1mm以下の微砂若干含		371
213	"	"	B14-21包II	口径9.6 器高3.8	1/3	丸みをもつ天井部からやや内弯きみ下がる口縁部で端部は丸くおさめる。	天井部未調整、他はロクロナデ、天井部内面はナデ	密、1~4mmの小石若干含		97
214	"	蓋Ab1	B7-16包	口径16.0 器高4.2	"	"	天井部の1/4をロクロケズリ、他はロクロナデ	精良	ロクロ右回転口縁部から天井部の内外面に自然釉がかかる	1207
215	"	"	"	口径15.0 器高5.1	1/2	"	天井部外面未調整、他はロクロナデ	2mm以下の砂粒少量含		1216
216	"	蓋Bb1	B14-16包II SK上	口径14.0 器高3.6	1/4	蓋Aに似るが、口径に比して器高が低く偏平な形態で、口縁端部内面に沈線を有する。	天井部外面未調整、他はロクロナデ	2mm以下の砂粒多含		369
217	"	"	B8-22包 B8-17包II	口径14.6 器高4.1	1/4	蓋Aに似るが、口径に比して器高が低く偏平な形態で、口縁端部内面に面をもつ	"	精良赤味の強い胎土		117
218	"	"	B8-17包	口径13.5 器高4.0	1/5	"	天井部外面の1/2をロクロケズリし、他はロクロナデ	"	焼成不良のため瓦質に焼ける	311
219	"	"	B9-22包	口径14.6 器高3.4	"	"	天井部外面はナデ、他はロクロナデ	5mmの小石若干含		20
220	"	蓋Bb2	B14-22包II	口径10.7 器高3.0	1/4	蓋C1をやや小型にした形態で、口縁端部は丸くおさめる。	天井部未調整、他はロクロナデ	1mm以下の微砂若干含	天井部外面に窯塊付着	307
221	"	"	B14-11包	口径11.2 器高3.2	1/4	"	"	砂粒を含む		74
222	"	"	B7-6包	口径11.0 器高2.9	"	"	"	2~3mmの砂粒若干含	口縁部外面に自然釉がかかる。ロクロ右回転	1210
223	"	"	B19-3包II	口径9.4 器高3.0	1/5	"	天井部外面未調整、内面ナデ、他はロクロナデ	精良	外面に自然釉かかる。	341
224	"	蓋E	B19-3包II	口径8.4 器高4.7	口縁部 1/3欠損	比較的長い口縁部で、端部内面に面をもつが、天井部との境の段は消失する。	天井部外面未調整、内面ナデ、他はロクロナデ	2mm以下の砂粒多含	ロクロ左回転、外面に自然釉が厚くかかり調整不明確	157
225	"	蓋Cb1	B16-17包	口径14.8 器高3.4	1/12	"	天井部の1/2をロクロケズリ、他はロクロナデ	0.5mm以下の微砂若干含		2094
226	"	蓋D	B14-18包		口縁部欠損	中央が凹んだ偏平なつまみを張り付ける。	天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	1~3mmの砂粒多含	ロクロ左回転	46
227	"	"	B-18包		"	"	"	2~4mmの砂粒多含	ロクロ右回転焼成不良のため瓦質に焼ける	49
228	"	杯Aa1	B14-25包	口径14.0 器高4.5	1/4	比較的高い口縁部で、端部内面は沈線状になる	体部の1/3をロクロケズリ、他はロクロナデ	1~7mmの砂粒含	ロクロ右回転	161

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
229	須恵器	杯Aa1	B11-7包	口径 11.3 器高 4.1	1/3	比較的高い口縁部で、端部内面に段を有する	体部の1/2以上をロクロケズリ、他はロクロナデ	2mm以下の砂粒若干含	ロクロ右回転やや歪む	1217
230	"	"	B13-24包	口径 12.4	1/6	比較的高い口縁部で、端部内面に面を持つ	体部の2/3をロクロケズリし、他はロクロナデ	8mm以下の小石含	ロクロ右回転	223
231	"	杯Ab1	B 7-16包	口径 14.2 器高 4.1	1/6	比較的高い口縁部だが端部は丸くおさめる	体部の1/3をロクロケズリし、他はロクロナデ	2~3mmの砂粒含	ロクロ右回転	1209
232	"	"	B 9-12包	口径 14.2 器高 3.7	1/8	"	"	2mm以下の砂粒若干含	ロクロ右回転	83
233	"	"	"	口径 13.0 器高 3.5	1/4	"	体部の2/3をロクロケズリし、他はロクロナデ	1~2mmの砂粒若干含	天井部外面に自然釉がかかる	92
234	"	杯Bb1	A19-17包	口径 12.8 器高 4.5	1/8	口縁部は低くやや内傾し、端部は丸くおさめる	体部の1/3をロクロケズリし、他はロクロナデ	0.5~2mmの砂粒多含	体部外面に自然釉がかかる。ロクロ左回転	1020
235	"	"	C16-7包	口径 12.0 器高 4.9	1/3	"	内面ロクロナデ	1~2mmの砂粒少量含	ロクロ右回転。体部外面に自然釉が厚くかかるため調整不明	77
236	"	"	B13-23包	口径 12.0 器高 3.6	1/4	"	体部の2/3をロクロケズリし、他はロクロナデ	0.5~2mmの砂粒含	ロクロ右回転焼成不良	261
237	"	"	A10-20包	口径 11.4 器高 3.7	1/3	"	体部の1/3をロクロケズリし、他はロクロナデ	1mmの砂粒若干含		1218
238	"	"	A15-19 セクションベルト	口径 10.8 器高 3.4	1/3	"	底部未調整、他はロクロナデ	2~3mmの砂粒を含む良好	ロクロ右回転	1212
239	"	"	A10-20 表土	口径 11.6 器高 4.7	3/4	"	"	1mmの微砂含	ロクロ右回転焼成不良	1010
240	"	"	A15-20包 I	口径 10.6 器高 4.3	1/3	"	"	2~3mmの砂粒を含むが良好	ロクロ左回転	1205
241	"	"	B14-10	口径 11.0 器高 3.6	1/6	"	体部の1/2をロクロケズリ、他はロクロナデか	1mm以下の微砂粒若干含	体部外面に自然釉が厚くかかり調整不明	70
242	"	"	B11-25包 II	口径 11.9 器高 3.8	1/4	"	底部へラ切り後未調整、他はロクロナデ	2mm以下の砂粒若干含	ロクロ左回転	1219
243	"	"	B13-19包 II	口径 12.0 器高 4.0	"	"	底部未調整、他はロクロナデ	1mmの砂粒若干含		84
244	"	杯Bb2	B13-10包	口径 8.6 器高 3.0	1/2	杯C 1と同様な形態だが、やや小型である	底部外面未調整か、他はロクロナデだが、粘土紐巻き上げ痕が明瞭に残る。	精良	体部外面に自然釉が厚くかかり調整不明、ロクロ右回転	7
245	"	杯Bb2	B19-1包 II	口径 9.2 器高 4.0 ~9.4 4.0	口縁部 1/4欠損	杯C 1と同様な形態だが、やや小型である。	底部外面未調整、他はロクロナデ	4mm以下の砂粒含		250
246	"	"	B14-6包 II	口径 9.2 器高 3.4	受部1/4残	短く内傾する口縁部をもち、受部も非常に短かい。	体部外面1/3をロクロケズリ、他はロクロナデ	0.5~2mmの砂粒少量含	ロクロ右回転	242
247	"	"	B14-14包	口径 9.6 器高 3.3	1/6	杯C 1と同様な形態だが、やや小型である。	底部内面をナデ、他はロクロナデ、外面調整不明	精良	ロクロ右回転体部外面自然釉が厚くかかり調整不明	8
248	"	杯Cb1	B20-7 SK1 (南西)	口径 16.0	1/8	杯C 1と同様な形態だが、口径に比して器高が低く偏平な形態	体部外面の2/3をロクロケズリ、他はロクロナデ	微砂粒若干含		413
249	"	"	B19-2包 II	口径 12.3 器高 3.4	1/6	"	底部未調整だが、体部との境のみロクロケズリ、他はロクロナデ外	5mm以下の砂粒多含	ロクロ右回転	362
250	"	"	B14-16包 II	口径 12.5 器高 3.5	1/5	"	体部外面未調整、他はロクロナデ	細砂若干含	ロクロ左回転	144
251	"	"	A19-19包	口径 12.3 器高 3.2	1/4	"	体部外面1/2をロクロケズリ、他はロクロナデ	0.5mmの砂粒含	体部外面に自然釉が厚くかかる。	1011
252	"	"	B14-19包	口径 11.3 器高 2.9	1/4	"	体部外面未調整、内面ナデ、他はロクロナデ	3mm以下の細砂含		137
253	"	杯Db2	B13-24 (II) SK 2 (南)	口径 9.0 器高 3.0	1/2	口縁部は、極めて短く内傾し、受部との高低砂がほとんどない	底部外面へラ切り未調整、内面仕上げナデ、他はロクロナデ	微細砂含、赤味の強い胎土	体部外面に自然釉が厚くかかる。ロクロ左回転か	249
254	"	"	B19-1包 II	口径 9.0 器高 3.1	口縁部 1/8欠損	"	底部外面未調整だが、体部との境を難に一周ロクロケズリする。他はロクロナデ	2mm以下砂粒若干含	若干歪みあり	249
255	"	壺A	B11-25包 II	口径 18.4 器高 26.7	1/3	球状の体部からゆるやかに外反する比較的長い口縁部で2段の波状文を施す。	体部外面平行タタキ、内面ナデ、口縁部ロクロナデ	精良		2076
256	"	"	B13-25包 I	口径 11.0		ゆるやかに外反する口縁部で端部は外に面をもつ、波状文は施さない。	ロクロナデ	砂粒含		1241
257	"	"	A20-5包	口径 13.2	1/4	ゆるやかに外反する比較的長い口縁部で、端部は内側に折れ曲がる、櫛による縫線を刻む。	ロクロナデ	精良	口縁部外面に自然釉がかかる。赤味の強い胎土	1193

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
258	須恵器	壺B	B14-17包	口径 13.1	1/8	やや外方へ真直のびる口縁部で端部は丸くおさめる。2条の凹線を巡らす。	ロクロナデ	細砂含		134
259	"	"	B14-21包 II	口径 15.3	1/4	やや外方へ真直のびる口縁部で端部はやや内傾して丸くおわる。2条の凹線を巡らす。	ロクロナデ	2mmの砂粒多含		69
260	"	甕A	B11-25包 II	口径 26.3 器高 47.2	ほぼ完形	ゆるやかに外反する口縁部で端部は外に面をもち、ややつまみ上げる。2条の凸線と沈線の間に波条を巡らす。	体部外面はタタキ、底部外面と内面はナデ、口縁部ロクロナデ	精良	肩部に自然釉がかかる。体部下半に焼成不良あり	1245
261	"	"	B19-1包	口径 21.4	1/4	ゆるやかに外反する口縁部で端部は外に面をもち、ややつまみ上げる。端部の面には1条の弱い凹線を巡らす。	ロクロナデ	1mmの砂粒若干含		331
262	"	甕Ba	B16-10包	口径 26.6	1/5	大きく外反する口縁部で、端部外面に面をもち、全体に鋭利な仕上げ	"	2~3mmの砂粒含	ロクロ左回転	1229
263	"	"	B18-2包	口径 23.0	1/12	"	ロクロナデ	5mm以下の小石含		334
264	"	甕E	B13-24包 II	口径 13.8	1/4	短く「く」字に外反する口縁部で、端部は肥厚し、若干垂下する	口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ後カキ目、内面同心円分。	0.5~1.5mm砂粒含	口縁部に重ね焼きの痕跡あり	255
265	"	甕Da	B13-10包	口径 21.0	1/8	「く」字に屈曲する口縁部で端部は上下に肥厚する。	口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ	2mm以下の砂粒若干含		108
266	"	"	B13-25包 II	口径 15.5	口縁部小片 頸部1/4	「く」字に屈曲する口縁部で端部は上下に肥厚し、外面に1条の凸線を巡らす。	口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ、内面ナデ	1mmの細砂若干含	体部外面、口縁部内面自然釉が厚くかかり調整不明確	373
267	"	"	B13-25包 II	口径 17.4	1/4	「く」字に屈曲する口縁部で端部は上下に肥厚する。	口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ、内面同心円分を一部ナデ消す。	1~4mmの砂粒多含		260
268	"	"	B18-14包 II	口径 25.0	1/3	"	口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ、内面ナデ	2mm以下の砂粒若干含	焼成不良、完全な酸化焼成	433
269	"	甕Ca	B19-1包 II	口径 22.4	1/7	ゆるやかに外反する口縁部で端部を折り返し、外面に1条の凸線を巡らす。	口縁部外面はカキ目、他はロクロナデ	6mm以下の小石多含		328
270	"	"	B14-1包	口径 27.7	1/8	"	ロクロナデ	微細砂多少含		143
271	"	"	B19-4包	口径 14.0	1/4	甕C 1と同様な形態だが、小型である。	"	1~4mmの砂粒若干含	口縁部全面に自然釉がかかる。	81
272	"	"	B14-21包 II	口径 13.0	1/6	"	"	1~4mmの砂粒多含	ロクロ右回転口縁部全面に自然釉がかかる。	111
273	"	"	B14-18包	口径 10.8	1/4	"	"	精良		174
274	"	壺D	A19-12包	口径 8.6 器高 17.0	3/4	内弯する口縁部が球状の体部に付くが底部は平らである。一对の環状把手が付く。	口縁部から体部内面ロクロナデ、体部外面上半をロクロケズリ、下半はヘラケズリ	精良		1006
275	"	壺C	A20-4 セクション	脚径 8.2	1/2	短頸壺に「ハ」字に開く脚が付く、肩部に櫛による刺突文を施す。	体部下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	精良	外面全面と底部内面に自然釉がかかる。	1173
276	"	"	A19-12包	口径 10.0 器高 16.7 脚径 10.0	1/2	短頸壺に「ハ」字に開く比較的長い脚が付く肩部に凸線と凹線が1条づつ巡る。	"	0.5mmの砂粒若干含	ロクロ右回転	1007
277	"	"	"	—	体部下半ほぼ完存	長球状の体部に、三方に透し孔をもつ脚が付く	体部外面上半カキ目、下半タタキ、内面はナデとヘラケズリを交互に行う。	精良		1220
278	"	高杯A	B14-16包 II	口径 15.0 器高 5.9 脚径 11.4	1/2	有蓋高杯で、「ハ」字に開く短かい脚が付く。脚外面中央に沈線を巡らす。	ロクロナデ	1~4mmの砂粒含	ロクロ右回転杯部やや歪みあり	183
279	"	"	B11-16包	口径 11.6 器高 7.8 脚径 10.0	1/2	有蓋高杯で「ハ」字に開く短かい脚が付く。	杯部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	精良	ロクロ左回転	1221
280	"	"	A15-3 表土	脚径 9.0	1/3	「ハ」字に開く短かい脚で、三方に透し孔を施す	ロクロナデ	1~2mmの砂粒若干含	内外面に自然釉がかかる。	1247
281	"	高杯B	A10-20包	口径 12.4 器高 11.5 脚径 13.2	杯、脚とも 1/2	有蓋高杯で、比較的長い脚部をもち、3方1段の透し孔を施す。	杯部外面2/3をロクロケズリ、他はロクロナデ	0.5~1mmの微砂若干含	ロクロ左回転	1016 1017
282	"	"	A10-20包	口径 11.8 器高 11.5 脚径 13.8	杯、脚とも 1/2	有蓋高杯で、比較的長い脚部をもち、3方1段の透し孔を施す。	杯部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	0.5~1mmの微砂若干含	ロクロ左回転	1014 1015
283	"	"	A19-16包	口径 11.4	4/5	有蓋高杯で、比較的長い3方1段透しの施された脚が付くものと思われる。	ロクロナデ	0.5mmの微砂若干含	"	1018
284	"	"	A10-20包	脚径 12.4	1/5	大きく「ハ」字に開く比較的長い脚で、3方1段の透し孔が施される。	"	3mmの砂粒若干含		2096
285	"	高杯C	A14-11 表土	脚径 14.0	1/5	長脚で、3方2段の透し孔を施すものと思われる。脚中央に1条の凹線を巡らす。	"	0.5mmの微細砂若干含	ロクロ右回転	2098
286	"	"	A14-6 表土	口径 12.0 器高 15.7 脚径 12.8	受部1/3残	長脚で3方2段の透し孔を施し、脚中央に1条の凹線を巡らす。	"	1~2mmの砂粒若干含	ロクロ左回転	1009

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
287	須恵器	高杯C	A14-11 表土	口径 12.8	3/4 (杯部のみ)	有蓋高杯で3方2段に透し孔を施した長い脚が付くものと思われる。	"	1mmの砂粒若干含	"	1013
288	"	"	B17-12包 II	口径 11.3	1/3 (杯部のみ)	"	杯部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	0.5mm以下の微細若干含	"	2095
289	"	"	A14-11 表土	—	筒部上半完存	長脚で3方2段の透し孔を施す。脚中央に2条のヘラ沈線を巡らす。	ロクロナデ	0.5~2mmの砂粒多含	"	1021
290	"	高杯E	B14-17包	口径 14.1	杯部 1/2	まっすぐ外方へ開く口縁部で、体部との境に段をもつ	体部外面、口縁部近くまでロクロケズリ、他はロクロナデ	精良		131
291	"	"	B14-9包	口径 13.4	杯部 1/8	直立ぎみに開く口縁部で、体部との境に凹線は消失している。	体部外面味調整、他はロクロナデ	"	蓋の可能性あり	333
292	"	"	"	口径 14.2	杯部 1/3	直立ぎみに開く口縁部であるが、体部との境の凹線は消失している。	"	1mm以下の微砂含		222
293	"	"	B13-19包 II	脚径 11.0	脚端部 1/3欠損	透し孔をもたず、細い長脚で、脚中央部に2条の沈線を巡らす。	ロクロナデ	4mm以下の砂粒含	脚外面に自然釉がかかる。	241
294	"	"	B19-3包 II	脚径 7.8	脚部 1/3欠損	長脚高杯を小さくした形態で、透し孔は細く2段に施す。	"	1~4mmの細粒多含		380
295	"	高杯Db	B 9-17包	—	1/3	深い楕状の杯部で、無蓋高杯と思われる。	杯部外面上半カキ目、下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	0.5~3mmの砂粒若干含	ロクロ右回転	396
296	"	"	A15-25包 II	脚径 8.2	脚部完存	基部の細い短い脚で透し孔をもたない	脚外面はカキ目、他はロクロナデ	精良	脚外面に自然釉がかかる。	1204
297	"	"	C16-8包	脚径 9.8	1/8	基部の細い短かい脚で、透し孔はもたず、端部は水平に外反する。	杯部底面ナデ、他はロクロナデ	2mm以下の砂粒多含	ロクロ左回転	78
298	須恵器	提瓶	A19-3 表土	口径 6.4 器高 17.0	把手のみ欠損	外反する口縁部で端部は外面をもつ。肩部に一对の環状把手がつく	口縁部ロクロナデ、体部は、1/3をロクロケズリ、他はカキ目	1~2mmの砂粒含	ロクロ左回転	1198
299	土製品(土師質)	臼玉	B14-7包	径 0.8 高 0.4~0.5	完形	低い円柱状で上下面が平らにつくられ、中央に2.5~2mmの円孔を施す。		精良		153-1
300	"	"	"	径 0.8 高 0.3~0.4	"	"		"		153-5
301	"	"	"	径 0.8 高 0.6~0.7	"	"		"		153-2
302	"	"	"	径 0.8 高 0.25~0.3	"	"		"		153-6
303	"	"	"	径 0.75 高 0.3~0.35	"	"		"		153-3
304	"	"	"	径 0.8 高 0.4~0.5	"	"		"		153-7
305	"	"	"	径 0.75 高 0.35~0.4	"	"		"		153-4
306	"	"	"	径 0.8 高 0.2~0.25	"	"		"		153-8
307	"	杯Ob1	SH19 No.1	高台径 11.4	杯部完存	角形の高台を垂直に張り付け底部全面で接地する。	底部外面ヘラ切り未調整、他はロクロナデ	2~4mmの砂粒若干含	摩滅が激しく調整不明確焼成不良	2021
308	"	甕F	SB28	口径 33.0	口縁部細片	外方へ開く口縁部は端部で垂下し、外面に波状文を巡らす。	ロクロナデ	3mmの砂粒若干含		1179
309	土師器	甕Bf	SK 8	口径 19.4	1/6	「く」字に屈曲する口縁部は端部で上方に鋸くつまみ上げられる。	口縁部内面ハケ目、外面端部のみヨコナデ、他は未調整	3mm以下の砂粒、雲母多含		1213
310	須恵器	壺	"	高台径 7.8	底部完存	幅のやや広い高台を張り付ける	体部外面下半ロクロケズリ、底部外面未調整、他はロクロナデ	2mmの砂粒多含	ロクロ右回転底部内面に自然釉	1195
311	"	甕Bb	"	口径 23.6 器高 53.5	2/3	長球状の体部に端部で大きく水平近くまで外反する口縁部が付く。	体部外面格子風タタキ、内面同心円分、口縁部ヨコナデ	1~2mmの砂粒若干含	肩部に自然釉がかかる。	1246
312	土師器	皿B	SK18	口径 21.2 器高 2.2	1/6	内弯ぎみに立ち上がる口縁部で端部は内にやや肥厚する。		1~5mmの小石多含	摩滅により調整不明	2045
313	須恵器	杯Bb	"	口径 12.0前後か	口縁部細片	口縁部は低く内傾し、受部は痕跡程度に退化する。	底部外面ヘラ切り未調整か、他はロクロナデ	3mm以下の砂粒多少含		1145
314	"	杯O 1	"	高台径 10.2	底部完形	角形高台を底部に垂直に張り付け、高台底部は前面で接地する。	底部外面丁寧なロクロケズリ、他はロクロナデ	細砂を多く含む	ロクロ右回転	1146
315	土師器	甕Fb	SK68	口径 24.3	1/9	締りのない頸部から短かく外反する口縁部が付く。	体部外面ハケ目、口縁部ヨコナデ	2mmの砂粒と雲母若干含		2040

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
316	土師器	甌	SB43	口径 20.2	1/8	体部からそのまま直し、端部で若干外反する口縁部をもつ。	体部外面ハケ目、内面ナデ	2mm以下の砂粒、雲母含		2034
317	須恵器	杯La 1	SK47	口径 12.6 器高 4.8 底径 8.2	口縁部1/8 底部1/2	やや内側に張り付けられた高台は、底部内側で接地する。	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	1~3mmの砂粒少々含	ロクロ左回転	271
318	土師器	甌Fb	SF72	口径 16.2	口縁部小片	張りのない体部で口縁端部は丸くおさめる。	口縁部ヨコナデ、体部内外面ハケ目	1mm以下の微砂、雲母若干含		293
319	須恵器	杯Ea 1	"	口径 11.0 器高 4.0	口縁部1/8 底部1/2	丸味のある底部で、口縁端部は内に肥厚する。	底部外面未調整、他はロクロナデ	1mmの細砂少々含	口縁部外面に自然釉が若干かかる。	424
320	"	"	"	口径 12.0 器高 3.5	1/5	丸味を残す底部から内弯して立ち上がる口縁部をもつ。	底部外面未調整、他はロクロナデ	1~2.5mmの砂粒含		315
321	土師器	杯A	B14-18包	口径 10.7 器高 3.5	1/2	底部より丸味をもって立ち上がる口縁部で端部は尖りぎみに仕上げる。	ナデ	2mmの砂粒含		315
322	"	杯B	B14-23包	口径 17.0 器高 4.5	口縁部小片 底部1/3	底部より屈曲ぎみに立ち上がる口縁部で端部は丸くおさめる。		精良	摩滅が激しく調整不明	191
323	"	杯C	B13-10包	口径 20.2	1/10	底部より丸味をもて立ち上がる口縁部をもつと思われ、口縁端部内面に沈線を巡らす。	外: ヘラミガキ 内: 放射暗文	3mm以下の砂粒含		365
324	"	杯D	B18-5包	口径 13.0 器高 3.7		粗製の杯で、底部より内弯ぎみに立ち上がる口縁部をもち、端部は内に面をもつ。	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ			265
325	"	皿A	B16-22包 II	口径 20.2 器高 2.8	1/4	底部より丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部内面に弱い沈線を巡らす。	外: 口縁部ヘラミガキ、他はヘラケズリ 内: 放射暗文	2mm以下の砂粒多含		427
326	"	"	B14-11包	口径 16.0 器高 1.9	"	底部より丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は丸くおさめる。	外: 口縁部ヘラミガキ、他は未調整 内: ヨコナデ	1mmの微砂含		428
327	"	皿B	B 9-16包	口径 21.8 器高 31.5	1/12以下	底部より丸味をもって立ち上がる口縁部で端部は内に肥厚前面をもつ。		精良		322
328	"	"	B13-25包	口径 20.4 器高 3.1	1/6	底部より丸味をもって立ち上がる口縁部で端部は内に肥厚する。	底部外面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	0.3~1.5mmの微砂含	摩滅が激しく底部内面調整不明	395
329	黒色土器A	杯	A20-8包	口径 15.2 器高 3.9	1/8	「ハ」字にまっすぐ外方へ開く口縁部で、底部との境は明瞭である。	内: ヘラミガキ、炭素吸着 外: 未調整	1mmの砂粒、雲母含		1196
330	土師器	片口鉢	B13-25包(II)	口径 15.8 器高 11.7	ほぼ完形	半球状の体部で口縁端部は内に折り返しぎみに肥厚する。	ナデ	2~3mmの砂粒多含	摩滅により調整不明確	103
331	"	鉢	B20-2 土坑群直上	底径 11.8	1/6	平らな底部より屈曲して立ち上がる体部で、底部とその境近くに穿孔を施すが、完通していない。	体部外面ハケ目、底部外面ヘラケズリ	0.5mmの微砂含	外面の穿孔は焼成前内面は焼成後底部内外面に黒斑	2013
332	"	甌Be	B14-14包	口径 19.0	1/4	ゆるやかに「く」字に屈曲する口縁部で端部は外に面をもつ	体部外面ハケ目、他はナデ	1mmの砂粒多含		313
333	"	"	B13-25包 II	口径 20.6	1/5	"		2mmの砂粒多含	摩滅により調整不明	320
334	"	"	B19-2包 II	口径 21.0	1/6	ゆるやかに「く」字に屈曲する口縁部で端部は外に面をもち、ややつまみ上げる。	体部外面ハケ目、口縁部ヨコナデ	1~5mmの砂粒多含	摩滅により調整不明確	251
335	"	甌Bg	B19-1包 II	口径 19.2	"	ゆるやかに「く」字に屈曲する口縁部で端部はやや内弯する。		0.5~4mm砂粒多含	摩滅により調整不明	366
336	"	甌Bh	B14-6包 II	口径 17.0	1/8	口縁部はほとんど外反せずに、まっすぐ開く。		8mm以下の小石多含	摩滅により調整不明	367
337	"	甌Be	A20-5 pit 1	口径 21.0	1/4	ゆるやかに「く」字に屈曲する口縁部で端部は外に面をもつ。	体部外面未調整、口縁部ヨコナデ	1~2mmの砂粒多含	体部内面摩滅により調整不明	1004
338	"	高杯	B13-25(II) SK 3	脚径 10.0	1/10	やや短かい脚で、根部は大きく「ハ」字に開く	筒部は面取り状にヘラケズリしているようだが不明確	5mm以下の小石含	摩滅が激しく調整不明確	298
339	"	土錐	B15-22 堅穴群直上	長 2.9 最大径 1.2 垂 2.9g	一部欠損	中央部がやや膨らんだ円柱状を呈する。	手づくね	2mm以下の砂粒含	摩滅が激しい	290
340	"	甌Bf	B15-22SK 2	口径 14.4	1/12	小型で、「く」字に屈曲する口縁部で端部は外に面をもち貌くつまみ上げる。	体部外面ハケ目、口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ目	精良	剥離が激しく外面ハケ目図示不可	408
341	"	甌Be	B13-25 II SK 1(北)	口径 13.6	"	小型で、ゆるやかに「く」字に屈曲する口縁部で、端部外面に面をもつ。	体部外面ハケ目後ナデ、内面上半までナデ、下半ハケ目	1~3mmの砂粒多含	摩滅が激しく調整不明確	2073
342	"	甌Bi	B-15包 II	口径 13.0	1/6	小型で、大きく水平近く外反する口縁部で、端部は外に面をもつ。	体部外面ハケ目、口縁部ヨコナデ	0.5~3.5mmの砂粒多含		265
343	"	甌Be	B19-1包 II	口径 25.8	1/8	ゆるやかに外反する口縁部で端部は外に面をもつ。	内外面ハケ目	0.5~5mm以下の小石多含	摩滅が激しく調整不明確	319
344	"	甌Ja	B13-24(II) SK 1 南	口径 22.4	1/6	鋭く「く」字に屈曲する口縁部で端部は外に面をもつ。	体部外面ハケ目、口縁部ヨコナデ	"	摩滅が激しく調整不明確	375

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
345	土師器	甕Ja	試掘坑 №23	口径 21.2	1/8	鋭く「く」字に屈曲する口縁部で端部は外に面をもつ。	体部外面ハケ目、口縁部ヨコナデ	3mm以下の砂粒多含	摩滅が激しく調整不明確	502
346	"	"	B14-12包	口径 28.0	"	"	体部外面ハケ目、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	4mm以下の砂粒多含		239
347	"	甕Jb	B19-2包(II)	口径 19.2	1/4	鋭く「く」字に屈曲する口縁部で端部は外に面をもち軽くつまみ上げる。	体部外面ハケ目、口縁部外側強いヨコナデ、内面ハケ目	1mm以下の微砂若干含		236
348	"	"	B13-25包(II)	口径 18.7	1/5	"	"	2mmの砂粒含		317
349	"	"	B14-16包(II)	口径 26.2	1/7	"	体部外面ハケ目、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	2mmの砂粒含	外面の剥離が激しく調整不明確	139
350	"	甕Fb	B14-16包(II)	口径 28.6	1/6	張りのない体部に外へ開く口縁部が付き、端部は丸くおさめる。	体部外面ハケ目、口縁部外側ヨコナデ、内面ハケ目	4mm以下の砂粒多含	剥離が激しく調整不明確	142
351	"	甕Fa	B13-25 II SK 1	口径 35.8	1/6	張りのない体部に外へ開く口縁部が競き、端部はつまみ上げ外に面をもつ。	体部外面ハケ目、口縁部ヨコナデだが頸部に指頭圧痕を残す。	3mm以下の砂粒多含	内面剥離のため調整不明	335
352	"	"	B 9-11包	口径 18.8	1/4	"	体部外面ハケ目、口縁部ヨコナデだが、内面にハケ目残る。	1~3mmの砂粒含		182
353	"	甕Fb	B14-19包	口径 22.8	1/3	張りのない体部に外へ開く口縁部が付き、端部は丸くおさめる。	体部外面ハケ目、口縁部ヨコナデ	2mm以下の砂粒多含		141
354	"	甕K	B13-10包	口径 26.0	1/12	内弯する口縁部をもち、端部は内面をもつ。	体部外面ハケ目、口縁部ヨコナデだが外側下半はハケ目。	1~6mmの小石少量含		217
355	"	"	B13-25 II SK 1	口径 24.5	1/6	"	体部外面ハケ目、口縁部ヨコナデだが外側にはハケ目が残る。	1mmの砂粒含		327
356	須恵器	甕Fa 2	B13-19 SK 1	口径 10.4	1/6	丸味のある天井部で、かえりは口縁端部より大きく下へ出る。	ロクロナデ	微砂若干含	天井部外面に自然釉がかかる。	2048
357	"	"	B13-25 II SK 1	口径 10.6 器高 3.1	完形	"	天井部外面1/2をロクロケズリ、内面仕上げナデ、他ロクロナデ	1mm以下の微砂含	ロクロ左回転	279
358	"	蓋Fb 2	B13-10包	口径 9.8	1/3	平らな天井部をもち、かえりは口縁端部よりわずかに下へ出る。	天井部の1/3をロクロケズリ、内面仕上げナデ、他ロクロナデ	精良	赤茶色に酸化焼成している。	192
359	"	蓋Fa 2	B20-6 土坑群直上	口径 9.4	1/5	丸味のある天井部で、かえりは口縁端部より若干下へ出る。	天井部外面外側1/2をロクロケズリ、内面仕上げナデ、他ロクロナデ	密、雲母若干含	外面に自然釉がかかる。	2011
360	"	"	B14-17包(II)	口径 9.3 器高 3.2	1/2	"	天井部外面1/2をロクロケズリ、他ロクロナデ	2mmの砂粒含	外面に自然釉がかかる。	306
361	"	"	B20-7 SK 1	口径 9.4	1/4	丸味のある天井部で、かえりは口縁端部より大きく下へ出る。	天井部外面の1/2をロクロケズリ、内面仕上げナデ、他ロクロナデ	密、微砂若干含	ロクロ右回転	2012
362	"	蓋Gb 1	B14-11包	口径 12.4 器高 2.6	1/8	偏平な天井部に半球状の異形つまみが付く。かえりは口縁端部と同じ高さ。	天井部の1/2をロクロケズリ、他ロクロナデ	細砂若干含	天井部外面に自然釉がかかる。	151
363	"	蓋Ga 1	B14-1包	口径 14.0	1/4	丸味を残す天井部で、かえりは口縁端部と同じ高さ。	ロクロナデ	1~4mmの砂粒含	天井部に外面に自然釉が厚くかかる。	187
364	"	蓋H 2	B19-1包II	口径 11.6 器高 3.2	1/2	丸味の残る天井部で、かえりは退化し、口縁端部より上方に付く。	"	2mm以下の砂粒若干含	天井部外面に自然釉が厚くかかる。 ロクロ右回転	247
365	"	"	B14-22包II	口径 11.3	"	丸味の残す天井部で、かえりは退化し痕跡程度になる。	天井部1/2をロクロケズリ、他ロクロナデ	細砂多少含	天井部に「」のヘラ沈線、酸化焼成する。	130
366	"	蓋H 1	B14-7包	口径 12.6 器高 2.9	"	"	ロクロナデ	1mmの砂粒多含	全体に難な仕上げ、天井部外面に自然釉がかかる。	6
367	"	"	B19-3包II	口径 14.4 器高 3.3	1/20	"	天井部の1/2をロクロケズリ、他ロクロナデ	1mm以下の微砂少々含	天井部外面に自然釉が厚くかかる。 ロクロ右回転	158
368	"	蓋Ia 1	B13-19包II	口径 16.6 器高 3.6	1/8	丸味のある天井部に偏平なつまみが付く、口縁部のかえりは消失する。	"	2mm以下の砂粒含		339
369	"	"	B14-15包	口径 17.0	1/4	丸味のある天井部に偏平なつまみが付くものと思われる。	"	4mm以下の砂粒若干含	ロクロ左回転口縁端部内面に自然釉がかかる。	73
370	"	"	B 8-13包	口径 16.1 器高 3.3	1/2	丸味のある天井部に偏平なつまみが付く。	ロクロナデ	精良	ロクロ右回転酸化焼成	25
371	"	"	B19-2包II	口径 14.8	1/6	丸味のある天井部に偏平なつまみが付くものと思われる。	"	"	精製品	343
372	"	"	B19-2包II	口径 14.0	1/6	丸味のある天井部に偏平なつまみが付くものと思われる。	ロクロナデ	砂粒を多く含む	天井部外面に焼成後刻まれた沈線あり	342
373	"	蓋Ib 2	B 6-13 表土	口径 11.4	1/4	平らな天井部から「ハ」字に開く口縁部が付く。	天井部の1/2をロクロケズリ、他ロクロナデ	1~2mmの砂粒若干含	ロクロ右回転	1206

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
374	須恵器	蓋J 1	B13-10包	口径 19.4	"	平らな天井部から「ハ」字に開く口縁部が付くが、全体として偏平な形態	天井部ロクロケズリの後ロクロナデ、天井部内縁は仕上げナデを行う。	1mmの砂粒含		72
375	"	"	B 9-17包	口径 16.8 器高 3.6	1/2	"	天井部をロクロケズリ、他はロクロナデ	2mm以下砂粒含	天井部外面に自然釉がかかる。	308
376	"	"	B 9-12包	口径 15.8	1/4	平らな天井部から内弯きみに下がる口縁部が付く。	"	1~3mmの砂粒多含	ロクロ右回転	85
377	"	蓋K 1	B14-25	口径 17.8 器高 1.7	3/4	天井部中央が落ち込んだために非常に偏平な形態を呈する。	ロクロナデ	1mmの微砂多含	ロクロ右回転	280
378	"	"	B16-8包	口径 17.1 器高 2.1	1/8	"	天井部の1/3をロクロケズリ、他はロクロナデ	1mmの微砂含	ロクロ右回転	1237
379	"	杯E a 1	B13-20包 II	口径 14.1 器高 4.8 底径 5.0	1/3	平らな底部から内弯きみに立ち上がる口縁部をもつ。蓋と類似する。	底部ロクロケズリ、底部内面仕上げナデ、他はロクロナデ	2mm以下砂粒少々含	ロクロ右回転	419
380	"	"	B 9-22包	口径 12.2 器高 1.9	1/2	丸味のある底部からやや内弯きみに立ち上がる口縁部をもつ。	底部外面未調整、内面仕上げナデ、他はロクロナデ	1mm以下微砂少々含	ロクロ右回転底部外面に粘土の補充あり	19
381	"	"	B 9-13包	口径 10.8 器高 3.4~4	1/4	"	底部外面未調整、内面仕上げナデ、他はロクロナデ	精良	歪が大きく、粗雑な仕上げ	237
382	"	杯E a 2	B13-24 SK 1 セクション内	口径 8.4 器高 3.8	1/2	"	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	2mm以下砂粒少々含	ロクロ右回転	294
383	"	"	B14-17包	口径 9.8 器高 3.6	1/2	"	底部外面ロクロケズリ後ヨコナデ、他はロクロナデ	精良		133
384	"	杯E b 1	B14-7包	口径 11.6 器高 3.8	"	"	底部外面ロクロケズリ、内面仕上げナデ、他はロクロナデ	1mmの砂粒少量含	ロクロ右回転	10
385	"	杯F a 1	B14-14包	口径 13.7 器高 3.5	1/2	丸味のある底部から内弯きみに立ち上がる口縁部をもつ、口径に比して器高が高い偏平な形態。	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	精良	ロクロ右回転内面に自然釉が厚くかかり調整不明	12
386	"	杯F a 1	B13-24 SK 1 セクション内	口径 11.8 器高 3.3	1/6	丸味のある底部から内弯きみに立ち上がる口縁部をもつ口径に比して器高が高い偏平な形態。	底部外面未調整、内面仕上げナデ、他はロクロナデ	1mm以下の微砂若干含	やや歪む	295
387	"	"	C11-23包	口径 10.2 器高 3.1	1/3	"	底部外面未調整、他はロクロナデ	1~3mmの砂粒多含		52
388	"	杯G b 2	B14-22包	口径 8.2 器高 3.0	1/4	丸味の残る底部から立ち上がる口縁部は、端部でやや外反する。	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	精良	ロクロ右回転	116
389	"	杯G b 1	B14-10包	口径 10.2 器高 4.5	2/3	"	底部外面ロクロケズリ、内面ナデ、他はロクロナデ	1mm以下の微砂多含	ロクロ右回転	5
390	"	杯H a 1	B14-14包	口径 12.7 器高 3.6	底部大半口縁部の一部残	平らな底部から内弯きみに立ち上がる口縁部をもち、口径に比して器高が高い偏平な形態	底部外面糸切り未調整、他はロクロナデ	1mmの砂粒多含	ロクロ右回転	9
391	"	杯J a 1	B14-6包	口径 14.2 器高 3.0	1/8	平らな底部からまっすぐ外へのびる口縁部。口径に比して器高が低い偏平な形態	底部外面未調整、他はロクロナデ	3mmの砂粒含	ロクロ右回転焼成不良	189
392	"	杯I b 1	B14-19包	口径 11.8 器高 4.0	3/4	平らな底部からまっすぐ外へのびる口縁部で端部は若干外反する。	ロクロナデ、底部外面調整不明	1mmの砂粒少量含	ロクロ右回転酸化焼成している。	11
393	"	杯I b 2	B14-13包	口径 8.4 器高 2.6	底部1/4残	"	ロクロナデ	1~3mmの砂粒多含	内面に自然釉がかかる。	214
394	"	杯L b 1	B13-25包 II	口径 12.4 器高 4.7 高台径 7.4	1/4	口縁部は端部でやや外反し、底部との境に高台を張り付ける。	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	微砂若干含	ロクロ右酸化焼成	420
395	"	杯L a 1	B13-24包 II	口径 11.2 器高 4.1 高台径 8.0	口縁1/8 底部1/4	底部と口縁部の境に高台を張り付け、口縁部はまっすぐ延びる。	底部外面ヘラ切り未調整、他はロクロナデ	4mmの砂粒含		338
396	"	"	"	口径 11.0 器高 4.1 高台径 7.8	高台1/2残	"	底部外面回転ヘラ切り後未調整、他はロクロナデ	0.5~3mmの砂粒多含		262
397	"	"	B19-1包 II	口径 10.8 器高 4.2 高台径 7.4	口縁部1/12 底部1/3	"	底部外面未調整、他は丁寧なロクロナデ	精良	ロクロ右回転	163
398	"	杯M a 1	B13-14包	口径 13.6 器高 3.7 高台径10.8	高台1/3残	底部と口縁部の境からややうちに張り付けられた高台は、外側で接地する。	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	精良	全体に丁寧な仕上げだが酸化焼成に近い	166
399	"	"	B14-19包	口径 13.8 器高 4.1 高台径10.8	1/6	"	底部外面ヘラ切り未調整、他はロクロナデ	6mm以下の小石多含	ロクロ右回転	356
400	"	"	B13-14包	口径 14.4 器高 3.7 高台径 7.7	高台1/4残	"	底部外面丁寧なヘラケズリ、他はロクロナデ	精良	精製品	62
401	"	"	B12-22包	口径 16.4 器高 4.0 高台径11.2 ~11.4	1/2	"	ロクロナデ	砂粒をほどんど含まず	焼き歪みが大きい。底部外面自然釉のため調整不明	1222
402	"	杯N b 1	B14-25包	口径 16.0 器高 3.9 高台径 9.8	1/5	口縁部は端部近くで外反し、やや内側に張り付けられた高台は、内側で接地する。	底部外面ヘラ切り未調整、他はロクロナデ	2mm以下の砂粒若干含	口縁部に重ね焼きの痕あり	164

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
403	須恵器	杯Na 1	試掘 No25包	口径 15.2 器高 4.1 高台径 9.0	1/4	やや内側に張り付けられた高台は、内側で接地する。	底部外面ロクロケズリ後丁寧なナデ、内面仕上げナデ、他はロクロナデ	5mm以下の小石少々含	ロクロ右回転	438
404	"	"	B14-15包	口径 14.0 器高 3.8 高台径 8.4	高台ほぼ完存	"	底部外面未調整、他はロクロナデ	3mmの砂粒含		146
405	"	"	B15-17包No. 1	口径 14.0 器高 3.7 高台径 8.9	1/2	"	底部外面ヘラオコシ未調整、他はロクロナデ	微砂少々含		286
406	"	"	B19-1包 II	口径 13.7 器高 4.2 高台径 9.6	口縁端部若干残 他は3/4	"	底部外面未調整、他はロクロナデ	0.5~5mmの砂粒多含	底部外面にヘラ記号	352
407	"	杯Ob 1	B 9-17包	口径 13.0 器高 3.5 高台径 9.8	1/2	口縁部は、端部近くで外反し、高台は底部全面で接地する。	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	1~4mmの砂粒多含		115
408	"	杯Oa 1	B19-1包 II	口径 13.8 器高 4.1 底径 8.5	口縁部1/12 底部1/2	やや内側に張り付けられた高台は底部全面で接地する。	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	3mm以下の砂粒多含		162
409	"	"	B15-22 遺構上面	口径 13.8 器高 3.6 底径 9.6	1/8	"	ロクロナデ	2mm以下の砂粒若干含	ロクロ右回転	2017
410	"	"	B 8-22	口径 14.5 器高 3.1 底径 10.85	高台1/4残	口縁部と底部の境近くに張り付けられた高台は底部全面で接地する。	"	2mmの砂粒含		173
411	"	"	B18-3包	口径 14.6 器高 4.0 底径 11.0	1/6	やや内側に張り付けられた高台は底部全面で接地する。	ロクロナデ	1mm以下の微砂少々含		355
412	"	"	B19-4包	口径 15.4 器高 3.7 底径 12.0	高台1/4残	口縁部と底部の境近くに張り付けられた高台は底部全面で接地する。	"	0.5mmの微砂少々含	ロクロ右回転底部内面に自然釉がかかる。	87
413	"	"	B14-9包	口径 15.8 器高 3.5 高台径11.2	1/4	"	底部外面ナデか?他はロクロナデ	4mmの小石多含		363
414	"	杯K	B16-18包	口径 15.8 器高 3.0 底径 10.1	1/2	平らな底部から屈曲して立ち上がる口縁部で端部は大きく水平近く外反する。	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	1mm以下の微砂多少含		1223
415	"	盤	B14-16包	口径 26.0 器高 3.8	1/10	やや丸みの残る底部から短かく立ち上がる口縁部をもつ。	"	0.5~3mmの砂粒含	精良不良	354
416	"	"	B14-22包 II	口径 21.7 器高 3.3	1/12	"	"	細砂多少含	ロクロ右回転焼成不良	136
417	"	壺	B14-12包	高台径 6.6	1/3	球形に近い体部をもつものと思われる。	"	精良、赤末が強い	精良品、内面に自然釉が若干かかる。	364
418	"	"	B 9-22包	高台径 8.2	1/4	幅の広い高台を張り付け、底部全面で接地する。	体部外面、底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	1mm以下の微砂含	ロクロ右回転	172
419	"	"	B16-2 No. 1	高台径 9.4	杯部完存	大きく外に踏んばった高い高台を張り付ける。	底部外面ナデ、他はロクロナデ	1mm以下の微砂含	外面に自然釉がかかり、別個体片が釉着する。	2022
420	"	"	B14-9包	口径 5.5 器高 4.6 高台径 8.9	完形	偏平な体に短かい口縁部と高台を張り付ける。	ロクロナデ	1mmの砂粒多含	ロクロ右回転	1
421	"	椀	B14-13包	口径 15.6 器高 4.8	1/6	器高に比して口径が大きく、口縁部は端部で「く」字に屈曲する。	"	1mmの砂粒含	口縁部内面に自然釉がかかる。	74
422	"	"	B13-24包 II	口径 11.8 器高 4.8	1/8	やや偏平な半球状の体部に短かい口縁部が付き端部は外反する。	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	0.5~2mmの砂粒含	ロクロ右回転	351
423	"	"	B19-2包 II	口径 11.4 器高 4.6	1/6	やや偏平な半球状の体部に短かく直立する口縁部が付く。	ロクロナデ	精良	ロクロ左回転焼成不良のため瓦質に焼ける。	159
424	"	"	B14-18包	口径 11.2 器高 5.0	1/3	やや偏平な半球状の体部に若干外方へ開く短かい口縁部が付く。	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	1~7mmの小石多含		243
425	"	"	B14-15包 B14-6包 II	口径 10.0 器高 3.8	1/2	丸みのある底部から立ち上がる口縁部は弱く「く」字に屈曲する。	底部外面雑なヘラケズリ、他はロクロナデ	細砂ほんど含まず	酸化焼成している外面の一部に自然釉がかかり、別個体片が釉着	132
426	"	"	B19-2包 II	口径 9.0 器高 4.7	1/6	半球状の体部に短かく直立する口縁部がつく。	ロクロナデ	精良	ロクロ左回転赤味の強い胎土	160
427	"	鉢	B13-9包 II	口径 11.2 器高 4.6 底径 10.4	1/4	平らな底部から直立する口縁部をもつ。	口縁部と内面ロクロナデ、他はロクロケズリ	3mm以下の砂粒含	ロクロ右回転	346
428	"	高杯	B14-22包 II	口径 14.2	1/8	やや偏平な杯部に「ハ」字に開く脚部が付くものと思われる。	板底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	細砂多含	ロクロ右回転	135
429	"	"	A19-20 表土	脚径 11.0	2/3	裾部で大きく「ハ」字に開く脚で、透し孔はない。	ロクロナデ	1~2mmの砂粒若干含	脚外面に黒斑あり。	1199
430	"	"	A20-4 セクション	脚径 8.4	筒部完存底部若干残	「ハ」字に開く脚部をもつ。	ロクロナデ、脚内面にしづり痕	1mmの砂粒含		1194
431	"	"	B13-25(II) SK 1(南)	脚径 6.8	1/3	端部で大きく「ハ」字に開く脚部をもつ。	ロクロナデ	微砂若干含	脚内外面の一部に自然釉	381

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.	
432	須恵器	高杯	試掘 No.25包	脚径 7.4	1/4	端部で大きく「ハ」字に開く脚部をもつ。	ロクロナデ	5mm以下の小石若干含	脚外面に自然釉が若干かかる。	439	
433	"	"	C17-1 落ち込み溝	脚径 5.5	1/3	太い基部から短かく「ハ」字に開く低い脚部	杯底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	微砂粒若干含		2010	
434	"	甌	B17-1 №.1 包	注口径 1.2	口縁部のみ欠損	球形の体部から大きくなっパ状に開く口縁部で、注口は隆起する。	体部下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	精良	ロクロ右回転	1005	
435	"	"	B13-24 SK 1	注口径 1.4	"	球形の体部から大きくなっパ状に開く口縁部が付くものと思われ、注口縁部は隆起する。	体部下半ロクロケズリ	2mm以下の砂粒含	ロクロ右回転体部外面に自然釉がかかる。	282	
436	"	"	B14-6包	底径 4.4 注口径 1.2	口縁部、注口先端欠損	球形の体部だが底部は平らである。注口は隆起し、口縁部はラッパ状に開く。	体部下半ヘラケズリ、他はロクロナデ	細砂多少含		154	
437	"	平瓶	B19-3包II	底径 11.2	口縁部のみ欠損	丸味のある偏平な体部	底部から体部外面カキ目。体部外面上半はナデ消す。	1~3mmの砂粒少々含	ロクロ右回転	248	
438	"	"	B14-21包II	口径 10.0	1/6	口縁部は1条の沈線を巡らせ、端部は外反する。	ロクロナデ	2mm以下の砂粒若干含	口縁部外面に自然釉がかかる。	212	
439	"	"	B19-2包II	口径 6.4	1/3	口縁部に1条の沈線を巡らすが、端部は外反しない。	"	2mmの砂粒若干含	内面に自然釉がかかる。	337	
440	"	甌Bb	B14-18包	口径 27.3	1/8	端部で大きく外反する口縁部で外面をもつ	"	1mmの砂粒若干含	ロクロ右回転	330	
441	"	甌Dd	B13-24包II	口径 20.3	1/6	まっすぐ外へ開く口縁部は端部で上下に肥厚し外に面をもつ	"	1~2.5mmの砂粒多含	内外面に自然釉がかかるが特に内面が厚い。	254	
442	"	甌Cb	A14-11 表土	口径 20.6	1/10	まっすぐ外へ開く口縁部は端部で外に折り返す。	"	0.5mm以下の微砂、雲母若干含		2099	
443	"	甌G	B18-7包	口径 22.0	1/5	口縁部は若干内湾し、内に面をもつ。	体部外面格子風タタキ、内面同心円分	2mm以下の砂粒多含	体部外面と口縁部外面に自然釉がかかる。	368	
444	"	甌H	B7-15包	口径 35.2	1/3	一对の把手をもち、頸部の締まり弱い鍋に近い形態。	体部外面平行タタキ後簡単なナデ、内面ナデ	1mmの砂粒含		221	
445	"	甌Ia	B19-1包II	口径 12.0	口縁部若干欠損	体部に比べ口縁部径が小さい壺に近い形態で	外側ロクロナデ、内面タタキ時のあて道具痕	7mm以下の小石多含	あて道具は、同志円にならず丸太状のものを使用している。	165	
446	"	甌Ib	試掘 No.25包	口径 10.8	3/4	体部に比べ口縁部径が小さい壺に近い形態で口縁端部はつまり上げる。	口縁部強いロクロナデ、体部外面ナデ、内面あて道具痕	2mm以下の砂粒含	口縁部外面に自然釉が薄くかかる。	437	
447	土師器	杯A	SB14	口径 13.8	1/8	体部は内湾し、口縁部でわすかに肥厚。	口縁部ヨコナデ。体部外面粘土紐接合痕。体部内面オサエの後ヨコナデ。	微細砂・金雲母		2042	
448	灰釉	椀C		口径 16.2 器高 6.7 高台径 7.8	1/2	体部は内湾し、口縁部がわずかに外反。輪花。高台は、三日月高台。	口縁部・体部ロクロナデ。輪花退化したのが1ヶ所。2ヶ所施されたものか。灰釉薄い。	緻密		1110	
449	灰釉	"		口径 16.8 器高 7.6 高台径 8.2	1/2	口径に対し、深目の碗である。口縁部は、内湾し、端部で外反し内面に沈線をめぐらす。高台は、高い三日月高台。	口縁部・体部はロクロナデ。底部外面は、糸切り痕をナデ消す。	微細砂		1111	
450	灰釉	"		高台径 6.8	1/5	三日月高台で端部肥厚。	張り付け高台。底部内面灰釉。	緻密		2044	
451	土師器	甌	SB16	(口径 18.4)	1/9	口縁部は、ゆるく外反し、端部で先細る。	口縁端部ヨコナデ。口縁部内面ヨコハケ、外側タテハケ。	砂粒・金雲母		2038	
452	灰釉	椀		(口径 16.0)	1/20	口縁部は、ゆるく外反し、端部は丸い。	口縁部ヨコナデ。灰緑色の薄い施釉。	緻密		2035	
453	山茶椀	椀	SB73	(底径 6.4)	1/12	高台は、断面逆台形で低い。	高台は、貼付け高台でヨコナデする。灰白色を呈す。	細砂		2039	
454	土師器	皿C III	SK 9	口径11.0 器高1.6	1/7	口縁部は、内湾し端部は丸い。底部は平底。		細砂		2056	
455	灰釉	椀B		口径16.8	1/5	体部は、内湾し口縁部は外反。	口縁部・体部は、ロクロナデ。			2055	
456	土師器	皿C IV	SK11	(口径 14.8) 器高 2.1	1/6	口縁部は、直線的に外開し先細る。底部は、平底。	口縁部ヨコナデ。口縁部と底部の境は、強くおさえられる。	細砂・金雲母		1140	
457		椀B		高台径 10.4	1/2	高台は、断面方形で高く直立。	高台ハリツケ。	細砂		1137	
458		甌A		(口径 17)	1/8	頸部は、わずかに内傾し、口縁部は肥厚し、水平な面をもつ。	口縁部・頸部ナデ。	細砂・金雲母多く含む		2001	
459	灰釉	椀		(口径 12.6)	1/4	体部は内湾し、口縁部は外反。	口縁部ヨコナデ。体部ロクロナデ。	緻密		1142	
460				高台径 6.0	1/4	高台は、断面方形で直線的外開。	高台ハリツケ後ヨコナデ。底部外面。			1184	

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.	
461	灰釉	椀	SK11	高台径 6.8	1/8	高台は、断面逆台形でわずかに内弯。	高台は、ハリツケ後ヨコナデ。	緻密		2002	
462	灰釉	椀	SK10	口径 15.8 器高 5.5 高台径 7.2	3/4	口縁部は、わずかに内弯し、端部の外反度は弱い。高台は、断面方形で、わずかに内弯して直立する。	口縁部・体部ロクロナデ、体部上半部に、淡灰色の灰釉をつけ掛けする。	緻密		1003	
463	土師器	皿B I	SK12	(口径 8) 器高 1.5		口縁部は、内弯し端部は丸い。底部は丸底。	口縁部ヨコナデ。底部内外面オサエ。		灰白色	2004	
464	灰釉	椀B		(口径 16)	1/9	体部は、わずかに内弯。口縁部の外反度は弱い。	口縁部・体部ロクロナデ。淡黄緑色の灰釉掛かる。	微細砂		2003	
465	灰釉	椀	SK26	口径 15.1 器高 6.1 高台径 7.3		口径に対し、深目の椀形態をなす。口縁部は、内弯し端部で外反する。高台は、断面逆台形で外面が内弯する。	口縁部・体部ロクロナデ。底部外面は、糸切り痕をナデ消す。輪花は、ヘラ状工具によるオサエで4ヶ所施す。高台部まで、灰釉をつけ掛けする。			1115	
466	灰釉	椀	SK42	(口径 14.0) 器高 5.8 高台径 5.0		口縁部は、わずかに内弯し、端部の外反度は弱い。高台は断面方形で外開、高い。	口縁部・体部ロクロナデ。底部外面、糸切り後ナデ消す。	緻密		1127 1128	
467				(口径 15.1) 器高 6.5 高台径 6.3		口縁部は、わずかに内弯し、端部で外反。高台は、断面方形で外開し、高い。	口縁部・端部ロクロナデ。体部下半部まで、白色灰釉をつけ掛けする。	緻密		1125 1126	
468	土師器	皿B II	SK27	口径 9.3 器高 1.6	完形	口縁部は、ゆるく内弯し、底部は丸い。	口縁部ヨコナデ。底部外面オサエ。			1114	
469		皿A II		口径 9.5 器高 2.0 高台径 3.7	完形	口縁部は、わずかに内弯する。高台は、台状となる。	口縁部は、ロクロナデされ、器面の凹凸多い。底部外面に糸切り痕をのこす。			1112	
470				口径 11.0 器高 2.0 高台径 5.9	完形	口縁部は、直線的に外開し端部は丸い、高台は、台状となる。	口縁部はロクロナデ。底部外面に糸切り痕をのこす。			1113	
471	灰釉	椀	SK30	口径 15.4 器高 5.0 高台径 8.4	1/8	体部は、内弯し口縁端部は外反。高台は、三日月高台で直立。	口縁部・体部は、ロクロナデ。底部外面は、糸切り痕をのこす。淡緑色の灰釉薄く掛かる。	緻密		11116	
472				(口径 15.6)	1/4	体部は、内弯し口縁部はわずかに外反。輪花は、1ヶ所のこる。	口縁部・体部は、ロクロナデ。輪花は、ヘラ状工具による。淡緑色の灰釉薄く掛かる。			1117	
473				高台径 7.4	1/3	高台は、断面方形で直立。	底部外面は、糸切り痕をのこす。	緻密		1118	
474	灰釉	椀	SK36	口径 16	1/5	口縁部は、端部で外反。	口縁部ロクロナデ。指圧による輪花1ヶ所のこす。	緻密		125	
475	灰釉	長頸壺	SK58	(口径7.6)		口縁部は、ゆるく外反して開く。口縁端部は欠く。	口縁部ロクロナデ。内外面とも薄緑色の灰釉が掛かる。	微細砂。		284	
476	製塙土器		SK60	(口径 15) 器高 4.5	1/10	口縁部は、直立し、端部は先細る。		細砂多く含む		409	
477	山茶碗	椀D	SK 6	口径 14.4 器高 5.2 高台径 7.4	1/3	体部は、わずかに内弯し、底部との境は厚い高台は、幅広く低い。	口縁・体部外面に淡緑色の自然釉かかる。			1119	
478	山茶椀	"		高台径 6.2	完形	体部と底部の境は、丸味をもつ。高台は、断面方形で低い。	底部外面糸切り痕。			1120	
479	山茶椀	"	SK33	(口径 14.8)	1/6	口縁部は外反し、端部は角張る。	口縁端部は強いオサエ。			400	
480	山皿	皿C		口径 7.3 器高 1.5	完形	口縁部は角張り面をもつ。	底部内面一定方向ナデ。			200	
481	土師器	皿B	SK34	口径 8.5		丸底の小形皿。口縁部の歪み大きい。	口縁部ヨコナデ。			17	
482	山茶椀	椀C		口径 16.0 器高 5.4 高台径 6.8	完形	口縁部は薄く、いずれかに外反。体部と底部の境で肥厚。高台は、断面方形で低い。	口縁部から体部ロクロナデ、底面内面一定方向ナデ。底部外面糸切り痕。口縁端部に自然釉。	砂粒含む		423	
483				口径 15.8 器高 5.6 高台径 6.2	3/4	口縁端部肥厚し、外反。体部は、わずかに丸味をもつ。高台は、断面方形で低い。	口縁部から体部ロクロナデ。底部外面には糸切り痕。	砂粒含む		22	
484				高台径 6.4	高台完存	体部丸味をもつ。高台は、端面逆台形で低い。	口縁部から体部ロクロナデ。底部内面一定方向ナデ。底部外面糸切り痕。	砂粒含む		23	
485	山茶椀	椀	SK38	(口径 15.8)	1/10	口縁部わずかに外反。	口縁端部強くヨコナデ。			401	
486	山茶椀	椀	SK39	口径 15.2 器高 5.1 高台径 7.4	1/3	体部ハ、ゆるく内弯。口縁端部は、わずかに外反	体部内面に自然釉			426	
487	山皿	皿C	SK35							124	
488	山茶椀	椀	SK40	口径 16.4 器高 5.5 高台径 7.3	1/2	口縁端部強く外反。体部丸味をもつ。高台は、断面逆三角形で低い。	口縁部から体部ロクロナデ。底部外面糸切り痕。体部内面に自然釉。	砂粒含む		296	
489				口径 15.5 器高 4.8 高台径 8.6	1/4	体部は、直線的に外開し、器壁は薄い。高台は、断面長方形で外開。	口縁部から体部ヨコナデ。	砂粒含む		390	

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.	
490	山茶椀	椀	SK40	口径 15.8 器高 4.6 高台径 7.0	1/4	体部は、わずかに丸味をもち、口縁部は外反。高台は、断面逆三角形で低い。	口縁部から体部ヨコナデ。口縁部外面は、外上方へ向く面をもつ。	砂粒含む		387	
491				口径 16.0 器高 4.5 高台径 6.6	1/4	体部は、わずかにV字に丸味をもち、口縁部は外反。高台は、断面逆三角形で低い。	口縁部から体部ヨコナデ。底部外面に糸切り痕。体部内面に自然釉。	砂粒含む		281	
492				高台径 7.4	1/4	底部の器壁は、薄い。高台は、断面長方形でわずかに外開。	体部ロクロナデ。底部外面、糸切り後ナデ。	良		2052	
493				高台径 7.5	1/2	器壁は厚い、高台は、断面方形で低い。	底部外面に糸切り痕。	砂粒含む		388	
494	山皿	皿		口径 8.6	1/5	口縁部は外反し、端部は外上方に面をもつ。	口縁部ヨコナデ。口縁端部内面に自然釉。	砂粒含む		421	
495	白磁	椀		(口径 16)	1/4	口縁部は、肥厚し外面に垂直な面をもつ。	口縁部内面には、小さな段をつくり出す。			441	
496				底径 5.7	完形	高台は、断面方形でわずかに外開。	高台ないめんのケズリ出しが浅い。			386	
497	山皿	皿C	SK37	口径 8.1 器高 2.1 高台径 4.8	1/2	口縁部は、直線的に外開。低い高台をはりつける。	底部内面一定方向ナデ。			126	
498	土師器	"	SK51	口径 8.8 器高 1.0		口縁部は、低く内弯して立ち上がる。平底。	口縁部ヨコナデ。底部外面不調整。			405	
499	山茶椀	椀F		口径 13.4 器高 4.9 底径 6.0		口縁部は、直線的に外開し、端面は角張る。	底部内面仕上げナデ。外面糸切り痕。			332	
500	山茶椀	椀F		(口径 12)	1/9	口縁部は、直線的に外開し、端面は角張る。	口縁部ヨコナデ。			406	
501				(底径 5.6)	1/2	高台はつかないが、底部外間に段をもつ。	底部外面糸切り痕。			407	
502	土師器	羽釜A	SK53	(口径 18.9 鍔径 22.8 器高 9.6)	1/6	口縁部は、直立し端面は内傾する面をもつ。鍔は、水平に引き出される。	口縁部ヨコナデ。鍔部ははりつけヨコナデ。体部内面ユビオサエ。底部内面ナデ。体部外面に粗いハケ目。			2060	
503	山茶椀	椀		(口径 13.6)	1/12	口縁部は、わずかに外反。端部は、外傾する面をもつ。				2059	
504				(高台径 8.2)	1/8	断面逆台形の高台が、はりつく。				2058	
505	山茶椀	椀F	SK59	口径 15.0 器高 4.9 底径 6.2	1/4	体部は、直線的に外面し、端部は角張る。無高台。	底部外面糸切り痕			297	
506				底径 5.0	1/2	体部は、直線適に外開。	底部内面仕上げナデ、外面糸切り痕。			1149	
507	陶器	甕		体部最大径 34.8	1/4	体部は、ゆるく内弯。体部は、中央部で最大径をもつ。	体部内面指オサエ痕。			1153	
508	砥石			現存長 5.0 幅 3.4 厚 0.6~0.9		長方形状の砥石。	両面に使用痕。			1152	
509	陶器	捏鉢	SK54	(口径 24) 器高 7.5 底径 14	1/8	体部は、直線的に外開。口縁端部は、角張る。	底部外面未調整。体部内面使用のため滑か。			414	
510	白磁	椀	SK29	(口径 18)	1/16	口縁端部は玉縁状。				410	
511	山茶椀	椀E	SK74							302	
512	土師器	鍋B	SK75	—	—	口縁部は、大きく外反し内側に折り返される。	口縁部ヨコナデ。			443	
513	山茶椀	椀F		底径 5.6~6.2	1/2	無高台。	底部内面仕上げナデ、外面糸切り痕。			301	
514	砥石		SK55	現存長 6.2 幅 6.0 厚 4.6			2面に使用痕。2面欠損			442	
515	砥石		SK76	現存長 5.0 幅 4.2 厚 1.2			両面に使用痕			43	
516	土師器	鍋D	SD77	(推定口径 17.3)	1/8	口縁部は、「く」の字状に外反。口縁端部折り返し、断面三角形。	口縁部ヨコナデ。			2074	
517	土師器	鍋B	SD78	(推定口径 28)	1/5	頸部は、力率。口縁部は大きく外反。	口縁部は、折り返され内面に内弯する面をもつ。			36	
518		羽釜B		口径 18	1/4	口縁部は、内傾し端部は肥厚。鍔は、強く外上方に開く。体部は、半球状。	口縁部ヨコナデ。鍔内面は、指オサエ。体部内面はナデ、外面はヨコハケ。			37	

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
519	山茶椀	椀	SD78	口径 14.0 器高 5.4 高台径 6.0	1/3	体部は、わずかに内弯。口縁端部は、外側に面をもつ。	底部内面一定方向ナデ。			41
520				口径 12.6 器高 5.6 高台径 4.2	1/6	体部は、わずかに内弯。口縁端部は、外側に面をもつ。高台は、低く断面逆三角形。	底部内面方向ナデ。外面糸切り痕。			39
521				口径 12.8 器高 4.4 高台径 5.0	1/	体部は、直線的に大きく外反。口縁端部は角張る。無高台でわずかに上げ底。	底部内面一定方向ナデ。外面糸切り痕。			40
522	山茶椀	椀F	SD48	口径 13.0 器高 4.6 高台径 4.6	3/4	体部は、直線状に外開。口縁部は、外側に面をもつ。無高台。	底部外表面			270
523	土師器	皿B I	B15-18	口径 6.5 器高 1.7		丸みをもつ小皿。底部は、わずかに上げ底。	口縁部・底部外表面はオサエ。口縁端部から底部内面はヨコナデ。	砂多い		219
524	土師器	"	B 9-14	口径 7.5 器高 1.3~1.7		丸みをもつ小皿であるが、歪大きい。	内外面とも乱ナデ。内面に煤付着。	長石含む		178
525	土師器	"	A19-19	口径 7.6 器高 1.6	完形	丸みをもつ小皿。底部の器壁はやや薄い。	底部外表面オサエ。他はヨコナデ。			1012
526	土師器	"	B13-22	口径 7.6 器高 1.6		丸みをもつ小皿。口縁端部は、わずかに内弯。	底部外表面オサエ。他はヨコナデ。	砂含む		349
527	土師器	"	B13-9	口径 7.8 器高 1.6	1/2	底部の凹凸著しい。口縁端部肥厚。	底部外表面オサエ。他はヨコナデ。	精良		95
528	土師器	"	A19-19	口径 8.4 器高 2.1	完形	丸みをもつ小皿であるが、歪大きい。	口縁部内外面ヨコナデ。	細砂多い		1231
529	土師器	"		口径 器高						2102
530	土師器	"	B19-16	口径 7.2 器高 1.1		偏平な小皿で、器壁は薄く、歪大きい。	内外面ともオサエの後、不定方向のナデ。	砂多い		179
531	土師器	"	B13-14	口径 9.0 器高 1.2		偏平な小皿で、口縁部は大きく内弯して立つ。	内面ヨコナデ。	砂含む		16
532	土師器	皿B II	B18-7	口径 10.6 器高 1.6		偏平な皿で、口縁部が大きく内弯する。	口縁部内外面ヨコナデ。			267
533	土師器	"	A15-13	口径 10.4 器高 2.0	1/2	底部の丸みが著しい。	底部外表面は、オサエ。他はヨコナデ。	砂含む		1208
534	土師器	"	B 6-19	口径 9.6 器高 1.7	完形	底部外表面中央が、わずかに凹む。	口縁部は、ヨコナデにより引き出された形となる。	砂含む		1201
535	土師器	皿C I	B13-8	口径 7.0 器高 1.7		平坦な底部から、口縁部が屈折して立ち上がる。	底部外表面不調整。他はヨコナデ。	砂含む		378
536	土師器	"	試掘坑 №24	口径 8.6 器高 1.2~1.6		上底状となる底部から、口縁部が外開する。	底部外表面はオサエ。他は、ヨコナデ。底部内面には、部分的にハケ目がのこる。	砂含む		501
537	土師器	"	B 9-14	口径 8.7 器高 1.3		平坦な底部から、口縁部が外開する。	口縁部をヨコナデし、底部外表面を不定方向にナデる。			314
538	土師器	皿C II	A18-23	口径10.0 器高 1.9		平坦な底部から、口縁部が肥厚して外開する。	底部外表面はオサエ。他はヨコナデ。	精良		1233
539	土師器	"	A18-23	口径 9.4 器高 1.8		平坦な底部から、口縁部が肥厚気味に外開する。	底部外表面はオサエ。他はヨコナデ。	精良		1232
540	土師器	"	B13-4	口径 9.6 器高 1.5		平坦な底部から、口縁部が外開する。	底部外表面はオサエ。口縁部は、強くヨコナデする。	砂含む		220
541	土師器	皿B III	B13-9	口径 14.0 器高 2.7	1/6	口縁部は、大きく内弯して開く。	口縁部内外面ヨコナデ。	砂含む		184
542	土師器	皿B IV	B13-7	口径 16.2 器高 2.7		頂部は丸みをもち、口縁部は内弯する。	口縁部ヨコナデ。			323
543	土師器	皿C IV	B13-7	口径 17.2 器高 2.5		やや突出ぎみの底部から、口縁部はわずかに屈折して外開する。	底部外表面はオサエ。口縁部内外面はヨコナデ。底部内面はナデ。	細砂含む		359
544	土師器	皿B V	B 9-14	口径 21.2 器高 2.8		平坦な底部から、口縁部は大きく内弯して立ち上がる。	底部外表面ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	砂含む		321
545	土師器	鍋A	B21-17	(口径 29.2)	1/5	「く」の字状に外反する口縁部は、端部で肥厚する。	肩上部には、オサエの指圧痕のこる。口縁端部は、ヨコナデ。	砂含む		1203
546	土師器	"	試掘坑 №33	口径 15.6 (器高 17.2)		口縁部は、「く」の字状に緩く外反し、端部で折り返えされ、肥厚する。体部は、凹凸をおち球形状となる。	体部外表面とも、下半以下をヘラケズリする。体部上半外表面タテハケ、内面をヨコハケで調整する。口縁部は、内外面ともヨコナデ。	砂多い		503
547	土師器	鍋C	B14-1	(口径 22)	1/5	口縁部は、「く」の字状に外反し、水平に引き出された後内側に折り返される。	肩部は、オサエの指圧痕の上をヨコハケを施す。			211

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
548	土師器	鍋B	—	口径 26.8		頸部は、やや長く直立する。口縁部は外反し、端部で内側に折り返される。	口頸部はヨコナデ。肩部外面にはオサエの指圧痕のこる。			269
549	土師器	羽釜A	B17-25	口径 31		口縁部はわずかに外反する。口縁断面は中央が凹み、上方を向く。鍋は、水平に付けられる。	口縁部は、内外面ともヨコナデ。体部外面は、ヨコハケ。	砂多い		253
550	土師器	甕A	A14-20	(口径 18)	1/8	体部は、わずかに外寄せする。口縁部は、屈折して、水平に短く引き出される。口縁端面は水平な面となる。	外面に煤付着。	砂多い		2063
551	土師器	甕B	B13-24	(口径 19.6)		体部は、ほとんど直立すると思われる。口縁部は、屈折して引き出され、端面が外上方を向く。	口縁部外面ヨコナデか。外面に煤付着。	砂多い		394
552	黒色A類	椀A	A20-8	口径 12.0	1/4	体部が、緩く内弯。				2086
553	瓦器	椀	B14-8	高台径 5.6	1/2	高台は低く、断面が逆三角形状。	底部内面に粗い輪結連状文。体部内面は、粗いヘラミガキ。			1188
554	灰釉	椀B	B14-8	口径 13.8 器高 3.9 高台径 7.8	1/2	体部ハ、緩く内弯。口縁部は、直線的で端部は角張る。高台は、断面方形で外開。				13
555	灰釉	"	B14-8	口径 14.2 器高 4.2 高台径 6.8	1/2	体部は、中央部でわずかに屈折。底部内面が凹む。高台は、断面方形で角張る。				3
556	灰釉	"	B14-13	口径 15.6 器高 4.8 高台径 6.4		体部は、ほぼ直線的に開く。口縁端部は大きく外反。高台は、断面方形で丸みをもつ。	体部外面は、ロクロ水挽き時の痕跡が稜をなしてのこる。			4
557	灰釉	"	B13-14	口径 13.6 器高 3.8 高台径 6.4	1/4	体部は、緩く内弯。口縁部は、大きく外反。高台は、やや低い三日月高台。				96
558	灰釉	椀		口径 12.3 器高 4.1 高台径 5.9		体部は、大きく内弯。高台は、断面方形で端部は丸みをもつ。				1156
559	灰釉	椀A	A20-15	口径 14.6 器高 3.3 高台径 7.0	1/4	体部は、緩く内弯。口縁部は、わずかに外反。高台は、高い三日月高台。				1197
560	灰釉	椀C	B14-11	口径 15.7 器高 6.5 高台径 8.5	1/2	体部は、大きく内弯して深い。口縁端部で大きく外反。高台は、薄く外開。				2
561	灰釉	"		口径 16.2		体部は、大きく内弯して深い。口縁端部で大きく外反。				145
562	綠釉	椀	B 8-20	—	1/9	口縁端部わずかに外反。				2080
563	綠釉	椀	A20-6	—	1/28	口縁端部外反。				2079
564	綠釉	椀	A20-2	—	1/16	口縁部、ほぼ直線的。	口縁部強くヨコナデ。			2081
565	綠釉	椀	B 7-17	(高台径 7.8)	1/9	高台は、薄くて長い。				2084
566	綠釉	椀	B13-7	(高台径 7.1)		高台は、断面方形で外開し、端部は段状。				18
567	綠釉	椀	B11-7	(高台径 8.0)	1/8	高台は、断面方形で直立し、端部段状。	底部内面。			1182
568	綠釉	椀	B13-10	(高台径 7.8)	1/9	高台は、断面方形で端部段状。				2083
569	綠釉	椀	B14-1	(高台径 8)	1/4	高台は、低く幅広く端部は内弯する段状。				2085
570	灰釉	壺	B14-8	(口径 5.8)	1/2	大きく外反する口縁部は、端部で肥厚して外反。				186
571	綠釉	壺	B14-16	(口径 7.6)	1/8	大きく外反する口縁部は、端部で水平気味に引き出される。				2082
572	山茶椀	椀B	B17-8	口径 16.1 器高 5.6 高台径 8.4	1/3	体部は大きく内弯。口縁端部わずかに外反。				1181
573	山茶椀	"	B18-6	口径 17.8 器高 5.6 高台径 8.0	1/4	体部は大きく内弯。口縁端部で肥厚して外反。				80
574	山茶椀	"	B 6-24	口径 17.8 器高 5.0 高台径 9.8	1/4	体部は大きく内弯。口縁部は大きく外反し、端部は丸い。				1172
575	山茶椀	"	B14-9	口径 15.8 器高 4.5 高台径 6.2		端部は大きく内弯。口縁端部は外反。高台は断面方形で				225
576	山茶椀	椀C・D	B13-20	口径 15.8 器高 5.4 高台径 6.9	1/2	体部は緩く内弯。口縁部は外反し、端部で外上方に面をもつ。高台は断面逆台形。				14

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
577	山茶椀	椀C・D	B13-7	口径 16.0 器高 5.3 高台径 5.6		体部は緩く内湾。口縁部は外反し、端部で外上方に面をもつ。高台は、前面方形で低い。				326
578	山茶椀	"	B13-14	口径 15.4 器高 4.9 高台径 6.6		体部は緩く内湾。口縁端部外反。高台は、断面逆台形。				67
579	山茶椀	"	B13-18	口径 16.0 器高 5.5 高台径 6.0	1/8	体部は緩く内湾。口縁部は、端部で外方に面をもつ。高台は、断面逆台形で低い。				54
580	山茶椀	"	B13-5	口径 14.0 器高 5.1 高台径 5.5		体部は緩く内湾、口縁部は外反し、端部で面をもつ。高台は、断面逆台形で低い				263
581	山茶椀	"		口径 14.4 器高 4.9 高台径 7.0		体部は緩く内湾。口縁部は、折れるように外反し端部で面をもつ。高台は、断面逆台形。				93
582	山茶椀	"	A14-25	口径 16.2 器高 4.7 高台径 8.9	1/4	体部は緩く内湾。高台は、断面逆台形で低い。				1200
583	山茶椀	"	B16-3	口径 15.6 器高 4.8 高台径 7.8	1/2	体部は直線的に外開。口縁端部は肥厚して外反。高台は断面逆台形。端部は緩く内湾。体部と口縁部の境で肥厚。				1180
584	山茶椀	"	B13-14	口径 15.0 器高 4.5 高台径 6.7	—	口縁部は、直線的に外開し、端部は外上方に面をもつ。高台は、断面逆三角形。				66
585	山茶椀	"	A 9-24	口径 14.6 器高 5.3 高台径 7.4	1/2	体部は直線的に外開。口縁端部は、外上方に面をもつ。高台は、断面んぎやく三角形。				1178
586	山茶椀	椀E・F	C11-5	口径 14.4 器高 4.9 底径 5.4	1/3	体部は直線的に外開。口縁部は、直線的に開き、端部は外方に面をもつ。底部は、わざかに上げ底。				44
587	山茶椀	"	C11-5	口径 13.8 器高 3.9 底径 4.8	1/3	体部は直線的に外開。口縁部は、直線的に外方に面をもつ。底部はわざかに上げ底。口径の割りに浅い。				45
588	山茶碗	"	C14-13	口径 12.8 器高 4.5 底径 5.4		体部は直線的に外開。口縁端部で外方に面をもつ。底部円面は凹凸をもつ。				149
589	山茶椀	"	C 6-22	口径 12.8 器高 4.7 底径 5.0	1/2	体部は直線的に外開。口縁部も直線的に外開し、端部が外方に面をもつ。底部は平坦。				30
590	山茶椀	"	B14-13	口径 12.4 器高 4.0 底径		体部は、わざかに内湾気味で開く。口縁端部は外上方に面をもつ。				138
591	山皿	皿A	B 6-14	口径 9.1 器高 3.2 底径 5.4	完形	体部は緩く内湾。口縁部は直線的で端部は丸い。高台は、断面逆三角形。				1008
592	山皿	"	B13-2	口径 8.8 器高 2.4 底径 5.1		体部は緩く内湾。口縁部、外方に面をもつ。体部外面は凹凸多い。高台は断面逆三角形で低い。				361
593	山皿	"	B13-20	口径 8.3 器高 2.2 底径 4.6		体部は緩く内湾。外面は口縁部と体部の境に棱をもつ。底部は、高台を意識して上げ底。				15
594	山皿	"	B13-10	口径 8.7~9.6 器高 2.3 底径 6.0		口縁部は緩く内湾。口縁端部は丸い。高台は断面逆三角形で低い。				194
595	山皿	皿B	B13-9	口径 7.8 器高 2.6 底径 4.2	—	体部は大きく内湾。口縁部は、直線的に開き端部は角張る。体部と底部の境は、高台を意識して段をもつが、底。				61
596	山皿	"	B13-9	口径 7.8 器高 2.2 底径 3.2		体部は緩く内湾。口縁部は外反。底部は、器壁が厚く。外面は丸味をもつ。				336
597	山皿	"	B14-9	口径 8.3 器高 2.3 底径 4.9		体部は大きく内湾。口縁部は外反。底部は丸底。				167
598	山皿	"	B13-10	口径 8.9 器高 2.0~3.8 底径		体部は緩く内湾。口縁部は外反し、端部は丸い。口縁部と体部の境に棱をもつ。底ぶく丸味ののこる平底。				198
599	山皿	"	B13-23	口径 8.2 器高 2.4 底径 3.7	—	体部は緩く内湾。口縁部は外反し、端部は尖り気味。底部は平ら。				345
600	山皿	"	B13-14	口径 7.8 器高 2.1 底径 4.6		体部は緩く内湾。口縁部は外反。底部は、高台を意識して上げ底。				344
601	山皿	"	B13-14	口径 8.2 器高 2.1 底径 4.1	1/7	体部は緩く内湾。口縁部は外反し、端部は丸い。底部は平ら。				58
602	山皿	"	B13-14	口径 8.3 器高 2.1 底径 5.0	—	体部は緩く内湾。口縁端部は内傾する面をもつ。底部は厚くわざかに上げ底。				64
603	山皿	"	B13-8	口径 8.3 器高 2.1 底径 4.2	—	体部は内湾。口縁部は直線的に外開。底部内面中央は凹む。底部は平ら。				63
604	山皿	"	B13-9	口径 8.5 器高 1.9 底径 4.6		体部は緩く内湾。口縁部は直線的に外開。底部内面は凹凸をもつ。				168
605	山皿	"	B13-14	口径 8.4 器高 2.0 底径 5.0	1/2	体部は緩く内湾。口縁端部は角張り気味。底部と体部の境は肥厚し器壁が厚い。				60

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
606	山皿	皿B	B13-14	口径 8.0 器高 8.0 底径 4.0		体部は緩く内湾。口縁部は外反。底部内面は凹凸あり。底部外面は平底。				65
607	山皿	"	B14-9	口径 8.0 器高 8.0 底径 4.0	1/6	体部は直線的に外傾。口縁部で飛行土、端部は丸い。底部は上げ底。				170
608	山皿	"	B14-9	口径 8.0 器高 8.0 底径 3.8	1/4	体部は緩く内湾。口縁部はわずかに外反し、端部は丸い。底部は、わずかに上げ底。				59
609	山皿	"	B13-14	口径 8.6 器高 8.6 底径 4.0		体部は緩く内湾。口縁部はわずかに外反し、端面は丸い。外面は、口縁部と体部の境で稜をもつ。高台は、わずかに、	上げ底。			169
610	山皿	"	B13-19	口径 8.8 器高 8.8 底径 4.8		体部は直線的に開く。口縁部は外反。底部はわずかに上げ底。				75
611	山皿	"	B13-8	口径 8.4 器高 8.4 底径 3.8		体部は直線的に開く。底部は平底。				227
612	青磁	椀	A20-1	(口径 14.2)	1/20	体部は大きく内湾。口縁部は外反し、端部は丸い。	体部内外面ケズリ。内外面とも灰白色釉がかかる。			2088
613	青磁	椀	B13-3	(口径 12.0)	1/14	口縁部は直線的に外開。端部は肥厚し、外上方に面を持つ。	体部内面に、毛彫文がわずかにのこる。内外面とも灰白色釉がかかる。			2087
614	白磁	椀	B13-10	(底径 6.0)	1/2	高台は、断面方形で高く直立。	高台は、ハリツケ。底部外面に			91
615	青磁	椀	A15-5	(底径 4.4)	1/2	高台は、断面方形で直立し、端部外面に内傾する面をもつ。	底部外面へラケズリ。			1230
616	白磁	椀	B13-17	(底径 5.1)	1/4	高台は、断面方形で高く、端部は補足なる。	ケズリ出し高台。			1187
617	白磁	椀	B13-10	(底径 5.6)	1/4	高台は、断面方形で低く、端部は外方に面をもつ。	底部外面不調整。内面に段をもつ。			2089
618	土製品		B10-12	径 4.6 厚 0.6	1/2	中央部に直径3mmの小孔を穿ち、厚さ6mmの外縁をもつ。外縁には「Y」の字状にヘラ描文を2ヶ所以上つける。		3mm砂を含む		1191
619	瓦	平瓦	試掘塙 №26	厚 2.2						507
620	瓦	平瓦		厚 2.1			断面は、ヘラケズリ。凹面に布目痕。			506
621	瓦	丸瓦	試掘塙 №29	厚 1.9			断面及び凹面端部は、ヘラケズリ。凹面に布目痕。			505
622	石製品	砥石	A15-19	長 6.2 幅 3.2 厚 2.9		ほぼ直方体をなす。	三面を使用。他の一面は、端部近くのみ使用。			1238
623	鉄製品	刀	試掘塙 №33	長 24.2 刃部長 18.7 最大幅 2.7		棟は、わずかに弯曲。刃先は、切先から大きく弯曲。茎の目釘穴は1ヶ所。				504
624	瀬戸・美濃(志野)	鉄絵皿	SB63 B 9-15 P 1	口径 12.8 器高 3.1 底径 6.2	2/3	無高第、体部は内湾ぎみに立ち上がり端部は細く終わる。	内外面共ロクロナデ、杯軸による施釉。底部は糸切り痕が残る。	緻密	貫入あり	385
625	"	丸皿	SB63 B 9-15 P 2	口径 11.2 器高 2.0 高台径 6.4	1/4	削り出し高台、体部は内湾ぎみに立ち上がり端部は細い。	"	"	"	382
626	"	"	SB63 B 10-16 P 1	口径 11.0 器高 2.0 高台径 6.4	1/4	貼り付け高台、体部は内湾ぎみに立ち上がり端部は細い。	"	"	"	425
627	"	天目茶碗	SB63 B 9-15 P 2	高台径 4.6	高台のみ	高台は台形を呈する。	削り出し高台	"		383
628	石製品	砥石	SB63 "	幅 3.1×8.9 厚み 1.5	完存	楔形、断面変形五角形。砂岩製。				384
629	瀬戸・美濃	天目茶碗	SE69, SK67 B 15-2	口径 11.4 器高 6.3	1/3	呈部内面は平坦、口縁端部は外反して丸く終る。黒色釉	内面から口縁部にかけてロクロナデのち鉄釉。ケズリ出し高台。	緻密		272
630	土師器	小皿	SE69 B 15-2	口径 9.4 器高 1.5	1/4	口縁端部はやあ外反し細く終る。	口縁から内面にかけてヨコナデ呈部ユビオサエ。	"		274
631	常滑	擂鉢	"	口径 33.0	1/10	断面は均一、端部上面に浅い錐みがみられる。	ヨコナデ成形、鉄錆釉。	微砂粒を含む	鉄質	418
632	瀬戸	"	"	口径 31.0	1/8	口縁端部は内面に段を持ち、外側に張り出す。	内外面共ロクロミズビキ、口縁部はヨコナデ、内面鉄錆釉。	"	御目 9本/3.2cm	277
633	土師器	羽釜	"	口径 29.0	1/4	羽部は三角形状。口縁端部は上部に面を持つ。縁孔あり。	内外面ともヨコナデ、羽部は貼り付け。	緻密	外面スス付着	276
634	"	"	"	口径 31.8	1/4	羽部断面は鉄挺形状、口縁端部は外に丸く終る。縁孔あり。	"	"	"	436

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
635	土師器	内耳鍋	SE69 B15-2	口径 27.5	1/10	口縁部は端部にいくほど肥厚する。内耳部は面取りあり。	口縁部ヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内耳部貼り付け。	雲母含む	外面スウ S付着	275
636	瀬戸・美濃	天目茶碗	SE71 B15-4	口径 11.8	口縁部 1.5	体部はやや内傾して端部は細く終わる。黒色。	ロクロナデの後、鉄軸を全面に施す。	緻密		2054
637	土師器	羽釜	SE71 B15-4 埋土1	口径 21.8	1/8	羽部は丸みを帯び、口縁端部は上方に面を持つ。	内外面共ヨコナデ、羽部貼り付け。丸	"	外面スス付着	278
638	常滑	擂鉢	SK71 B15-4	口径 32.0	1/10	体部断面は均一、端部は肥厚し面を持つ。	内面から口縁部にかけヨコナデ体部ハユビオサエ。	微砂粒含む	軟質	288
639	"	"	SE62 B15-18	底部 15.2	1/8	体部断面は均一。	体部外面はヘラケズリ、内面はナデ成形、底部は未調整。	1~2mm砂粒少量含	"	2053
640	土師器	小皿	SK31 B18-7	口径 8.8 1.4	1/5	口縁部は直線的に伸び、端部は細く終わる。	口縁から内面かけヨコナデ、底部は細く終わる。	緻密		412
641	"	"	"	口径 8.8 器高 1.4	1/4	"	"	"		411
642	"	"	"	口径 8.8 器高 1.4	1/4	"	"	"		411
643	"	"	"	口径 10.0 器高 1.9	完形	"	口縁から内面にかけヨコナデ、底部ユビオサエとヘラケズリ	微砂少量含む		35
644	"	"	"	口径 10.6 器高 2.3	1/4	"	口縁から内面にかけヨコナデ、底部ユビオサエ	"		376
645	瀬戸	擂鉢	SK51 B10-6	口径 31.0 器高 14.5 底部 11.0	2/3	口縁部は内面に段を持ち、端部は肥厚して上方に面を持つ	口縁部ヨコナデ、体部外面へラケズリ、底部は糸切り痕が残る	"	御目11本/4cm底部 御目有り	246
646	瀬戸・美濃	折縁大皿	"	口径 24.6 器高 5.5 高台径 13.8	ほぼ完形	受口状の口縁で、高台は細い全面に施釉装。	ロクロナデ成形。貼り付け高台底部糸切り痕が残る。	緻密	内面に鉄絵あり	104
647	美濃(織部)	丸皿	"	口径 12.2 器高 3.2 高台径 6.6	1/4	高台は削り出しで高い。端部は外反して丸く終わる。	内外面共ロクロナデ、長石釉。底部はヘラケズリ。	"	貫入あり	417
648	瀬戸・美濃(志野)	丸皿	"	口径 11.0 器高 2.5 高台径 6.1	1/2	貼り付け高台、端部はやや肥厚して丸く終わる。	内外面共ロクロナデ、灰釉施釉底部へラ切り痕。	微砂粒少量含む		415
649	美濃(織部)	鉄絵皿	"	口径 12.1 器高 3.0 高台径 7.1	4/5	貼り付け高台、端部は折縁し上部に面を持つ。	内面ロクロナデ、外面から底部にかけヘラケズリ、長石釉。	緻密		105
650	瀬戸	丸碗	"	口径 10.8 器高 7.7 高台径 4.6	4/5	体部は内弯し端部は細く終わる。貼り付け高台。	内面から口縁部ロクロナデ、体部から底部へラケズリ、灰釉。	"		106
651	伊万里	ぐい呑	SK52 B10-13	口径 6.2 器高 4.4 高台径 2.6	3/4	体部はやや弯曲し端部は僅かに外反する。	底部は無釉の削り出し高台。草木状文様の染付が2ヶ所。	"	染付文様	1131
652	瀬戸	小壺	"	口径 9.0	口縁のみ1/3	口縁は上に肥厚し上部に面を持つ。	口縁部ロクロナデ。灰釉。	"		2051
653	"	擂鉢	"	口径 33.8	口縁のみ1/4	口縁端部内面に段をもち、外へ折り返す。全面錫釉。	内外面ロクロナデ成形。	"	御目単位34mm	1124
654	土師器	皿	SK55 B10-14	口径 14.5 器高 2.0	1/8	口縁部は直線的に立ち上がり細く終わる。	口縁から内面はヨコナデ、底部はユビオサエ。	微砂粒を含む		1148
655	"	羽釜	"	口径 17.8	1/8	口縁端部は上面に面を持つ。羽部は断面が三角形状。	口縁から内面はヨコナデ、体部は刷毛目成形(?)。	"	磨耗が著しい	1147
656	常滑	甕	SK56 C 6-17	口径 18.6	1/4	N字口縁で縁帶をなす。端部内面段は明確。	口縁部ヨコナデ、内面オサエ、体部外面タタキ成形。	緻密		27
657	"	"	"	口径 21.6	1/9	"	"	"		26
658	土師器	羽釜	"	口径 18.0	1/5	羽部は矩形、体部は直線的に立ち上がり羽部で内傾する。	口縁部ヨコナデ、内面オサエ、体部外面は剥離のため技法不明。	微砂粒を含む	外面スス付着	28
659	石製品	砥石	"	幅 3.2×4.5	1/2	4面に使用痕あり、砂岩製。				29
660	土師器	鍋	SK67 C 11-14	口径 21.5	1/9	折り返し口縁は偏平、端部内面には段を有さない。	口縁部ヨコナデ。	微砂粒多量に含む	外面スス付着	32
661	"	羽釜	"	口径 20.0 器高 (11.7)	1/3	羽部は台形、体部は直線的で端部は肥厚し上部に面を持つ。	口縁部ヨコナデ、内面オサエ、体部外面刷毛目調整。	緻密	"	33
662	常滑	擂鉢	SK67 B10-22	口径 29.0 器高 9.5 底径 9.8	1/8	体部断面は均一、端部は垂直に終わり面を持つ。	内面から口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、底部未調整。	微砂粒を含む	軟質	233
663	"	"	"	口径 31.5 器高 13.0 底部 15.1	1/2	体部は上にいくほど肥厚する端部は垂直に切れ面を持つ。	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ底部未調整。	"	"	101

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
664	常滑	擂鉢	SK67 B10-22	口径 30.5 器高 12.4 底径 15.5	1/2	体部断面は均一、端部は垂直に切れ、上面に2条の凹線	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ底部未調整。外面ベンガラ塗装	1~3mm砂粒含む	軟質	102
665	信楽	"	"	口径 29.6	1/10	器壁は薄く端部は張り出しの縁帶を有す。	内外面共ロクロミズビキ。	丸長石粒を多量含む	御目 5本/1.2cm	234
666	瀬戸	"	"	口径 30.0	1/8	器壁は上へいくほど薄く、端部は折り返して梢円形を成す。	端部はヨコナデ、内面外面共ロクロミズビキ、鉄鍔軸。	微砂粒を含む	御目 10本/3.5cm	235
667	土師器	羽釜	"	口径 25.0	1/4羽部は三角形、体部は内傾して端	部は内側に面を持つ。	口縁部ヨコナデ、体部内外面共ヘラケズリ成形。	金雲母を含む	外面スス付着	229
668	"	焰焰	SK67 B10-17	口径 27.0	1/2	体部器壁は薄く、口縁部はやや弯曲して端部は細く終わる。	"	"	"	228
669	"	風炉	SK67 B10-22	底部 15.6	口縁部を欠く	体部は直線的で、窓部は刀子により切り出す。	外面ヨコナデ、内面居たナデ、底部外面未調整。	緻密	内部スス付着	2091
670	瀬戸	壺	"	口径 11.0 器高 43.0 底部 18.0	2/3	体部はやや弯曲し肩部は丸みを帯びる。口縁端部は肥圧。	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ内面指オサエ、底部外面未調整	1~2mm砂粒多量含	自然釉	432
671	瀬戸・美濃	天目茶碗	"	口径 11.3 器高 7.5 高台径 3.9	ほぼ完形	底部内面は平坦、口縁端部は外反して丸く終わる。黒色釉	内面から口縁部にかけロクロナデのうちに鉄軸。ケズリ出し高台。	緻密		98
672	"	"	"	口径 11.6	口縁部1/3	口縁部はいったん内傾し、端部で外反する。黒色釉。	内面から口縁部にかけロクロナデのうちに鉄軸。	微砂粒少量含む		195
673	"	"	"	高台径 4.3	底部のみ	底部内面は平坦、底部外面にはヘラ切り痕が残る。	内面から口縁部にかけロクロナデのうちに鉄軸。ケズリ出し高台。	"		196
674	"	徳利	"	高台径 6.4	底部のみ	体部は直線的に立ち上がる。	全面にヘラケズリ、鉄鍔軸を全面に施し、上部に鉄軸を再施軸	"		197
675	伊万里	角皿	SK67 B10-6	幅 14.0×16.2 器高 3.1 高台径 6.0	2/3	全形は菱形で、角はハート形に割れる。高台は円形、砂目。	型打ち成形。流水文の染付。	緻密	染付文様	107
676	瀬戸・美濃	香炉	SK67 B10-22	口径 12.6 器高 4.8 高台径 9.5	1/2	体部は直線的で凹凸が目立つ端部は丸く終わる。鉄軸。	内面から体部にかけ鉄軸。底部はヘラケズリ成形、ケズリ出し高台	"		100
677	"	片口鉢	"	口径 12.5 器高 10.2 高台径 10.8	3/5	体部はやや内傾し直線的に立ち上がり、端部は外面に肥厚	内面から体部外面にかけ刷毛塗りの鉄軸。底部はヘラケズリ。	微砂粒を含む		99
678	瀬戸・美濃(志野)	丸皿	"	口径 11.0 器高 2.5 高台径 6.1	1/5	貼り付け高台、体部はやや内傾し端部はやや肥厚して終る	内外面共ロクロナデ、底部ヘラ切り、長石釉。	緻密		194
679	"	鉄絵皿	SK67 B10-17	口径 12.2 器高 2.5 高台径 6.8	1/4	貼り付け高台、体部は内弯して端部は補足終わる。	"	"	鉄絵有り	180
680	"	丸皿	"	口径 11.2 器高 2.4 底径 7.0	1/4	無高台、体部はやや内弯して端部は細く終わる。	"	微砂粒を含む		445
681	土師器	小皿	"	口径 9.5 器高 1.7	1/4	底部は平らで、口縁部はやや内傾して丸く終る。	内面から口縁部にかけヨコナデ底部は未調整。	雲母を含む		232
682	"	"	"	口径 11.0 器高 2.1	1/5	底部は平らで、口縁部は直線的に立ち上がり細く終わる。	"	"		231
683	"	"	"	口径 11.0 器高 1.5	1/2	底部は平らで、口縁部はやや外反して丸く終わる。	"	1~2mm砂粒少量含		230
684	瀬戸・美濃	香炉	B19-1包	口径 15.8 器高 5.6 高台径 10.2	1/4	体部はやや内傾して直線的に立ち上がり端部は外反する。	内面から体部にかけ鉄軸。底部はヘラケズリ成形、ケズリ出し高台	微砂粒を含む		305
685	瀬戸・美濃(志野)	鉄絵皿	B15-19包	口径 12.2 器高 2.6 高台径 6.4	1/4	削り出し高台。体部はやや弯曲し端部は外反ぎみに終わる	内外面共ロクロナデ、底KB Uヘラケズリ。長石釉。	"	買入あり	226
686	"	丸皿	B10-13包	口径 13.4 器高 3.2 高台径 7.2	1/3	削り出し高台。体部はやや弯曲し端部は細く終わる。	"	緻密		310
687	唐津	皿	B12-14包	高台径 8.0	1/10	高台は削り出しで断面が逆台形。体部はやや無い弯する。	白濁色、黄褐色、赤褐色の同円文と波状文文様。	"		310
688	瀬戸	丸碗	B10-13包	口径 11.8 器高 6.9 高台径 5.0	1/2	体部は内弯し端部は細く終わる。貼り付け高台。	内面から口部ロクロナデ、体部から底部ヘラケズリ、灰釉。	緻密		181
689	伊万里	染付碗	B20-7包	口径 10.3 器高 5.6 高台径 4.2	4/5	体部はやや内弯し、端部はやや外反して細く終わる。	削り出し高台は細い。内外面共ロクロナデ。	"	染付文様「寿」文字	325
690	瀬戸・美濃	ぐい呑	B 9-14包	口径 8.1 器高 4.6 高台径 4.2	4/5	体部は直線適で、端部は僅かに外反して細く終わる。	内外面共ロクロナデ、張り付け高台、底部ヘラ切り。灰釉施軸	"		89
691	"	仏龕具	B12-14包	口径 7.8 器高 6.3 底径 4.0	ほぼ完形	体部は丸く弯曲する。三角形状の染付。	底部を除く全面に磁器釉。削り出し高台。	"	染付文様	257
692	土師器	羽釜	B10-17包	口径 23.6	1/8	羽部は逆台形状で、口円端部は上部に面を持つ。円孔あり。	口縁部ヨコナデ	緻密	外面スス付着	312

正知浦遺跡出土土器観察表

No.	器種	器形	遺構・地点	法量(cm)	残存度	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土	備考	整理No.
693	土師器	羽釜	B14-21包(II)	口径 27.2	1/8	羽部は平らで、口縁端部は上部に面を持つ。円孔あり。	口縁部ヨコナデ	1~2mm砂粒少量	外面スス付着	374
694	"	"	B10-13包	口径 31.0	1/6	羽部は逆台形状で、口縁端部は上部に面を持つ。円孔あり	"	"	"	245
695	常滑	擂鉢	試掘坑 No.16包	底径 11.8	1/10	底部は平らで、体部は直線的に立ち上がる。	外面は指圧痕が明瞭、内面は摩滅にて調整技法不明。	"	"	500
696	"	甕	B15-19包	口径 42.8	1/18	口縁折り返し、端部上方は凹面となる。	口縁部ヨコナデ	砂粒多い		329
697	石製品	硯	B14-23包	幅 11.2×15.5 厚み 1.0~2.2	一部欠損	粘版岩製の長方硯。表浦兼用				150

正知浦遺跡出土土器観察表



遺跡遠景（東から）



調査前状況



第1次調査区全景（西から）



第1次調査区航空写真



第2次調査区全景（東から）



第2次調査区航空写真



正知浦古墳群近景（北東から）



1号墳全景（南から）



1号墳石室全景（南から）



1号墳石室（南から）



1号墳石室（東から）



1号墳石室掘形（南から）



2号墳全景（北東から）



2号墳石室全景（北から）



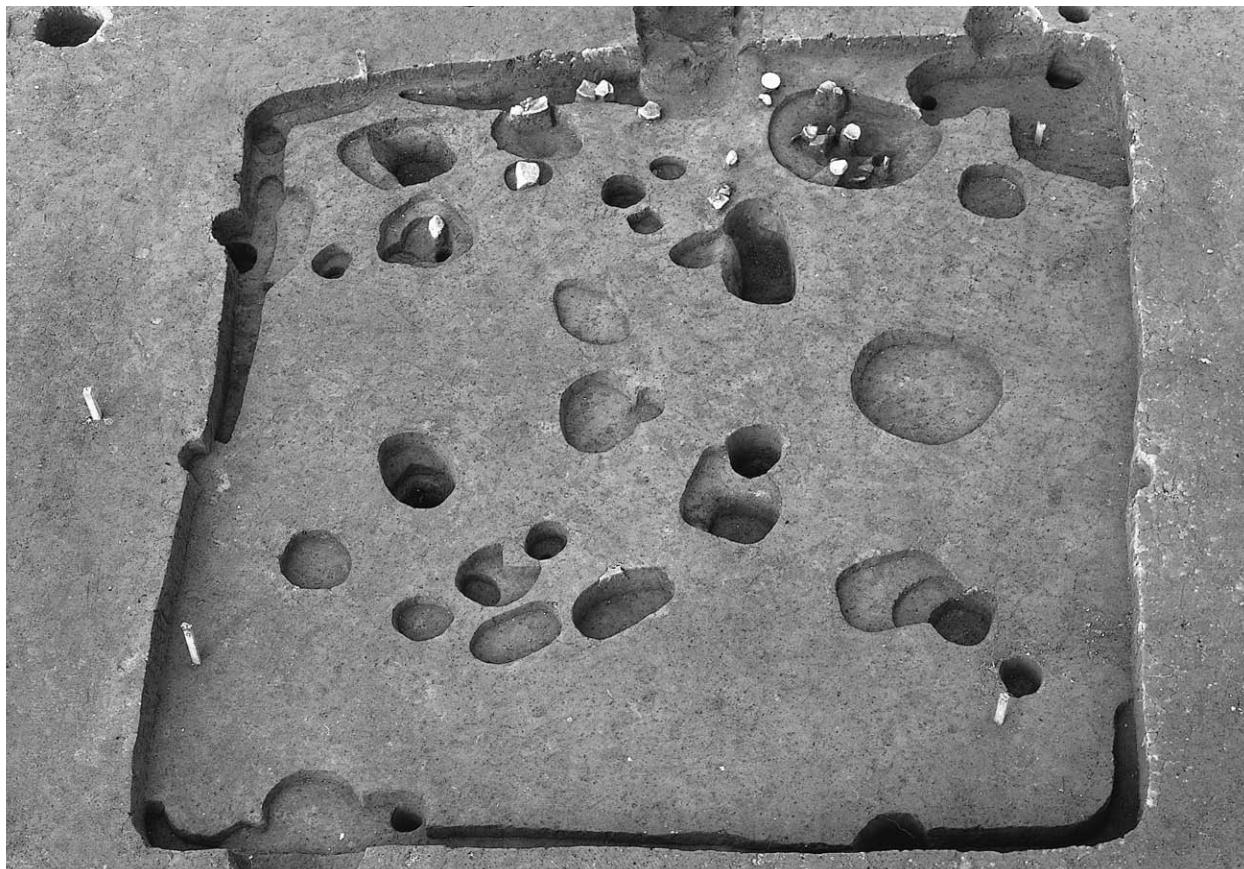
2号墳石室遺物出土状況（東から）



2号墳玄室遺物出土状況（東から）



鉄製品出土状況



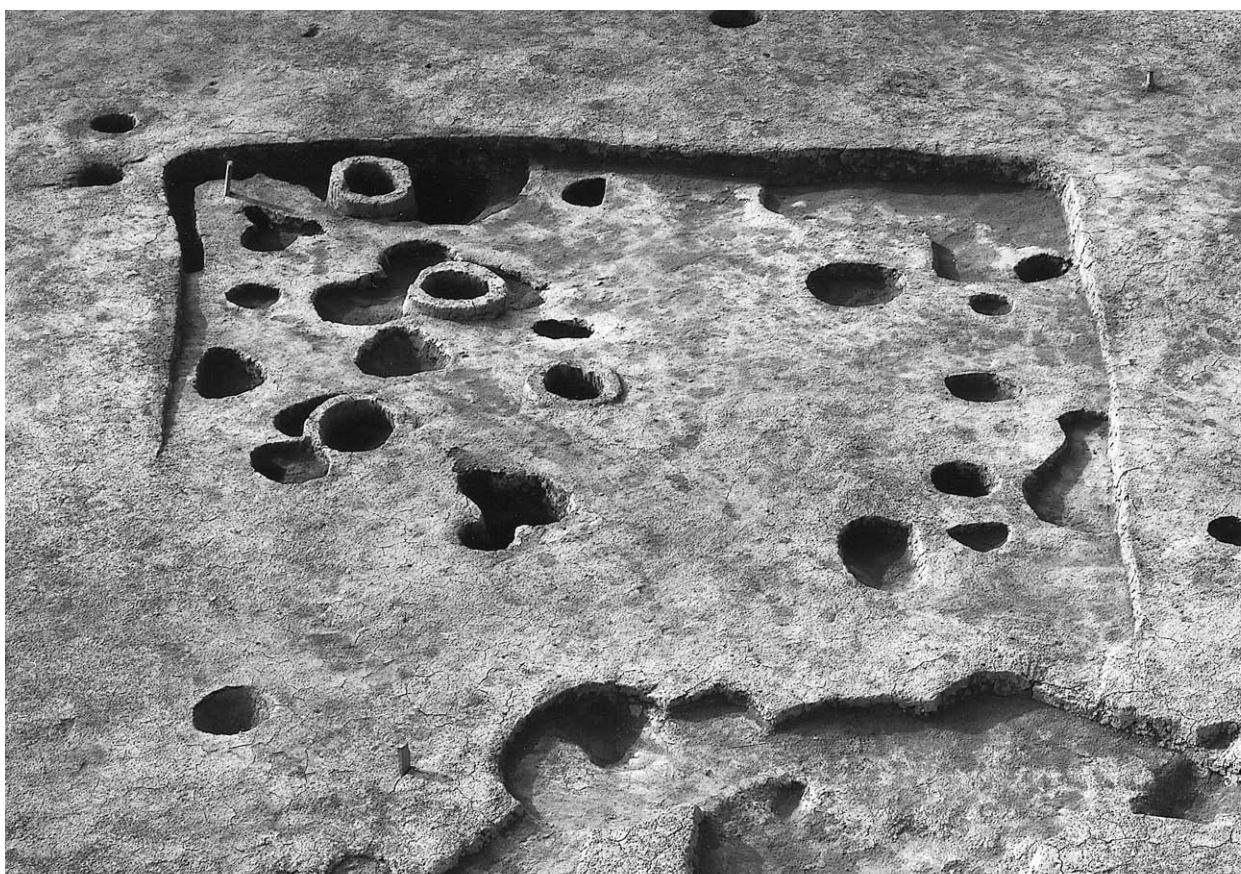
S H23 (南から)



S H20・21 (南から)



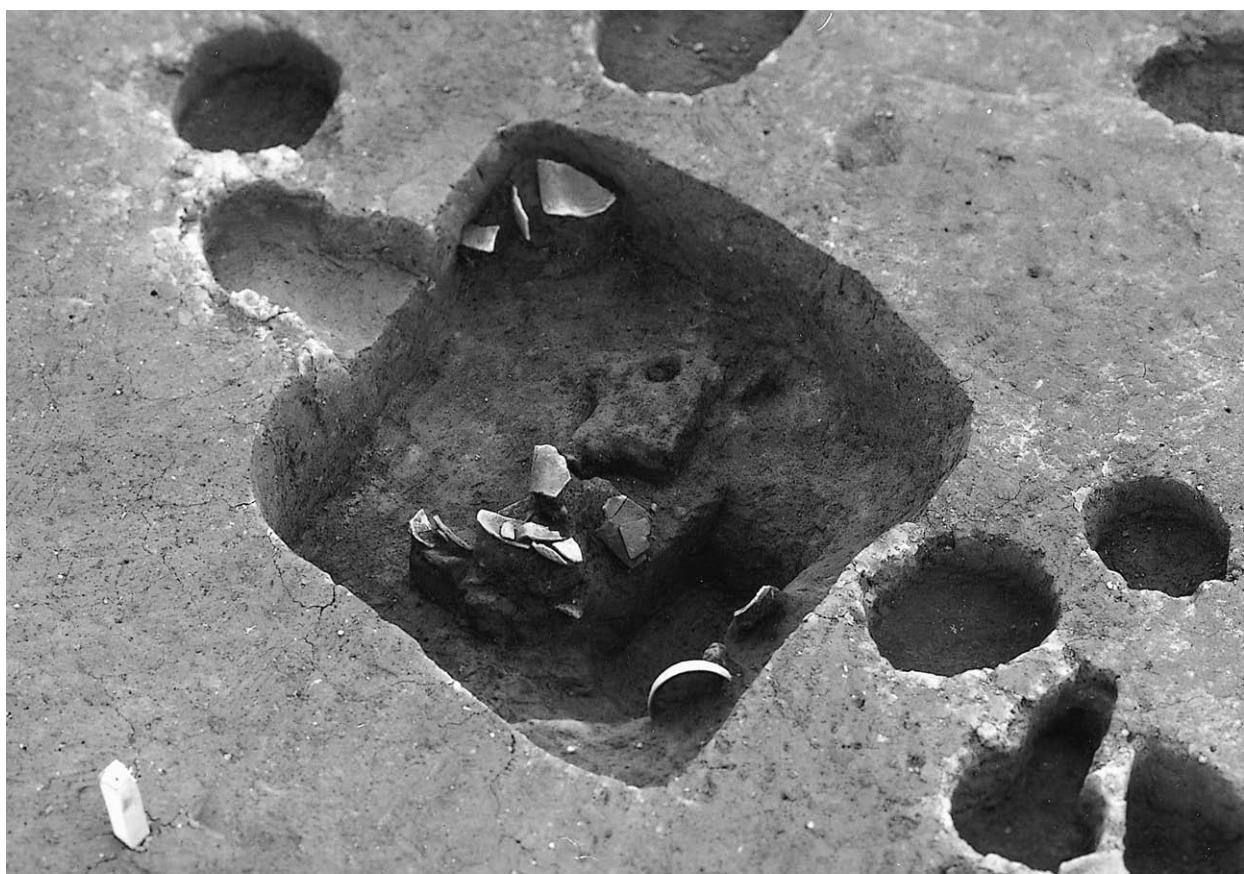
S H20・21・22 (東から)



S H19 (東から)



SK 1 遺物出土狀況



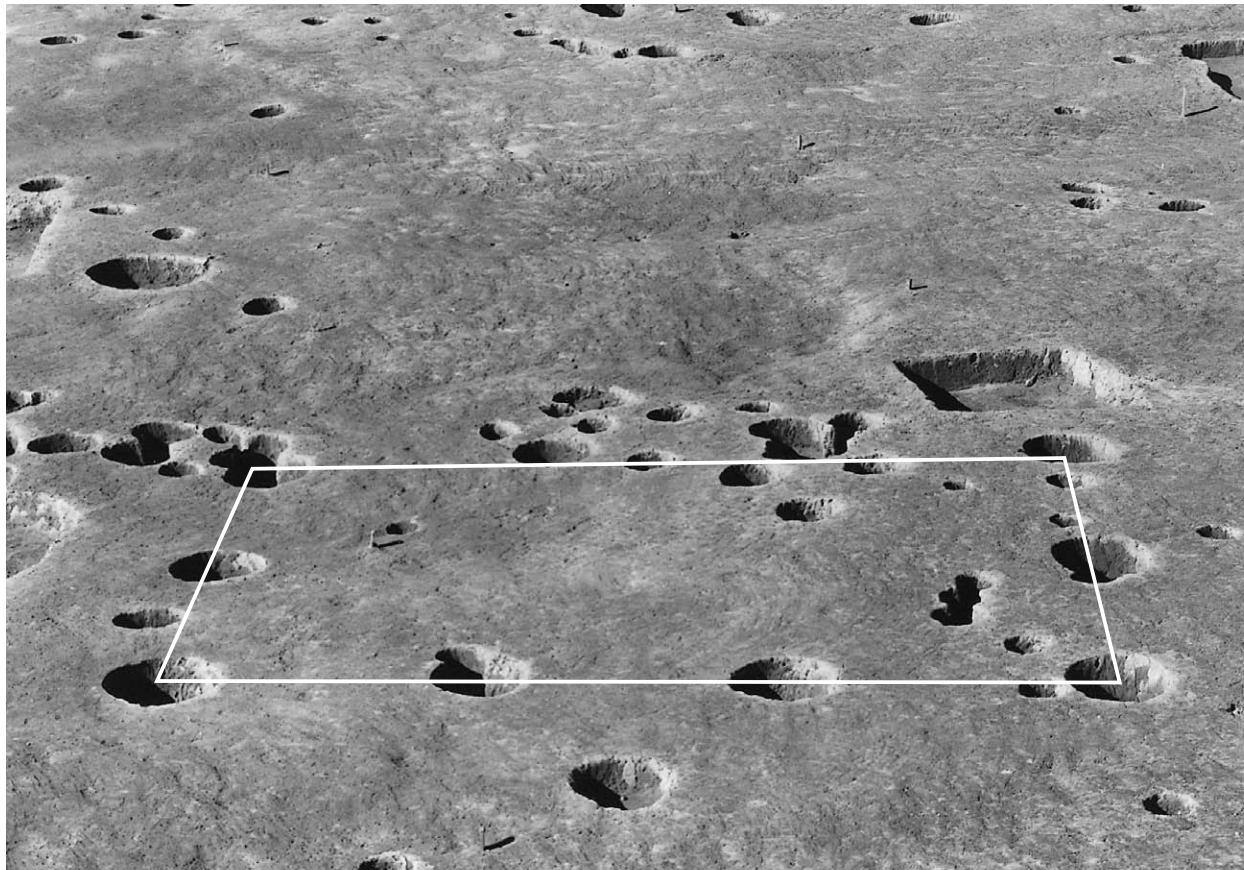
SK 26 遺物出土狀況



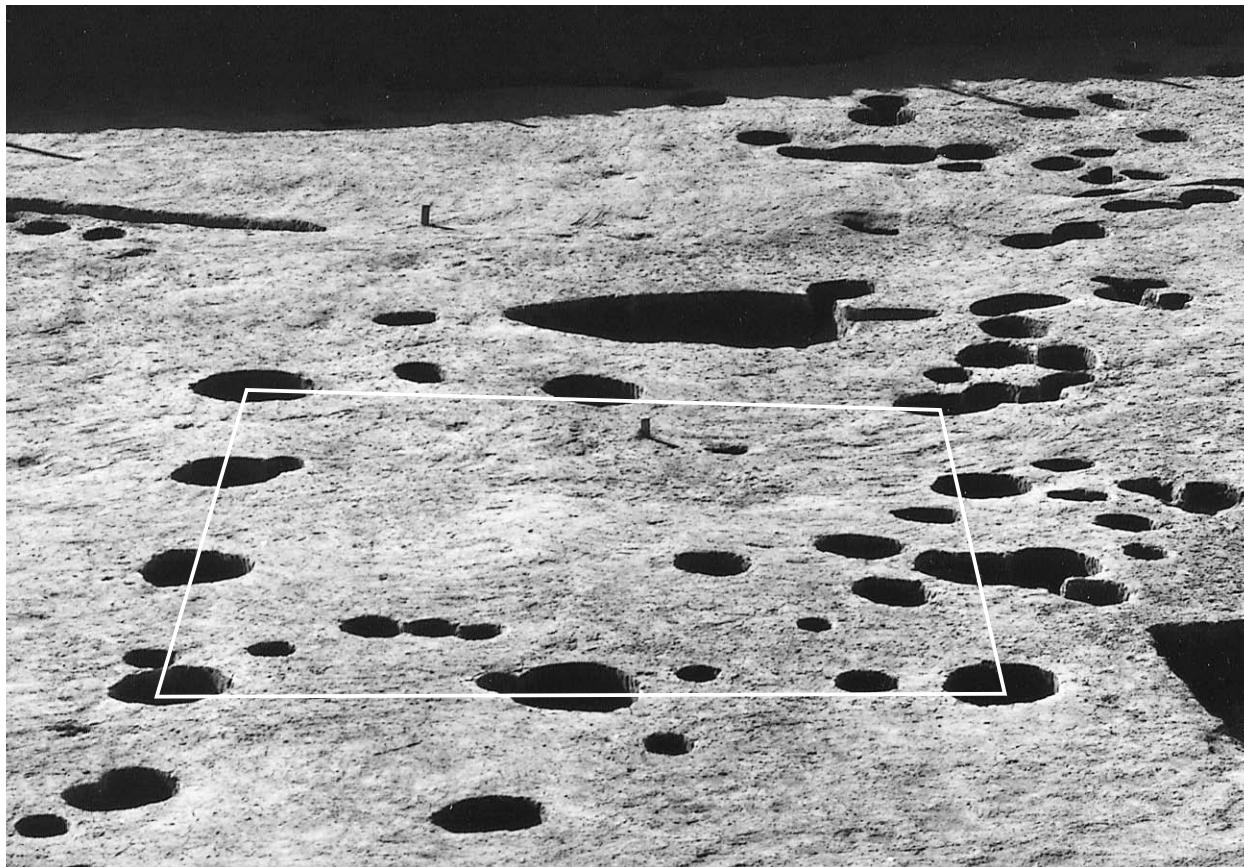
S K 8 遺物出土状況（南東から）



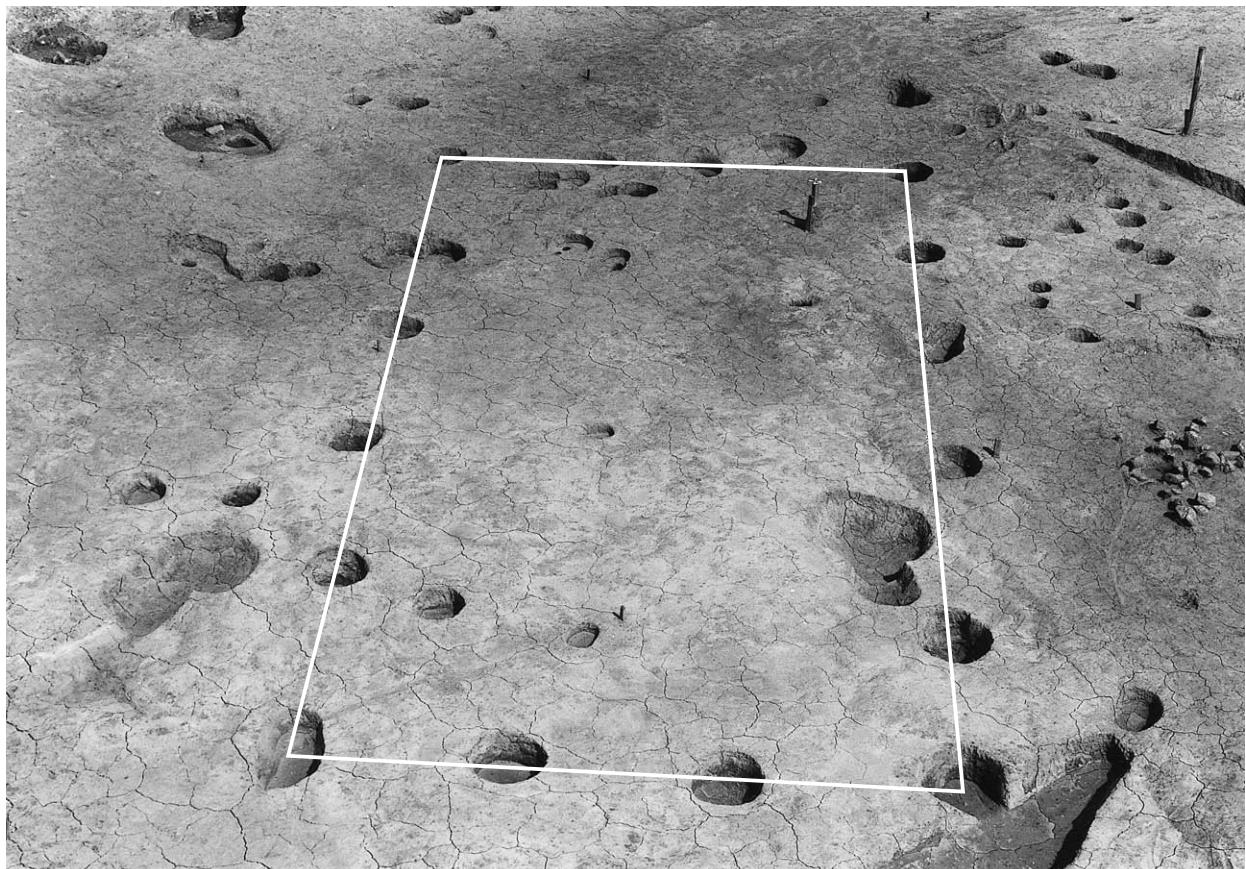
S K 46 遺物出土状況（南西から）



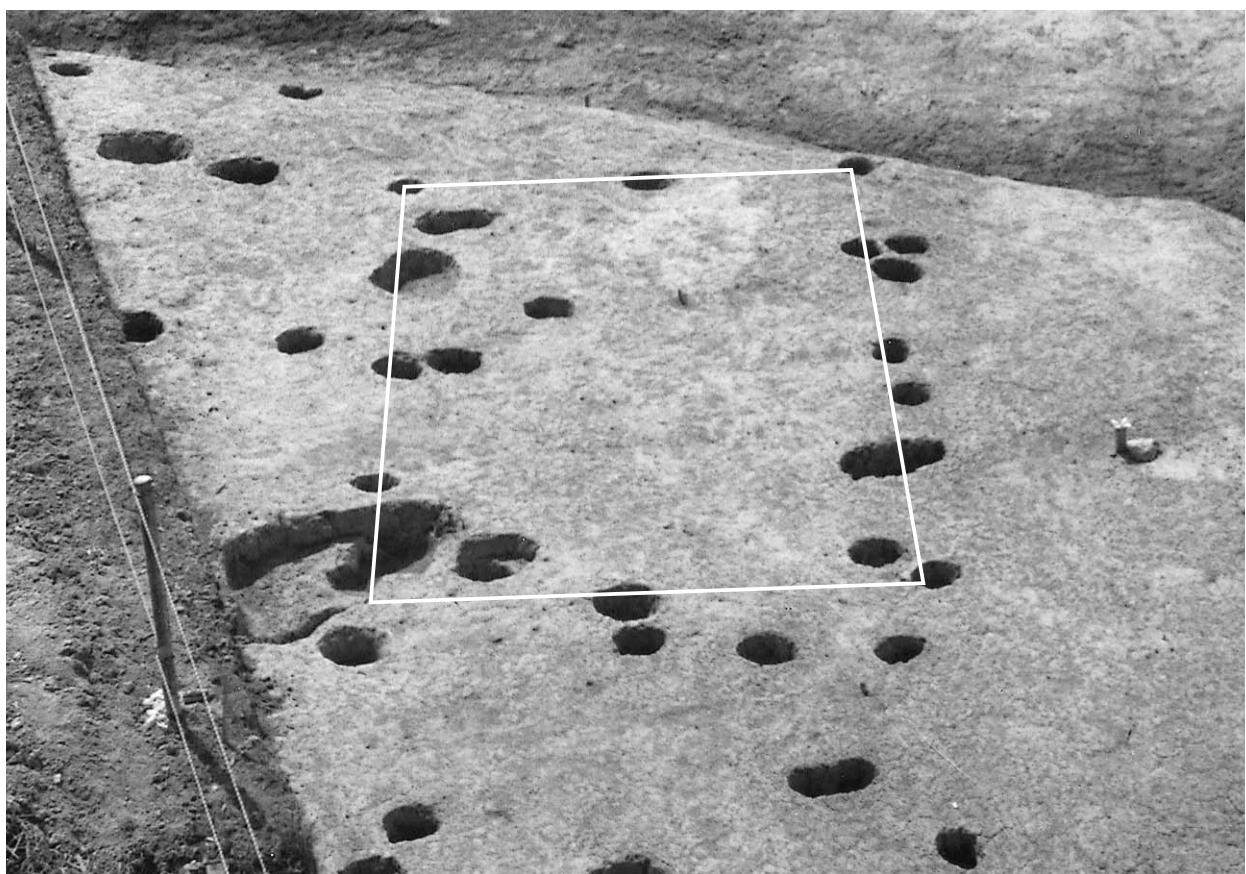
S B28 (東から)



S B28 (北から)



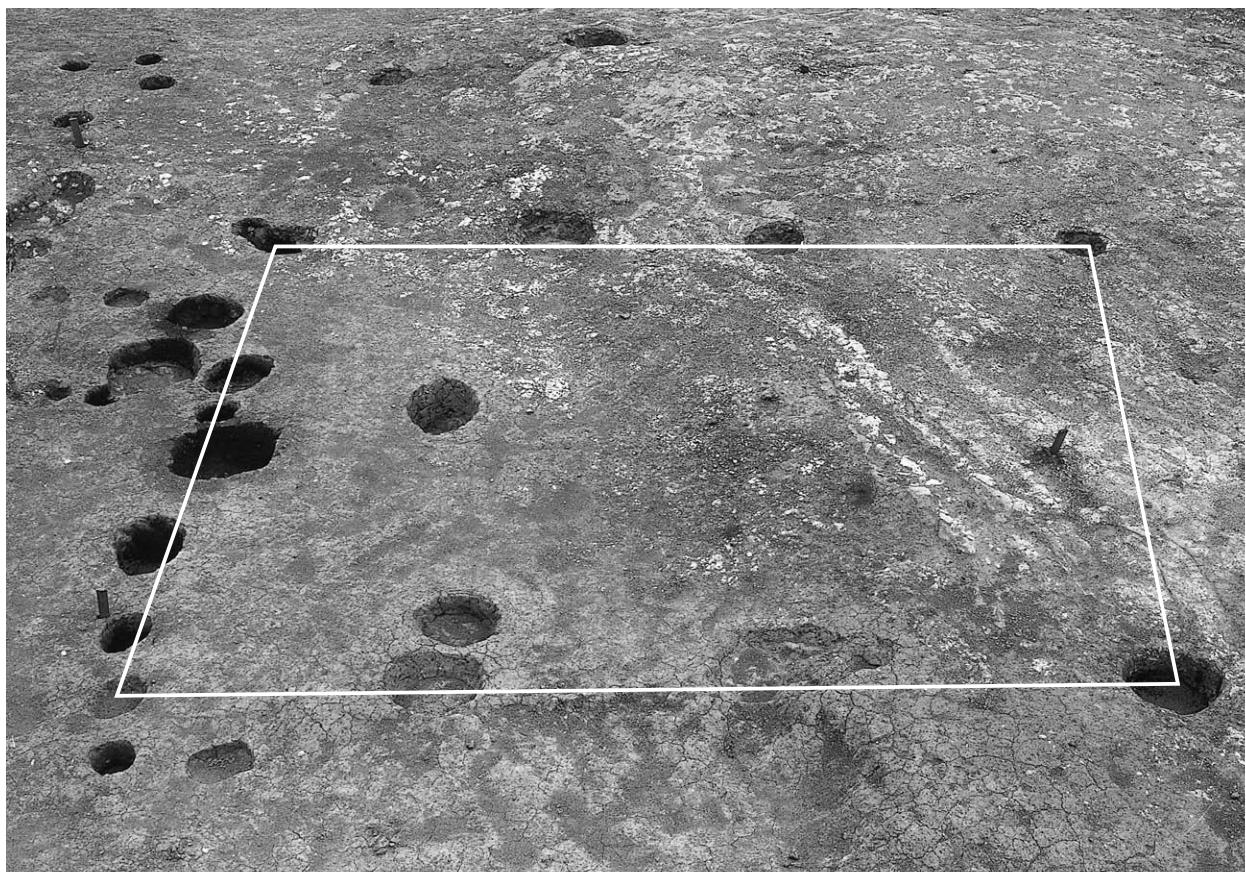
S B 50 (南東から)



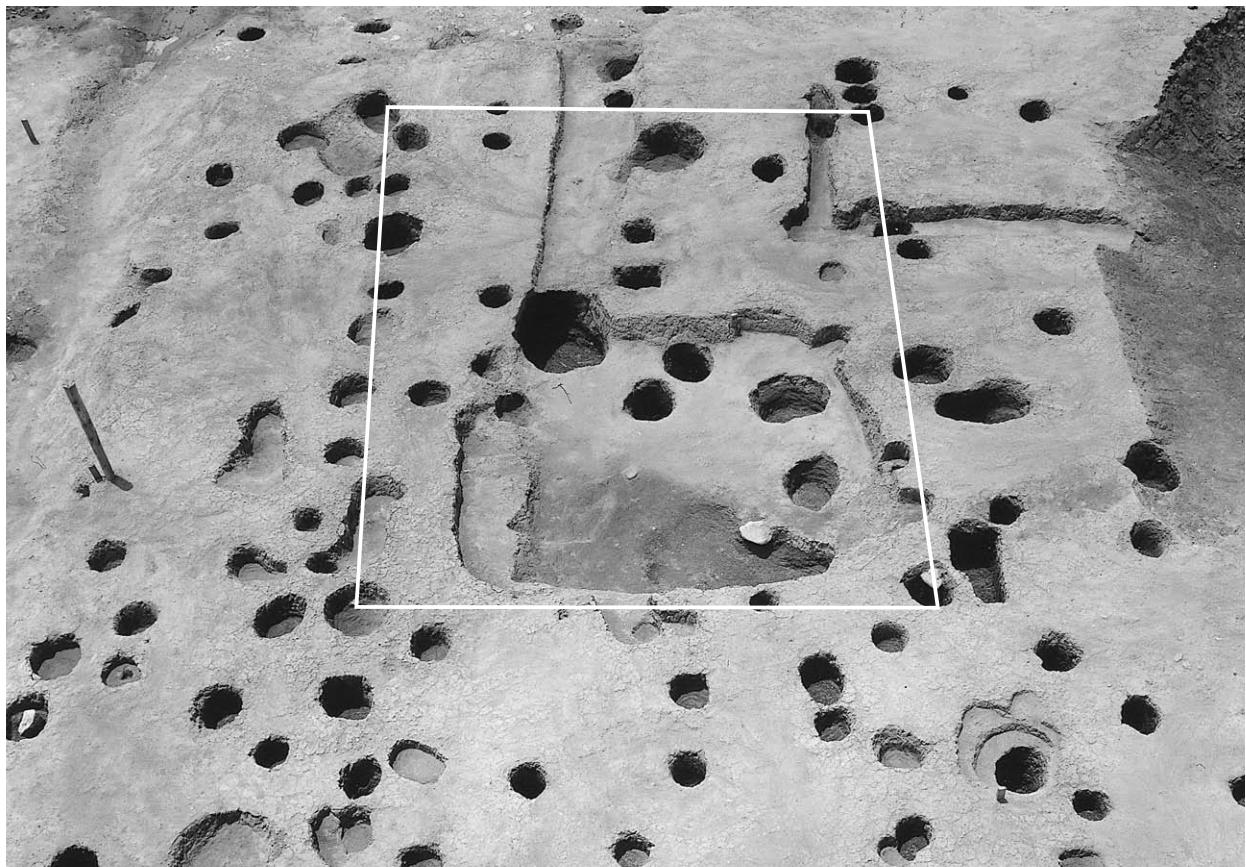
S B 43 (南ら)



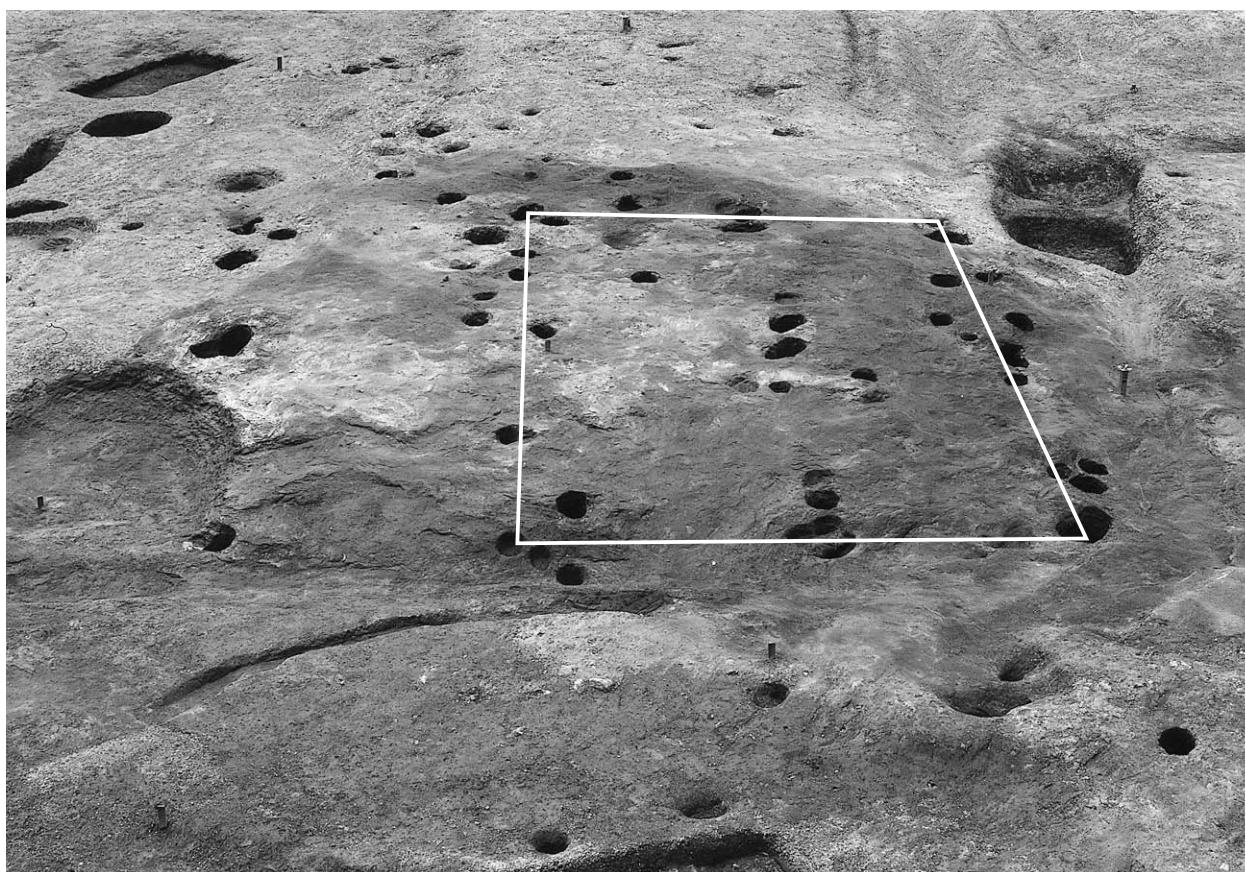
S B13・14・15・16（北から）



S B32（南から）



S B 47 (北から)



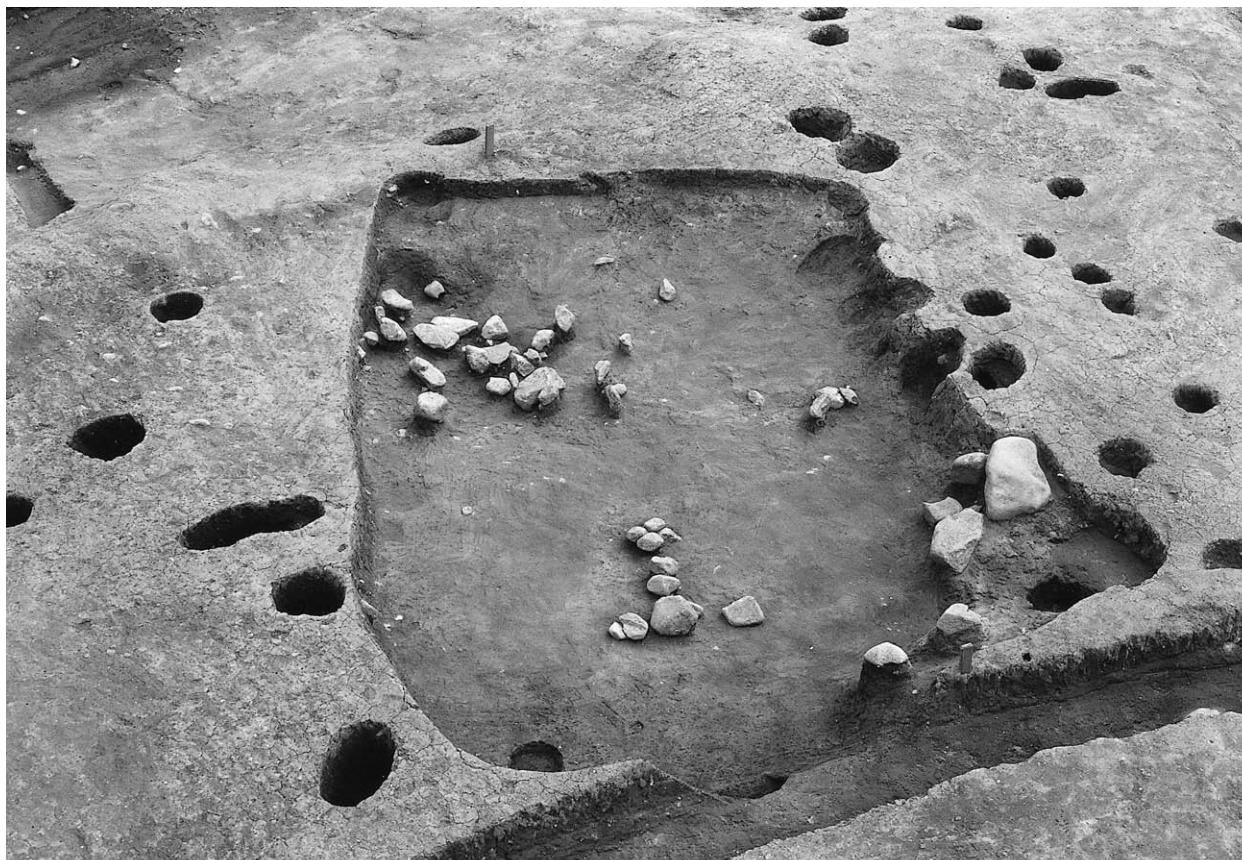
S B 73



S X 6 (南から)



S X11 (北から)



S K60出土状況（北から）



S K60（北から）



S K59出土状況（東から）



S K59（東から）



S K 40 (東から)



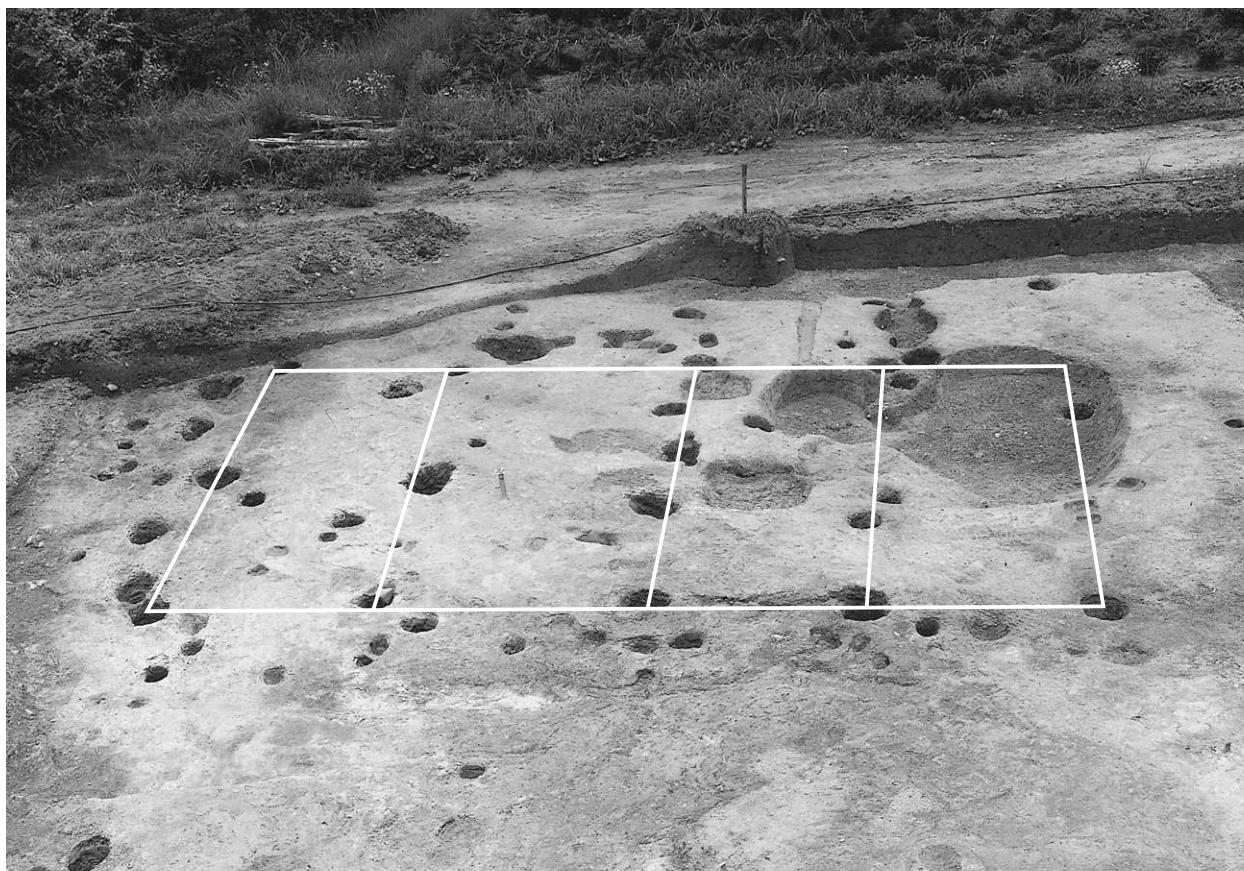
S K 67 (東から)



S K56 (東から)



S K56・57 (東から)



S B63 (南から)



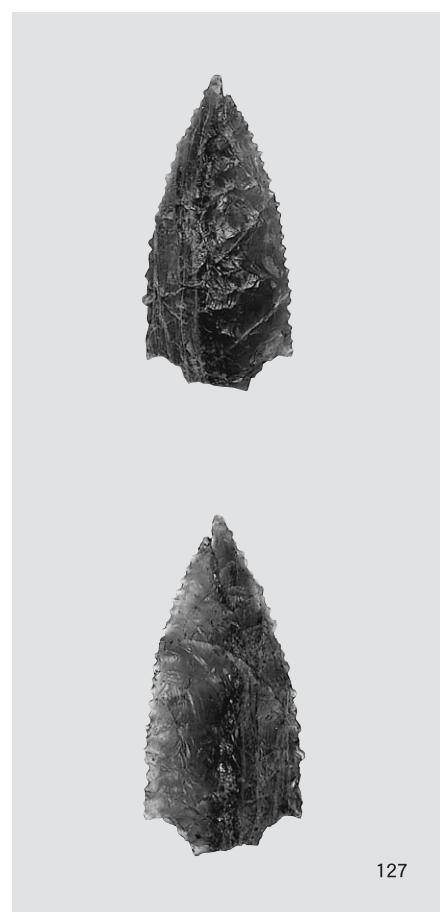
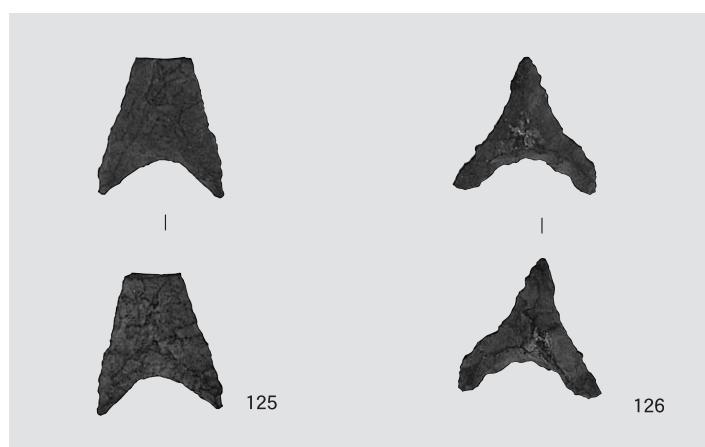
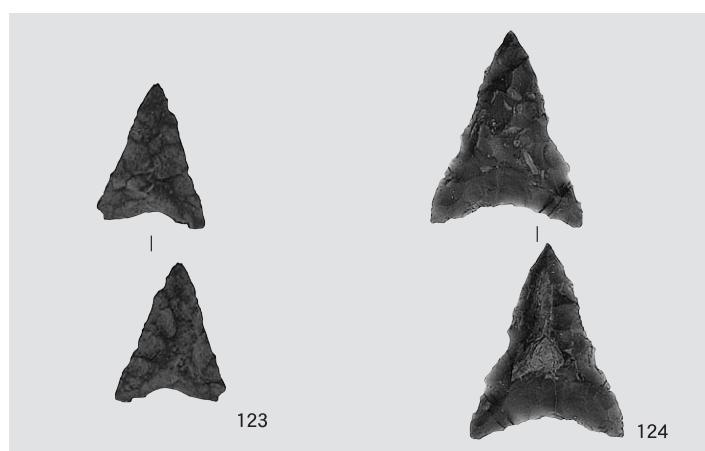
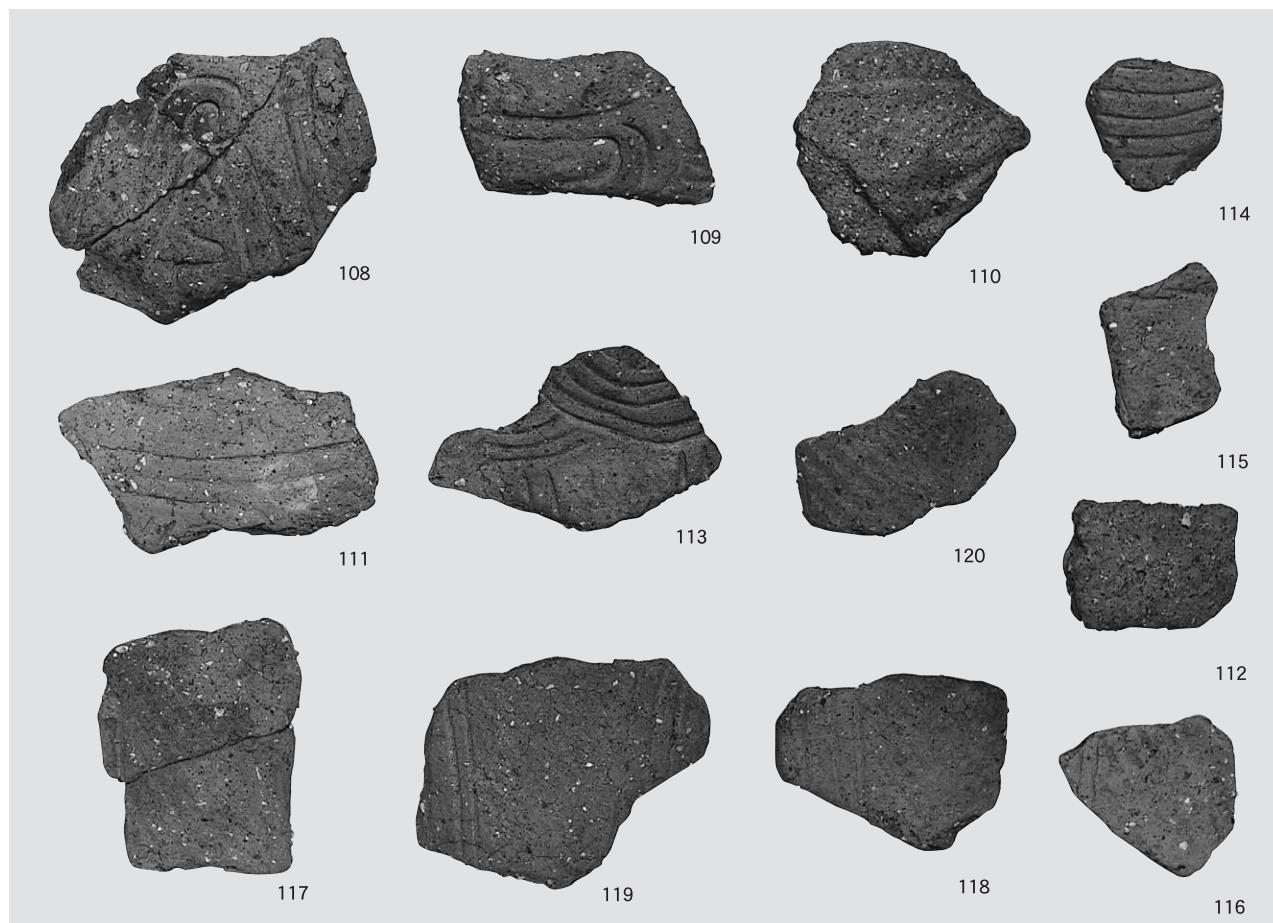
S W71



S E 72



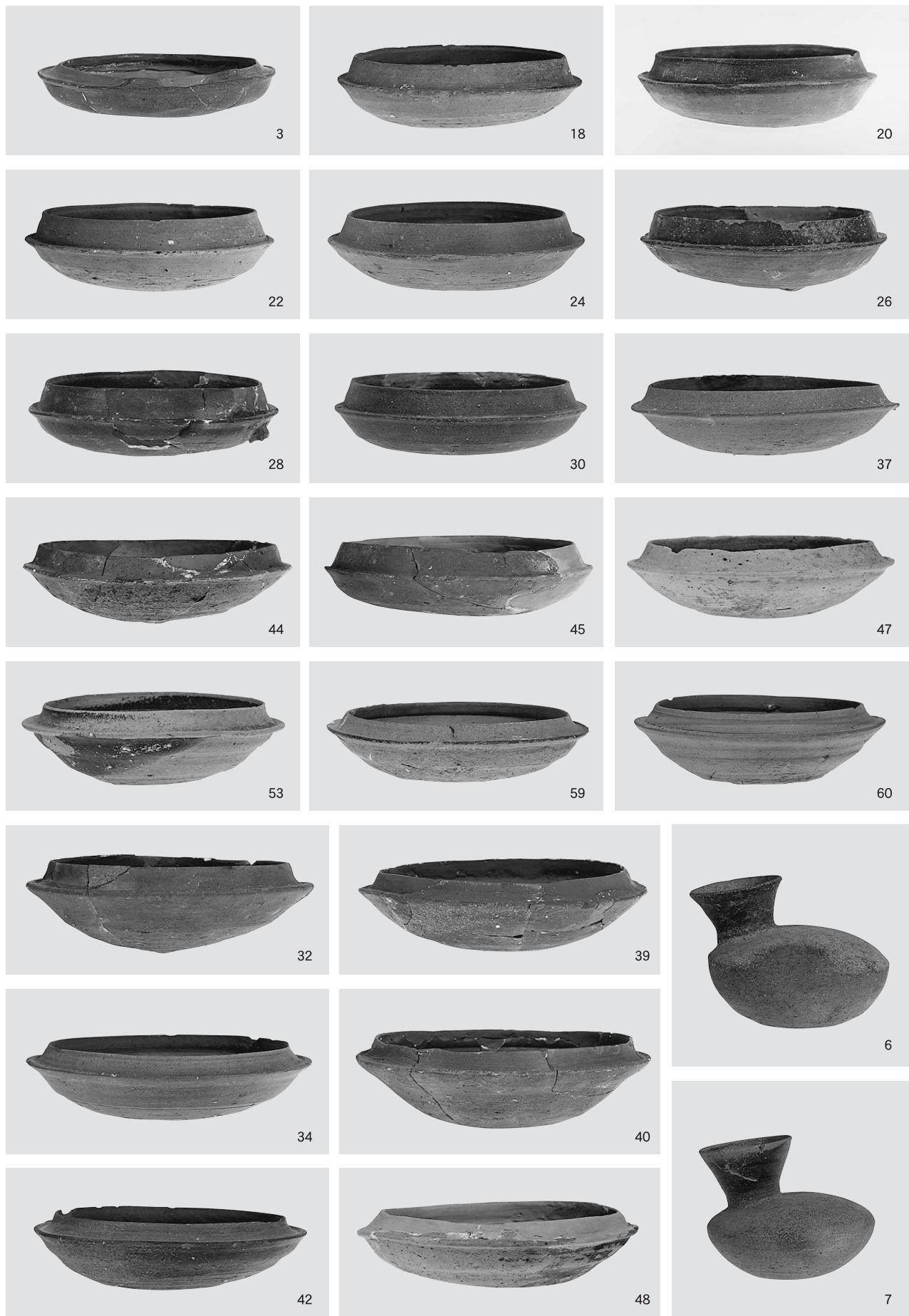
S E 69



遺物（縄文土器・石器）



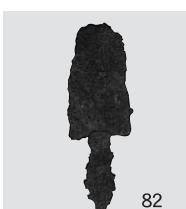
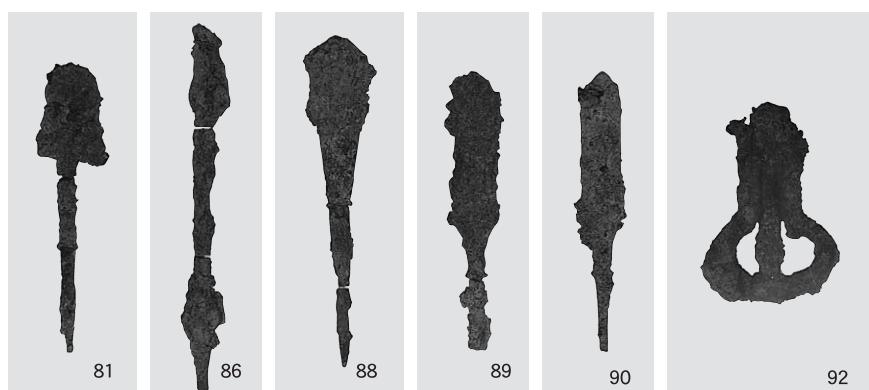
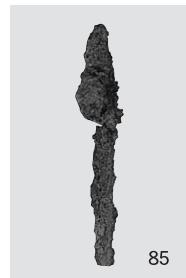
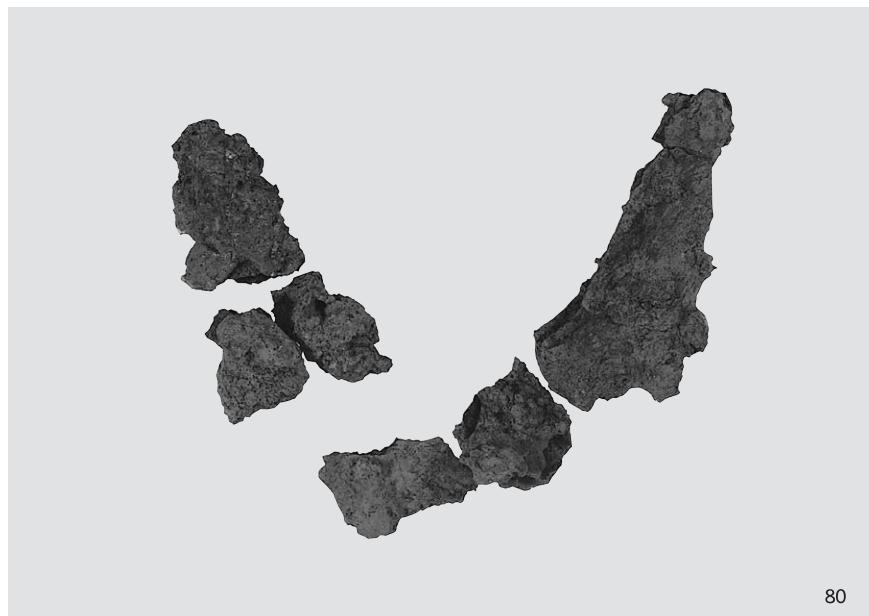
遺物（須恵器 1）



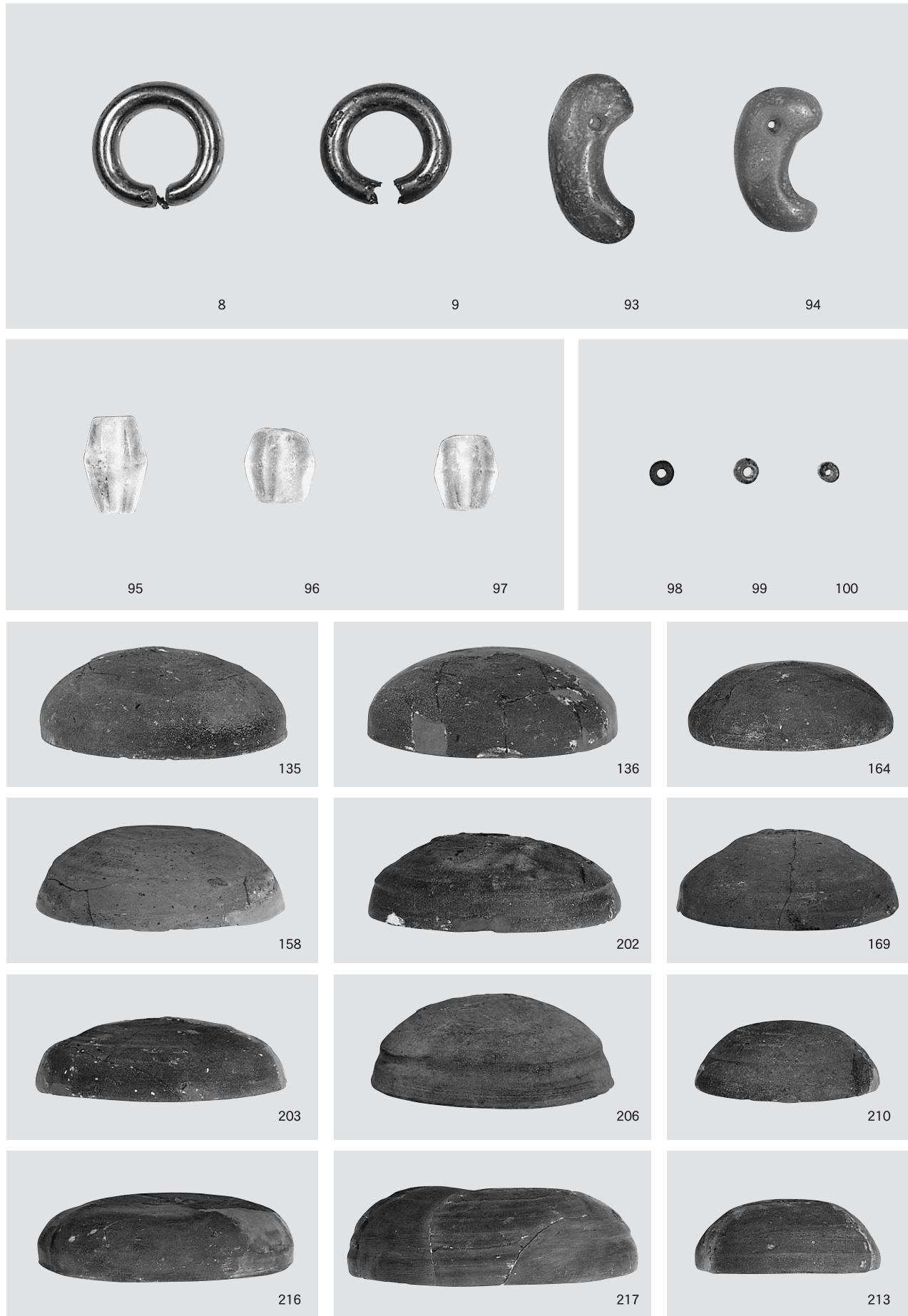
遺物（須恵器 2）



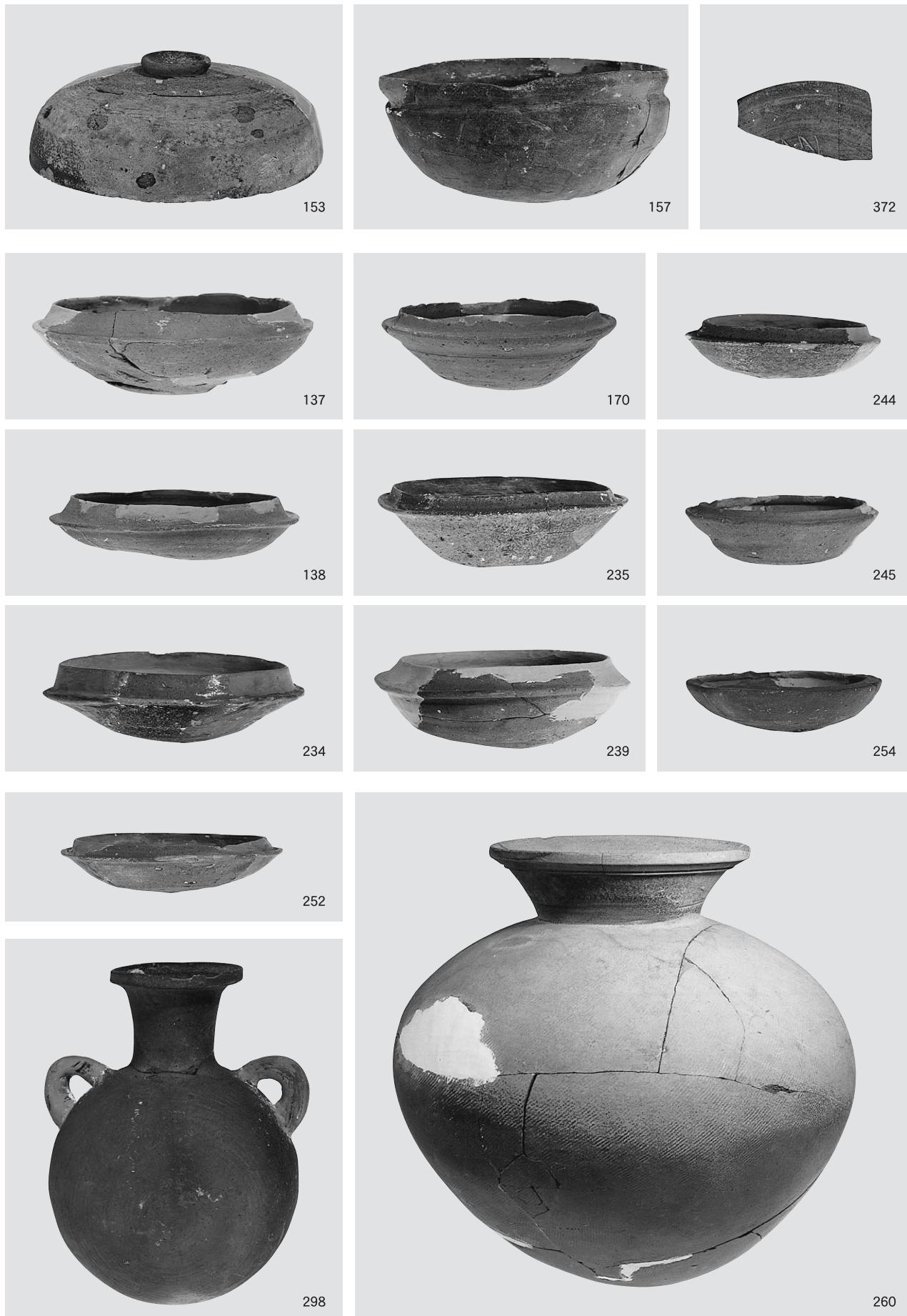
遺物（須恵器3）



遺物（須恵器4・鉄器）



遺物（金環・玉類・須恵器 5）



遺物（須恵器 6）



遺物（須惠器 7）



141



154



171



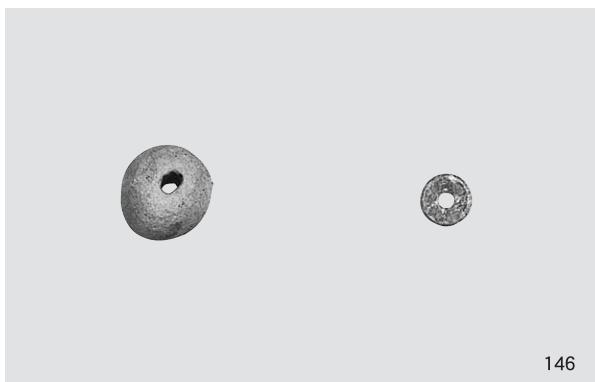
180



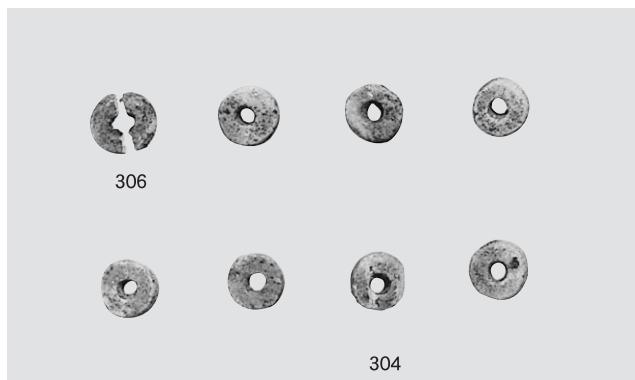
179



192



146



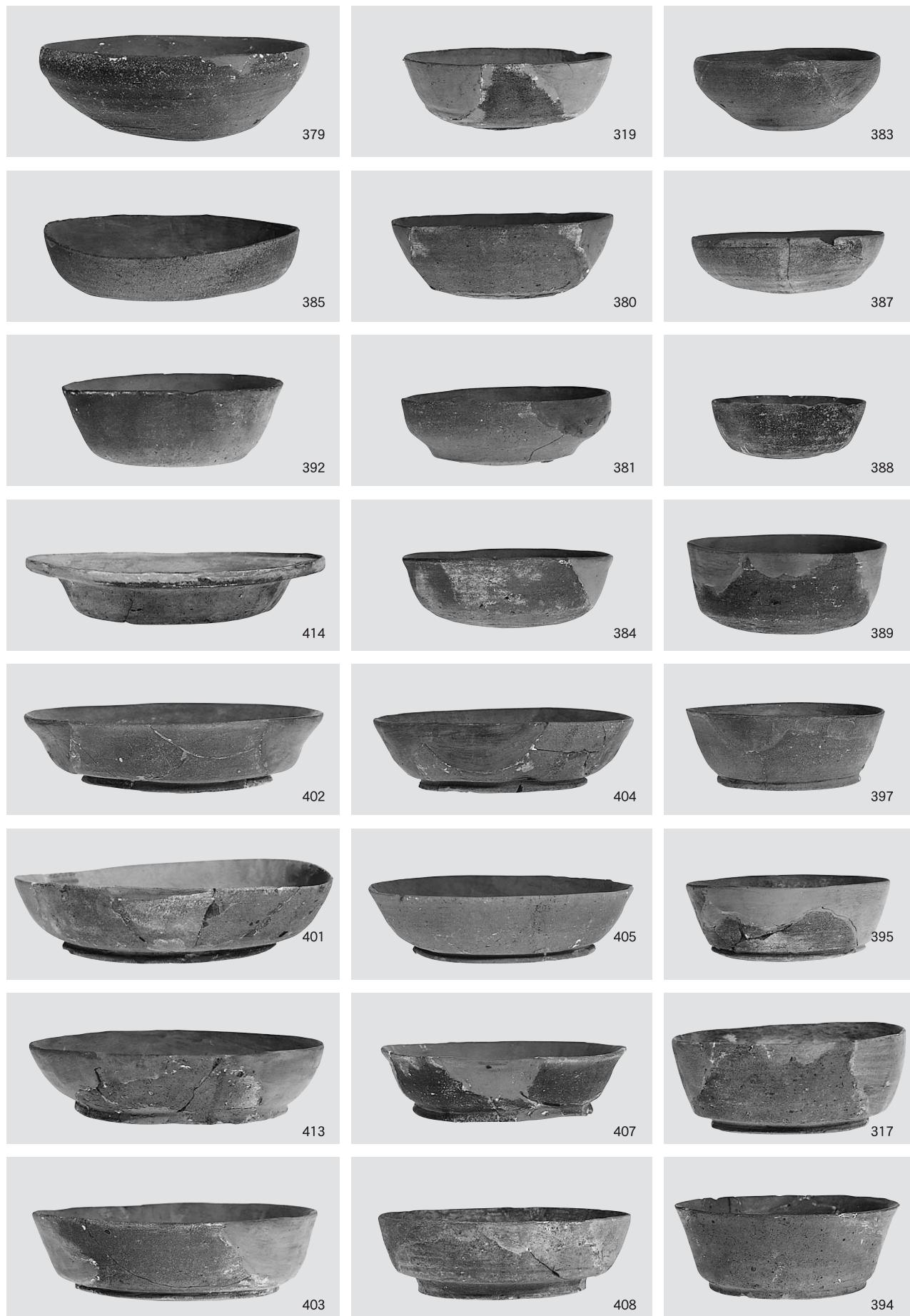
306

304

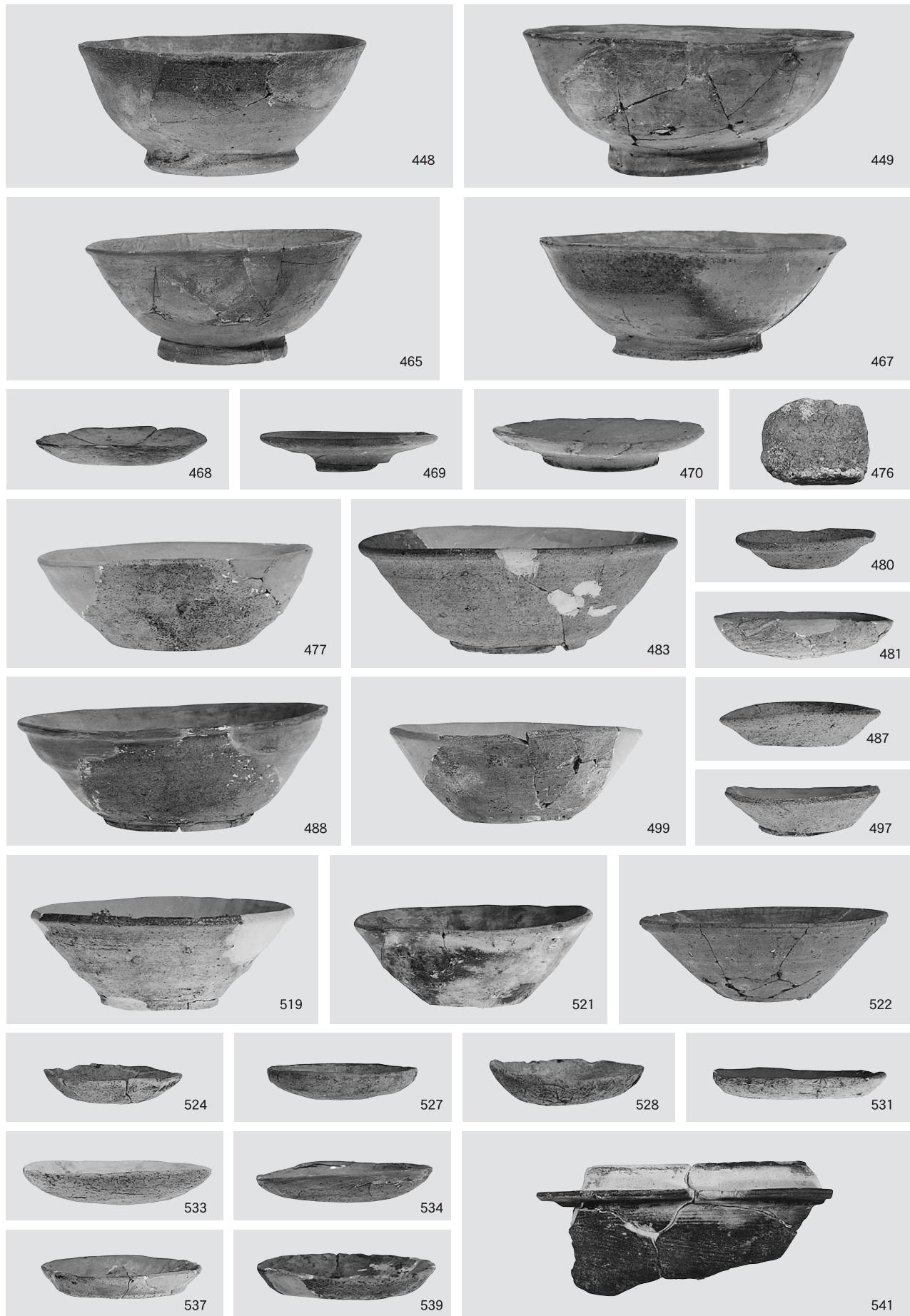
遺物（土師器・白玉）



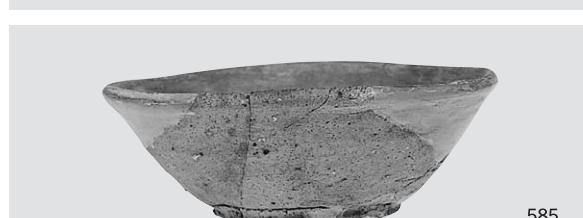
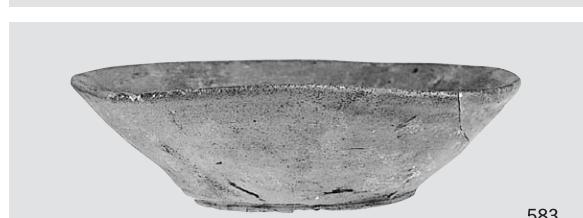
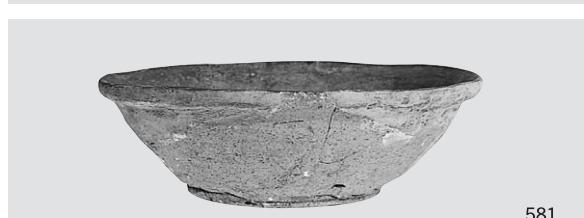
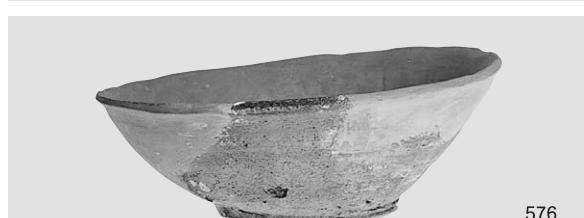
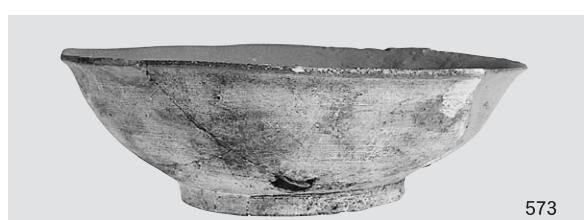
遺物（須恵器 8）



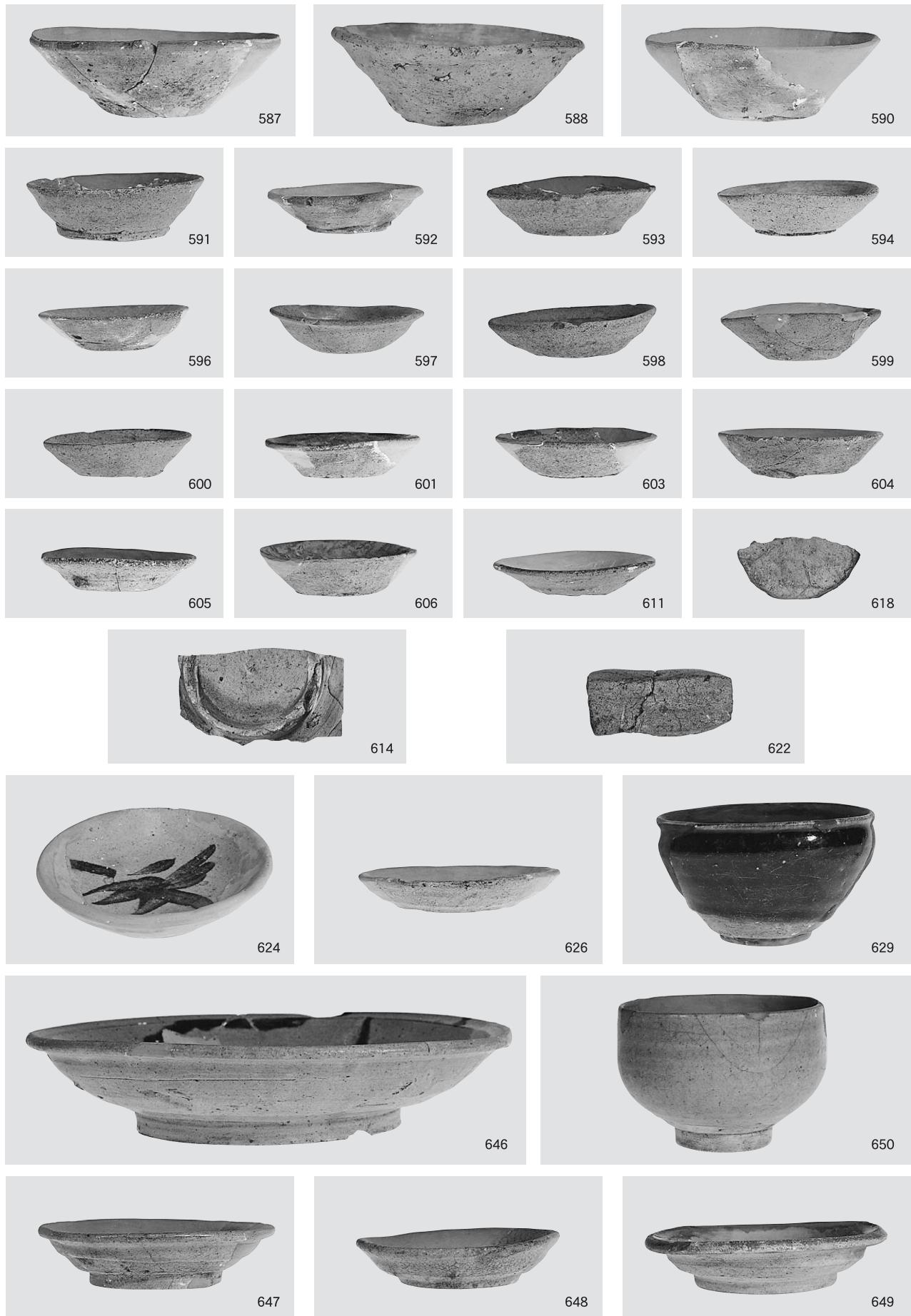
遺物（須惠器 9）



遺物（灰釉陶器・山茶椀・山皿・土師器）



遺物（灰釉陶器・山茶碗）



遺物（山茶椀・山皿・施釉陶器）



遺物（擂鉢）



遺物（施釉陶器・石硯）

付 編

亀山地方の地質

三重県立津西高等学校

教諭 磯辺 克

1. 概要

調査範囲は南の鈴鹿川から来た安楽川の東西7.5km、南北6kmの間である。図1の範囲内では古生界中生界は分布せず、一番古い地層で新生代鮮新世から前期更新世の奄芸層群亀山累層である。したがって大部分が比較的新しい地層で占め、特に海拔40~50mの段丘礫層が目立ち、遺跡もこの地層に分布するのは注目してよいだろう。

地質構造は下部の奄芸層群で走行、傾斜がそれぞれN10~20W、3~6NEでシルト岩や砂岩が多い。

2. 地質

(1) 新生代奄芸層群亀山累層

鈴鹿川をはさんで南側と北側の安楽川寄りに広範囲に露出する。奄芸層群下部は砂岩層で団結していないが、上部はシルト岩、固結シルト岩、凝灰質固結シルト岩等で構成している。奄芸層群全体の厚さは約1200mにも達し、植物化石（ブナノキ・ナラ・ヤナギ・ニレ・科等）やタニシ・象化石等の化石を含む湖成層である。なお象化石については、3. 象化石の項で詳述する。

(2) 第四系・中期更新世

○最古器扇状地堆積物

四日市市水沢町北谷北方の大地を模式地とする堆積物で、奄芸層群とは不整合関係をなしている。本地域では安楽川をはさんで南北両岸之高台に分布する。同様にして鈴鹿川をはさんで南北両岸流域にも分布し、椋川付近では層厚約10mで、ほぼ水平に堆積している。

本層を構成するものは最大礫径10cmで、平均2~4cm位である。それらの礫種は花崗岩、砂岩、粘板岩、チャート、ホルンフェルスである。基質は砂で中に火山灰層をはさむ。層厚は川合町付近で約10mそれより西方の国道306号線付近では1~8mと減少している。

○中期扇状地堆積物

本地域では安楽川左岸、田村町の北東に分布する「亀山地域地質図」によると、堆積物は下位より礫層、黄褐色土、黒色土の順になっていることと扇状地堆積物に比べて礫が全般に新鮮であることと、固結度がよくないことの特徴があることで、半くさり礫が含まれる点が共通するとある。礫種はホルンフェルス、粘半岩、チャートで、直径5~10cmの亜角~角礫で、陶汰は不良である。坂倉広美氏の研究では、この地域は能褒野台地で中位段丘とし、本論と異にしていることを付記しておく。

(3) 高位段丘層

本層は亀山市街を中心として東西の旧領地に広く分布する。高位面の高度及び中位面との高度差は、住山村~亀田町において高度が60~100m、高度差10~15mとなっている。

堆積物は下位より礫層、細粒層、赤色土の順となっていて、場所によっては中間の細粒層のない所があり、層厚は10m以下である。

礫種はチャート、粘板岩、粘板岩ホルンフェルス、花崗岩で、まれに石英斑岩を含む。礫径は平均5cm内外で、円磨度や陶汰は一般に良い。

(4) 中位段丘層

分布は大森町西方及び鈴鹿川の両岸である。中位面の高度及び低位面との高度差は、鈴鹿川左岸の井尻町~関町では45~105m、10~20mである。段丘堆積物は下位から礫層、砂礫~礫層（径約1cmで、シルト~炭質物レンズをはさむ）。

礫種はチャート、粘板岩、粘板岩ホルンフェルス、花崗岩である。層厚は会下で6m以上であるが、他はこれを越えない。

(5) 低位段丘層

本地域では安楽川下流左岸の田村町付近と、鈴鹿川両岸近くに分布する。場所に寄っては、例えば鈴鹿川右岸では中位段丘層に接し、一方、安楽川では前者と異なる。安楽川付近では30~170mと高度は変

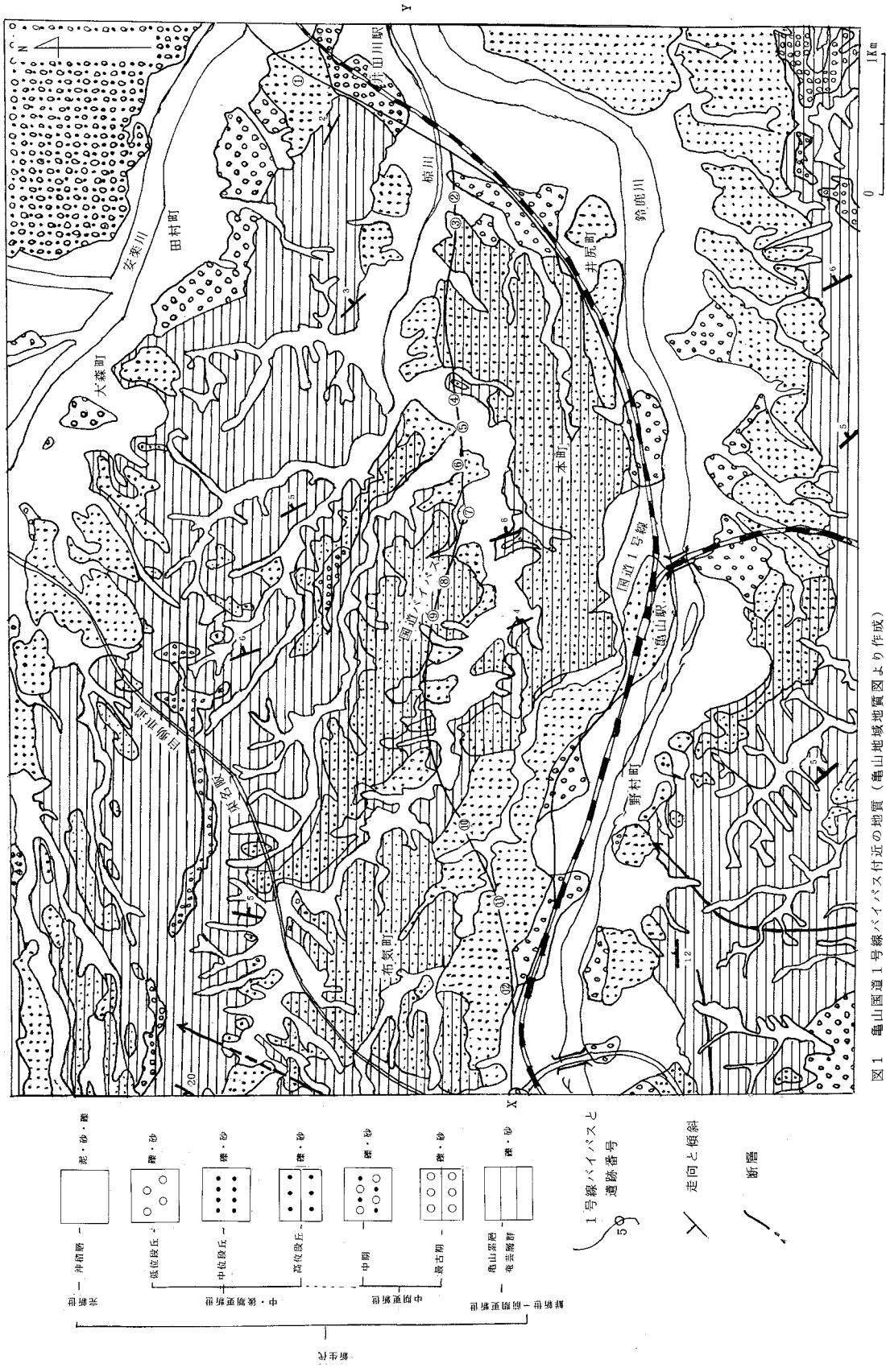


図1 鬼山国道1号線バイパス付近の地質（鬼山地域地質図より作成）

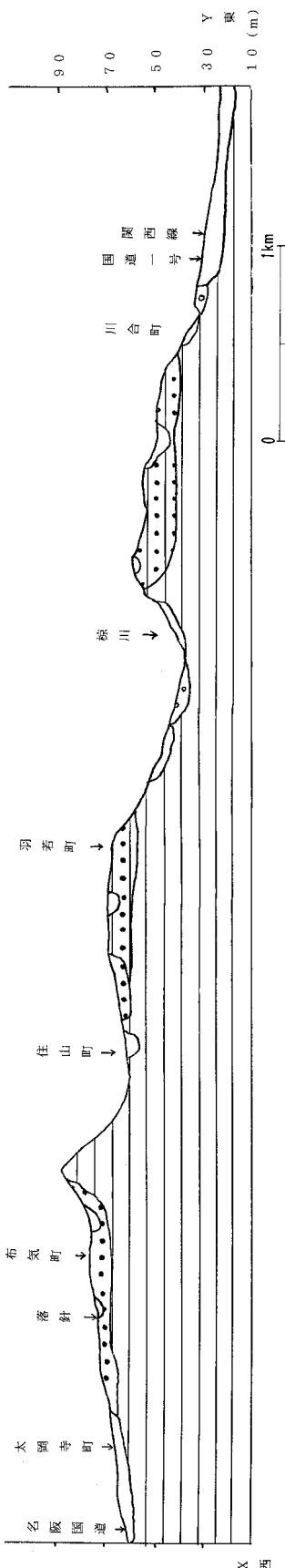


図2 図1のX Y断面図（凡例は図1と同じ）
垂直：水平=20:1

化し、沖積層との高度差葉 0～10mである。

礫種は高位・中位各段丘層と同じで、円礫で有る。最大径70cmにも及ぶ礫もあるが、平均10～15cmである。

(6) 沖積層

安楽川や鈴鹿川両岸にそれぞれ500目内外に分布する。これらは泥・砂礫であつて、椿世町付近で10m前後の堆積層をなす。又、椋川左岸では厚く18m前後もあるが、これ以上のものは見当たらない。

礫種は下位よりシルト層砂層、シルト層、砂層と3～4m交互に堆積している。椿世集落付近では椋川の氾濫原で、層厚5～7m砂礫層で礫径0.2～13cmのチャートを主体としたものである。

3. 象化石

昭和52年(1977)7月に、亀山市住山町の服部安平氏が住山町の椋川(川幅約3m)の川底から門歯を発見した。その後、亀井節夫(元京都大学教授)が研究に当たり、同年11月中旬にステゴドン、エレファントトイデス(*Stegodon cf. elephantoides*)の門歯(キバ)の化石と鑑定した。4か月かかって300個近い破片をつなぎ合せて復元した大きさ、形は尖端と歯根部を欠いているが、長さ176cm、弯曲にそって201cmもあり、太さも根部で18×16cmという大きなものであった。ねじれがなく、かなり弯曲しているのが特徴である。

産出した地層は奄芸層群(第三紀鮮新世中期)の下部にあるT₂火山灰(下位)とT₃火山灰(上位)との間で、T₂火山灰は古琵琶湖層群の真杉火山灰に対比され、フィットショントラック年代で3.1±0.5百万年である。

これより先の6月頃、地元住山町の会社員も同じ椋川の下流約300mで、同じ門歯を採集していたことが後に判明した。いずれも門歯だけであったが、臼歯が発見されるとさらに年代決定が確かなものとなるため、今後その発見の必要性もあり、可能性もあるので注意していきたいものである。

4. あとがき

本地域は古生界、中生界といった地層がないので岩石や鉱物についても特に取り上げることのない地質が的には特徴がない。その中で特に注目すべきことが、3.で述べた象化石である。理由は化石そのものに学問上意義があることと、今後共、開発に伴

う工事中に発見される可能性が充分考えられ、その時の参考になればと思い記述した次第である。

〈参考文型・引用文献〉

1. 亀井節夫 (1978) 亀山の像 そくほう 303号 地学団体研究会
2. 宮村学他 (1981) 亀山地域の地質 (1 / 5 万) 地質調査所
3. 和田幸雄 (1982) 三重県亀山市周辺の奄芸層群地質雑88-2、
pp, 121~139
4. 亀山中学校、中部中学校 (1990) 亀山地区の地形と地質をさぐる
5. 建設省中部地方建設局 (1990) 昭和55年度亀山バイパス地質調査、その1報告書

上椎ノ木1号墳出土の四神鏡の材質分析

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

学術博士 村 上 隆

(1) はじめに

古墳から出土する鏡などの青銅製品は、通常緑青などの錫で覆われていることが多いが、三重県上椎ノ木1号墳で出土した四神鏡は、表面に盛り上がった顕著な錫も認められず、表裏とも丹念に研磨され、全体に黒色の平滑な表面を持つ。文様の点からみても、動物様の四神を配した極めて珍しい鏡である。古代の青銅器の材質や製作技法や、また遺物の埋蔵環境を考察するためには、大変貴重な遺物である、と考えられる。

(2) 四神鏡の構造について

上椎ノ木1号墳で出土した「四神鏡」は、肉眼観察で鉢近辺にひびが認められるものの、欠けた部分もなく全体としては完形である。表面には緑青のような際立って盛り上がった錫もなく、たいへん安定した状態である。ただ、外縁部にスポット状に内部進行性の錫が認められる。表の鏡面部は、丹念に研磨されており銀色の光沢を残す部分と、黒色の光沢を呈する部分が混在している。裏の文様面には少量の赤味顔料が付着しており、出土状況からも、埋納時に朱のような赤色顔料が蒔かれた可能性が考えられる。内区にある4つの小さな乳が、玉でも磨き上げたように見事な光沢を持っているのが印象的である。動物様の四神は、文様自体がシャープさに欠けるため、図像を詳しく同定するのはむずかしい。なお、鏡体は、鏡面部がほんのわずかに凸面状に反っている。

図1 (a) に文様面の写真と、(b) にX線ラジオグラフィー^{*1)} の結果を示す。外見では健全そうに見える鏡であるが、内部をX線によって透視すれば、鉢を囲むように縦横にひびが走っているのが確認され、取り扱いに注意を要することがわかる。また、(b) のX線ラジオグラフィーにおいて、スポット状に白く見えるのは、鏡の鋳造時に生じた巣である。

(3) 四神鏡の材質について

(a) 蛍光Xによる分析

上椎ノ木1号墳から出土した四神鏡はどのような材質で作られているのか。この間に答えるために、文化財用に開発された蛍光X線分析装置^{*2)} によって、まったく非破壊的に分析を行った。分析箇所は鏡面3ヶ所、文様面3ヶ所である。この分析方法は、まったく非破壊的で遺物を分析できる利点を持つが、錫などで覆われた表面状態の測定であるため、測定値が鏡本体の成分を反映していないことがあるので注意を要する。分析結果を、表1に示す。なお、表中の数値は、X線強度比を重量%換算した判定分析の値である。

両面とも一般に考えられる青銅鏡の成分値より、錫の濃度がかなり高いめにでている。すなわち、鏡の表面で錫が豊富になる現象が起っている、と考えられる。また、微量の水銀の検出が見られるが、これは表面に付着した赤色顔料の朱（硫化水銀：HgS）によるものであろう。鉛、ヒ素、銀は鏡に本来含まれている成分であろうが、鉄、ビスマスは埋蔵時の土成分の吸着とみられる。

今回、鏡両面部から鏡本体の金属部分を少量サンプリングを行うことができた。この採取試料に対する蛍光X線分析の結果を表2に示す。表面からの非破壊的分析でかなり高い値ででていた錫の濃度が下がり、青銅鏡の成分値として納得できる値に近づいている。また、鉛の濃度が表面の分析値より高い現象が起っているのが興味深い。

(b) X線回析による分析

四神鏡の鏡面に作成された化合物を同定するために、X線回析分析^{*3)} を行った。この分析も文化財資料からまったくサンプリングを行わない非破壊的手法を用いた。結果を図1に示す。鏡面からは、銅と錫の金属間化合物 ($Cu_{41}Sn_{11}$) を検出した。また、念のため表面から少量サンプリングした粉末試料を、

粉末X線回析法によって分析したが、同様に金属間化合物 ($Cu_{41}Sn_{11}$) を検出したのみであった。青銅器によくみられる銅系の鏡や錫の鏡（錫石： SnO_2 ）などは今回検出されなかった。X線回析法で検出されるのは結晶性の化合物のみで、非品質の化合物は検出困難である。従って、この四神鏡の表面に非品質の化合物が形成されている可能性も考えられる。

(3) まとめ

古代の青銅器の表面に錫が豊富になる現象は一般的であり、その原因がいくつか考えられている。基本的には次の三つに分けられる¹⁾。（1）人為的な錫添加（例えば、錫めつき）、（2）錫汗（鋳造時に起る錫の逆偏析）、（3）埋蔵中に生じる選択腐食。上椎ノ木1号墳出土の「四神鏡」は、これら3つのうちのどれかに相当するのか、あるいは別の原因があるのか。その詳細はわからない。

表面に非常に錫が豊富であるにも関わらず、X線回析によって金属間化合物 ($Cu_{41}Sn_{11}$) しか検出されないのは、錫を主とする非品質性の化合物が生成されている可能性を示唆している。この化合物が錫石 (SnO_2) 生成の前駆現象と考えてよいのか、検討を要する。またこの生成物が光沢のある表面の原因で

あり、このため表面の錫の濃度が低めにでたのではなかろうか。

今後、断面における元素の濃度分布などの観察を通して、このような現象の詳細を検討してゆく必要がある、と考えている。

参考文献

- 1) N.D. Meeks: Tin-rich surfaces on bronze-some experimental and archeological considerations, Archeometry, 133-162, 28, 2 (1986)

* 1) X線ラジオグラフィー

X線透視撮影。遺物内部の構造を非破壊で探すことができる。使用した装置は、(株)リガク製工業用X線発生装置。撮影条件は、管電圧 50kV、電流 5mA、時間、ターゲットからの距離 10cm。使用フィルム富士フィルムIX-80。

* 2) 蛍光X線分析

遺物を構成する元素を調べるために用いる。文化財用に非破壊で測定できる装置を開発している。使用した装置は、(株)リガク製文化財用全試料型蛍光X線分析装置7371C。ターゲットはクロム(Cr)。測定条件は、管電圧50kV、管電流50mA。波長分散型の検出器を備えている。

* 3) X線回析

顔料や鉱物、遺物に生じた鏡など、結晶化合物の同定に用いる。やはり文化財用に非破壊で測定できる装置を開発している。使用した装置は、(株)リガク製文化財用X線回析装置。ターゲットはクロム(Cr)。測定条件は、管電圧30kV、管電流10mA。

表1. 上椎ノ木1号墳出土「四神鏡」の非破壊蛍光X線分析

(a) 鏡面部の分析

元素	銅(Cu)	錫(Sn)	鉛(Pb)	鉄(Fe)	ヒ素(As)	銀(Ag)	水銀(Hg)	ビスマス(Bi)
分析箇所①	21.0	73.0	3.9	0.3	1.0	0.37	0.15	0.07
分析箇所②	26.0	69.0	3.7	—	0.79	0.34	—	—
分析箇所③	21.0	73.0	3.5	0.38	1.0	0.37	0.16	0.070

(b) 背面(文様面)の分析

元素	銅(Cu)	錫(Sn)	鉛(Pb)	鉄(Fe)	ヒ素(As)	銀(Ag)	水銀(Hg)	ビスマス(Bi)
分析箇所①	23.0	71.0	3.6	0.39	1.1	0.36	0.18	0.082
分析箇所②	20.0	73.0	4.1	0.80	0.79	0.42	0.28	0.072
分析箇所③	18.0	76.0	3.6	0.69	1.0	0.40	0.24	0.080

表2. 鏡体から採取した試料の蛍光X線分析

元素	銅(Cu)	錫(Sn)	鉛(Pb)	鉄(Fe)	ヒ素(As)	銀(Ag)	水銀(Hg)	ビスマス(Bi)
分析①	63.0	28.0	8.8	—	—	—	—	—
分析②	61.0	31.0	7.8	—	—	0.22	—	—

(a)



(b)

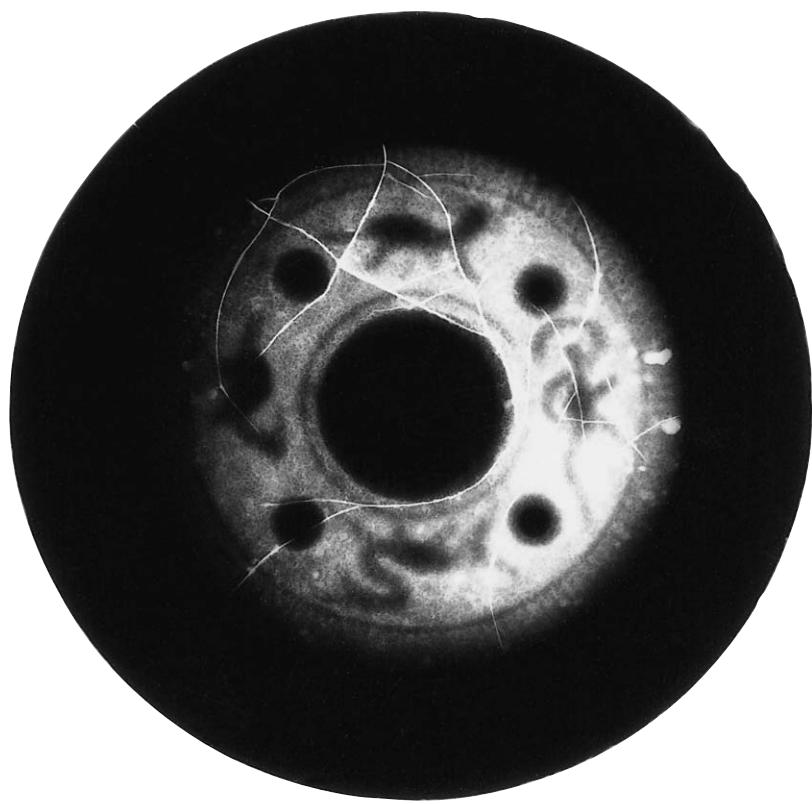


図1. 上椎ノ木1号墳出土「四神鏡」とX線ラジオグラフィー

上椎ノ木1号墳の土壤分析結果

三重県農業技術センター生産環境部

調査研究員 広瀬和久

I. はじめに

国道1号線亀山バイパス建設工事に伴う上椎ノ木1号墳の発掘調査において採取された試料（土壤）について、カルシウム（Ca）及びリン（P）を分析することにより、遺骸が埋葬されていたかどうかを確認するとともに、遺骸の埋葬位置及び身長の推定を行った。

なお、試料の採取位置は、第1回目（5/19）が棺内遺物が出土したレベルであり、第2回目（5/30）は第1回目の下方約5cmの棺底と推定されるレベルである。又、各試料採取は10cm間隔で行った。

II. 結果の概要及び考察

遺骸の埋葬位置及び身長の推定を行う目的で、遺骸が土に還る過程で最後まで残る人骨に着目し、人骨組成中で含有量の多いカルシウムとリンを分析した。この分析値から上椎ノ木古墳土壤のカルシウムとリンの自然賦存量（バックグラウンド値）を推定した。次に、この自然賦存量と各試料の含有量とを比較し、試料の含有量の方が多ければ、何らかの原因でカルシウム又はリンが付加されたものと考えた。

この原因の大きなものとして遺骸の埋葬が考えられ、濃度の高い地点の分布状況から遺骸の身長推定を行うことにした。しかし、今回の試料はカルシウムとリンの定量値のバラツキが大きいため、自然賦存量を推定することがかなり難しくなった。

そこで、最初の考え方として平均値に標準偏差値を加えた値（Ca: 90ppm, P: 522ppm）をこの古墳土壤の自然賦存量とし用い、以下の考察を行った。

第1回目に採取した遺物出土レベルで、カルシウムの含有量が自然賦存量（90ppm）以上であったのは、No.7, 15, 16, 17, 40の5地点であり、またリンの含有量が自然賦存量（522ppm）以上であったのは、No.14～17の4地点である。

この結果、カルシウムとリンの濃度が共に高かつ

た地点はNo.15, 16, 17の3地点のみであり、この3地点については、遺骸が埋葬された可能性が非常に高い。

又、No.11, 12, 13の3地点については搅乱坑が入り込んでいるため、人骨（遺骸頭部）があったのかどうかは判定しにくいが、No.14はカルシウム濃度は低いがリン濃度が高いことから、遺骸頭部の先端はNo.14ではないかと推察される。

次に、2番目の考え方として、平均値（Ca: 75ppm, P: 412ppm）をこの古墳土壤の自然賦存量として用いて考察を行った。

その結果、第1回目採取の遺物出土レベルで自然賦存量以上であったのは、カルシウムがNo.1～9, 15～20, 37, 40の計17地点であり、リンはNo.14～18, 25, 26, 28, 29, 40, 43, の計11地点であった。これらの地点のうち、カルシウムとリン濃度が共に高かった地点はNo.15～18と40の5地点であった。このうちNo.18は遺骸頭部と考えられるが、No.40については明瞭ではないが、近傍の地点でもカルシウムとリン濃度がやや高いことから、比較的小さい遺骸が埋蔵された可能性も考えられる。

以上の2通りの考え方から、被葬者の位置と身長を推定すると、カルシウム及びリン濃度がやや低いため断言はできないが、No.14を頭部先端とし、リン濃度がやや高いNo.29を足部末端とするのが最も妥当であり、約150cmの身長の遺骸であったと推定される。

なお、第2回目の試料（第1回目の約5cm下方の土壤）については、第1回目に比べて全体的に濃度が低く、又、バラツキも大きいため、一定の傾向は認められない。しかし、No.17～19, 22の地点では、カルシウムは低濃度ではあるがリン濃度は特に高く、何らかの影響が考えられる。

これは、上方の第1回目でもNo.17～19はカルシウムやリン濃度が高いことから、人骨成分の中でも容出しやすいカルシウムは流出してしまい、リンだけが

残留したためか、あるいは、この試料を採取したレベルは棺底であったため、木棺中のリンの影響によ

るものではないかと推察される。

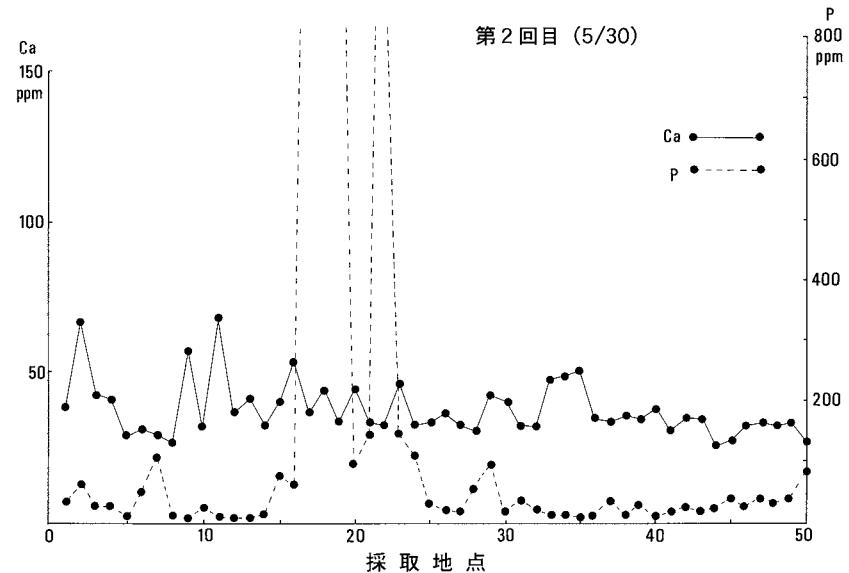
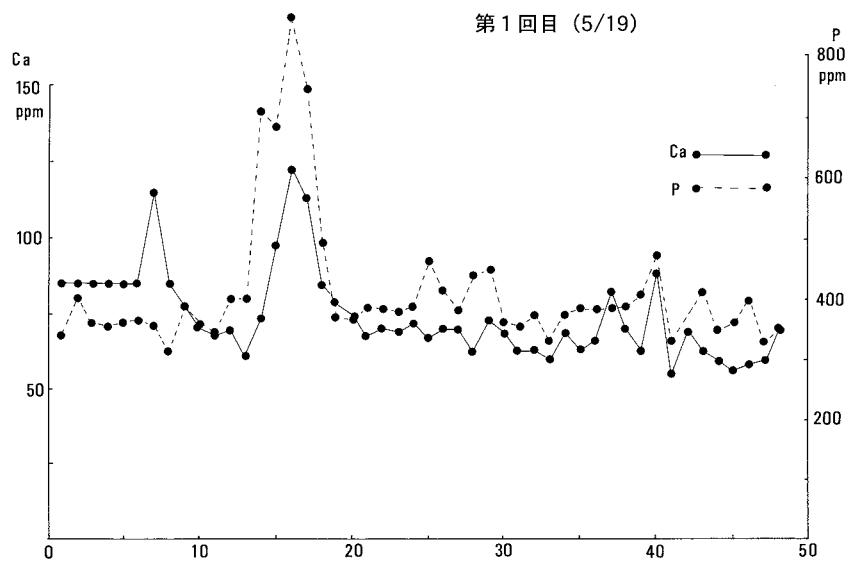
参考 (人骨の組成)

項目	含有量 (%)
(1) カルシウム	25.6
(2) リン	12.3
(3) 硝素	4.4

「化学大辞典」共立出版 (1978)

項目	含有量 (%)
(4) 炭酸塩	4.0
(5) マグネシウム	0.4
(6) (全灰分)	(66.8)

(注) 含有量は立脱脂した新鮮組織に対する値



第1図 土壌中のカルシウムとリンの分布

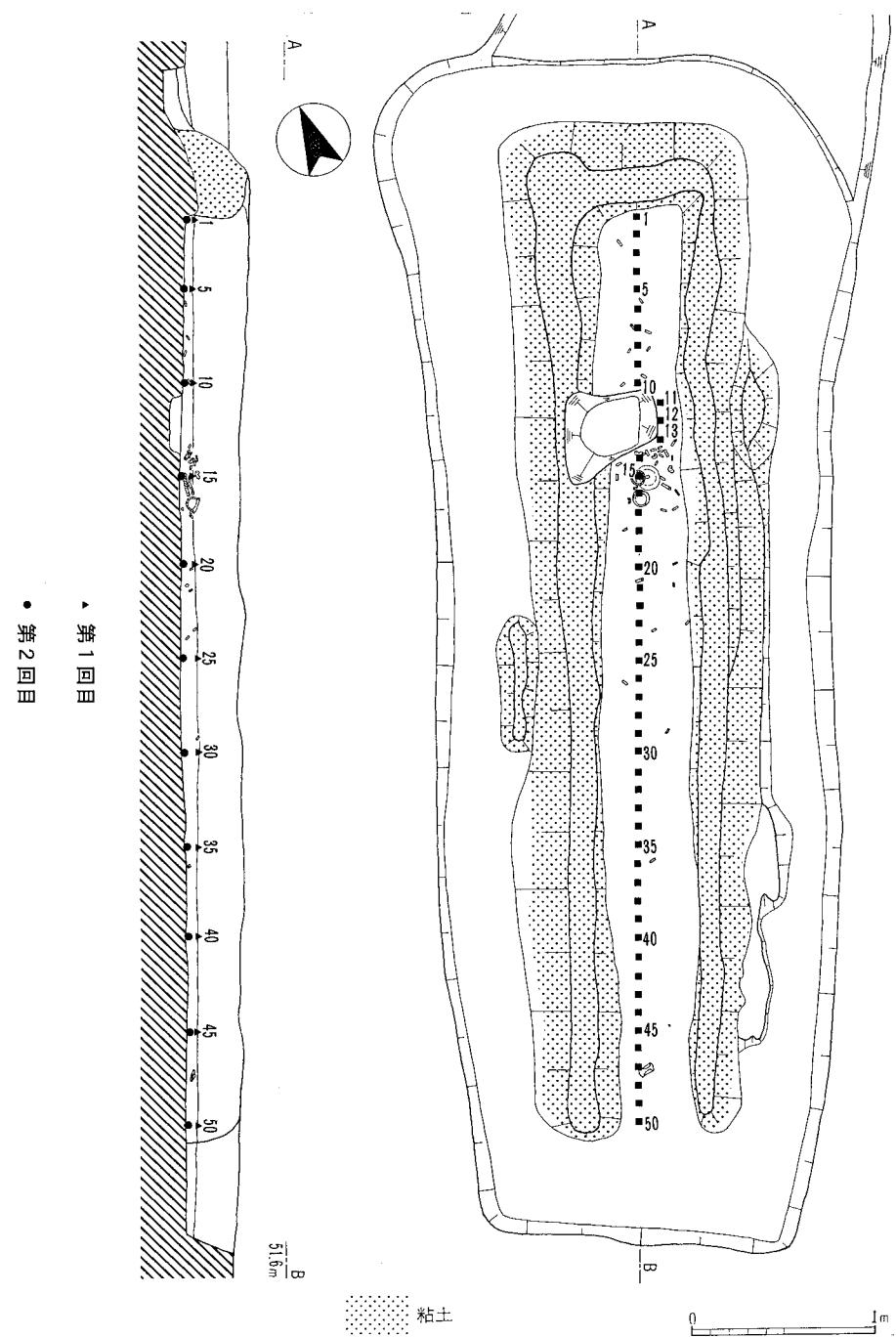
III、土壤分析結果一覧

地點 No.	第 1 回 目 (5/19)			第 2 回 目 (5/30)		
	レベル(m)	Ca(ppm)	P(ppm)	レベル(m)	Ca(ppm)	P(ppm)
1	5.1. 1.3	8.5	3.43	5.1. 0.8	3.8	3.9
2	" . 1.0	8.5	4.04	" . 0.6	6.7	6.8
3	" . 1.2	8.5	3.60	" . 0.5	4.2	2.9
4	" . 1.3	8.5	3.55	" . 0.4	4.1	2.9
5	" . 1.0	8.5	3.60	" . 0.3	2.8	1.0
6	" . "	8.5	3.65	" . "	3.1	5.3
7	" . "	1.15	3.55	" . 0.2	2.9	1.11
8	" . "	8.5	3.11	" . "	2.6	1.4
9	" . "	7.8	3.88	" . "	5.7	1.0
10	" . 0.9	7.0	3.60	" . "	3.1	2.4
11	" . 1.0	6.8	3.44	" . 0.1	6.8	1.0
12	" . "	7.0	3.99	" . 0.2	3.6	"
13	" . 0.9	6.0	"	" . 0.3	4.1	"
14	" . 0.6	7.3	7.09	" . "	3.2	1.4
15	" . 0.7	9.8	6.81	" . 0.4	4.0	7.7
16	" . "	1.23	8.56	" . "	5.4	6.3
17	" . "	1.13	7.42	" . "	3.6	2.211
18	" . 0.8	8.5	4.91	" . "	4.5	2.852
19	" . 1.3	7.8	3.71	" . 0.5	3.3	1.646
20	" . 1.2	7.5	3.65	" . "	4.5	9.2
21	" . 1.1	6.8	3.88	" . 0.6	3.3	1.45
22	" . "	7.0	3.83	" . "	3.2	1.071
23	" . "	6.9	3.83	" . "	4.6	1.45
24	" . 1.0	7.2	3.88	" . 0.7	3.2	1.11
25	" . 1.1	6.7	4.63	" . "	3.3	3.4
26	" . 1.0	7.0	4.15	" . "	3.6	2.4
27	" . "	7.0	3.83	" . 0.6	3.2	1.9
28	" . "	6.3	4.36	" . "	3.0	6.3
29	" . "	7.3	4.48	" . "	4.2	9.7
30	" . "	6.9	3.60	" . 0.7	4.0	1.9
31	" . 1.1	6.3	3.55	" . "	3.2	3.9
32	" . 1.2	6.3	3.71	" . "	3.1	2.4
33	" . 1.4	6.0	3.33	" . "	4.7	1.4
34	" . 1.1	6.9	3.76	" . 0.6	4.8	1.4
35	" . 1.0	6.3	3.85	" . "	5.0	1.0
36	" . 0.9	6.7	3.83	" . "	3.4	1.4
37	" . "	8.3	3.88	" . 0.5	3.3	3.9
38	" . "	7.0	3.88	" . "	3.5	1.4
39	" . "	6.3	4.09	" . 0.6	3.4	2.9
40	" . 1.0	9.0	4.75	" . "	3.8	1.0
41	" . "	5.5	3.28	" . 0.7	3.0	1.9
42	" . "	7.0	3.49	" . "	3.4	2.4
43	" . "	6.3	4.15	" . "	3.4	1.9
44	" . 0.9	6.0	3.49	" . "	2.5	2.4
45	" . "	5.7	3.65	" . 0.8	2.7	3.9
46	" . "	5.9	4.04	" . 0.7	3.2	2.9
47	" . "	6.0	3.28	" . "	3.3	3.9
48	" . 1.1	7.0	3.55	" . 0.8	3.2	3.4
49	—	—	—	" . "	3.3	3.9
50	—	—	—	" . 0.9	2.7	8.2
平均値	5.1. 1.0	7.5	4.12	5.1. 0.5	3.7	1.93
(標準偏差値)		(± 1.5)	(± 1.10)		(± 9)	(± 5.56)

(注) (1) Ca, P濃度：風乾土当たりのppm (mg/Kg)

(2) 太字：平均値+標準偏差値 (Ca : 90ppm, P : 522ppm) 以上

(3) ■：平均値 (Ca : 75ppm, P : 412ppm) 以上



第2図 上椎ノ木2号墳土壤採取地点 (1:40)

三重県埋蔵文化財調査報告100-1

上椎ノ木古墳群・谷山古墳
正知浦古墳群・正知浦遺跡

1992. 3

編 集 三重県埋蔵文化財センター

発 行 光出版印刷株式会社
